THE CENTRAL REVIEW

中央公論

第廿七年　第三號

第二百七十六號

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

新橋堂式 **組合せ本箱**

●最新式最新形の本箱にして目下歐米諸國に大流行を極め居れり
●多數の優れたる特徴を有す其重なるもの左の如し



△藏書の增減に從ひ自由に其大さを伸縮し得べし
△室内の構造に應じて適宜に配置し得べし
△硝子戸の開閉に巧妙なる構造を有す
△書物を分類するに最も適當なる構造を有す
△形狀優雅色彩美麗しかも堅牢此上なし

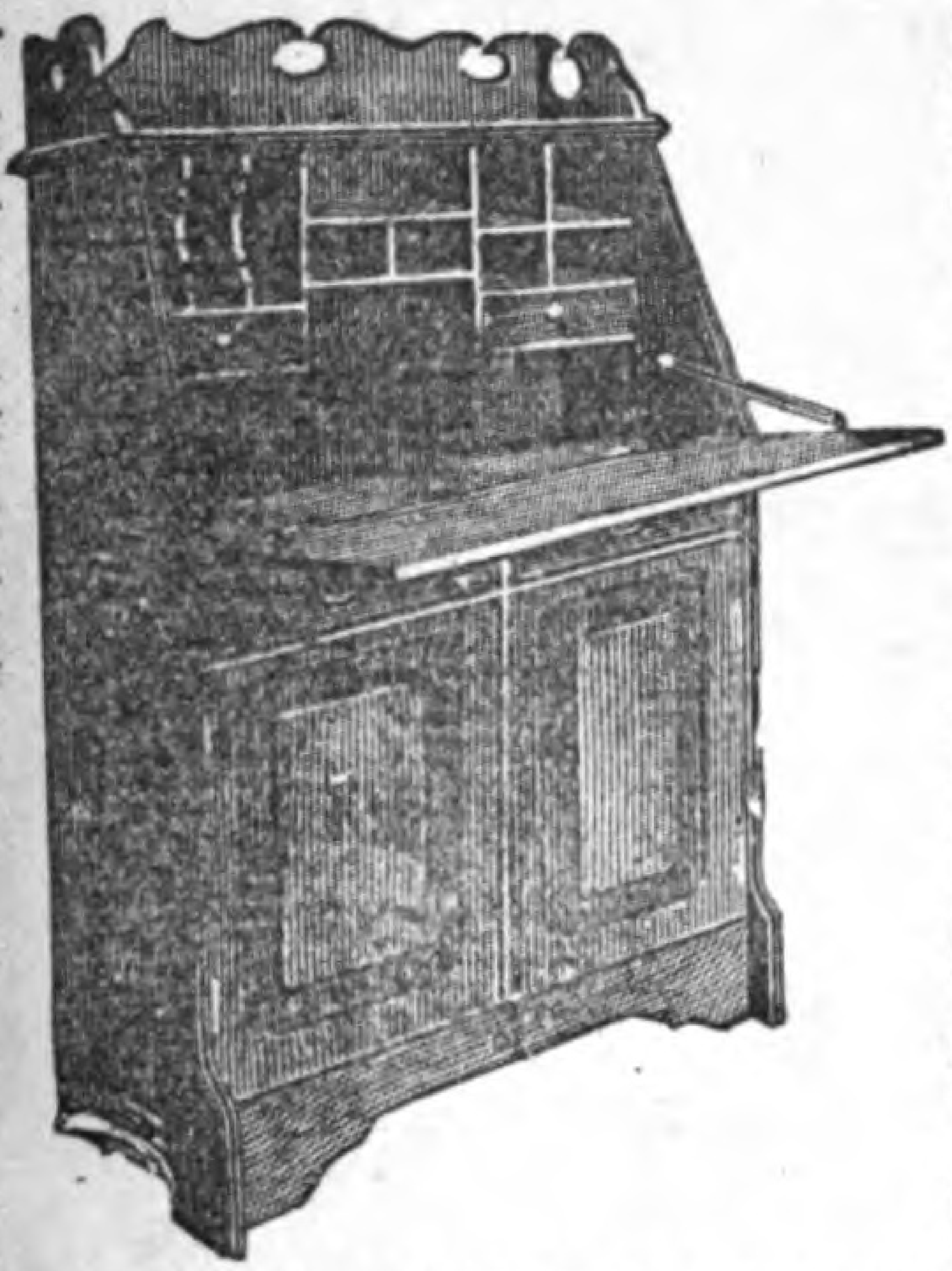
金二十六圓　檜製
金二十八圓　樺製
金三十圓　欅製
運賃荷造費御自辨

理想のデスク

△之れを要するに最善最良の本箱構造を示せる目錄は郵券二錢封入御申越次第進呈

『事務用定價金廿五圓
書見用定價金廿二圓』

荷造費各一圓八十錢
運賃は御自辨



●デスクの上部は事務用又は書見用に用ひられ下部は帳簿棚又は書棚に使用するやう構造されて居ります
●夫故日常必要の帳簿又は書物を最も手近に配置し得て便利此上もありません
●デスク使用後は机板を閉ぢて其大さを短縮する事が出來ます
●材料は兩デスク共檜て塗は木地色のデスク仕上げてす

發賣元 東京市京橋區銀座大通新橋際 **新橋堂**
電話新橋千九百九十一番
振替貯金口座二百番

●醫學士 樫田十次郎先生述

第四篇 **滋養物の攝取**

定價金五十錢 郵稅六錢

體力養成叢書

如何なる食物を攝取すれば吾人は吾人の健康を保持し得るか……
此問題の答案は即ち本書!!

第一篇 大澤醫學博士述 冷水浴と冷水摩擦
第二篇 一木醫學博士述 腹式呼吸
第三篇 大澤醫學博士述 海水浴

定價廿錢 郵稅四錢
價廿五錢 郵稅四錢
價廿五錢 郵稅四錢

●狩野病院長 狩野謙吾先生著 第十一版

神經衰弱自療法

定價六十錢 郵稅六錢

此書は神經衰弱症治療の專門大家として有名な狩野先生が各種の神經衰弱症例へば**惱**神經の衰弱症**胃**神經の衰弱症**生殖器**神經の衰弱症等の治療法を通俗に而かも詳細に講述せられたものてす、斯病に惱める不幸な方が是非御一讀の必要ある書物だと思ひます

發行所
東京日本橋區檜物町八(振替二一〇三〇番) 文星堂書店
東京市銀座大通新橋際(振替東京二〇〇番) 新橋堂書店

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

出でたり

自然と倫理

法學博士文學博士男爵加藤弘之先生著

▲菊版クロース表紙
▲定價壹圓
▲郵稅十二錢

加藤博士

曰く予は七十七歳なれば『自然と倫理』は予が最後の著作たる可しと又曰く大方の君子縱横無盡に論評せらるるあらば著者の幸なりと

▲法學博士文學博士加藤先生は一代の碩學也先生年八十に近くして尚且孜孜として研鑽倦まず本書は實に一生の心血を傾倒して始て成りたるもの机上の空論を唾棄して偏に事實に依據し純自然力に淵源せる進化論的倫理を研究したる大著述也基督教を駁擊して終始變らざる先生が近代の空論を痛罵せる大獅子吼は明治年間に於いて最深刻にして最痛快なる者也▼

發行所　東京南紺屋町　實業之日本社　郵便振替貯金口座東京三二六番

光彩陸離たる三月號

文章世界

三月一日第四號　正價廿錢　郵稅二錢　前金十冊一圓六十錢　一ケ年三圓二十錢

■春を描寫した文章　吉江孤雁

■朝霜の窓より　田山花袋

■飜譯小說：ハムブルグの冒險　ハンツ、ハインツエエヴエルス

■小說：死の床　島崎藤村

■現代翻譯界の一瞥　岩野泡鳴

□東山の文人　孫悟空
□書室日記　橋本邦助
□東京印象記　黃金冠
□文壇人國記　黑頭巾
□泉筆便り　前田晁
□私の好きな歌　前田夕暮

●靜物（長詩）　與謝野晶子
●不男（小品）　小山內薫
○新らしき機運を捲き起しつゝある洋畫家の群　（月旦）
○慶應義塾の文科　主稅

◎コナン・ドイルの『短篇作家評論』　千葉龜雄
◎二月文壇の重なる事實　時評記者

新著三種
■德田秋聲の『黴』……　水野葉舟
■谷崎潤一郞氏の『刺靑』　小宮豐隆
■田山花袋の『花袋文話』　片上伸

■東京　博文館　本町■

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

品切れのところ五版出來

▲不撓不屈の青年！ 野依秀一著

無學の聲

▲中央公論『無學の聲』を評して曰く！

『無學の聲』といふ題名を見ても首肯される。現代此種の書物も多い中に、これ程特色の際立つたものはない。一卷百餘の文章は、學說でもなく、談義でもなく、又指針でもない。凡てが野依秀一といふ人自身であるかのやうに見える。此書が單なる一形式に非ずして、やがて現代に於ける、參考書乃至研究資料の凡てである所以である。こゝに現代青年の一風格が、露骨に表現されて居る。その內容の價値如何は、此の本能的に正直な、裝飾のない、旺盛なそして廣々とした、態度の爲めに壓し下されてゐる。桃介式と共に、野依式は何處から見ても、現代必在のものであつて、又現代稀有なものであらざるを得ない。

發行所 東京芝愛宕町 實業之世界社 振替貯金口座三四三三

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

清麗如梅嬌艶似桃

文藝倶樂部

三月一日發行 第十八巻 第四號 正價廿五錢 郵税二錢五厘●前金十六冊分三圓九十錢

○緬甸だより 来馬琢道

○東京の人夫 峽雨生

■小説 重荷 生田葵

■小説 争 中村吉藏

■講談 扇屋梅川 寳井琴窓

■小説 秘密の扉 コナンドイル 無名氏譯

○黑龍江齊々哈爾の花街永安里 古笠生

◎演藝當座帳 鬼太郎

◎演藝珍珍集 曉紅

●花見の仕度 ドンナ仕度が面白いか？

○露西亞の假聲遣 福原雨六

○阿彌陀ケ池（落語） 入船亭船橋

□油斷のならぬ運送屋 迎月子

□伯林の活動寫眞 棃灑生

□中村福助渇仰記 闇太郎

□唐模様 泉鏡花

□因縁 鈴木春浦

□本町誌 石橋思案

●此頃の先斗町 銀兵衛

●中村吉右衛門 秋湖

●鮪釣り 漁翁

●缺本商 研堂

東京本町 博文館 口座二四〇番

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

注意 抽象的論理以外、單獨自修の要訣は只本書に於てのみ發表せらる

岡田虎次郎先生祖述

伊藤先生編著

岡田式呼吸法と靜坐の實驗

岡田先生最近肖像は本書の獨り有して誇とする所、先生が十五年前の撮影を朦朧なる複製としたるが如き者に非ず、先生の眞風光を見んと思はゞ本書に來れ。

呼吸靜坐圖解寫眞は本書が第一の誇りとする所、息を吸ふ時、息を吐く時、靜坐の時の三態度を寫眞として挿入し、本文の明註とす是亦他書に無き所也。

單獨自修の要訣は只本書に於てのみ發表せられたるもの本書を手にせずんば、地方の人は遂に何等得る所なかるべし、本書を逸して後悔する勿れ。

忽廿版 本書の最信用ある所以

諸名士の實驗談には華族、諸博士、高等官、辯護士、實業家諸名士の實驗談、實行模様を掲ぐ岡田式の實際價値を批判すべき唯一の好材料

附録 **靜坐萬能篇**

△第一 病氣と靜坐
△第二 婦人と靜坐
△第三 勉學法と靜坐

岡田式呼吸靜坐は實行簡易奏功偉大、理想的心身强健法にして本書は其原理實行方法實際効果應用方法等を最も簡易明確に説述したり

● 口繪寫眞二葉入洋製頗美本總かな附紙數
菊判二百五十頁 定價金七十五錢 小包料八錢

發兌元
東京市京橋區中橋廣小路六番地(振替口座東京四壹〇九番) **文榮閣書店**
東京市神田區錦町二丁目五番地(振替口座東京二七八九番) **春秋社書店**

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

四月一日發行

中央公論

春期大附錄號

附錄として掲載せらるべき創作

別れてから（小說）……田山花袋

割烹（小說）……谷崎潤一郎

梅曆の如き（小說）……永井荷風

白壁（戯曲）……正宗白鳥

彌生帖（小說）……泉鏡花

鼠坂（小說）……森鷗外

零落（小說）……長田幹彦

日光（小說）……島崎藤村

委細は卷末の編輯だよりを見よ

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す



中央公論第二十七年第三號目次

▲公論

所謂宗教利用問題

領土擴張主義と商權擴張主義



FANTIN LATOUR



"L'AURORE"

中央公論



第二十七年
第三號
第二百七十六號

南滿並南淸出兵論

(一)

支那の革命亂は、竟に我が勢力圏內にまで及ぼし來れり、是れ實に默視すべからざる重大問題たり。旅順大連は勿論、南滿洲鐵道及び其の沿線の租借地並びに撫順炭鑛其の他の利權は、實に我が十萬の生靈を殞し、二十億の財を糜して辛ふじて獲たりし勢力圏也、其の犧牲の大なる、實に日本有史以來空前にして、其れ丈け我が國民の腦底に牢乎として拔くべからざる印象を存す、此の間豈他の鼾睡を容さんや、何ぞ況んや之を攪亂し紛擾せしめて、我が臣民にさへ危害を及ぼすをや。

革命軍と稱するもの六百人は、既に大孤山に上陸して所在に官軍と衝突せり、又先さに革命黨員とし

て潜かに満洲に入り、鐵道沿線に潜伏せる一千内外の徒も、各地に呼應して相起てるが如く、彼の鐵嶺に於ては、日本商人の移轉を迫るあり、蓋平其の他に於ては日本臣民の殺害さるゝあり、夫れ舊年末商取引の最も頻繁なる時季に於て、突然商家の退去を迫るが如きは、實に他の利益を無視するもの也、況んや我が臣民を迫害し、竟に之を殺すに至るをや、彼の革命派の北伐軍と稱するもの、並に南満洲に侵入せるものゝ如き、一定の方略より出てしに非ず、また確實なる攻伐の準備ありて、且つ萬已むを得ざるに發せしに非ず、唯だ草賊的に、不規律無節制に出没するものにして、其の目的單に所在の官民を脅嚇して以て物情を攪亂するに在り、是れ正さしく平和の敵にして、又實に人道の賊なり、吾人は今必らずしも之を以て革命派を責むるものに非ずと雖も、我が勢力圏内を蹂躙し、我が利權を侵害し、我が臣民の生命財産の安全を破壊せらるゝに至ては、斷じて之を默止する能はざるのみ。

(二)

南満洲の革命亂に、紛擾せらるゝや、勢ひ我が新領土たる朝鮮を風動する虞なきにあらず、新附の民、未だ悉く我が皇化に霑はず、動もすれば風聲鶴唳にも亦驚魂駭魄せんとす、殊に近く境壌相接する所に於て、干戈を交へ 生民加擔して起ち、所在に禽走し獸奔するを視ば、果して恟々として安んぜざる所なきや否や、多言せずして知るべきに非ずや、乃ち我が領土の安全を保持するがためにも、南満洲の秩序と康寧とは、我れ必らず之を保持せざる可からず。

上海は一個純然たる商業地のみ、然かも列國が治外法權を有する居留地たるがために、清國の亂人等皆

かりて一指だも染めず、現に太平天國の亂に、猖獗なりし髮賊も曾て上海を侵さず、此がため富豪紳士の亂を避けて生を娛む者、相率ひて上海に集中し、竟に今日の如き殷盛を現せるに至りしにあらずや、夫れ列國强しと雖も、長鞭馬腹に及ばず、歐州より支那に出兵するの至難なるは、三十三年の北清事變當時の明證する所、佛獨兩國の如き、二個師團の兵を出すにも尙ほ二年の準備を要すといはずや、我が日本に至ては、旬日ならざるに能く三個師團以上を出し得べく、三月にして十師團の兵を出すまた難からず、其の實力の强大なる、到底歐州列國と同日に語る可らず、然るに清國官民の日本を視る甚だ輕きが故か、我が勢力圈內なる南滿州を視ること、眇たる彼の上海にだも如かざるが如きは何ぞや。

我が日本は、其の名譽面目に掛けても、南滿洲の康寧を堅持し、苟くも一歩だも之を浸犯せしめず、一分だも紛擾せしめざるを要す、我が鐵道守備隊は勿論、一個師團の兵は、既に警備の任に就けるならん、然るも革命軍の徒、僅かに足を擧ぐれば、鳳凰城、蓋平並びに得利寺の附近より、奉天、鐵嶺に至るまで、動もすれば擾亂を免がれざらんとするは何ぞや、蓋し兵力未だ十二分ならざるが故ならざらんや、果して然らば、我れは宜しく速かに相當の兵を出すべし、兵を出して以て十二分に南滿州の秩序と康寧とを堅持すべし。

南滿州の秩序と康寧とを堅持するは、啻だに我が利權を擁護し、我が臣民の生命財產を安全ならしむるに止まらず、又併せて列國臣民の生命財產を防護する所以にして、且つ支那人民をも安堵せしめて、以て生々の恩を享けしむる所以也、蓋し南滿州にして平和且つ肅清ならん乎、中清若くは北清に於て徇

々たる支那の富豪紳士は、悦びて茲に避難すべく、彼の皇族親貴の如き、また財産生命の安全を期するがため、茲に來り寓するにも至るべし、若し果して然らば、是れ彼等生民を助けて其の堵に安んぜしむるに止まらず、又實に南滿洲を殷盛にして幾んど第二の上海たらしむる所以ならずや、而して是れ人民をして眞の平和を享樂せしむる所以にして、人道上の最大德澤也、我が南滿洲を勢力圏内にする覿面の効果茲に於てか益々明著なるべし、我が皇平和の仁澤を布きて、彌よ其の光輝を發揚する所以は是ならずや。

青島に據る獨逸は、能く其の武威を以て平和康寧を維持し、革軍其の附近を侵さんとするや、力を官軍に藉して之を掃蕩したりき、彼の東三省總督趙爾巽が、其の家族を日本の勢力圏内に留めずして之を獨逸管下の青島に移せしは、日本の力の十分に平和を保つに足らざるを虞れて、却つて獨逸の恃むべきを信ぜる結果にあらずや、青島と南滿洲と、其の廣狹大小の差こそあれ、他の勢力圏内たるは一也、然るに此を擇ばずして彼れを採る所以は他なし、此の平和秩序實に安んず可らざれば也、我が政府は宜しく之に鑑みて、速かに南滿洲に出兵し、其の武裝に由て以て賢實に秩序と康寧とを保維すべき也。

知らずや、釜山より安東縣、奉天を經、若くは大連より奉天を經て西行北京に向ふ一路と、北行長春哈爾賓より歐洲に向ふ一路とは、實に世界の大道路にして、交通上の大幹線たるとを、單に其の平和安全を保つがためにも、また所在に官革の衝突擾亂を容す可らざる也。

(三)

故伊藤公の內閣は、曾て淸國政府をして福建省不割讓を約せしめたりき、不割讓とは、之を我れ以外の他國に割讓せしめざる謂也、隨つて該省が一種の我が勢力圈內たるや既定の事實たり。

我が臺灣の經營を圓滿ならしめんとせば、素より福建省の平和を維持せざる可らず、我が臺灣にある最大多數の土民勞働者は、大抵廈門又は汕頭より移住せるもの也、彼等は裸體のまゝ舟子となり、精苦して若干の旅資を作り、之を以て臺灣に渡航し來り、百般の勞働を爲すもの也、故に福建省にして擾亂せん乎、臺灣にある多數勞働者も亦恟々として堵に安んぜず、逃れて我が治化を風動するに至ると多言せずして明か也。

茲に於てか我が政府は、完全に臺灣の秩序と安全とを保維するがため、亦福建省、少くも廈門汕頭の秩序保維に努めざる可らず、此がためには若干の軍隊を出すも亦た辭す可らざる也。

我が同盟國たる英國が、其の香港の平和を保全せんとするや、對岸なる廣東省の秩序を維持するの必要なるを知りて、現に印度より少からざる軍隊を派遣せるに徵せよ、流石に大國、統治の骨法に精通する到れりと謂はざるべからず。

我が軍隊を廈門及び汕頭に派せんとするは、猶ほ我が同盟國が兵を廣東に出すに異ならざる也、誰か片言隻句を其の間に介むものあらんや。

臺灣の統治を全ふし、且つ其の領有の効果を十二分に收穫せんと欲せば、少くも廈門汕頭には斷じて他人の鼾聲を容るべからず、之を容るれば、我が航路を危險ならしむるに止まらず、我が南進の足場を

脆弱ならしむる所以なれば也、夫れ南進は我が已むを得ざる勢ひ也、南方熱帶に產する無限の富を吸集して、以て我が工業資料と爲すは、經國上の最要事業にして、實に富國の關鍵たり、然るに厦門汕頭を他の手に委して、臺灣の基礎を不安全ならしめん乎、此の經營洵に至難ならざるを得ざる也、故に厦門汕頭の秩序と安全とを堅持し、苟くも他の窺窬を許さゞるは、我が立國の大計上、欠く可らざる急務なりとす。

吾人の見を以てすれば、淸帝既に退位の上諭を下し、支那を擧げて一大共和國たるが如しと雖も、袁世凱をして初度の大統領たらしむるとは、眞に革命を叫べる人々の忍びざる所たるに止まらず、共和政が果して支那に適するや否やも疑問にして、且つ各省獨立の氣勢强く、漸く內訌の兆あるを蔽ふ可らず即ち支那の大に動搖するは寧ろ今日以後にあるべし、此の間に在て我が厦門汕頭をも不問に附し、其の漸くにして擾亂渦中に入るを默視せん乎、其の結果實に測る可らざるものあらんとす。

寧ろ早きに及んで出兵し、豫め計畫を立てゝ以て萬全に其の秩序と平和とを支持せば、南淸又は中淸地方の富豪縉紳にして、亂を怖れ安を娛むもの、玆に競ひ來りて絕好の安住所と做すに至るべし、乃ち福建省をして殷盛なる樂地たらしむるに止まらず、又實に居住者をして平和の德澤に浴せしむる所以にして、人道上頗ぶる崇ぶべき偉業たらずんばあらず、吾人の耳にする所によれば、政府は既に滿州守備隊を更代せしむるため、第十二師團派遣の準備を爲したりといふ、今日守備隊を歸還せしむるは得策にあらず、寧ろ十二師團の一部を南滿州に出し、一部を福建省に派して以て其の平和保證に供すべき也。

（四）

福建省に出兵する結果は、若干の海軍も亦併せて之を置かざるべからず、即ち海陸軍のため、多少の設備を爲す必要上、或は一部の租借地を得べき必要あるも知る可らず、我が政府は宜しく精密に計畫して萬違算なきを期すべき也。

或は此の租借を以て支那領土保全の主義に反すと謂ふ者あり、然れども租借は分割に非ざる也、若し租借を以て領土保全に反すとせば、此の主義を以て結合せられたる日英同盟は、獨逸の青島租借を排斥せざる可らず、而して其の以前に於て日本自から旅順大連の租借地を放棄せざる可らず、租借の分割にあらざるや、素より多言せずして明かなるのみ。

或は南滿州又は福建への出兵を以て分割の先驅と爲し、公然之に反對する黨人及び新聞記者なきに非ず、然れども出兵の目的は我が既得の利權を防護するにあり、居留民の生命財産を保全するにあり、其の居住の各國人民を保護するにあり、其の目的寧ろ完全に領土を保全するにあり。何の點か果して分割の名實に適せんや。

世には支那人、殊に革命黨に媚ぶるがため、幾んど常識を逸するが如き言動を爲すものなきに非ず、凡そ巧言令色を以て、辭令の妙を盡すもの、世界豈支那人の如きあらんや、之に對して始終宴會に於て挨拶するが如き御世辭のみを並ぶるも、抑も國の大經綸を奈何せん、夫れ近世外交の要道は、利益の獨占にあらずして均霑にあり、相共に利して而して相共に便するに在り、然かも根本義は自家の立脚地を

失はず、自家の利益を擧げて全く之を犧牲とせず、以て經綸を誤まらざるにあり、汲々焉として革命黨にのみ媚びて或は及ばざるを恐るるが如き者、少しく省みる所ありて可也、彼の出兵説を阻む職々者流の如き、殊に大に反省すべき也。

噫清朝亡ぶ

（一）

清帝は二月十二日を以て三個の上諭を下し、全然其の統治權を放棄して、國體を共和に更むるに至れり、平和の間に此の革命を行へるは、支那歷史に未だ曾て有らざる所、之を特筆大書すべきを當然とす。隨つて其の上諭の如きも、記して以て後に貽す値あり。

上諭（第一）

朕隆裕皇太后の懿旨を奉ず

曩に民軍事を起してより各省響應し天下沸騰し生靈塗炭に苦む由て殊に袁世凱に命じ委員を派して民軍代表者と大局を討論し國會を開き政體を公決せんとを議せしむ既に兩月に至ると雖も尙ほ確たる辦法なく南北睽隔彼我對峙し庶は途に病み兵は野に曝す徒らに國體一日決せざれば民生一日安からず今全國人民の心理多く共和に傾き南中各省曩に唱議し北方の各省亦後に主張す人心の嚮ふ所天

命知るべし余（皇太后）また何ぞ一世の尊榮のため兆民の希望に逆ふに忍びんや是を以て外大勢を視、內輿論を審かにし特に皇帝を率ひて統治權を以て之を全國に公にし定めて共和立憲國體と爲し近く海內亂を厭ひ治を望むの心を慰さめ遠く古聖天下を公にするの義に副はしむ袁世凱は曩に資政院の選擧を經て總理大臣となれり茲に新陳代謝の際に方り宜しく南北統一の法あるべし乃ち袁世凱をして全權を以て臨時共和政府を組織し民軍と統一辨法を協議せしむ凡て人民安堵海內泰安を期す夫れ滿蒙回藏五族を合して領土を完全にし一大中華民國と爲よ余と皇帝とは快寬に退處し歲月を悠遊し永く國民の優禮を享け親しく郅治の國政を視ん豈夫れ怡ならずや

上諭（第二）

朕隆裕皇太后の懿旨を奉ず

曩に大局危殆兆民の困苦するを以て特に內閣に勅し民軍と皇室優待の各條件を商酌し以て平和解決を期せしむ

茲に伏奏の優禮條件に依るに宗廟寢陵永遠に祀を奉じ先皇の陵制舊の如く妥修し皇帝は政權を離るゝも尊號を廢せず並に皇室優待八ヶ條、皇族優待四ヶ條、滿蒙回藏待遇七ヶ條皆奧旨也特に皇族及び滿蒙回藏人等に宣示し今後務めて彊域を除き共に治安を保ち世界の昌平を重視し共和の幸福を享受せしむ余實に重望あり

皇室優待條件

第一條　大淸皇帝辭位の後尊號仍存して廢せず中華民國は各國君主を待つの禮を以て待遇す
第二條　大淸皇帝辭位の後歲費を四百萬兩とし淸貨幣改鑄の後改めて四百萬元と爲し中華民國より支辨す
第三條　大淸皇帝辭位の後姑く宮禁に居り後頤和園に移る侍衛人等は條規の如く留用す
第四條　大淸皇帝辭位の後其の宗廟寢陵永遠に祀を奉じ中華民國より適宜衞兵を置き愼重に保護す
第五條　德宗皇帝の陵未だ工事終らざるは制の如く修築し其の典禮を奉ずる仍ほ舊の如くし所要經費均しく中華民國より支辨す
第六條　前の宮中用る所の人員常に照して留用す唯だ以後更に宦官を加ふるを得ず
第七條　大淸皇帝辭位の後其の現有資產は中華民國より特別保護す
第八條　現有の禁衞軍は中華民國陸軍部の節制に歸し其の數及び俸與尙ほ舊の如くす

皇族待遇條件

第一　淸國王公世襲槪ね舊に由る
第二　淸國皇族の中華民國國家の公權及び私權は國民と同等とす
第三　淸國皇族資產を一體に保護す
第四　淸國皇族は兵役の義務を免ず

滿蒙回藏各族待遇條件

滿蒙回藏各族共和を贊同するに依り中華民國は左の待遇を爲す
第一　漢人と平等とす
第二　其の現有の資產は之を保護す
第三　王公世爵は舊に依る
第四　王公中生計の困難なる者は生計の方法を代籌す
第五　先づ八旗の生計を籌す未籌定前の八旗兵弁の俸給は更に舊に依る

第六　從前營業居住等の制限は一概に之を除き各州縣聽自由に入籍を許す

第七　滿蒙回藏現有の宗教は自由たり

以上の條件は正式法文に列し双方代表者より各國駐箚北京公使に照會し各當該政府に傳達すべし

上諭（第三）

朕隆裕皇太后の懿旨を奉ず

古天下に君たる者民命を保全す人を養ふを以て人を害するに忍びず現に將さに國體を新定せんとするは先づ大亂を治め泰安を保つを期するに在り若し多數の民人に背逆し無窮の戰禍を開かば大局決裂慘害相亞ぎ勢ひ必らず種族の慘劇を演じ宮廟震惱し兆民荼毒に罹らん其の禍何ぞ言に忍べんや害相量りて其の輕きを取る當に是れ朝廷を親覩し吾民を憐恤するの苦衷也凡そ汝中外臣民克く此の意を體し虛驕の意氣を挾み過激の空言を逞ふする勿れ國と民と兩つながら其の災を受けん民政部步軍統領姜桂題馮國璋等をして嚴密に防衞し剴切に開導せしめ天に應じ人に從ふ大公無私の意を悟らしめよ國家官を設け職を分ち民の爲めにす內は各府部員を列し外は督撫司道を立つるは群黎を康保するためにして一人一家のために設くるに非ず汝大小各官非類を懷ひ謹みて職掌に據し各長官に命じ懇切訓戒其の官職を空ふせず以て余が夙昔庶民を愛撫するの趣意に副よ

內閣總理大臣　袁世凱
署理外務大臣　胡維德
民政大臣　趙秉鈞

署理海軍大臣　譚學衡
署理農工商大臣　熙彥
郵傳大臣　梁士詒
理藩大臣　達壽

聖祖の康熙元年より起算すれば二百五十一年、又太宗の國號を清と稱せし崇德元年よりすれば二百七十七年にして、愛親覺羅氏の朝廷は滅亡せる也、太祖努爾哈赤肇めて國號を滿洲と稱せし天命元年よりすれば二百九十七年也、支那の歷世多くは二百年內外にして亡ぶ、其の三百年に逹するは鮮し、清朝もた其の撰に漏れず、嗚呼歷史は果して繰返す乎。

（二）

支那の民心が清朝の秕政に倦めるや久し、清朝は道光以後全く人心を喪へるなり、彼の長髮賊の亂に當つて、曾國藩等漢人の起るなく、而してゴルドン將軍等の官軍を助くるなくば、清朝は當時既に滅亡すべかりき、近くは三十三年の北清事變に於ても、列國若し清朝を廢滅せしめんとせば、僅かに一擧手一投足の勞にて足りし也、譬へば清廷は猶ほ朽木の如し、唯だ幸ひにして之を推すの風なかりしが爲め今日まで其の命脈を保てるのみ。

南方革命黨の崛起せるもの、從來二三に止まらざりき、然かも槪て小なる百姓一揆的にして、殆んど滿足なる銃器をすら有せず、隨つて一も大勢に反響するには足らざりき、然るに去年十月十日武漢の變起りてより、清廷の狼狽太だしく、未だ五月ならざるに已に全く其の滅亡を見るに至る、蓋し朽木永く

自から支ふる能はざるのみ。

武漢の變は、素より組織あり系統ある革命亂にはあらざりき、而して其の一點の火片飛んで燎原に至りしは何ぞや、革命の機運既に大に熟せりといふと雖も、抑もまた清廷の擧措總て其の宜きを得ざりしが故也。

清廷が武漢の變起ると聞くや、直ちに詔を下し、所在叛起するものも、一たび悛改すれば敢て其の罪を問はずと宣示せるは第一の失策也、叛するも罪せられざる以上、何人も先づ一たび叛して以て革軍に呼應すべし、斯くして幸ひに革命成らん乎、初めより之に參加の功勳を錄せらるべし、若し革軍敗れん乎、歸順すれば則ち一も罪せられざる也、果して然らば、利害に敏くして雷同附和を好む支那の官民等、如何ぞ競ふて相叛せざるべき、乃ち清廷第一の詔は、實に叛亂を促がして大を致さしめたる也。

其の袁世凱を起すに方つても、全く死命を制するの權力を彼に與へたるが如き、亦一の失策たらずんばあらず、彼の廕昌と雖も一擊して能く漢口を奪ひたるにあらずや、之に命じて更に漢陽武昌を攻めしめば、功を成す太だ難からず、南京に至ては、津浦鐵道によりて若干部隊を南下せしめ、張勳と內外相扶けしめば、容易に之を革軍に委するには至らざりしならん、兵の精鈍大小を比すれば、清廷素より優に革軍の上にあり、唯だ資財の缺乏に至ては、大なる困難なりしと雖も、其の程度を革軍に比すれば、幾んど甲乙あるを視ず。然るに清廷の王公大臣等初めより膽落ち氣沮み、求めて自から勢威を失墜し、竟に一の袁世凱をして欲する所を恣にし、且つ革軍をして其の志を成さしむ、寧ろ嗤ふべきのみ。

然れども退位の措置は洵に其の當を得たり、今にして帝位を頑守するも、事に多くの効果なく、却つて徒らに時局を紛更し困難ならしむるに過ぎず、故に自から帝位を捨てゝ、其の血食を絶つに至らず、年々四百萬の歳費を得、皇帝たるの尊號を有するは、歐洲にも多く例を視ざる所、支那の史上にも亦先例なし、彼の廢せられて庶人となり、若くは毒殺せられ、馘首せられて、其の三族を夷滅せらるゝに比すれば、得失素より同日に語る可らざる也。

我が歴代幕府の亡ぶるや、多くは夷滅を免かれず、唯だ徳川氏のみは政權を朝廷に返還して一族永く繁榮し、五爵の首班に位ゐして以て今尙ほ一代の尊重を受く、淸廷また又然らんとす、其の歴史上の先例を破れるは、豈近時の人情平易にして、政治上の爭ひ深酷ならざるの致す所乎、吾人は頗ぶる之に興味を感じ、且つ愛親覺羅氏のために祝す、

（三）

宋の亡ぶるや文天祥あり、明の滅するや鄭成功あり、其の忠烈節義實に後の懦夫を奮はしむ、今や淸朝三百年の帝統斷絶するに方つて一人の義士有て起つなきは何ぞや、嗚呼世道人心の變乎、非乎。

吾人の見る所によれば、支那人は唯だ利を視て義を知らず、利害損得の加減乘除に敏にして、忠孝節義に殉する意氣あらず、是れ二十四郡一人の義士なき所以の一ならん。

康熙乾隆の治、實に前朝の郅治と光を爭ふに足る、然かも學者をして訓詁旁博の末節にのみ拘泥せしめ、由て以て黜首を愚にせんとせし政略の結果、學風蕩然として仁義忠孝を尙ばず、科擧の弊と共に一

代の民心を腐蝕せしむ、是れ清朝の滅亡に際して、王公親貴以下竟に一の仁人なき所以の一ならん。

吾人は隣國の君主の滅亡を看て、轉た我が國體の偉なるを思ひ、一種崇嚴の感を禁ずる能はず、苟くも我が皇室御引退の如き椿事あらん乎、是れ實に大和民族全滅の秋也、吾人四千萬の同胞は、其の遺孽を止めずして悉く之に殉せんのみ、四億の人民中一人の起つて義を唱ふるなきと、其の差素より天淵月鼈も啻ならざる也、我が國民は記せよ、我が國體の崇ぶべき、茲に至て益々明著ならずや、而して節義を砥礪して彌よ其の光輝を増さんとは、經世家の永く意を致すべき所ならずや。

（四）

四億の民衆を擁する大國なりといふを休めよ、彼の南京なる共和政府は、僅々一千萬圓の資を得るすら亦太だ難きを告ぐるに非ずや、袁世凱の立つ假政府と雖もまた亦然り、彼等にして精鋭なる三個師團の兵を有せんとするも、亦殆んど不可能なるが如きにはあらずや、僅かに租税を徴收せんとするも、動もすれば民心の離反を怖る、斯の如き薄弱なる政府を以てして、抑も何を爲さんとするや、支那の亡びざるは、全く日英兩國の力也、少しく詳らかにいへば、日本及び英國が領土保全主義を確守し、野心ある列國をして、支那を分割せしめざるが故に、乃ち僅かに其の形體を存するのみ。

此の時に方て、實力あり、節制あり、系統ある政府を建てんとす、素より不可能事にはあらざるも、實に至難なると多言を要せず、彼の容易に共和立憲を口にするが如き、思はざるもまた甚だし。

支那の狀勢より案ずるに、各省は是より大に勢ひを張るに努むべし、各省互ひに兵權を有し、徵稅權

を有して苟くも之を他に委するを欲せざるべし、斯くして一種の聯邦共和を爲すといふも、米國に似て米國に同じからず、獨逸に似て獨逸に同じからず、共和の基礎薄弱にして、而して內訌必らず絕えじ。

(五)

支那人の如き政治思想なき民衆と、徒らに廣大なる領土とを有するものを治めんには、必らずや一種の壓力を要す、一種の壓力とは何ぞや、曰く兵力是れ也。

支那の歷史を案ずるに、兵力大なるもの必らず主たり、戰に勝つ者必らず王たり、空論を好みて口舌の爭ひに急なる支那人の如きは、兵力にあらざれば治めがたく、又兵力に非ずんば屈服せざるのみ。熟々支那の人民性を視るに、其の形式こそ軍隊たるを得れ、精神的に精銳なる軍隊たるべき資質は全く無し、又政治的にいへば、國民性を欠如すること甚だし、故に彼等は旺盛にして不屈の意氣を以て、假令社會的結合を保ち得るも、國民として精强なる國家を形成せんとは難し、匈奴、回紇、契丹、遼、金は實に歷代彼等の深患たりき、今や北方に露西亞あり、西方に獨逸あり、其の兵力の精銳なる、素より匈奴以下の夷人と同視す可らず、支那が其の爪牙を免かるゝ、全く難し、彼の領土保全主義の如き、到底永遠に其の効果を持續す可らざれば也。

淸廷の卒然として亡べる、而して之に代るべき共和政府の微弱無能なるは、能く支那の特色を語る者也、之に由て以て遠き將來を揣摩するに、蓋し中らずと雖も遠からざるべき乎、若し夫れ近き將來の事に至ては、吾人多く言ふ能はず、寧ろ紛淆相次ぐものとして、之を事實に徵すべきのみ。

公論

岩倉公を論ず（下）

池邊吉太郎

元來和宮の御降嫁は井伊の遺策遺謀である。少くも井伊同意の事であつた。これて以て京都の御機嫌を取らうとしたのだ。和宮御降嫁といふ事の發端は安政五年頃から起つて居る。近衛公が所司代の酒井若狹守を呼んて三條實萬卿と一所に和宮御降嫁の話をされた。それが十月の一日である。無論井伊の大老になつた後の事である。此頃からして其話が起つて居たからして、井伊は知つてる、そして酒井に其話を進めさしたから無論同意の事てあつた。處て岩倉は和宮御降嫁の事について先帝の御下問を受けて意見書を出して居る。それは萬延元年六月の事のやうだ、からしてこれは井伊の死んだ後だ。元來此事には先帝は御不同意である。又和宮御本人もまだお若い。十代て居らるゝ。そして又御降嫁がお厭だ。御自筆のお斷りの書面などがある。況して又先帝のお氣に入りの皇妹てある。御本人も御承知なく、先帝も亦なか／＼御承知がない。けれども井伊沒後の幕府は切に之をお願して居る。其時岩倉は御下問に應じてお遣はしなさいといふた、前の「神州萬歳策」は少しも行はれ無かつたが、今度の降嫁意見は其まゝ行はれた。これは岩倉が先帝の御信任を得たからてせう。其時はどうも岩倉の意見が御決定の本となつてる樣てす。其意見書は斯うだ。今日の日本の狀

態は朝廷を初めとして下々に至るまで十人が十色の心を持つて居る。土崩瓦解の勢になつて居る。實に危險である。此場合に日本を維持する長策大計は外ではない。關東に御委任になつて居る政權を隱然と朝廷に回復する事が適當と信じます、關東の覇權は最早や地に落ちて居ります。大老の井伊は白晝浪人共から首を取られて居る。此一事でも證據は明白でありませんか。かゝる關東に御委任になつて攘夷を遊ばさうといふのは、長竿で以て天上の星をたゝくのと同一である。斯ういふのだ。いよ／＼以て皇權回復論の端緒を開いて居る。そして此時にはもう幕府を征伐しやうといふ決心も示して居る。此意見書を見て始めて知つた。それて此王權回復の事業を大成するには干戈を動かす外はありません、がこれはなか／＼口先ばかりて出來るものてはありません。又其事はなか／＼急々に運ぶことは出來ないのである。何れ大諸侯を頼まなくては關東征伐は出來ますまいが、大諸侯が思召に應じないて、どうかすると、朝廷と幕府の御私戰と心得て、味方とならないといふ事があるのみならず、或は土崩瓦解を機會として一隅に覇權を握り、徳川に代るものが出るかも知れない。こゝでも亦大諸侯當てにならぬといふ論をして居る。其上攘夷論の浮浪過激の徒は、異人館の燒打もするだらうし、又暗殺もするだらう。又外國との交渉が不調に歸して外國が悉く聯合して日本に征め入り、沿海を掠奪し或は或地方に外國旗を翻し、内憂外患一時に起るといふ懸念が無いでもない。此憂慮も大に當つて居る。であるからして寧ろ弱くなつた幕府を恩を以つて撫けて保護をしておやりになつて、幕府をお使ひになるといふ事が今日の策略として適當と信じます。それが隱然と朝廷に政權を回復する御方略に相違ない。其方略には和宮を御降嫁になるのは唯一でありませう。そこで和宮の御一身は今日朝廷の爲めに九鼎大呂よりも重い、御降嫁をお許しになるのが適當と信じますといふのだ。世間の嫌疑とはウラハラだ。奸物といふのは實は無理だ。そこで主上はそれをお容れになる。そして和宮に關東に行くことをお勸め

になる。和宮も皇室の爲めならばといふので御承諾になる。が、いよ〳〵和宮の京都をお發しになるのは文久元年十月廿日だ。此時岩倉公は和宮にお伴をして關東に行く。お伴をした殿上人の中でも岩倉は極く肝要な役目を勤めることになつた。又先帝も岩倉に働かせて見やうとの思召があつたものと見える。千種有文といふ人も一所にお伴をしたが、千種の方が岩倉よりも位が上だ。此時岩倉の官位もお上げになつた。四位の少將とか中將とかにされた。そして已に京都から發して大津に迫つて居る頃にわざ〳〵岩倉に勅使をお遣はしになる。これは幕吏などの眼に岩倉公を重く見せる方略であつたといふ。其前に岩倉には宸翰を賜はつて居る。岩倉は御趣意を承知して居るし、使命のある所も充分分つて居るが、只岩倉を重く見せる爲めに箇樣な事があつたといふ。其時はもう大變な儀式で幕府でも費用を厭はずにやつた。徳川の先代には皇室と結婚した例は餘程古い。長い間絶えて居つた。それを再興して昔の禮式よりも尙一層盛大といふ積りでやつた。

其晴れのお伴を岩倉がやつて、そして內々の使命をも見事にやり遂げた。和宮が江戶に御入城になつたのは十二月十一日だ。もう其前に岩倉は幕府の老中連と樽俎折衝を初めて居る。一寸老中の荒膽を拔くやうな事をやつて居る。何といつたかといへば、お前さん達は承久元寇の例を追うて天皇を廢さうといふ企てをして居るナとやつた。これは其頃噂のなかつた事でもあるまい。安藤對馬守が坂下門でやられた時の斬奸狀にも廢帝の例を調べた奴だといふ事が罪條の一となつて居る。けれども其頃の幕府の老中には到底も其んな事を調べも考もする人が有りさうには無い。井伊が生きて居て引續きてあの後をやらうとすれば承久の北條若くは建武の足利を行く外行きやうがなかつたらう。が其後の幕府の老中では到底も思ひも寄らぬ。ズット跡になつて水野筑後守が謀主となつて、小笠原閣老に兵隊を率ゐさせて一寸京都に逆寄せした事はあつた。それもタイした根據を持つて居なかつたから、直に追返されて引さがつた。といふ次第で、其時岩倉が一本參つ

た時には、不意を打れて、安藤對馬守、久世大和守などいふ人々は、悉皆荒膽を拔かれて震ひ上つた。決して〳〵左樣な事は御座りませんといふ。さうすると岩倉がそれなら其證據を見せよといふ。どうしたらよろしう御座らうといふと、將軍自筆の誓書を奉れと岩倉が答へた。ソレは東照宮以來先例のなきことて御座る。此場合先例などの必要がないと爭ふて、老中もとう〳〵岩倉に從ふ事になつた。和宮は翌々十二月十三日に入城になつた。岩倉と千種は十四代將軍家茂公自筆の誓書を受取る。歸つて御覽に入れたら、成程此字の幼稚サ加減ては自筆に相違なからうとお笑ひになつたさうだ。そして岩倉は成功して歸つた。翌文久二年二月十一日には御褒美を頂いて居る。と同時に又之が大きな岩倉の嫌疑の種になる事がある。岩倉は內旨を奉じて酒井若狹守にお遣ひ物を贈つた。和宮御降嫁の事についていろ〳〵骨折つてくれた段は忝いと御褒美の使を勤めて居る。又も一つ嫌疑の種て無くてはならぬ一件がある。岩倉は遂に長州の勤王家達から睨まれだ。といふ一件がある。それは外ぢやない。長州の吉田松陰一派の勤王家が毛利忠正公を奉じて大いにやらうとするのに、一寸裏を掻いた長井雅樂が文久二年三月に上京して、其毛利忠正公のお使になつて朝廷に遊說した。公武一和論だ。これが諸侯から出た公武一和論の先登て、島津三郎公のよりも少し前だ。永井は一和論と共に開國航海論者てあつたが、此永井の開國論は松陰一派に睨まれた。松陰の攘夷論もよく考へれば矢張り一種の國權論に外ならない。或は永井雅樂の開國論と結び附いて行けさうな國權論て無いても無い。永井の論は斯うだ。神功皇后はどうてある。三韓征伐はどうてある。開國航海主義で海を渡つて國威を張るは當然だ。海の中に縮こまつて日本の維持は出來ないといふので、制海的開國論とも見らるれば、開國的侵略論とも見らるゝ。岩倉の腹の中ではこれも最もだ位に多分思つて居られたでせう。が永井雅樂と說の合ふのはそれよりも公武一和論てしたらう。處が永井は幕府の老中安藤對馬守に使はれて居る幕府の廻者て

あると、松陰一派からはひどく憎まれて居つた。又薩摩の勤王家からも俗物だのと罵られて居つた。西郷もさういつて居つたし、山縣のメモリーにもさういふ事が見えて居る。何でも永井の上京の途中山縣は濱松で出逢つた。其時永井のお伴の時山直八と激論して刺違ひをやらうとした事があると書いてある。其永井と岩倉公が逢つて、二人の間に話が隨分出來たものと見える。そして永井にいくらか盡力して加勢をした、朝廷に取持つた。そいつが又岩倉の奸物の一原因を爲さゞるを得なからう。永井が長州人から切腹をさせられて大失敗したのに、岩倉が其時無事で有つたのは寧ろ不思議な位だ。尤も注意は相當に周密にあつたに相違ない。又恰度永井が失敗した跡、島津三郎(久光公)が公武一和論を一藩の力を懸けて主張して出た、其先容として京都に來て居る伊知地貞馨（其頃堀次郎と號した）に會つて、岩倉は薩摩藩の開國鎖國の意見を聞かして呉れといふて居る。斯う問ふ位だから、公武一和論は兎も角、開鎖に關しての薩摩の論はまだ分つて居なかつたらう。其時伊知地が外交家的にいふには、薩摩の藩論が個樣と申し切る譯には參りませんが、私一個の意見としては鎖國を墨守すべきではない、開國を以て日本の方針とする方がよいと思ひます、と答へた。此答を聞いて、岩倉は手ッ取早いから直にハヽアと分つたらう。薩摩は本來開國下地の論を持つて居る。然るに三郎公がいよ／＼京都に乘込んで申立てた條項の中には、開鎖一件に付ては全國の公論を以て御決定然るべしといふて居る。先帝も其思召であつたから、これならば反動の起る氣遣ひはない。斯う出たのは、三郎公も注意したのだらうけれど、或は伊地知が岩倉の注意を取次いで斯うさせたのかも知れぬ。其時岩倉がいふには如何にも開國の方が理屈かも知れない。が長州の永井のあの論はお前知つて居るか。あの論は京都では不人望だ。お前は注意して、其説を言ひ觸らしてはいけないといつた。岩倉は此時全然開國論になつて居なかつたからでも有らう。然るに開國論では叩かれないで公武一和論で叩かれる事になつた。

處で岩倉公はこゝで薩長に倚るといふ端緒を開いた。永井と伊知地が薩長の代表者としてやつて居る所を見て、大諸侯は油斷はなりません、わるくすれば第二の德川になるかも知れぬといふ論を止めにして、セッセと關係を付け始めた。公武一和論で付け始めたのだから、薩長を器械にして德川を矢張り使つて行かうといふ主意から出ては居るが、即ち德川と大關係を作るための小關係のつもりかも知れぬが、兎も角もそれが因緣となつて深くなつた。そして自然的に實際的に薩州と殊に深くなつた。長州では永井が失敗して其後を松陰一派が引受けて京都に出て來て、之には三條公が近かれて、尊攘一本鎗を推立てたが、これに對しては對抗の勢ひだ。勢ひではあるが、岩倉は岩倉流で、矢張り長州に對しても調和的態度を失つて居ない。薩長調和といふ事もやがて初めて居る。

處で岩倉が薩長は第二の德川にならぬといふ見當を定めて、斯うしたかといふに、其れはどうだか分つたもので無い。調和して並立させて置けば、双方から制し合つて、獨りで主權を簒ふといふ事は無い譯だから、其れで岩倉が調和を心懸けたかといふに、それも何うだか。但調和されて並立した薩長藩閥は兎も角も明治の初年から殆ど今日に至るまでも存續してる。元老でも元師でも權衡がやかましいだけ、其だけ並立してる。薩長が共に岩倉を拜んでもよからう。岩倉公は藩閥の權威創造者だ。其得意の調和癖は、井伊に對しても失敗、公武一和に付ても失敗、だが、薩長に對してだけは三世相の始め善し後惡しの反對で、結局に至つて成功した。岩倉の功罪共に調和に在り、薩長調和に在りだ。其薩長が第二の德川となりはせぬかといふ事は、御維新の頃は會津桑名が最もさう思つたものである。慶喜公も一時さう思はれたやうである。大政返上後、二條城から大阪城に引上げて、慶應四年即ち明治元年の正月三日會津桑名が先鋒となつて京師に推寄せて伏見鳥羽でとう／＼開戰するに至つたのを抑止し得なかつたのは、慶喜公の腹の底に此の思惑をされたからであらう。そして却つて逆賊慶喜と呼ばるゝに至つ

た。其頃の諸藩中でも、薩長は天子を挾んで覇業を企て、第二の德川幕府を初むるだらうと思つたものが比々然りて有つたかも知れぬが。薩長はさうては無かつた。さうては無かつたが、藩閥には成つて仕舞つた。これは其時の諸侯達が腑甲斐が無いからだ。又其後になつて、日本國民に甲斐性（カイセウ）の無い處が有るからだ。藩閥は勿論政理て無い。勿論政情の產物だ、政治家は政情の下には兎角頭の上らぬものだから、岩倉も夫れか。イヤ全然夫れとするのは酷だらう。

舊臘こゝまで話して、あとも直に其翌日話し續ける積りのが家族に大病といふ事故が起つて大取込て、續ける事が出來ぬばかりてなく、貴社員が丹念に筆記して下さつたのを校訂潤色も出來上らなかつた。今ては事故が止まりましたが、その止まつた事が亦私の家族の大變な事故て、取込中だけれども、中止する譯に行かぬから、モー腹案は忘れて仕舞つて思ひ出すのが困難なけれども、何とか始末を付けます。腹案を忘れたばかりてなく、前に話した事も忘れて居る。讀返して見る暇もない。從つて重複もしませう。が續けるつもりて續けます。

長州ては、「今に長州か江戶になる」といふ唄があつたさうです。兵隊などが歌つたものてせう。毛利が德川になる、詰り斯ういふ意味と見える。が然し長州は勿論、薩州にした所て、德川に取つて代らうといふやうな野心を起したといふ事は一所（ひとところ）も見えないやうてある。藩主の毛利公はどういふ方てあつたか私にはよく分りませんが、大原三位が初めて逢つた時に毛利はどこがエライか分らない。よく長州人があれを押し立てゝ居るもんだ、と江戶から岩倉に文通したといふやうな事がある。これは毛利公の親の方か子の方か一寸忘れましたが、子の方ならば、元德公の事てあらう。此人には直接逢つて知つてる人が今日ても大分有りませう。私も噂には聞いた事がある。第二の德川にならうなどゝいふ野心はあのお方の腹の中のどこの隅にも固まつて居たやうには思はれない。親の敬親公はどうか

と言ふに、どうも眞正直な勤王家の樣ですよ。薩州の方で三郎公はどうであつたか。之もどうもどう見ても、さういふ考はあつたと思はれない。其兄さんの齊彬公の方にだつて、雄略遠謀、エライ事を考へて居つた人には相違ないが、自分の一家一族を、日本のエライものにせう、一家一族の權勢を張らうなどゝいふ考よりも、世界に於ける日本の地位といふ正直な考の方が多くはなかつたか。やはり此日本を世界の間にどう押し立てゝ行かうかといふ考の方が主もてあつたやうに私には見える。兎も角も其の時の日本人といふものはまだ世界を知らない。恰でウブな田舍者か東京へ出て來て、新橋のステーションでポッと鐵道から下ろされて、何處を向いてどう行つたらよいか。自分が東京に出て來た用向は斯うである。自分は東京で何うせねばならぬといふ心ばかりがあつた所で、方向は根つから極らない。見當が附かない。オヅ〳〵したものだ。どういふ贅澤をして見やうとか、どういふ快樂を貪つて見やうなどゝいふ考は起つても、其實行に取懸られるものでない。其れと同じやうに御維新の日本人の腹の中は大まごつきにまごついて居る。只もう心配で〳〵堪らなかつた。自分の一身一家、若くは封建時代の一國について、只相當に、隣り近處の振合を見て其れに負けないやうにと位の考はあつても、どこをどう踏み附けて、どう蹴散らかして、一身一家の權勢のみを張らうなどゝいふ考は、あつちにも、こつちにも無かつたやうてある。人間は其處になると正直なものといはなくてはならぬ。其時の世界が日本人全體をして左樣せしめたといふよりも、寧ろ世界にポット出の日本人の心理が、自然に其處に陷らざるを得なかつたと言はなくてはならんでせう。てあるからして、今に長州が江戸になると唄つても、今に薩州が江戸になると唄つても、それが薩長各々第二の德川になるといふ腹があつたといふ證據にはなりにくい。こゝて若しか圖拔けて薩摩が第一等の勢力を持つとか、或は圖拔けて長州が獨占的な權勢を持つとかいふ事があつたら、それはどうてあつたか分らない。とかく第一等の獨占的權勢家

は我儘を働きたがるものてある。いくらポット出の田舎者ても、日本一の大地主てゞも有つてお覧なさい。假令心配て〳〵て堪らんといつても、隨分向ふ見ずの考えを起してそれを實行しないに限らない處がてす、薩長いづれも日本一の大地主て有つたとしても、共に獨占的てなく並立的てあつた、一つてなくて二つてあつた。そして出合頭から競爭して居る。出合頭から腹の中の喧嘩の掛引は絶えた事がないやうに思はれる。片方が好い事をしやうとすれば、片方が必らず制する。片方が大野心を起せば、片方は必らず之を取捉らまへてぶちのめす。況んや其關係は薩長間ばかりてない。下手な野心を下手に喋舌れば、土州などが中々負けては居まい、或は越前だからつても默つてはゐない。又其外大諸侯の可なり有力なものもないてはない。そんなものからもどうかすると尻ぼを抑へられる。そこて圖抜けた大勢力て他を抑え付ける程の一つの大名が徳川になることは出來られる。が、二つの徳川が同時に成立つ氣遣はない。況んやもう封建などは有ることがならないやうになつて居る。世界の歴史の大勢上運命が極まつて居る場合だ、其封建の産物たる幕政などが日本にばかり殘り得やう譯がない。且列國と對峙して行かねばならぬといふ必要は早速に感じて了つて居る。其れに成るべく都合のよい政體を採らなくてはならんといふ事はどうあつても最大必要の事である。此最大必要の前にはエライ大諸侯の一身一家の慾望位はどうあつたつて萌す場所がない。それて薩長といふものが第二の徳川とならずに只の藩閥といふものになつて了つたのてある。岩倉の爲にはマア倖ひと言ひませうか。

其薩長の二つが互ひに爭ひ合つて喧嘩をした、其經歴といふものはどうも兩方共餘程隱すやうてある。まだ世に明かになつてゐない事が餘程多いやうてある、が形跡から察すれば察しのつかぬ事はない。決して〳〵明治政府となつてからの事てなく、そも〳〵の維新前の出逢ひ頭の初つから駈引をして、何か知ら爭ふてゐたといふ事は掩ふべからざる事實てある。誠に結

構な事で有ります。前に言つた樣な理由の下に、私は結構と申します、然るに其れを極端に至らしめないで、兎も角も利用らしい事にしたのが、岩倉の事業です。しかし是も利用しやうといふ考えて利用したのか、どうか其邊までの研究は、未だ届きません。そこで先づ第一番に京都に乘り附けて來たのは長州よりも薩州が早い。文久元年四月十四日に島津三郎公がやつて來た。あれをあゝしたのには岩倉公が與つて力がある。本來は前に言つた通り、大諸侯は當てにならない。下手にやると第二の徳川を作り出す。却て王權回復の邪魔になると度々上書して居るが、それは腹の中の理論のみであつたものと見える。主義目的は何處までも王權回復。其王權回復を行ふ手段としてどうしても或勢力を惹かねばならぬといふ事は分り切つて居る。其勢力を惹く爲めには大諸侯と結びつかねばならぬ。其結びつくべき大諸侯を見出さぬ中は岩倉の腹の中で大諸侯危險論を繰り返して居つたらうが、一度見出すとそんな理屈ばかり言つて居られない。假令多少の危險があるとしても之を惹きつけなければ其目的たる王權回復は成し得られない。此實際の必要の前には岩倉も頭を下げて大諸侯を惹くことになつた。もう其處になると思慮分別の餘地がない。其結果として藩閥を作り出すなどいふ事は、其時の岩倉の頭の中では忘れて了つて居つたんでせう。若し岩倉に王權回復といふ主義目的がなくて斯うなつたら、それこそ權變不測な政情の奴隷で、仕樣のない者になつて仕舞ひますが、岩倉はさうでは無い。さて第二に乘り出して來たのが長州であつた。永井雅樂が上京して來たのは文久二年四月だから、島津三郎公よりは少し前てす、けれども永井は直に失敗して引退つて腹を切つたから、あれは何にもなつて居ない。永井が若し彼時今少し成功して居つたら、岩倉はもつと深くなつたんでせう。そして其失敗の時には岩倉も今少し傍仗を喰つたでせう。が不成功で早く引下がつたから、岩倉は亦倖ひに免れた。そして直ちに島津の方へ手を出した。

けれども島津の方から岩倉に對して希望を有つとい

ふ事は殆んど無かつた様です。つまり岩倉の何物たるかゞ未だ分らなかつた。但岩倉の方からはモー深く結ぶ氣になつて居た。薩州人が朝廷を擁して御維新をしやうといふ事の考を起したからには　朝廷の公卿と結ばなくてはならぬといふ事は分り切つた事であるに拘らず、それをいよ〳〵事實にあらはしたのは、大久保が慶應三年位になつて初めてやり出した事で、文久二年頃にはまだ考へ及んでゐない。即ち公卿では誰が一番人物であるかといふ事をちつとも物色してゐない。寧ろ朝廷の王權回復論者の方が諸藩の方を物色して居る。岩倉のあの眼玉の中には先づ一寸長州が映つて、そして薩摩のみが大に映つて來た。三月の十六日に島津和泉守即ち三郎公が鹿兒島を發して上京の途に就いた。四月三日には播州室津に到着した。其頃岩倉は巳に島津と文通を初めて居る。一體京都の公卿といふものは、幕府の掟て以て一切諸侯と交通してならんといふ事に縛られて居る。これは例の德川一流の對京都の軍法から來て居ることとて、隨分嚴重てあつたものと見える。がそれはもう何でもないといふ時代になつて居る。但し表向には掟があるからして、公卿達が直接諸侯と交通するといふ事がビク〳〵ものでないでもない。現に島津の上京についても近衞などは多少心配して居る。京都へ來る前に第一に江戸に行つて、それから京都に來るやうにしたらどうだなどゝいうて居る。然しそれにも拘らず膽汁質の岩倉からは早速京都に來いといふ文通であつたらしい。岩倉の何物たるを知らぬながらも三郎公は其書面に勵まされて、四月十四日に京都に入つた。さうして先づ斯ういふ事を京都に奏上する積りだといふ事を岩倉に報告して居る。それはいふまでもなく公武一和論だ。これが岩倉の腹の中と恰度一致して居る。永井雅樂の論も公武一和論であつた。岩倉にはまだ〳〵大諸侯の力を藉りて、德川を仆さうといふ考へは無く、只それを假りて德川を使はうといふ腹があるから、公武一和論とはモー譯もなく結び付く。此公武一和の方法について、此時島津は一々具體的の案を出して居る。さうして主としていふのは、

其時諸侯の人望を一身に負うてゐた一橋刑部卿を將軍の後見として、松平春嶽公を政治總裁即ち大老とするといふ事であつた。其外朝廷では幕府と仲の好い九條公をめやるといふ事。又關東では井伊の衣鉢を繼いで居る安藤對馬守をやめるとかいふ具體的の案だ。只一つ暗に岩倉と衝突したのは時の京都の所司代酒井若狹守をやめるといふ論であつた。岩倉はまだ此時までも酒井を利用して仕事をしてゐたので、世間からは酒井と結托して朝廷の裏切りをするとまで思はれて、それが岩倉奸物論の一大材料となつた位だ。其酒井を島津は打ち下ろさねばならぬといふのだ。これには岩倉も內心では隨分困つたでせう。が少しも困つた色を見せなかつたでせう。大に結托す可き相手が出來たからには、小利用の小結托は不用でもある。處が左樣な岩倉の腹の中が其時直に讀めるものでない。からして酒井結托を材料としての岩倉奸物論には、薩摩人も存外熱心に唱和して居る。そして岩倉を救はなかつたのは、まだ岩倉の何物たるかを知らぬからでも有つたらう

か、主としては此時の對酒井態度の暗々裏の衝突から來て居る。此邊に隨分顧慮す可き事情が有つた樣ですが、岩倉は頓着なく猛進した。それで朝廷の島津應待の役目は主として近衞のやうであるが、武家傳奏の本當の職に居つたのは中山大納言卿、正親町三條中納言卿（嵯峨實愛卿）であるに拘らず、一侍從でしかない岩倉も之に加へられて三人になつて居る。さうして最も激しく盡力したのは矢張りどうも岩倉のやうである。そしてこゝで又直ぐ岩倉の調和論が出て來て居る。調和方針、調和主義で以て事を纏めやうとして居る。幕府朝廷を調和せしめる公武一和論は無論の事、其上薩長調和論を出し初めて居る。其時出來上つたのは所謂三事策である。これは岩倉の立案だ。第一が將軍上洛國事を議定すべき事。第二が島津、毛利、山內、伊達、前田を五大老となし、幕政に參與せしむる事（恰度豐臣末路の五大老の制が粉本となつたやうだ）。第三が一橋刑部卿を將軍後見人となし、越前中將を大老となすこと。此三つだ。處で此第一は長州の論であつ

た。永井雅樂もそれを唱へて居つたが、其後木戸なり何なりがそれを遊說して居つたさうである。第三が即ち前述の通り島津三郎の熱心な主張だ。而して第二の五大老の意見は主として岩倉の主張であつた。薩長の主張を並立させて、其間の調和の楔子に自己の意見として五大老案を挾んで出した。此五大老設置の意見などが、中々以て旨く行はれるものでない事は、多分承知て有つたらう。しかし何か並立衝突を調和す可き中間の楔子が無くては治まらぬから、斯したものでせう。それてあるから岩倉は最後まで五大老案を維持したばかりて、強く主張する樣な事は無論やつてない。

そこで此三事策を是非幕府に實行させる。實行させる爲めには勅使を江戸にやるといふ事に廟議が決つて了つた。之には酒井若狹守が驚いたらしい。大分反對運動を試みた。然し岩倉はもう構はない。何といつても構はない。島津の出した條件の中に幕府の老中久世何の守といふものを上京させやうといふことがあつた。酒井はそれを取捉まへて、久世が最早上京するから、久世に仰せになれば分る。わざ〳〵勅使をお出しになるには及ばんといふて、勅使中止の議を起した。三郎公もなか〳〵そんな事て胡魔化されるものてない。又朝廷の方てもそんな議を押し切つて勅使をやるとにした。さて其勅使には岩倉適任といふ議が多かつたやうだ。矢張り其時の公卿の仲間では、もう岩倉はどうあつても第一の器量人となつて居つたものと見える。處が岩倉は大原三位を推した。大原てはいけない、是非岩倉てなくてはいけないといふ說が近衞あたりからも起つて居る。又少くも大原、岩倉二人をやれといふ說もあつたやうだ。が、岩倉は朝廷に缺くべからざる人だ。お使ひは大原てよいといふ議を、誰かゞ唱へて、終に相談がさう極まつた。さうして所謂大原三位の江戸乘込となつた。もう此頃でも一寸岩倉が朝廷の重寶の隨一となつて了つて居る。

大原は最初から岩倉の相棒だ。極く懇意の間柄だ。大原が島津と一所になつて五月二十二日にいよ〳〵京都を發して江戸に向ふといふ時に岩倉が送つて行つて

居る。さうして言つて居る所は斯うだ。薩長兩藩は大切なものであるんだ。兩藩共國事に盡瘁する氣である。が油斷は出來ない。薩長は猶兩虎の相對するが如しだ。動もすれば兩方から嚙み附かんとして居る。もう其端緒は開かれて居る。若し此れが大格鬪すれば形勢が瓦解する。江戸に行つてもよく此事に注意せられたいといふて居る。藩閥の守本尊のお守札がモーてヽて出た。而して岩倉が心配し出したのは、次に言ふ樣な事實も有つたからでせう。即ち其頃の公卿間の協議が斯うで有つた。いよ〳〵此三事策を幕府に實行させる爲めには實力の後楯が入る。其實力を求めて、薩摩はあるが、薩摩丈けてはまだ手薄い、どこを引張つて來たらよからうといふ事になつて、直に長州に白羽の矢が向いた。但し之に就て薩摩の意見がどうだか、多少顧慮されるから、內々三郎公に聞いてやつてある。處が其返事は斯うてある。人心一和天下挽回の基本を立てるのが私の志てあつて、威權を貪り、功名を立てる野心は毫頭ない。志を遂げる爲めには一匹夫の命令にも從ひたいと思ふ位てあります。長州の命令でも聞きませう。と斯ういふ譯てある。隨分穩やかなやうな、穩やかでないやうな口上てある。其頃長州の世子長門守は上京して居たやうです、そして薩摩人のやる事をジロ〳〵睨んで見て居たやうです。永井雅樂が一度やり損じつた其後だから、人のやる事を指を啣へて見て居らなくては仕樣がなかつたでせう。只朝廷に對しては何とか理屈を揑ね返して、詔勅が出る每に一々朝廷に質問書を發したりなんかして居る。然るに島津が國の爲なら一匹夫の言ふ事ても聞きます、長州の言ふてても聞きませうと答えたから、勅使發程前の五月十三日には其時在江戸の松平大膳太夫(毛利公)に對して、今度關東へ三事策を仰せ下されたについては、天下の一大事てあるによつて、叡慮を徹底したい。其方に於ても公武の爲めに丹誠を抽んてて盡力するやうにとの御沙汰書が出て居る。其御沙汰書を貰ひながら六月の六日に、即ち勅使が六月七日に着いて來るのに、態々其前日に松平大膳太夫が江戸を發して京都に下つて仕舞つた。

これも随分穏かでない。此等を見ると、何だか國事は第二で京都に對しての薩長の權力爭ひが第一のやうに見えないでもない。一寸面白いでせう。岩倉が大原に注意したのは多分豫めこんな様子を呑み込んで居つたからでせう。文字でも岩倉さんの何かの書き物の中に、文久元治あたりの事は主として薩長の爭であつた。それて事が十分に行かなかつた。といふやうな事が見えて居つたやうです。幕府は實は井伊の死んだあとはモーお終ひになつて居るといふても差支ないのである。薩長が早く一致したならばどんな事になつたんだか。もそつと早く何かやつたかも知れない。けれども薩長の爭は。國會開設前後の大隈、板垣の爭ひ位のものでなかつた。元治元年には京都でもつて互に叩き合つて戰爭をして居る。長州人の今に崇拜する久坂義助などが其戰爭て死んて居る。

然るに兎も角も大原島津は江戸て成功した。もう勅使が江戸に到着する以前、三事策の第一たる將軍上洛は幕府の方から申し出て居る。であるからして將軍上洛といふ事は何も談判折衝しないで直ぐ極まつた。京都に對しては兩敬の間柄といつて。いはゞ對抗の形勢を作つて、十三代頃までもずつと維持して居た徳川だ。其徳川が京都から呼付けられて、將軍自身に上京を餘儀なくせらるゝ様になつては、權勢も地に墜つる譯であるから、さうならない前にこつちから上洛しやうとイニシエチブにやる考であつたでせう、が矢張モーどつちにしても駄目になつてる。兎も角そこで第一は評議の必要がない。第二は岩倉の發意で五大老案であるが、若し岩倉自ら江戸へ下つたらどう言ひ張つたか、多少の論波を生じたかも知れぬが、是は前に言つた通り薩長調和の緩衝突機として岩倉が挾んで置いたのだから、大原は餘り言ひ張らなかつた。又島津は勿論これに熱心でない。それで全力を籠めて第三の一橋後見、春嶽大老といふ事を言ひ張つた。大原も其方針でグイ／＼やつた。とう／＼幕府でも承知して了つた。そこで兩人は大成功をして歸つて來たが、どうも長州がそれを指を啣へて見て居る譯に行かなかつたん

でせう。大原の歸つて來ない前に第二の勅使が江戶に向つて出るといふ段取りに取りかゝつて、これが京都では成功した。薩長暗鬪の開幕とも言へませうし、岩倉三條暗鬪の第一段とも申されませう。

即ち八月の十四日に松平大膳太夫建言して曰く、外國に對する御所置は破約（條約破棄）の外はありません。攘夷を措いて國勢を張るべき途がありません。我々父子は叡慮に從つて獨力で以て盡忠報國をいたしませう。攘夷の御實行が唯一の治國平天下の基で御座るといふて居る。島津の方とは全然別調子である。島津は開國下々地の對外方針であつて、外夷の御處置は總てを國論に決するといふ論だ。處が長州は條約破棄を叫んで、攘夷實行を治國平天下の基ひとした。又薩州は國の爲なら一匹夫の說も容れるといつたが、長州は獨力で盡忠報國の決心だと唱え出して、全く排他的態度を示して來た。公武一和は何んの事だといはんばかりだ。然るに此論は獨斷的で快心のもので有つたゞけ、京都で頗る多く公卿達を靡かして、三條公が音度を取られて盡力されて、とう／＼攘夷實行を促すの勅使が前の勅使の歸らぬ前に決定した。而して今度の勅使に立つたのが三條公、並に姉小路公だ。十月の十二日に京都を發つて居る。大原は八月の六日に京都に歸つたが、ちつとも歡迎されない。將軍はもう上洛するといふのを待ちもしないで、又一橋後見、越前大老でどうするかを見もしないで。攘夷實行の勅使が直ぐ出たので有る。これはもうどうあつても薩長喧嘩の暴露と見る外はない樣です。其時は土州の山內容堂公も長州の手傳をされて居る。矢張り薩摩が一人で働くのを少々憎くかつたかも知れない。處が岩倉は第二の勅使の出ない前、第一の勅使も歸京しない前、譴責を喰つて追拂はれて了つた。其彈劾者中には三條公の名がある。此際の變化の渦がどう卷き起つて、どう人を呑んだかは、隨分の見ものであつて、一寸際どい所がありませう。薩長調和の心配家の岩倉は此時は其調和が出來られない前に先づ打落されて了つた。七月二十四日に侍從職の辭表を出して居る。直ちに免官になつた。八月

二十日に落飾を仰せ附けられて居る。大分殘念であつたてせう。此時岩倉に歌がある。幾つもある。

いかさまに思ひわきても嘆ちても
涙のみこそふりまさりけり

とか或は又

今はとて思ひ切れども黒髪の
亂れて條も分れざりけり

勅なれば髮は切りもし剃りもせん
淸き心は神ぞ知るらん

とか、いろ〳〵ある。いよ〳〵坊主になつて、あつちからもこつちからも散々にいぢめられた。先帝は岩倉を御信用になつてる。公卿間にも岩倉に同情の人が無いでも無い。けれども變化の渦が卷き上つたからして、手が出されぬ、救ふ事が出來ぬ。それで岩倉は無遠慮に勤王黨壯士に脅迫された。酒井に出入して、佐幕の嫌疑で斬殺された賀川肇などいふ者の片腕が、岩倉邸の中に手紙を添えて投げ込まれた。つまりお前も今に斯うなるぞといふ意味である。それて岩倉は所々を逃げ廻つて居らるゝ、加茂の靈源寺にも逃げて居らるゝ、其時にも歌がある。

夜深くも草葉の露にそぼちつゝ
あらぬ野山の月を見るかな

それから寺々を逃げ廻つて、遂に岩倉村に入つて、六疊と四疊半と三疊位の草の家の中に潜居された。誰も行つて訪ねるものもない。

問ひもしつ問はれもしつる友垣の
あと絶え果てゝ積る雪かな

などゝいふ歌を咏んで引込んで了つて居る。

そこでこれは勿論岩倉の大不幸である。歌でも分るが、本人は絶對に悲觀して。到底も浮む瀨がないと思つて、悲嘆に暮れた事もあつたてせう。しかし此處に亦岩倉の堪忍袋の底の深い處が見へる、そして橫着に剛毅な處も見へる。賴みにならぬ事を賴みにしても、決して〳〵捨鉢な言動をやらぬ。そして逃げ延びられるだけ、逃げ延びて時節を待つた。性格も違ひ、心事も違ひますが、境遇だけは遠島中の西郷と同じた。し

かしどつちが頼み無い身で有つたかといへば、岩倉の方が少々頼み無い程度が高かつたかも知れぬ。西郷には大久保などいふ友達が猶娑婆に生息して居て、其方角から助け舟が出るかも知れぬといふ多少の望みも有つたが、岩倉には其れが無い。御信頼を得た先帝よりして何とかして下さりはせぬかと思つたかも知れぬが、是は神佛に頼むと同樣な頼みだ。薩摩の島津はあつても、まだ岩倉を岩倉として認めて居らぬ。長州は無論の事だ。比々として奸物視して居る。此時の岩倉は眞の暗夜の難破船で、一點の燈光も其眼中に映ぜなかつたでせう。只洋中の岩窟に潜んでじつとして居る外は無かつた。がこれは此時の岩倉には最適當の事であつた。最適當の事を得た岩倉はつまり誠に幸福な人だ。試に彼時に彼潜居をして居ないで、何か外に岩倉に適當な居場處があつたかどうか考えて御覧なさい。一つとして有るまい。文久二年の暮には將軍も上洛した。一橋も越前も一所にやつて來た。が何一つ出來ぬ。只、攘夷〈、サア攘夷をしろ、今攘夷をしろといふ丈け

て、三條等の國事係公卿を初め、松陰學派の壯士連中が學習院を根據として京都のお膝元を占領して了つて居る。三郎公も越前との義理に引出されて、文久三年に一寸上洛して居るが手も足も出ない。京都はもう長州の京都、即ち三條一派の京都だつた。それは三郎公は例の生麥一件で英國人が薩摩に討入るといふ噂があるといふのを切ッ懸けに急いで歸國して仕舞つた。その生麥一件とは何かといふのですか。それは此前年即ち文久一年八月三郎公が大原勅使に隨行して江戸に乘込んで成功しての歸途、神奈川附近の生麥で、英人が其行列を横ぎつたといふので、供廻りの武士が其奴を斬つたといふ一件です。英國は承知せぬ。然るに三郎公は平氣だ。日本の大名の行列は神聖にして犯すべからずといふ事を外國人に承認させよう、とも言はなかつたけれども、斬捨てにしたまゝで構は無かつた。英國政府は幕府に喰つて掛る。イヤそれは薩摩のことだ、薩摩に談判して呉れと幕府が逃げる。それで英國はとう〈薩摩に軍艦を差向けた。恰も長州では文久

三年五月十日を攘夷紀元として、馬關て外國船砲擊を始めた、その日より二ヶ月も經たぬ七月二日に英吉利の軍艦が七艘鹿兒島に乘り込んて來た。そしてこゝても開戰だ。此戰爭には薩摩人が餘り不手際てなかつた。英國のキャピテンが戰死して居る。又軍艦も錨を殘して逃げた。それて三郎公は文久三年には京都を逃げて歸つたけれども、國ては英國軍艦を打退けて、其お蔭て外國相手の戰爭の經驗を得て、薩摩の兵制が整ひ且つ攘夷黨からも、薩摩は卑怯の國てないと思はるゝ事になつたのです。去ればといつて是が岩倉に何の關係が有る譯てはない。それて岩倉は此時岩倉村潛居が最も適當だつたといふのです。此時若もまご／＼して朝廷に居たら。其こそ飛んだ目に逢はれたに相違ない。

それにしても岩倉村潛居は永くなかつたでも無い。慶應三年の十二月九日の王政復古の實行、クーデターの幕明きまでずつと引込んで居つたんだから、文久二年の八月から五年と四ヶ月餘りの蟄伏てある。尤も蟄伏中てはあつたが、慶應二年の頃からは、段々岩倉の天地が廣くなつて、本人は出廻らないけれども、世の中の事物の方て筆の端やら舌の端やらて引き付けられて、自然と岩倉の天地を寬にした。玉松操先生が來る、薩州の大久保が尋ねる、長州の廣澤が逢つて見て背かれぬ事になる、やがて薩長調和の役を實地に引受けた土州の坂本龍馬中岡愼太郎も引き付けらるゝ事になつた。そして岩倉が知らぬ間に、本人に取つては寧ろ意外に、薩長調和が出來上つた。やがて又坂本中岡の媒介て、岩倉村と太宰府とに意思疏通して岩倉三條の調和も出來た。此調和が出來て來ると岩倉は順風に帆を揚げざるを得ない。モー徳川征伐の密勅でも何でも一氣に出來す事になつて仕舞つて、トコトンヤレ節の天樂吹奏の中に、岩倉は天使に手を引れて、坊主頭に衣冠を着けて、玉松操に起草させた王政復古の文案類を携えて十二月九日の曉を冒して禁裏に入る事となつた、岩倉一代記中の壓卷記事がコヽで書かれねばならぬ處だ。岩倉の成功だか、調和の成功だか、岩倉の調

和だか、調和の岩倉だかが、渾然勃然として成立つた。そこでです。元來傍若無人な點からいへば、薩州の方が長州よりもひどい。長州をぶちのめす手は薩州の方で早く出してゐませう。文久三年の蛤御門の警衛を解いて、京都を我物として居つた三條一派、即ち主として長州を追拂つて、クーデターを一度やつた事がある。あれは慶應三年十二月九日の王政復古のクーデターと同じ手段て、文久三年のクーデターの方は公武一和の爲めだつた。慶應三年の方に非常の隱謀密計が行はれたと同樣に、文久三年の方にも行はれてゐませう。其張本人が誰だか私はよく知らない。東久世さんの話ては會津の廣澤安任が其本尊てあるとして居る。然し主もなる働手は鹿兒島人ては無かつたかどうか。少くも島津が會津の相棒て有つたに相違は有るまい。あすこて長州を一打打つた。手の出し方は薩摩の方が早い。其翌年の元治元年に久坂義助等が長州の三家老を推立てゝ回復のため推し出して來た時に、禁闕守護といふ名て又薩摩が長州に一打擊をくらはして居る。其時は西鄕が軍賦役といふ名て、三郎公の名代て大に働いて居る。名義を立てる事には薩摩もなか〳〵注意して居るから、禁闕守護の爲めの一戰といへば大層立派てあるが、單に薩長の爭として見れば隨分極端な打擊の手が早い。それ程までもやりつやられつした薩長だ。其薩長が手を握り合ふといふ餘程やりにくい事である。藩閥攻擊の爲めに改進黨と自由黨に手を握らさうとした策士は隨分多い。最後に政友會總裁の伊藤公と進歩黨總理の大隈伯を握手せしめやうとしたのは加藤高明君てしたらう。其前にはもう幾人となくある。が、一度も出來上つてゐない。自由黨と改進黨は別に戰爭をしたのでもなく、殺し合つたのてもない。それても握手といふ一幕はどうしても出て來てゐない。聯合聯立といふ事は實にむづかしい。それを薩長がやつて、或程度までは今日まで殘つてる。寧ろ奇蹟だ。調和したのか、調和さしたのか。前者もある、後者もある。後者の中ではどうも岩倉が最初からの發意者てある樣に見へる。やはり直接にも間接にも岩倉本尊の力が多いてせう。

慶應三年十二月九日の王政復古の事は、岩倉を中心として見て、まだ中々話せませう。右の調和の作用並に藩閥が其守護神の下に成立つ事になつた次第、それに土州がどうしたか、皆面白い話題で有りませう、が話が餘り長くなるから、もうやめて、駈足をしてお終ひにして了ひます。

御維新になつてからの岩倉は薩長の相談相手といつてよいか、明治政府の柱石といつてよいか、さういふ地位に居据つて幾度も／＼政變に出逢つて居る。大きいのをいへば、明治六年の征韓論の破裂。明治八年の島津、板垣の辭職。明治十四年の漸進立憲主義で以て急進論者の大隈を叩きつけた政變。それに加ふるに明治十年の西郷を潰して仕舞つた西南戰爭。研究するとなか／＼皆面白い。明治政史の上には各々皆一事件をなして居る。其時のあの遣り方について、岩倉にいはしたら、岩倉としての申譯が必ずありませう。が一貫して誰の眼にも映ずることは、王權回復につゞいて王權の下に成立つてる明治政府の擁護だ。或は藩閥政府の維持といつても好い。それに續いて、間々に見へるのは國權回復の仕事だ。擴張急進論者たる征韓黨から言へば岩倉は仕様のない人の様ですが、それでも其頭は國權主張の外に出てない。そして明治四年の歐米巡回後も大久保木戸の如くハイカラになつて居なかつた。そして又小細工ではあるが、チョイ／＼手を外に出す。明治七年の臺灣征討なども斯人の發意だ。あれは西郷と調和のための發意だから、例の調和主義が本であつて、更に小細工に陷りはしたが、外政に心が無ければあの手も出はせぬ。その內治經營方針も、主として對外對峙の心からであつた様です。例へば鐵道の一件についても、鐵道諸會社から岩倉神社といふのを建てられて居る因縁がある。

岩倉公の話はこれで置きますが、さて大きく見た所で、日本の御維新以來のこれまでのエライ政治家といふものは、日本の爲め、皇室の爲めには親切に考へもし、又血も流し骨も折つた。が、日本人全體の爲めに、日本を善くして、日本人全體で以て世界に於ける日本

の地位を高めやうといふ事を主としてやつた政治家は存外少いやうである。或は一人もなかつたかも知れない。趣旨はさういふ所に根據を置いて居る政治家が大分ありませう。が、どうも誠意が足らんやうだ。今後若し日本に大政治家、大經世家といふやうなものが起るとすれば、矢張り日本人全體を引立て、引廻して、世界で仕事をしやうといふ事が、腹の底の本體となるといふ人より外はなからうと思ふ。今まではそんな人がまだ見當らない。

（完）

自然より人生へ

茅原華山

濃紅艶紫の春も將に逝かんとする一日、私は日暮里の某る友人を訪れるために、年わかき一人の友と共に上野の山を過ぎてゐた。

軟かい暮春の風は羅衣の流れるやうに頰を撫てゝ、色々な事に齷齪として、汚れてゐる人の氣分を悠暢とさせ、靜かな上野の全山は鮮かな初夏の日影を浴びて新緑の薫りに咽んでゐる。薄命の花は、もう、梢にあとも止めず散り盡して、雲か雪かと疑はれた爛漫の昨日は夢と化した。あゝ、無心の花は、心に痛みを覺ゆる多情多恨の人の子の上をも思はずに散つて了つたのか。思へば、儚なきは花の生命ばかりではない。この鮮新な新綠さへ、やがては復た凋落すべき運命を有つてゐるのではないか。彼の趙甌北が吟つた『春在㆓東風㆒原是夢。生非㆓薄命㆒不㆑爲㆑花』の一句も思ひ浮ばれて、自然と人生――兩性との間を間斷なしに流れてゐる『薄命』といふことがしみ〴〵感じられた。

それにしても、濃紅から脱したこの自然の色彩は、清楚として甚だ快い印象を與へる。東京には相應しい

色てあるなど丶思ひながら歩いてゐると、厭に、濃いお化粧をした婦人が自分の前を突切つて行つた。新綠の森と厚化粧の女！全然調和すべきものではない。實に不快なコントラストだ。そして、私は其の嘔吐を催すばかりの性の色が、この淡い、淸楚な上野の色彩を搔き亂したやうな氣がして、折角、浮んだ詩想も滅茶々々に壞されて了つて殘念だつた。私は同行の友人と刺戟的色彩に就いて論じながら歩いてゐたが、何時の間にか上野のこの色彩から遠く離れて、夕陽の斜に射す友人の家の玄關に立つた。

生憎、主人は不在であつたが、豫て閨秀の聞え高い若い夫人が吾等を迎へて歸さない。いろ〳〵の御話も是非伺ひ度いからと留められる儘に、主人の歸りを待つことにして奧へ通つた。

家は宏壯ではないが風雅である。非常に眺望が好い。座敷の端の廻椽に長椅子を据えて、煙草を燻らしてゐると、その紫の烟の靡くまゝに、武藏野の一隅が展開されて來た。十區八百餘街地といつた東京の一部と一面荒廢に歸すべく運命づけられてゐる田園とが一眸の中に現はれて來る。田園は全く荒蕪に歸せんとしてゐるのだ。洋々とした初夏の光の中に、將に來るべき怖ろしい悲慘な事實が潛んでゐる。范石湖が。

採レ菱辛苦廢ニ犂鉏一。血指流レ丹鬼質枯。
無レ力レ買レ田聊種レ水　近來湖面又收レ租。

の詩も、やがて實現するのではあるまいか。

兎に角、この日は非常に好天氣であつた。淡い新綠は放縱な夏に移らうとして、すべてが濃厚なる輪廓に向つて動いてゐる。天地は青年の氣持のやうに、活々とした空氣に滿ち、風は靜かに青草の上を渡つて吹く。眼を放てば、筑波の双尖は遠く紫に霞んで夢の如く、隅田川は銀の帶の如く渺茫たる武藏の平野を貫いてゐる。それ等の景色が、恰好、穹廬のやうに、東を中心として南と北に至る半面の天蓋の中に見える。そして、時折、自分が燻らす紫の煙は、その半形の斷面を流れて、斯うした翠色に深い〳〵趣を添へた。

私は時の經つのも知らずに、この風光に見入つてゐ

たが、何時の間にか日は全く杜に落ちて、何處からともなく夕暮の色が犇々と迫つて來た。所謂る暮色蒼然として至り、今まで透き通るやうに見えてゐた天地が稍や不透明になつた。と思つてゐると、地平線の上に一抹の靄が立つた。凝つとそれを瞰詰めてゐると、最初は地平線上に影のやうに薄く棚引いてゐたのが、だん〳〵上に擴がり、横に延びて、ある程度まで眼界を覆ふて了つた。遠から近く、森を隱し、村落を包みて、終に足元まで迫つて來た。そして、空はコバルト色に彩られてゐて、下界の鼠色と判然區別されてゐたが、それもセコンドの刻む毎に次第々々に融和して、丁度天地が同色になつた時に夜の黒幕が切つて落された。

月もない、星一つ見えない薄闇の夜だ。けれども、幾分か晝間の名殘りを留めてゐる暮色の中に、工場の煙突が浮出て見える。毒々しい煙を吐いてゐる眞黒な煙突よと見ると、尙ほそれに連接して、高いのや、低いのや、大小色々の煙突が遠近に濃淡を見せて、煙を吐くのも吐かないのも、もう、ボンヤリとして薄墨で暈した繪のやうだ。

空の色のみに注がれてゐた私の眼は、いつしか下界に轉じて來て、一目この光景に接すると、思ひははしなくも『天然より人生へ』移つた。

思ひ〳〵に勝手な方向に立ちのぼる煙を見ながら、私は靜かに過去のことを考へ始めた。

私は東京で生れて、幼い頃から此邊にはよく來たものだが、六年も日本を留守にして、再びこゝに來て見れば、先づ煙突の何時の間にか林のやうに立つてゐるのに氣付かずには居られなかつた。そして、其の變化に驚いた。

本所深川方面をはじめ、東京の一角は今や大阪になりつゝある。否な小なるグラスゴーになりつゝあるといつても宜い。私がグラスゴー市に行つた時に、一人の知人が一枚の繪葉書を持つて來て、これがグラスゴーを代表するものであるといつて見せて呉れた。それは殷賑なる市街の空一面無數の煙突を以て埋められてゐるものであつたが、今、東京は將にそのグラスゴーに

ならんとしてゐるのではないか。月が草より出でゝ草に入る武藏野の昔は知らねど、なほ靜かであつた政治敎育の都は、今や煙の都に變ぜんとしてゐる。自分が少年時代にこの丘に立つて眺めてゐた時は、麥浪千里天風は浩々と吹いて、常に關東八州は豐饒を唄ふたものだ。美しい雲の色！平和の日の光り！もう、其樣ものは何處を探したつて見られぬ。

少年の心は自然の琴線に觸れる每に、躍り上る若い血を絞つて、詩に歌に限りなき思ひを遣つたものであるが、あゝ、其時、靜かに靡いてゐた炭燒く野末の煙はこの毒々しい石炭の黑煙と化してゐやうとは夢にも思はなかつた。若き時の思ひ出と共に、言ひ知れぬ哀愁に咽んだ。朦々と立昇る石炭の煙には何となく不穩の精神が含まれてゐる。――凄い革命の暗示のやうにも見えた。文明の推移は都會の繁榮を來たし、都會の繁榮はかくまでに人間と自然とを隔離する一大牆壁となるのであらうか。と思つてゐる中に、夜は全く確實に宇宙を占領して、僅かに影を留めてゐた最も太い煙突までも見えなくなつた。天地は全く闇になつた。私は少時く瞑目して、たゞ主觀的に宇宙、人生といふやうな事を深く考へた。すると、フト、其の瞑想を破つて目眩しい電燈がパッと點いた。そして、自分の頭の上て輝くと同時に今まで暗かつた闇の世界に光が走つた。消魂しい汽笛の音がして靑森行の急行列車が轟然たる響を立てゝ崖下を疾走した。

闇の世界は復た光の世界に變つた。右は一面光りの海である。その光りは電燈ばかりではない。瓦斯もある。石油燈もある。夜の幕が開けば、自然の姿を其儘に殘して置く菜種の油の灯がチラホラと見えた詩境のやうな舞臺は既に轉廻して、人類が自然に反抗し征服して造り上げた物質の光が四邊を威嚇すると共に、今まで靜寂であつた夜の市聲が聚々乎として潮の寄するが如く耳を襲ふて來た。

都會を學ぶには巡查が戶別調查をするやうにするのも一方法には相違ないが、立つ所高ければ眼亦高して、高所から見下ろして觀察するのもまた必要な方式であ

ると思つた。そして、箇々に就いて見れば進むもあり退くもあり、其の推移も千差萬別であるが、吾等は全部を通じて時代の大波が押寄せてゐるといふ事を達觀せねばならぬと思ふ。

煙突の殖えるといふ事は、一面には工業の進歩發達を意味し、一面には資本家階級の增加を表示するものである。一本の煙突が殖える度毎に數名の資本家が增える事になる。故に、煙突が五本になり十本になつて行くのは彼等經濟的强者たる資本家の跋扈跳梁を無言の裡に證明するものである。

資本家の跋扈は一方に富を集積する者が出來ると同時に、他の一方には富を掠奪せらるゝ者が出來る事を忘れてはならぬ。資本家の殖えると共に大打擊を蒙むる者は中等階級である。ある者は富者にならうけれども、多くは時代の趨勢――强き壓迫のために敗者となり劣者となつて、下層へ下層へと沈淪して行くのだ。

尨大なる煙突の下には幾多の壓迫に泣く無辜の貧民の有ることを思はねばならぬ。斯くして、富と貧とは反對の方面に向ひ、一方は益々大になれば、一方は愈よ小になつて行く。然れども、之を分量から見れば富が增加すればするだけ、貧も亦愈よ益す增大して行くのだ。

日本には日本の國民性（ナシヨナリテー）がある。固有の精神的歷史があると世人は安んじてゐるやうだが、私は歐羅巴を週遊して、光り輝く文明の裏面に流るゝ悲慘な多くの事實を見て來たにつけても、今や將に東洋のグラスゴーたらんとする東京を見ては、是れ決して對岸の火災視してゐる所ではなく、實に吾が腹心の憂であると叫び度い。

かの武藏野の薄の中にチラホラと見えた種油燈の光りは縱令ひ暗かつたにしても慥かに今日よりは平和（ピース）であつた。電氣となり、瓦斯となれば、夜猶白晝の如く明るい。けれども、その光りの中には富の壓制――强者の跋扈と弱者の叫喚悲哀といふ暗い痛ましい影が壓〱然と漂ふてゐる。

米國には富の勢力範圍を示した分割地圖があるが、これも最早米國の事であるとはいつて居られない。これからは三井、岩崎等の色に彩られた日本地圖も出來るであらう。支那の政治上の分割よりも、達人は富の分割が世界の大勢に及ぼす力の大なることを悟らねばならぬ。國を持たぬ猶太人は金力にて世界を征服してゐるではないか。東京は非常に廣い。人口を二百萬も有してゐる。けれども、その二百萬の人々は、悉く自立してゐるのではない。少數の資本家に支配されてゐる勞働者である。

資本家と勞働者との區別は、截然として明瞭である。人情といふものは一家に於て行はれる。即ち家內工業に於て其の發現を見ることが出來るが、その家內工業制は資本家の增加と共にドシ／＼破壞されつゝある。

大工場で、而かも多數の人では、資本家と勞働者との間には、友愛とか、主從の美はしい觀念とかいふやうなものは全然、保たれる譯のものではない。資本家は賃銀を以て勞働を買ひ、勞働者は賃銀に向つて勞力を賣るに過ぎないやうになつて來た。人と人との關係でなければならぬ生活が、冷かな金と金との關係になつて了つた。そして、其の結果は自から資本家は資本家で團結して、勞働者階級を壓制し、勞働者は勞働者で團結して組合を作り、資本家の專橫に反抗しやうとするに至つた。兩者の間には、たゞ利害の打算があるばかりだ。

この時、丁度、遠くから工場の鐵槌の音が傳はつて來た。ジッと耳を澄ますと、各種の工場から響いて來る鐵槌の音は、一種の響動（どよみ）をなして夜の空氣を震はせてゐる。あゝ鐵槌の響、市井の動搖、これぞ實に東京市民の聲である。勞働者の聲だ。勝ち誇つた資本家の凱歌の如くにも亦た疲れ果てゝ生に絶望してゐる勞働者の深い溜息の如くにも聞える。

灰色の煉瓦塀に沿ふて、靑い營養不良の勞働者の顏が、數限りなく描き出されて來た。惱殺されるやうな褐色の煙は地を這ふて彼等を襲ふて來るが、彼等はもう之れを拂ひ退ける勇氣がない程疲れ切つてゐるやう

だ。そも此の無數の勞働者は何處から來るのであらうか、都會は或る意味に於て、底なき谷である。數限りなき勞働者を葬むる底拔けの谷だ。文明は果して謳歌す可きものであらうか。私はこの矛盾に堪えられぬ痛苦を覺えた。

彼等勞働者は過度の勞働のために、石炭の煙のために、不潔な空氣の爲めに、營養不良の爲めに、冷い、不安な最後の運命に捉はれてゐるのである。雜沓の巷に傷ましい暗影につきまとはれつゝ悲しい、望なき日を送つてゐるのではないか。而かも、不幸は彼等一代に止まるものではない。彼等の子孫には精神的不具者が多くなる。是れ即ち英米に人種改造論の起つた所以である。何故かといへば、英國などは自由貿易の影響は暫く措くとしても、農業が漸次に頽廢して、農民は田園を捨てゝ都會に住むことゝなつたからだ。英國は工業國となつた爲めに、人種が衰亡しつゝあるといふ說も、すべて、こゝに原因してゐる。

私は英國に居る時に思つた。吾が日本もやがて工業國となるべく運命づけられてゐるが、幸に昔ながらの農業國である。少くとも日本國民の六割は健全なる農民であるといふ事を心强く感じてゐた。黃金の波あまねく漂ふてゐる美田を想ふ每に、そこに强健なる農民の存在を想ひ起す度に、是れを兵士にすれば、理想的兵士となり、是を勞働者とすれば、一騎當千の働手となり、富國强兵は期して俟つべしと信じてゐた。然るに、今日はからずも、此所から久振りに邦土の田園を見渡しては實に長大息を禁じ得かつた。

農民は田園に安逸が求められなくなつた。昔時のやうな自作主義は段々廢れて、此處にも亦資本主義の跋扈が發現してゐる。田園で身を粉にして努力しても、何の安逸も將來の利益も獲られぬところへ、時々刻々に其の規模經營が膨大する工業の力は田園の子弟を都會へ牽引するに十分である。斯うして農民は田園を置き去りにして、都會へ都會へと集中して來るのだ。日本に於ても、この都會集中が不可避の趨勢であるとすれば、やがては英國の轍をふまねばならぬやうにな

る。農村頽廢！何といふ哀愁の響を與へるのだらう。少くとも日本人としては斷腸の思がする筈だ。

恰好この時『今日の農民を以て昔の如く肉體精神共に健全であると思つてはならぬ。安逸に其日が送られて、彼等が自覺といふことをしなかつた時――たゞ雲の逝くが如く、水の流るゝが如く、鳶の飛びて天に戻るが如く、魚の流に躍るが如き場合は如何なる疾病も襲ふ餘地が無かつたのであるが、今日は生活の爲めに自覺する可く餘義なくされるやうになつた。從つて、今までの食物では營養不良となり、肉體の健全なものも減少して來た。大宮人が農民は奢侈になつたと咎めるのは殘酷である。』といふ田舍の友人の手紙の一節を思ひ浮べて、考はそれからそれへ、瞑想が段々深くなつて行ふとした時に、フト、美しい電燈の光りに鮮かな血色の透き通る樣な靨が眼の前に浮んだ。にこやかな愛嬌のある夫人が茶を持つて來た。灰色、褐色、黑色と腦の底のガンガン痛む色を思ひ浮べてゐたが、美しい夫人の色彩と溢れさうな笑顏に蘇生した。全く惡夢から醒めて復活したやうだ。

晩餐に誘はれるまゝに吾々は其の席に就いた。其時は主人も丁度歸つて來たので、四人は愉快に話し乍ら箸を執つた。

其席で私はこの夫人と樣々な話を交へたが、曾て、私が豫想したよりも遙かに優れた女性であつた。

ノラに似た女が多くなつて來たけれども、ノラの自覺でさへ吾々の眼から見れば、吾々の思ふ自覺の半分しか行かない。況んや其れに眞似んとしてゐる現代の婦人に於てをやだ。今の婦人は四分の一、三分の一位の自覺に生きやうとしてゐるのではないか。徹底せぬ自覺には何等の價値も無い。

この夫人の如きは稍や完全に近いものである。宗教も相當に解かり、文學美術に對しても一見地を有つてゐて、而かも其の貞淑は秋霜烈日の俤がある。一方には容色の美を以て優り、一方には其の才能を鼻に掛けず、夫に仕へてゐるのは實に美しく見ゆるものである今の美學者は承知しまいが、私は善は美の必要條件で

あると思つた。

現代のすべての婦人は自覺せしめねばならぬ。そして、其の自覺を導いて徹底した圓滿の域に達せしめねばならぬ。一度聲を揚げた以上、婦人問題も進んで解決させるのは急務てはないか。

今の資本と勞働の問題も、都會と田園の問題も昔に戻す事は出來ない。かゝる事は溯つて解決すべきものてはなく。一歩進んで解決せねばならぬ。新らしい問題の起る毎に後に退くのは卑怯てある。前に進んて解決するこそ憂國の士の執るべき道てある。人類をして小我より進んて大我に自覺せしむるのが、我等の任務てあると思ふ。

晩餐を終つてから吾等は再び前の場所に歸つた。東京市は依然として夜の聲が高い。唯暗い空と明るい都との間に超越せる一人の佳人著け得て、天地いまだ全くに死せざるを感じた。然しながら此佳人は曾て慘憺たる生活難の篩に掛けられなかつた、若し此篩に掛けられて尚今の心と魂とを失はなかつたら、眞に圓滿なる自覺の域に入つたものてあるが、それは神より外に豫言することが出來ぬ。

次號の公論欄には金子筑水氏の長論文。河上肇氏の「進化論と社會主義」。久米博士の「古事記は根本史科の價値なし」。稻葉軍醫正の「勞働者の生活問題」。及び諸名家の「民業主義と官業主義」に對する論議等掲載せらるべし。

所謂宗教利用問題

△三教會同について

内務次官　床次竹二郎

今回の三教會については私の趣意を誤解して居る向きが尠からぬやうです。之に對しては諸種の新聞雜誌にも意見を述べて置きましたけれどもまだ〳〵誤解を悉皆取除くことが出來ないやうです。それて其誤解を除く爲めには幾回でも意見を述べることを辭しませんけれども、只今は取込んで居りますし、又自分の意見を書き記した書き物がありますからそれを載せて頂いた方が、口でお話するよりも却て明確になるだらうと思ひます。

（一）

（一）　宗教と國家との結合を圖り宗教をして更に權威あらしめ國民一般に宗教を重んずるの氣風を興さしめんことを要す。

念ふに明治維新の當時在來の文物制度を更革するに是れ急なりしが爲め勢ひ玉石同焚の迹あるを免かれざりき随て寺院佛堂の壞れたるものも少からず爾來神佛に對する一般尊崇の念は著しく爲めに毀損せられたり基督教も亦當時少からず嫌忌排斥せられ多く顧る所とならざりしも今は自由を得て布教益勉めつゝあり此の如き既往の事實より推して之を考ふるに當今は正しく宗教をして更に力あり權威あるものたらしむるの急要あるを覺ゆ。

蓋し國民道德の涵養は教育と宗教と相待つて始めて完きを得べきものなるに現今は教育に由りて今日の道德を敎ゆるの實狀なり然れども本に遡りて神といひ佛といひ天といふ所に常に接觸するにあらざれば國民をして公明正大なる思想を堅實に發成せしむることを得ざるべし故に國民道德の基礎を作るには必らずや宗教と教育との相待つて進むを要とす是を以て二者の結合を圖り之をして互ひに提挈せしむるの實を擧げ相率ゐて以て國民教育の上に竭さしめんことを切望す是れ即ち國家と宗教との結付けを殊に切要とする所以なり

（二）　各宗教家の接近を益密ならしめ以て時代の進運を扶翊す可き一勢力たらしむるを要す

蓋し宗教の根本義は素より各自一貫したるものなる可しと思惟すれども今日の道德とする所は時勢と場所とによりて其見方説方を異にし常に進化して已まざるものなるが故に神道と佛教とは今少しく歐米に向つて歩みを運ふの要ある可し顧れば維新の當時鎖國攘夷を捨てて開國進取の國是を執り日本を擧けて斷乎たる諸般の改革を實行し歐米の列國と共に

先つ形の上に於て接近し以て世界一般の氣風に合せんことを勉め爲めに長足の進歩を遂げたり神道佛教の同じく進んで世界の道運に合せんと勉むべきこと亦宜しく此の如くなるべし基督教に於ても恰かも自家の殖民地を作りたるが如く圏堵を劃して出でさるの觀あるを改め我國體に應じて勉めて人情風俗との調和を圖り此の如くにして其大成を期せんことを望む

人或は曰はん若し此の如くするときは神佛基督の三教共に何れも其特色を失ふに至るべしと然れども均しく是れ基督教にして英國に入れば英國の基督教となり米國に入つては米國の基督教となり獨逸に入つては獨逸の基督教となれりさすれば神佛とも外に向つて歩み基督教も亦内に向つて進みたりとて兩者共に現代日本の宗教として優に其特色を發揮するに妨けなかるべし

此の如く精神界に於て歐米の思想信仰と日本の思想信仰との二者の調和を得るに至らんことは最も切望して已まざる所なり政治經濟の方面に於て夙に開國進取の國是を取り以て今日に進み來りたるは歐米列國と共に文明の惠澤に浴するが爲めに外ならず精神界に於ても亦爾かあるべきものと信ず

殊に日本としては歐米の各國と人種を異にするが故に最も此點に留意せんことを要す黃色と曰ひ白皙と曰ふは固より單に外面上の區別に外ならずと雖も猶ほ此相違より生ずる感情の衝突を緩和するには最も其意を致さざる可らず此點に於ても獨り形の上よりのみならず精神の上よりも一層亦此種の衝突を避くるの用意あるを要す

蓋し人道は一ありて二なきものと信ずれども世界の文明に參加し列國と共に其惠澤に浴せんには猶ほ政治經濟の上に於て孤立とならざるやうに勉むべきが如く精神界に於ても同しく孤立とならさるやう力を致す所なかる可からす宗教家か互ひに提挈して國家と宗教との爲めに竭すは是の故に極めて至大なる一の使命なりと思惟す

要する所は宗教をして益權威あらしめ一般に之を重んするの氣風を與し以て國民道德に裨補する所あらしめ且之に由りて精神界の方面よりも進んで世界の平和文明の爲め貢獻する所あらんことを切望するのみ

然れども此事たる動もすれば輙ち世間に誤解を來さしめ易く宗教家に於ても亦互ひに誤解を起すの虞れなきを保せす是の故に十分に意思の疏通を圖り然る後徐ろに其事を實にせんと欲し各宗教家間の連絡を取らんと試みたるまでに外ならす

（二）

今回發表したる三教者會同の事に就ては世上種々の議論ありと雖とも多くは其眞意を誤解したるものなれば何れも肯綮に中らざるを憾みとす

第一　今回の企畫は單に三教者をして一堂に會同せしめんとするに在り三教者を合同せしめんとするもの丶如くに解するは全くの誤りなり即ち各宗教の本義を各々發揮して國家社會の爲めに盡力せんことを望むの精神なるを世上動もすれば輙ち各宗教をして各々其特性なき合同を遂げ

しめ以て之を統一せしめんとの計畫なる如くに誤認す然れども元來長き間の歴史を有して各々其特色を異にせるものを打して一團と成し之を統一せんとするが如きは決して爲し得べきの事にあらず固より此の如き無謀の擧に出でんとするにあらざるや言ふを須たざる所なり

第二　往々宗教と教育とを混同するものにはあらざるかとの説あり然れども我邦には從來より二者の間既に分界の劃然たるあり今更之に對して議論を入るゝの餘地あることとなし今回の企畫は何にも教育の中に宗教を混淆せしめんとするにはあらず唯教育と宗教との二者が相依り相扶け互に提携して國民の德育上に今一層の盡力を爲さんことを望むに過ぎず

第三　或は基督教側の要求を容れて神社崇敬の一條を削除したるやに傳ふるものあり是れ亦誣ゆるの甚しきものと謂ふ可し元來我邦にては神社が全然宗教の外に置かるゝことは制度の上に顯然たり故に宗教の會同とは固より關係なきものなり隨て初めより計畫以外のものに屬し之を削除したりといふが如きは神社の見解を誤れる失當の臆説たるに過ぎず

第四　人或は政教一致を圖るといひ或は二宮宗の排斥なりといふものあり然れども此の如きは全く思ひ設けざる所にして斯る考を有せずといふを一言せんのみ

第五　又或は目するに宗教の利用を以てするものあり然れども毫末も之を利用せんなどの考へを有することとなし且改めて言ふまでもなき事ながら宗教はもと利用さるゝ性質のものにあらず故に初めより唯各宗教が共に其本分を盡くし十分に社會人心の指導に勉むるあらんことを希望したるのみ

第六　更に非難して言ふものあり曰はく內務省が斯る計畫を爲したりとて果して幾許の實効を收むることを得べきかと然れども精神とする所は單に三教者を會同するに在り別段之に由て仕事を爲さんとするにはあらず唯此會同に依て世間一般の人心に刺激を與へ政治教育宗教の三者が互に相侵さず相尊重し合つて國家の進運に資するの端を啓かんとするのみ念ふに斯る會同に依て仕事をするなどゝいふは二回三回と幾多の會同を重ね互に意志の疏通を得たる後の事に屬し今日に於て多きを望むは望む者の誤なり單に三教の人々を會同せしめんとするに就てすら種々の浮言流説を生ずること既に此の如し況んや其れ以上の事に於てをや

第七　今回基督教を同時に會同するの趣旨は曩に陳べたる意見書によりて明かなるべしと雖ども學者並に宗教家間に基教と倶にするを好ます之を目して國民の德育に利あらずとなす者あるが故に倘ほ玆に一言するの要あり信教の自由なる今日既に日本に存在せる一宗教に對し一視同仁を以て之に臨むべきは固より言を待たず此の如くにして基教と共に進運の爲にせんとするは即ち之を誘導して同じく尊王愛國の精神に歸趨せしむる所以たるべく徒らに之を排斥するが如き態度を以て之に對するは甚だ雅量なきの事たるのみならず寧ろ却て反抗の念を起さしむるに止まるべし是れ人情の常にして思慮ある者の宜しく心を用ゆべき所なり況んや精神界の事は固より行政權を以て左右し得べきものにあらず宜しく宗教は宗教を以て相磨礪するの途に出でしむるを得策ととするをや殊に歐米

の列國は今尙ほ往々にして我邦を誤解し排外の思想を含める道德の涵養にのみ重きを措くものゝ如くに思惟するの實なきを得ず隨て此際精神界に於ても開國進取の方針を採るは國運を世界平和の裏に置く所以なりと信ず

以上の諸點は今日世上に起れる誤解の主なるものゝ如し凡そ一國の文明開化は獨り物質的方面の發達のみを以て滿足すべきにあらず精神的方面の發達亦之に伴ふべきは言ふまでもなき所なり近來は資本家と勞働者との間に於ける衝突の事例も漸く少からざらんとす將來工業の發達進步に伴ひて彼の歐米社會に於ける一種の惡風も益々我邦に入り來らんとするは已むを得ざるの事たり而かも是れ獨り都會に於けるのみの問題にあらず田舍に於ても地主と小作人との間柄は日に增し良好に向ひつゝありといふことを得ず寧ろ漸次に不良ならんとするの傾向あり從來の如き情誼上の關係は日に益々薄くして單に小作料を授受するに止まれる經濟上のみの關係とならんとするは今や掩ふ可からず此の如くにして各階級間に於ける溫情の漸次失はれんとするは現今最も慮るべきの事なりと思惟す殊に細民部落などの實狀を觀るに家庭の間一も溫情の通へる者なきを多しとす是等は社會改良上更に寒心すべきものたるべし然れども是等の事たるや單に經濟上の[illegible]て十分なる解決を見得べき者にあらず之を救濟す[illegible]へ如何に陋巷にありとも[illegible]精神上の慰安[illegible]るべし

且夫れ現今國民の義務敎育とする所は六箇年の小學敎育に在り然るに徵兵檢查の際に就て其實際を見るに智育の方よりいふも學校に在て修め得たるの事は隨分之を忘れたるの實あり之より推して考ふるに德育の方に於ても殆んど同一の狀態に在るものと思はる是の故に十二歲を以て義務敎育を終りたる以往の一生を通じて尙ほ能く道德心を堅固に保持し行くことを得るや否や極めて安心し難き事と思ふ固より理性にして苟くも發達するあらば是非の判斷を誤らざるべき筈なれども少年時代に於ける六箇年間の敎育のみにては是れとても十分なることを得ざるべし中等以上の敎育を受けたる人ならば兎も角理性も明かなるべしと雖も其れさへ一生を通して道德心を堅固に保ち行くことは至難の業たるべし故に學校の敎へたる所をば社會も亦保護して健全なる發達を遂げ得るやうに圖らざるべからず是に於てか必然の順序として社會敎育の必要を生ず而かも是れには宗敎の力最も大切なるべし加之六箇年の義務敎育を以て終るの人は國民の大部分を占むるが故に日本國民全體の德育問題としては單に學校に於ける德育のみを以て安心し得ざるや固より明白の事たりと信す

殊に交通機關の發達と共に世界は益々狹きを覺え列國との境界も漸次接近したるの實あり故に今の時に方り愈々以て民心の堅實なる發達を圖り益々國運の基礎を固うし置くの要ありされば今日我邦は各種の方面より互に相依り相扶けて十分に國家進運の爲めに盡くす所なかるべからずと思ふ區々たる小感情に制せらるゝことなく眼を大局に注いで十分に此問題の利害得失を講究することは此際切に希望に堪えざる所なり

△三敎會合について

大谷光瑞

國家社會を形成する要素として人類の存在する限は宗敎、敎育の兩者の必要あるは明了にして、要はこの兩者關係如何により、現世間の人類の幸禍の分るゝ處なりとす。兩者各一定の國境あり、これを超越せば濫なり、局に當るもの愼まざるべからず。頃日內務省の示す所は至當にして、而も文部次官の云ふ所亦正當なり。事の成否は衝に當る人の功過にして、即ち國民の禍福亦玆に存す。合同の適否の如きは瑣論のみ。

予は、予の職權の命ずる所に從ひ、唯至善を盡すのみ。宗敎の他半面たる出世間の如きは、現世間政府の關知する限に非らず。

△宗敎心の涵養に止るなら贊成

文學博士　波多野精一

此度の問題に就いては單に新聞だけで、信ずべき方面の人に臆張り逢つて居ませぬから內容が少しも分りません、當局者の考が何の邊にまで有ることやら、床次君にでも會つて直接聽きでもしましたら分りませうけれど……、今御話の通り丈の內容なら宜い樣ですね、只宗敎家を激勵して布敎に熱心ならしめ、そして一面敎育とも連絡を付け敎育家をして國民の宗敎心の發達を助ける樣にするといふ。只それ丈の事なら至極贊成します。極めて結構な事と思ひます。宗敎は人生の最高調に達したものです、學問も道德も藝術も無意識的の宗敎です、宗敎に達してはじめて其の自覺を得るのです。個人も國民も絕對的實在に接してそこより目的、理想を得來らねば其の生活は充實しませぬ。が國敎を定めて何れか一の宗敎に特別な保護を與へるといふ樣な事をするならそれはいけません。宗敎といふものは左樣いふもでない、人の信仰は自由でなければなりません。從つて實際分つた宗敎家であるならば、其勢力の世間的に擴まることを望みますまい、それ故好しや當局者から左樣いふ相談を受けたにした所が拒むでせう。拒むのが本當であります。又三敎合同などといひ

既成の三教から別に一宗教を作り出さうなどと當局者が企てるなら實に馬鹿げた話であり、事實又出來る事でもありません、

が當局者の考が其樣な事でなく。只宗教心の涵養を期するに止まり、徒は各宗教の自由競爭自然淘汰に任すといふ事なら頗る智慮ある遣り方で、之を責むるに直に歐羅巴に於ける政教分離の傾向を以てすることは出來ませぬ。政教分離は國教の定まつて居る國で、兎角教權に政權が壓せられる處から、其弊より免れ樣として起つたもの、其樣な弊は近く佛蘭西が苦痛を嘗めて來たのだから固よりいけぬけれど、御話の樣なら今我當局者の企つる所は左樣なものでなく、又獨逸あたりに現在行はるゝ宗教教育の如きものでもない、内容が甚だ違つて居る。とすれば彼を引いて無暗に此を攻擊する事は間違つて居ます。前にもいつた通り、私は此度の問題に就いては委しい事は薩張り知らぬのですから、只伺つた樣ならばといふ條件附で當局者の企に贊成します。(病後暫く靜養の爲諸新聞雜誌に一切意見の發表を斷られ居らるゝ博士に强いて座談を請ひ、其一部を茲に筆錄したるものなり。一記者)

△大騷ぎをする要を見ず

高木壬太郎

宗教利用に關する内務省の計劃に就ては政教混同だと言つて非難する者もあるが理想から云へば政教は元來一致すべきものである。併し今日の宗教は單一てない、神佛耶といふやうに色々に分れて居るのだから、政教一致といふが如きは實際出來るものでない。政府としては先づ宗教の力を認め、國民をして之を敬重せしむるやう導くに止め、宗教自然の發達に任せ優秀の宗教をして勝たしむるより外はない。思ふに内務省此度の計劃も、國民道德の維持作興は教育ばかりては往かぬ、宗教の力に賴らねばならぬことを認めて、三教の代表者を會同して、どうか諸君協力一致して國民道德の改善に盡して貰いたいといふ位のものであらうと思ふ。果して然らば、前内閣の神社佛閣參拜の奬勵に比して一歩を進めたものではあるが、政教を混同したのでもなければ、學校の中に宗教をもつて來ようとした

のでもないのだから、あまりやかましくいふにも及ぶまいと思ふ。

併し今日我國民に敬神の念が乏しくなり、道徳の觀念が薄くなつたのは、政府が宗教を奬勵しなかつたがためてはない。實は現代思想の傾向が之を然らしめたので、内務省抔の力でどうもなるものでない。又宗教が世人に尊重せられなくなつた他の原因は、今日の宗教が新空氣を吸ひ新思想に支配せられて居る人々の智的靈的要求を十分に滿足することが出來ぬのと、又宗教家に人を引くやうな人格の高い人物が乏しいのに由るので、内務省が何を思つたからとて、俄に國民をして宗教を敬重せしめ得べきものでない。勿論依賴心の强い我が國民のことだから、政府のいふことなら何でも御尤と云つて聞くものもあらうが、そんなことで信じた宗教が何の益に立たう。故に我々は内務省此度の計劃が如何程迄其目的を達し得べきやは頗る疑問であると思ふ。隨て我々は之に至大の重を置いて反對するにも及ばぬと思ふ。さりとて又之に依て國民に宗教尊重の念が起つて、宗教擴張の上に便益を與へるであらうと考へて喜ぶのは愚である。宗教家たるものは、政府が迫害しやうが奬勵しやうが、そんなことには頓着なく、時代人心の要求に應じ之を滿足し得るに足る知識と品格とを養ひ、自己の力を以て自己の宗教を擴張するに努めたらよからうと思ふ。要するに我々は宗教の立場から云へば内務省此度の計劃の如きは左程大騒ぎをする程のことではなからうと思ふのである。

△三教會同問題

文學博士　松本文三郎

三教會同の件に就いては、余猶未だ親しく當局者から其意見を聽いたことはなく、新聞に顯はれて居る所は時々に變化し、其眞意の果して那邊にあるか判然之を知り得ない。併しながら先日二三の人々から「教會ト宗教トノ關係ニ關スル宣言案」なるものを廻附され、其中に當局者の意見は大體左の點にあるを知り得たとして記載してある。是れは學者の會合の席上、當局者が親しく說明し、又此に出席の學者が其要領を記憶したのであらうから、當局者の意見を知るには、是れが恐らく最も確實なる資料であらうと思ふ。扨其趣意書を見ると第一には

日本國內ニ存在シテ多少トモ感化ヲ與ヘツヽアル宗教團體ニ對シテ政府ハ大體同様ノ取扱ヲナス

とあるが、我邦には公認宗教と未だ公認されざる宗教とがあつて、政府の取扱の各異なることは今更言ふ迄もないことである。政府は果して如何にして同一の取扱をなさんとするのであらうか。同一の取扱をなさんとするならば、先づ以て同一の取扱の出來るやうにして、始めて之をするのが順序ではなからうか。併し新聞紙の傳ふる所によれば、今回の會同には佛教派は、其大小を問はず、各其代表者を出さしむるのみならず神道の如きに於てすらも尙ほ且つ之と同様であるのに、基督教のみは二十幾派の中僅かに五人とかの代表者を出さしむるといふ。是れが果して同様の取扱といふのならば。同様の字義も甚だ曖昧であつて、余輩は殆んど其要領を得るに苦しむのである。次には

(二)從來政府ト各教派トノ間ニ意思ノ疏通ヲ缺キタル憾モアレバ、今後ソノ關係ヲ圓滑ニシ、且ツ何レノ宗派モ各ソノ能ヲ盡クサンヿヲ希望ス、……政府ハ各宗派ガ各々ソノ本分ヲ發揮シ、又諸派互ニ切磋琢磨シテ國民ノ感化ニ盡力センヿヲ希望シ、……國家ノ進運ニ有益ナル感化ヲ及ボサンヿヲ希望ス

とある。政府が從來宗教に疏遠であつたのは、政府當局者の眼中宗教を無視して居たからである、今之を誤れりとし和協せんとするならば、一夕の歡談も必ずしも不可ではない、併しながら若しそれだけの意味ならば態々各宗の代表者を集むるよりも、寧ろ內務省から各府縣に、各府縣から各郡に命令し、其地方々々で有力者の會合をなさしめた方が遙かに簡單で且つ有效であらうと思ふ。且つ此には「ソノ關係を圓滑ニシ」とあるが、從來でも其關係疏遠ではあつたが、撞突して居た譯ではない、地方によつては互ひに協力和合して居た處も段々ある。各地方の當局者に和協の意志さへあれば是れは何時でも出來得たことである。又各宗教をして其能を盡くし、其本分を發揮せしむる等のとは、當局者の希望を俟たずして彼等の既に努力して居る所である。現時の如き自由競爭の烈しき時代に於て、各出來得る限りの能を發揮せざるものが何處に有るべきであらう。若し彼等が怠つて其能を發揮しなければ、其災禍は忽ちにして已の頭上に落ち來るのである。彼等が出來得る限りの能を發揮しても尙ほ足らず、又國家の進運に裨補せんと欲して能はざるのは、別に其原因がある。其原因も必らずしも彼等の之を知らないのではない、唯之を改善するだけの力がないからである。其根本を治せずしては、一夕の會合如何にして其の希望を達すべきであらう。又

(三)諸宗派ノ間ニ遍般ノ意思ニ於テ相疏通シ、又力ヲ協セ得ベキ點ニテハ同心協力センヿヲ望ム

とあるが、是れが又中々難事業である。同じ佛教內に於てすらも合同は今の勢望むべからざるのである、其困難は基督教內に於ても敢て異ならぬ。從來佛教各派の合同や、基督教各派の合同問題は、幾度論議に上つたか知れぬ、而して彼等合同の明かに有利なることを知らぬのではない、けれども爾來愈分裂こそすれ、合同は殆んど全然實行されて居ない。

況んや三敎の合同抔とは畢竟空想である。政黨や會社抔の離合と宗敎の離合とは全然其事情を異にする。

要するに今回內務當局者が三敎の會同を催すに至つた趣意は、以上の三點にあるのみで、其他言ふ所は唯宗敎に干涉せぬとか、宗敎と敎育との分離に何等變更を加えぬとかいふ辯解に過ぎない。若し當局者の意志が眞に以上述べ來つた三點のみに止まるものとすれば、今回の會同は有害ではないかも知れぬが無益である。當局者の希望は希望として存するのみで、到底實現さるゝ筈はない。が併し是は唯表面上の趣意で、其眞意の存する所更らに他にあるならば、其無益は更らに變じて有害となるであらう。余儕は寧ろ今回會合の無益に終らんことを祈り、又今回は當局者も騎虎の勢已むを得ざるに出づとしても、今後再び斯かる無益の會合の繰返されざらんことを衷心希望に堪えぬ次第である、何故かといふに斯くの如き會合は繰返さるゝに從ひ、常に無益に終らずして動もすれば危嶮の之に伴はんとする傾向を有するからである。當局者若し志あらば、斯かる會合を催すよりも寧ろ、國家の爲に一日も早く完全なる宗敎法案の提出に勉められんことを希望する（終）

△余は大體贊成す

内ヶ崎作三郎

一、床次內務次官發意の三敎代表者會合は神道佛敎基督敎の代表者を一堂に集めて懇談するがごときものらしい。余はこの種の會合には反對すべき理由を見出すことが出來ない。

二、若し內務省がこの會合を利用して宗敎家を制肘せんとすることあらば、その時に及んで反對するも決して遲からざるべし。宗敎家は國法に背かざる範圍內に於て傳道說敎の自由を保有しなければならぬ。

三、世間に宗敎は過去の時代に屬し、現代はこれ以外のものに依つて國民德敎の根本とせねばならずと論ずる人がある。これは宗敎の定義如何による。ベンジャミン・キッドその社會進化論に於て人生を動かすものは經濟と宗敎なりと斷じた。まことに動かすべからざる斷案である。

四、天とか、佛とか、神とかの思想を以て時勢後れなりと評する人々もある。是等の概念の內容は常に進步し、充實せられつゝあるを知らずや。宗敎は進步しつゝある。これを知らずして宗敎を論ずる人多し。請ふ最新の宗敎哲學を研究せよ。

五、宗教の任務は生と死との間に於ける靈魂の教育てある。學校教育は必ずしも靈魂に觸れざるも可。然れども學校教育萬能を信ずるは一種の迷信てある。人生は常に疑念誘惑、不安等に圍繞せらる。これを指導して向ふ所を示す。これ宗教の特權。學校教育は智育、德育、體育にあり、宗教々育は靈育を主眼とす。兩者各々本分あり。教育と宗教と宜しく相助けよ。決して反目すべからず。

六、吾人は學校にて宗教を教へよと主張せない。たゞ學校以外の宗教々育に干渉するなかれといふのみ。教育家往々にして學生の信仰自由を束縛せんとするものあり。彼等は自己本職の繩張を知らざるものである。

七、今日の日本人の大多數は絕對の觀念なく、又宇宙（コスミツク）感情（エモーシヨン）を缺く。萬事に雄大の計畫と思索とを有せざる、これその素因。科學も發明も皆一種の宇宙感情に確立す。宇宙意識を說くは宗教の任務である。

八、今日の宗教家中或は墮落し、或は時勢の進運に添はざるものあるべし。然れども缺點のみ拾はゞ所謂道學者もしくは教育家にも同樣なる批評を甘受せざるべからざるもの多かるべし。人を以て教を廢する勿れ。

九、二月上旬の讀賣新聞紙上にて加藤弘之博士は神道に人物拂底し、佛教も十中八九、否十中十まで取るに足らずと斷言された。これは狂激の言、學界長老の言明としては餘りに不注意ならずや。佛教界猶ほ多くの學者と篤行の士を有するてはないか。今日の學者中尸位素餐の徒なきを保せず。老博士何故に宗教家にのみしかく酷なりや。

十、加藤弘之博士は猶基督教の忠孝道德と容れざるを主張す。博士は果して富永德磨氏の著「基督教と國家及道德」を一讀せられたりや。恐くはこの良著は博士の疑問に答へて餘あらん、

十一、基督教は哲學上幾多批評を容るゝ餘地あるは言ふ迄もなし。然れども我が　皇室及び國民と親交ある歐米諸國民の道德の標準たる勢力未だ失墜せず。わが同盟國の君主はこの宗教によりて宣誓し又即位した。

我國との外交關係頗る微妙なる米國合衆國建國の精神と存在も基督敎に負ふ所多きは天下の承認する所。加藤弘之博士樞密院顧問官として、又皇室の藩屏たる華族として、又二個の學位を有する學者として重きを國民になす。而して博士常に基督敎を酷評す。博士の誠意は吾人之を疑はずと雖も、累を國交に及ぼすことなきか。余は加藤博士の三省を請はんとす。

十二、昨年來我が政府の思想上保守退嬰的政策は痛く歐米友邦の感情を害し、一時は外債方面にも惡影響を及ぼしたと傳へられた。この點に於ては加藤博士等の責任輕しとせず。余は過ぐる數年の間、英國にありて、この邊の機微を解したりと信ず。敢て一言す。十三、床次次官の言明は一は明治政府の唯物的政策の大轉機たると共に、帝國政府の進步的國是を明かにしたるもの、國内の思想を刺戟したるに止まらず、對外關係に大貢獻あるを疑ふことが出來ない。

十四、政府當局者は進んで宗敎を信ぜよ。西園寺首相、原内相、長谷場文相、床次次官の如き直接なる責任を有す。神道を信ずるものは之に立て。佛敎に歸依するものは寺院に詣でよ。基督敎を信ずるものは敎會に出席せよ。而して國民を指導せよ。然らずんばこの紀念すべき聲明も空しく白紙たらんのみ。何ぞ獨り政府當局者と限らん。華族も、學者も、富豪も、軍人も、官吏も、平民も、各反省する所あれ。

十五、然れども最も責任あるは宗敎家自身である。眞理は常にその内容を擴充しつゝあり、萬物悉く進化す。宗敎のみ何ぞこの例外ならんや。今日の憂は宗敎家の多數がこの理を解せざることである。神道佛敎は措いて問はずとして、二十世紀に入りて歐米に於ける基督敎思想の發展驚くべきものがある。然るに日本の基督敎者にはこの大勢を解せざるものが多い。宗敎家自身の覺醒は重大なる問題である。

△政治と宗教には密接の關係あり

文學博士 姉崎正治

今度の會同に就て意見を述ぶる前に、明にして置くべきは問題の起因に對する私の關係だが、それには世間は色々の誤報邪推の傳はり居る今日、一々それを辯解しては所謂辯解として見らるゝ恐れがあるから、事件が凡て終了した後に、前後の關係書類を添へて私の行動を世に公にする時があるでせう、併し只兎に角一言だけして置くべき事は、此問題に對しての私の立場は何處迄も、亦何れの方面に對しても批評的助言者であるといふ事である、床次氏には、其著「歐米所感」を見、又宗教教育談話會て會つて議論を交へもし、人物と意見とを知つて其人の其意見が實際に行はるゝことを希望した。又宗教家の側や先輩友人で今度の問題に關係すべき人には事柄を話し、意見を交換したこともある。が何れにしても飽迄批評的助言としての立場は失はぬ。それを黒幕とか何とか考へる人は、要するに批評家たる態度の如何を心得ぬ人なのだから、斯樣な見方の風說や評論に對しては何等の答辯をもする必要はない。

今度の問題に就いて第一に論ずべき點は政治と宗教との關係である、多くの人は政教分離は文明國の趨勢だから、日本も其趨勢に逆行してはならぬといふ考を持つ、新聞などの批評に此主義を唱へたものを見るに、單に政教分離といふ形のみを見て、其內容に就いては考ふる所なく、又西洋諸國の實情に就ても研究を欠いて居る、政教分離とは政府と宗教團體との區劃を明瞭にするとの意味で、此意味なら勿論何れの國も政教分離に傾きつゝある、けれども此問題とても決して簡單な問題ではなくて、フランスの如きは千九百七年の分離法で之を斷行したが、其法の實行には色々の困難に遭遇して居る。政府と教會とを分離するといふは必要の政策だが、分離なるものは必ずしも背反ではない。それをフランスでは分離が直に背反嫉視と爲つて困難に陷いつて居る。アメリカの如きは背反ではない、分離しつゝ宗教には十分活動の餘地と自由とを與へて居た。其他各國の事は煩はしいから一々述べますまいが、日本は制度上で、明治六年の大教院廢止以來、分離に似て干渉にもなつて居る如く、又保護に似て嫉視にもなる樣な、曖昧な態度で今日迄持續して居る、約說すれは、宗教團體は何れも皆繼子として扱はれて來た。全く無關係でもなければ、又區劃を守りつゝ相助くるでもなく、何れの國にも見ぬ妙な政教關係で來て居る、今度の問題に關して佛教側の人は、頻に耶蘇教を非公認教とかいふ樣な事をいふけれども、此繼子扱ひに至つては三教何れも異なつた處がない、今日が此關係を明にすべき大切の時機である、其所以は一方には宗教以外の神社に對する整理保存、或は其奬勵が近年漸次歩を進めて來つて居る。それ故今に於て一方に神社と國家との關係を明かにすると同時に、他方では宗教團體と政府との關係を明白にすべき必要が迫つて居る。世評には、昨年は神社崇敬て今年は宗教奬勵などといふ

勝手な評を下すものもあるけれど、元々此二つは相並んで進むべく、神此崇敬に次ぎ宗敎の取扱は當然續いて來べき問題である。單に分離といふ空虛な言を以て此問題を解釋し居る樣な考のものは、現在分離を行つたフランスの實狀を研究し見るが宜い。

制度上からの政敎分離は必要としても、尙ほ進んで國家の統治と人民の宗敎信仰との關係、卽ち國家と宗敎との實質的關係に就いては、一層複雜にして又深きものある點を見なければならぬ。此點では、宗敎の信仰は一個人の事柄だから、國家とは何等の關係なしといふ見方がある、けれど此等は元來社會主義から出たもので、社會を以て單に個人が相互の利益の爲に約束し合つて集合した團體だと見做す見界から出て居る。けれど國家なるものの決して斯かゝる簡單な團體でないことは日本の思想家の皆認めて居る所であらう。細かい議論は別とし、吾人の所見では國家とは一系の文明を有し之を發達せしむる團體である。換言すれば歷史と理想とを共にする人民の結合である。此歷史と理想との內容が卽ち國體と爲る點であつて、此方面の自覺を有せぬ國民が總て團結の薄弱なる國民である。國家の事業制度は一方には人民の直接の利益幸福を增進すると共に、過去には歷史、將來には理想を中心にし、鞏固にして進取的なる團體を造るに在る。是が卽ち國家の魂である。古來何れの國家を見ても、此兩方面を併せ得た國家は强大を致して居る。(各國の歷史に就いて說明し得るけれど、是も繁冗を厭うて略す)此に於て國家と宗敎との實質的關係を生ずる。何となれば宗敎には色々の方面があるにしても、其根本性質を言へば人々が自己の生命の依つて出る源を崇重する心と、其心から此世に處し又現世彼岸に亙つての理想とを與ふる力である。例へば現在日本に問題と爲り居る祖先崇拜の如きは、此宗敎心が自己の肉體、家族、種族の源に對して發したものである、或は又此源を推して一切萬物の父なる神に迄遡る宗敎もある。卽ち國家の生命は其過去の歷史を重んじ、祖先以來傳へた文明を尊重するに在るが、此心は遂には宗敎心の一部分と爲るべき性質を持つて居る。又國家の將來に對する理想希望も、宗敎の信仰で與ふる理想と關係を絕つ譯に行かぬ。現在の生活に於ても人民の幸福と其精神的安立とは密接な關係を有して來る。斯く極めて概括的に說いても、國家の性質と宗敎の內容とは密接に相影響する樣に爲つて來る。如何なる世界的宗敎でも其信者が歷史あり理想ある國家に屬する限は、其理想を尊重し、發揚し行かなくてはならぬ、是が卽ち宗敎の國家に同化し適應すべき所以であるが、さればとて此同化適應といふは、必ずしも宗敎が其理想を棄てて國家に降參するの意ではなく、宗敎の信仰理想に依り國家の歷史に深き意味を發見し、以て國家の理想を高くし又淸めもするので、是が宗敎の本分である。如何なる世界的宗敎でも此同化適應卽ち國家理想の發揚を爲し得ぬものであるならば、總てそれは感化の實力の無い宗敎である。例へば日光は萬古に通じ世界に亙つて同じ光であるけれども、それが草木を照しては梅は梅、桃は桃の成長をさせる。是は一面よりいへば、日光が梅桃乃至千百種の草木に適應する爲て、其れが草木の種を成育し、其成長を發揚する所以

である、此點を又反對に國家本位で考へて見ても、國家が宗教の信仰に依つて其理想を發揚し發達せしむればとて、國家の特色を棄てて、漠然たる世界的宗教に降參するのではない、歴史と理想とを守りつゝ其理想を高め發達を盛にする爲に、千古に通じて變らざる力を吸收するまでの譯である。若し梅や櫻が日光の力を借りては意氣地がないとて、故らに日光の無き處に成長せやうとすれば、所謂日陰の植物で生氣のないものと爲る。國家の宗教に於けるも亦是と同然で、其國内に出たものにせよ將た他國から來たものにせよ、世界的の勢力なる理想信仰をばドシ〳〵取入れて之を國家の力と爲すべきは當然である。即ち植物の日光に浴するものである。今の日本には日本固有の道といふ點だけを重んじ、如何なる思想、信仰でも外來のものとしいへば之を拒絶せんとする氣風がある。其爲に日本元來の精神や過去の歴史に含まれ居る、大切な又深奥な意味を發見し得ぬ。此樣な鎖國主義は日本國の文明をして全然日陰の植物と爲らしめんとするものである。日本國の文明、理想より出た道にして若し雄大に且つ普遍なる感化力を有するものであるなら、其文明や理想が世界的宗教と握手し共同し得ざる理由はない。敕語でいへば、それで宣せられた人倫、道德、忠孝の道、建國の威德は、勿論皇祖皇宗の遺訓に基いて居る。即ち皇室を中心とした日本の歴史が事實的(單に理論ではなく)證明となつて居る。けれど此國家の理想此國民の践むべき道は、又同時に中外に施して悖らず古今に通じて謬らざる道である。已に中外に施して悖らざる以上は、又内外古今の別を問はず、此道の精神を發揮し得た宗教信仰から光を得滋養分を吸收して盛に成長を遂げしむべきである。

斯く見來れば國家と宗教信仰との關係は單に制度や國體の表面的問題でなく、精神理想の實質に關係する大切の問題である。制度組織の上ですら分離といふは多くの論者の考ふるが如き簡單なる問題でない。分離の形式を取つてそれが背反嫉視に落る如きは一國の不幸であつて、殷鑒は遠からずフランスに在る、況んや理想信仰の實質に就いて考へて來れば、國家と宗教とは各其活動の範圍方面を別にするにせよ、精神上には少くも相携ふべきものである。猶ほ植物の成長と日光の照臨とは明に其間に區分あるにもせよ而かも兩者の遂に相分つべきにあらざるが如きものである。床次氏の宣言中に在る國家と宗教との契合といふひ、又日本宗教の世界的思想といひ、何れも此點より見て解釋すべきものであらう。要するに日本の思想家、評論家は今迄宗教問題に冷淡であつた爲、他國の政教關係に就いても解釋が粗漏で、僅に分離の一語丈で解釋を盡し得たと思惟するであらうけれど、此の如く簡單なる考で國家に大切な問題を斷定する如きは頗る輕卒且つ危險な事である。(序に言つて置くが、敎育と宗教との關係に就いても、イギリスでも之に困難を感じ、嘗て菊地男爵に日本の敎育に關する講義を頼んだ時、日本の敎育家はイギリスも亦宗教と敎育との分離をする事と考へて居た處、イギリスは全然反對の解釋を採り、各學校には凡て其設立者の宗教を入れ、國家は其何れの宗派のものと雖も平等に保護する事とした。此事でも日本の論者の思想の

餘り形式的に且つ簡單過ぐることを示して居る。實質の解釋は各其國々に特別の點があり、單に分離が何れの國にも通じた文明的方針だとはいひ難い。)

以上問題に就いて兩面から大體の解釋を述べたのだが、既に此問題に就いての由來を考へて見ねばならぬ。西洋の諸國特にフランスやイタリヤに政教分離の歩を進めて來たのは、或る必要から出た事である、即ち中世紀以來教會の勢力が凡ての方面に及び、政治教育のみでなく、研究や思想の自由に迄立入り過ぎた。此等の國での政教分離は要するに政府が教育の壓制を脱せんとする努力に外ならぬ。(此點に就いてはイタリヤの元老ルッツアッテ氏が「信教と研究の自由」と題するものを出版し、之を日本にも飜譯することを私に頼まれたから、近い中に其飜譯を出版して世に示す考て居る)それ故イタリヤやフランスで分離の必要を感じ、遂に分離したからとて、直にそれが日本の標準となるものでない。日本には却て其反對の事情のあることを思はなくてはならぬ、イタリヤやフランスは教會の壓抑より脱する爲に、教會の勢力を反撥する爲に、遂に宗教を無視する極端に迄走りつゝあるが、是は反動の政策であるから、軈て此反動時代が終れば元の中正に複し、國家と宗教とが互に相尊重し、相和合する時代が來るに相違ない。イタリヤの上院議員で小說家であるフォガッツアロの如きは、此理想を以て進み、イタリヤの思想界には隱然たる勢力を占めて居る。今日はそれが事實に現れぬにせよ、其端緒だけは已に見えて居る。フランスはまだ其處迄行つて居ぬけれども、今後のフランスの繁榮には此問題の解釋が至大の關係を有して居る。右は外國の事だが、扨てつ翻て日本の事情を見るに、イタリヤやフランスとは全然の反對である。即ち我德川時代では却つて宗教を政府の奴隷とし使役して來て居る。そして維新の際には其奴隷たる宗教を全然家の中より逐ひ出さうとした。が全然逐ひ出す事は出來ず、厄介者の居候を扱ふ樣にして今日に迄及んだ、其爲に國家の損を招いた事は諸方面に現はれて居る。今日教育界に德育に就いての難問があるのも、一部分は此宗教無視の結果である。(勿論經濟其他の諸種の社會問題があるには相違ないけれども)それが爲に宗教の感化と國民の理想に對する進歩とが相離隔し、教育と宗教との分離の必要あるにもせよ。(是は別論に讓る)分離が軈て背反と爲り、教育家と宗教家とは疎遠と爲る一方である。國民の義務教育と社會に出てからの感化とは甚しき扞格を生ずる。國民の信仰感化に就いて政府は少しも干渉してならぬといふならば、教育事業も政府でせぬ方が正當となる。けれど政府の仕事は國利民福を增す爲に、即ち國家の文明を發達し、理想に向つて進む一部の働をする以上は(但し政府のみが之をすると誤解してはならぬ)政府も宗教の感化力を全く度外に附すべきでない。既に監獄教誨、軍隊布教、從軍布教など、政府は從來宗教の活動を許すのみならず、又それを獎勵した事もある、是は決して不當の事でない、政府は主として行政、司法の手段に依り、宗教は其感化に依り、共に〳〵國家の爲に盡す以上は、其間全く沒交涉たる事は如何しても出來ぬ。例へば前にいつた從軍布教の如き、戰爭中は佛教

や基督教の事業を陣中で歡迎し、其効力を認めたに拘らず、戰爭が濟めば宗教は再び元の繼子扱食客扱に附して顧みなくても宜いといふのは餘りに輕薄な見方である。何れにしても政府と宗教とは共に國家の文明を發達する爲に働くものである以上、其間に意思の疏通と或る點の打合せ、又活動の調和がなくてはならぬ、勿論双方其區域を明にし、分業して進まなければならぬのであるが、分業といふは分離背馳でない、相互の調和協同である、世人は此分業を分離と考へ、其又分離といふ事に就いても深く内容を考へなくて、それで床次氏の計劃を見るから、意味を誤解し邪推し愚論を持出すのである。

其誤解に就いて尙ほ一つ言ふべきは國家と宗教との契合といふに就いてである。國家と宗教とが目的を同うして共に助けるといつても、直にそれが政教一致であつて政府が何か一の宗教を作り出し、又は何れか一の宗教を特に保護して、他の異端邪說を排斥するといふが如き意味でない。何となれば如何なる迷信又は幼稚なる宗教とても、兎に角それが今の世に行はれるのは、まだ其位の程度の信仰で滿足する人民の存在する證據である。其人心を動かすことは政府の力でなし得るものでない。人を感化するは人。心を動かすものは心だから、此等の信仰上の淘汰作用は各宗教の自由なる活動、從つて又信仰の切磋琢磨で處置し行くべき問題である。それ故今度の問題に關聯して何か國敎風のものを作り出し。他を壓迫するといふが如きは勿論あるべからざる事、又試みたからとて出來るべき話でもない。各宗教が各其力を發揮し、自由に感化を及ぼす樣に爲らなくてはならぬ。(今迄は繼子扱の結果として此點に詰らぬ干涉や妨害が事實行はれて居つた)すれば各其力に應じて人心を感化し、其間に所謂自然淘汰を生じ、劣等の宗教は高等な方に引上げらるゝ方に近づくに相違ない。即ち國家と宗教との契合といふのは、今迄の世界に無つた政教一致ではなく、自由活動を許しての分業である。

尙ほ此上宗教と道德との關係、宗教と教育との關係に就いては、大體今言つた分離ではなく分業といふ精神を圓滿にする必要があるから、其等の評論は近々一册の書物にして世に問はう。右に述べた點は自分の確信であつて、又多少乍ら西洋諸國の實際、日本の歷史を研究しての斷言である。從つて此見地からして當局者たる床次氏にも獻策し、宗教家にも相談し勸告した事もあつたのである。批評家が此研究の斷案に對する内容に對して批評を與へるなら何處迄も其研究を重ずべきだが、詰らぬ政略的の邪推を以て兎や角いふことなら、私は其樣な論者の一切相手にならぬであらう。

△三教會同を評す

文學博士　桑木嚴翼

所謂三教會同等の事情に就ては、余は詳しく前後の經過を知らないから、餘り耳新しい意見を述べるとは出來ない。とにかく宗教的精神がさほど度外視すべき

ものでないといふことを認めた點と、諸宗教特に基督教に對する一部の人々の偏見を鋤去することを得た點とは、爲政家の處置としては非常の努力を要したことであると言はざるを得ない。既成宗教が今日では全く勢力を失つて居ると見るのは、決して社會の實狀に通じた言ではない。もし信徒の數量から判斷することが出來るとすれば、昨年諸派の大遠忌などは好い證左を示して居る。教義の高尙なことや若しくは意味の深いことから言へば、佛教も基督教も決して淺薄な小理屈から割り出した、處世訓などとは比べ物にならぬ。もし道德の根底には宗教的の精神があるとしたら、其宗教は決して今日突然起つたものであることは出來まい。必しも宗教に憑らないでも道德は成立つかも知れない、歐米の宗教は幾分か惰力の然らしめる點があるかも知れない、或は今日の世界の趨勢は寧ろ宗教と道德との分離に傾いて居る點が多いかも知れない、然し此點に於ては日本はやゝ特別の事情にある。歐米では宗教が權力を持ち過ぎて居たから其弊に對して純人間的道德の主張も生じたのである、然し其人間的道德の根底には、或は論理的に徹底して居ない點があるかも知れぬが、依然宗教的精神が存して居る。日本では從來（近代の事に限つて言つて居る）宗教は教育ある社會に對しては餘り實際上の勢力とはなつて居なかつた、是れ明治の啓蒙的思潮の當然の結果である、從て其反動として宗教的精神を引き入れるのも、强ち世界の大勢に反した事とは言へない。而して既に宗教の力を認めるやうになれば、從來相當の歷史を有して居た各宗派に同等の待遇を與へるのは當然である。此事が自ら、歐米の思想文物を悉く敵視する一方の傾向に對する緩和策となることは、歐米の所謂精神的文明に許多の長所のあることを信ずる者の大に喜ぶ所でなければならぬ。

然し此事が果して其目的に對してはどの位有効の結果を齎すかは疑問である。凡て新計劃に對しては諸方から注文が出る、從て諸方の人の滿足を圖らうとする、勢、公平穩健だが何等の奇のないものになつて仕舞ふことが多い。余は元來、此會同によつて何の位の事

業をなさうとするのかをよく知らないから、其結果が假りに大てなくても、其れて計劃者の豫期通りになつたのかも知らないが、とにかく、新計劃の常に遭遇する運命を述べて見たまでゝある。

又此計劃が政府當局者を中心とする點に就て非難があるやうだが、其是非は暫く措く、從來の慣例ては隨分此種の業が政府を中心として起つて居る、而して其爲に屢滑稽な結果を生ずるともあるかも知れないが、元來まだ官尊民卑の風が盛な社會だから、政府の聲がゝりて始めて犬と猿の間柄の人々も一堂に會するやうにならぬとも斷言出來ない。全體宗教が政府に利用されるのは固より惡いが、自分自ら利用されたいと志願した場合も少なくなかつたやうだ。今更特に當局者と對立しようといふのは、宗派によつては隨分矛盾の言と言はずばなるまい。

教育と宗教との關係に就ては、今後とても學校教育上に宗派の論爭を引入れたり、教場て宗教の儀式や迷信を說くとは必要あるまい。然し教育家が宗教的信仰を有つとを罪惡のやうに看做す一部の偏見に對しては、此政策は幾分か矯正の効果を擧げ得るかも知れない。

△當局者の成功を希望す

文學博士　加藤玄智

拜復貴意了承仕候然る處御注文の如き限りある紙數にては愚意十分盡し難く就ては下事近々世に公にす可き拙著「我建國思想の本義」てふ小冊子中第十章の「現下の宗教問題」の條下に割讓致し度と存じ候乍然一言愚意の要を採りて申し上げんか大略左の如くに御座候

内務當局者今回の擧はその結果の如何は豫め多きを望む可からざるものあらんも兎に角從來政治家が維新當時の排宗教熱――主として排佛毀釋、之に外來品と云ふ點で基督教を排斥するもの――にうかされ居れるものより此頃漸く病本復し、遲まき乍ら少しく眼が覺めたる如き感ありこは國家の爲め至極慶す可きことと存じ居候。然るに一部の教育者は之に關し何か自家の領分の他より侵蝕せらるゝが如き惡感を抱き大に反對を試みるものあるは實に苦々しく片腹痛き感なき能はざる者に御座候又宗教家の中にも奇貨措く可しとなし何か爲めにする所あらんと欲してその結果反對を稱ふるものありと傳ふ、是れ又苦々しきとに有之候、小生は宗教家教育家政治家等が黨同異伐など云ふ狹量

なることを止めて極て虚心坦懐至誠の心を以て國家の爲めに盡さんことを希望し徒に衆のエがみた様にごつ〳〵互に角つき合のみをせば平和に國家の進運に貢獻せんことを切望するのに候斯くして宗教家の精神的聯合軍の力を藉りて唯物思想に基せる諸種不建全なる時代の惡思潮を撲滅せられんことを冀ひて止まざるものに候、此點より見て内務當局者の今回の擧の如きその結果の多きを屬望し得ざらんも兎に角その成功を希望して措く能はざるものに御座候。

以上愚見の一端貴問に應して披攊仕候餘り永くなり候て他人言論の妨害にもならんかと存じこれにて擱筆致し、詳細は拙著「我建國思想の本義」に讓り申度候先づは右要用迄早々　不一

△現下の宗教問題について

金子筑水

國家が宗教や其の他精神界の事柄に立入つて惡いといふ理由はない。たゞ其の目的と手段の如何によつて、問題が起こつてくる。今度の内務省の宗教問題は、非難すれば幾らも非難は加へられるが、大體の主意に於ては、先づ諒とすべきだと考へる。たゞ我輩は、隨分時勢とかけ離れた既成宗教家――所謂宗教家の會合を圖つたとて、何ほどの効果が有るかを疑ふ者である。當局者は、時代思想に關する深い理解を缺いてゐるやうに見える。肝腎な國體問題などを、そつと棚にあげておくのが、をかしく感ぜられる。兎にかく會合が成立したからは、何かそこから新しいものを産ませてやりたい。

△實情に疎し

文學博士　前田慧雲

如何いふ事か内容は能く知らぬけれど、床次君からも書面が來て居る、それだけて見ると一向惡くはない様だ、宗教の力を以て道德の地盤を鞏固にするといふは至極結構の事である。是迄教育の力を以て凡ての人を道德的に導かうとして居るけれども、大した効力がない、成る程教育勅語もある。學校ではそれを説いて聽かせる。が一般國民には學校へ出ぬものもある、又出たものも學校に居る中こそは勅語を奉讀しても居ろうが出た後には隨張覺えて居らぬ、一度も讀まぬといふものが多い。斯様な譯でちつとも國民一般が道德的には進んで居らぬ。之を當局者が

氣付いて宗教の力を以て凡てを道德的にしやうといふのは好い考である。

又宗教家を會同させるといふ事に就いて兎や角世評が八釜しいけれども、是も私は世間でいふ様に惡くもないと思ふ。政府が斯様な企をするのは干渉だ、要らぬ世話を燒くのだといふけれど、別に如何するといふでは無し、只重なる人達を會同させて、互に親み合つて好い鹽梅にやつて呉れといふ丈、つまり政府が諸宗教家の間に立つて双方の媒介をして呉れるといふに止まるから、何も惡い事ではないと思ふ。それを干渉などといふならば、管長制度の存在こそ尙干渉であろう。一宗派の管長の任免の權を内務大臣の手で握つて居る。これこそ餘計な世話である。て此方の束縛を寧ろ免れたが宜いと思ふ。之を世間の者が氣附かずに居るのは可笑しい事である。

が只言ふべきは此様な會同に於て幾干の利益があるかといふ事である私の考へる處では何にもなるまい、大勢宗教家が寄つた所で何の纏まつた話の出るもんでない、不得要領、いや不得要領とまでも行くまい、只御茶飲んで別れる丈の事に了るだろうと思ふ。當局者としては勞して益ない事である。それのみなら宜いが、兎もしたら却て色々の弊害が起るかも知れぬ。例へば佛教とか神道とかいふものは謂ふ迄もなく日本化した宗教若くは日本的の宗教であるとしても、基督教は日本に來てからまだ幾干もたたず、日本化したものもあるけれども其中にはまだ日本化せず、純然たる西洋流のものもある。そして今迄佛教神道は公認されても基督教は公認されて居らぬ、それが今度の會同で自然公認された形になるとそれ等の者も同様に國民に見られるから其結果餘り宜しくあるまい。基督教ばかりならまだ宜いが、尙ほ他に色々怪しいものが入込んで居る。まだホンの一部に二三少數の信者を持つに止まり、世間にはあまり目立たぬけれども不都合な性質のものが入込んで居る、それ等迄が其影響て、一般に宗教が勢を得て來ると共に勢を得て來るとなつたら甚だ宜しくない事だと思ふ。内務省は此様な事をせずとも宗教を重んずるなら重んずるで他に爲すべき事があるであろう。此様な方面は寧ろそつとして置いて、他の方面で色々宗教に利便を與へ宗教心を普及させる仕方があろうと思ふ。

一體今の政府には統一がない。眞實宗教心の普及を謀るといふなら教育との連絡を取るべきである。然るに内務省では此様な企をし宗教を重んずるといふ方針であるに對し、此事は文部省では一向知らぬといふ。統一ある一つの政府の仕事とは思はれぬ。地方の諸學校などでは今でも科學萬能主義で宗教を不必要と思つて居る教員が多く、毎々生徒に向つて左様な說き方をする、政府にして宗教を重んずるといふならばそれを其儘に打棄てては置けぬ筈だ。床次君は諸宗教家の會同などよりも、寧ろ此方面に努力すべきである。文部省の役人等の地方の實情に疎い事は驚くべきである。此間も文部省の或る役員に會ひ、語るに此事を以てしたら、其様な事はありません。地方の學校で宗教を排斥する様な事はありませんといふ。隨張り實情に通じて居ない。床次君の精神は甚だ結構

な事と思ふけれど、只其手段が矢張り實情に疎いものである事を遺憾とする。

△手つ取り早き一案

釋宗演

床次次官には前年會つて親しく語つた事もあり、其平生の意見を知つて居ますが、此度の企は眞實自己の確信から來たもので、洋行して彼地の實況を觀察して歸られた後に、一層其確信を増した事はありませうが、決して宗教を政治に利用しやうなどいふ、一時の思付の話ではないのです。近年道德觀念の動搖は著しい現象で之を救ふには是非共宗教の力に待たなければなりません。元來道德は單に世間的一般の說き方では効果ある者でなく、十分深い宗教的確信の上に樹立するんでなくては世に處して力ある者とは爲りません。今や時代人心の要求が種々の事情より宗教に向ふ樣になり、遂に當局者をして斯かる企を爲さしむるに至つた事は結構に思ひます。三教會同に就いては世間に是非の論囂々たる有樣でありますけれども、要するに三教の重なる者が寄集り、胸襟を開いて語り合ひ、共に親しみ合つてそして國家の爲、社會の爲に、各々自己の宗教に向つて盡すといふ事丈であるなら、私には至極贊成であります。又當局者としては決してそれ以上に深く宗教の内部に立入つて迄如何するといふ事はなりません。三教合同してそれより新に一宗教を作るなどは、元と宗教なる者の性質として企てて行はるべきでもなく、床次さんとても十分それは承知の事だから、當局者として其樣な無謀の提案をされる憂はありませんが、左樣でなくとも尙ほ幾分前に述べた以上に立入り世話を燒き、それで宗教を世間に盛にしやうなどとすることはいけません、政府の力で宗教を盛にすることは決して爲し得るものでもなければ、又其方面ならば我々宗教家が互に提携し奮闘して、自己の力を以て自己の宗教を弘むべきで、敢て政府の力を假りるべきでありません。此度の會同に此樣な計畫があると

するなら同意は出來ませぬが、床次さんには其邊の理屈が分つて居り、其樣な憂はありますまいから私は贊成致します。

宗教家側の反對には堂々たる理論よりも寧ろ瑣々たる感情に本くものが多いから困ります。此度の企にも徒に神佛二教は公認教で管長制度も設けられて居るに反し、基督教にはそれがない。然るに今當局者が主に爲つて三教の會同をさせるとなれば、基督教も亦國家より他の二教と同一の待遇を受くる形となる云々といふを理由として、反對するものがありますけれども、私等には元々其管長制度なるものが喜ばしくない。出世間的の宗教が世間的の國家の手に左右せられ、一宗派の首長たるものが内務大臣によつて任免される。即ち内務大臣の息を吹掛けられねば一宗派の首長に活力が添はぬといふ樣な事は餘りに意氣地ない次第であります。此制度は教部省廢れて宗教局の出來て以來今日迄行はれて居るのでありますが、之れは今度の會同を機として寧ろ我々より提議し、返上したいものです。宗教家に由來貴賤上下の階級あるべきでなく、それが宗教の精神で、特に我佛教に在つては釋尊自らが人爵を厭ひ、赤裸々の一個人で弘教に勉められた事でもあり、其流を汲む我々佛徒たるものは、特に此心掛を以て法界に立たなくてはなりません、私は寧ろ基督教と同樣に自由の位置に立つて働くべく其管長制度の撤廢を望むものであります。

それから今一つ。是は取り樣によつては不敬とか或は僭上とかいはれるか知らぬけれど、決して其樣な考を持つものではないが、既に教育には教育勅語あり軍人には軍人の勅諭あり、又近く戊申詔書もあるといふ樣に、色々な方面色々な事に時に應じて幾らも勅語や詔書が下つて居る。されば此人心生活の大現象たる宗教に關しても、亦至尊陛下の御語を仰ぎ得ぬ事はなからうと思ひます。勿論其御語は如何なる御語であるべきか、其形式は如何なる形式を取るべきか、其邊の處は一向私どもの考には浮びもせず浮かべも致しませぬが、それは如何樣にもあれ兎に角陛下の思召として

て、宗教は必要なりとの御一語を天下の民衆に向つて、給はるならば、是に過ぎた結構な事はなかろうと思ひます。すればそれ以外に當局者が焦慮して色々の方法を講ずる必要はありません。一番手っ取り早い事に思ふ。私どもは何も政府の威力を假りて其下に勢力を扶植したいと考へるものではありませんが、今や四圍の事情より社會の要求が宗教に向ひ居る事であれば、其結果それが陛下の御語となつて天下に與へらるゝ事は何の不思議もない事に思ひます。私共はそれ以上に政府に望む所はない。宗教は重んずべしとの思想が普及した後は、各々自己の信ずる宗教の爲に努力し自己の力を以て自己の勢力を扶植するが宜い、そして各自其教理を異にし其信仰を異にすれば、根本に於ける合同は到底成立つべきではないとしても、其國家に對し社會に對する方面に於て別に共通の處あるべく、其點に於て提携し得べき限は提携し協同すべき限は協同して共に救世に勉むべきだと信じます。

△外部よりの援護を排す

文學博士　村上專精

御維新頃には骨董品などは誰も顧るものがなかつたが、追々世が治まり人心が落着くに從つて又骨董品が持囃される樣になつた、宗教なども矢張り維新の初頃には誰も顧るものが無かつたのが、骨董品同樣此頃になつて又世人の注意に上る樣になつて來た。が是は致方ない、骨董品は無用にあらず有用なものだから世に存在するとした處で、譬へば煙草の樣のもの、煙草は幾ら有用でも米とは比較にならぬ、飯に代へて煙草を飲むといふものは有りはすまい。飯を食べてそれから煙草といふ順序になる。明治の今日に至つて又人心が宗教に注意を生じ、當局者迄此度の企をするに至つたのは、如何やら仕事に型が附き氣分も落着いたから、どりや一服といふ所であろう。

時代が推移し人心の要求が遂に宗教の必要を感じて來た結果であろうから、それは結構な事に相違ないが、併し今度の三教會同といふ事は少し考へて見なければならぬ。餘り贊成出來ぬ。勿論得失をいふ上にも各々の立場によつて違う、各々の所屬の宗教を本位として見るのと、又各々の本山を本位として見るのと、それからそれ等の考より一切脫脚して赤裸々の個人として見るのと、皆意見が違つて來やう、それで本山本位て考へるなら三教會同は宜いてもあろう。當局者は宗教に權威を附ける

とやらいふ事だが、具體的には如何いふ事にするのか知らぬけれど、左樣いふ風の事は本山本位の考のものには結構でもありませう、が一個人として眞に宗敎の爲を思ふと私は贊成出來ませぬ。此の如きは偶ま宗敎の衰頽を來す所以と思ふ。待遇の上から佛敎、神道は公認敎で管長制度にもなつて居るが、基督敎は今迄は默認であつて管長制度も何もない。それを三敎合同など當局者によつて企てらるゝとなると、默認が今度公認になる譯だとて不平をいふ。それに對して世間には又餘りに局量が狹いとて非難する者もあるが其立場に立つて見れば、それには尤もの理由があるので强ち局量狹隘なりと一言に擯斥する譯に行かぬ。が私一個の考からすれば管長制度その者が已に行かぬと思ふ。是は本山本位では考へられぬ事だ、本山本位の人達には隨分まだ管長などいふものは大したものだ、有難いものになつて居る。それ故多數の坊主どもになど此樣な事をいはうものなら直にそれは排佛だ、怪しからんともいふでせうが決して排佛どころでなく、大に佛敎その者の爲を思ひ未來を思ふからである。當局者の此度の會同の企たる徒に宗敎に敬意を拂ひ、何等かの權威を與へんとするだけのものであるならば、各宗敎其者の緩怠を招き内部の腐敗を誘導するの媒となる恐がある。宗敎の生命は何等外部の援護なく、自由に自己の確信を以て奮鬪する所に在る。論より證據明治の初年に敎部省が廢せられ敎導職が無くなつた時の佛敎徒の驚きはない。今にも佛敎全滅に至るかの如き悲觀を抱いた者もあつたでせう。所が事實は反對で、それ以後の佛敎は却て活氣を添へて居る。左樣な譯で、宗敎家に外來の援護は無用どころか却て有害である。で私は寧ろ管長制度のなくなる事を希望する程であります。床次君は賢明な人には相違ないが、まだ宗敎内部の實情には疎いと思ふ。此意味を以て私は此度の企には賛意を表し兼れます。

二月廿五日午後三時より華族會館に於て第一回三敎會同催され神道家側より十五名、佛敎家側より四十九名、基督敎家側より七名出席したり。

領土擴張主義と商權擴張主義

△兩主義併行論

玄黄子

一寸飛び離れた立場から飛び離れた考を述べるやうに見えるかも知れないが、一體國といふ奴、此奴は頗る油斷のならん奴で、其の國次第では隨分厄介な事を考え出して、飛んだ迷惑な、人困らせな事を仕出來す。侵略主義などいふものはそれであるに違ひない。どうかすると無理非道な事をする。無邪氣にそこいらに遊んで居る子供の團體に向つて、其團體が無邪氣に遊んで居る其事物を傍から引つたくらう、或は分け取りをしやうと、コソ〳〵と話し合つて突然とそいつを實行するといふやうな、恰度惡少年でも仕さうな事をする國がある。之は國がしたといはうか、或は帝王がしたといはうか、兎に角さういふ例は隨分あるとと思ふ。近來世界に發達しかゝつて居る所の民政―デモクラシー、此デモクラシーの支配して居る國ではさういふ事を餘りしない。そこで今日の世界の大體の傾向からいへば、侵略主義といふものは其國に生息して居る個人〳〵の意見としては存在して居るかも知れぬが、其國の方針としては餘程少いてせう。尤も我々の隣國あたりには今だに此主義を國是とし方針とするものがあるかも知れんが大體からいへば餘程少くなつて來て居る。それならば其事が一切止まつて了つたかといへば、さうぢやない。なか〳〵さうぢやない。例へば英國の如きは領土擴張などいふ事を夢にも見ない國のやうにどうかすると世の中から思はれる。商工立國、自由貿易、そんな事を看板にして居る。けれども之は英國の最近の事で、殊にマンチエスター派の經濟論が英國を支配し

た以來の事て、凡そ世界に、領土擴張をやつて、やつて、やりぬいたものは英國である。今日でも英國の殖民地が一番エライ。那翁一世が歐羅巴て荒れ廻つて歐羅巴の國々を打滅ぼしたり、征め隨ひたり勝手氣儘の統一政策を行うたそれが引つくり返て歐羅巴は滅茶〲だ。又中世紀以後航路發見、新領土發見から引續いて持つて居る領土の一番多いものは西班牙と葡萄牙、又佛蘭西も隨分やつて居つた。そんなものも本國が亡びたり、弱められたりしたので旨く立ち行かなくなつて居る。それをシホに英國はあらん限り拾つて廻つて居る。それに就ては隨分巧みな事もやつて居る。那翁の跡始末をする時代には歐洲本土には手を出さぬが世界各所に落てゐるのを拾ひ上げる。拾ひ上げないまでも外の手から離す。カンニングなどは南米に澤山の小共和國を作つてゐませう。そして業山な演說などもやつて居るやうてす。名は大義によろしい。そして實際は英國の領土擴張となつた。小獨立國を澤山に作つて自國の商品をウント賣り込む。領土擴張と商權擴張が併行して居る。それで英吉利は今日でも一等榮えた國の筆頭て居るといふ有樣になつたのである。只侵略といふやうな無理な事がない丈けだ。題號に設けられた領土擴張はなか〲油斷なく行つて居る。そこで侵略主義となつては弊害があるけれども、今の世界の狀勢からいへば領土擴張と商權擴張の二つの方針は併行して居るといつてよい。國といふ國、總ての國がこの二つ共行はうと思うてゐない國は殆んどありますまい。どうもどこの國にしても今の文明世界に人口の減つて行く國は少いものである。文明の行詰りになつて人口の減つて行く所は格別、そこまで行かない國はどうしても領土の必要が增して來る。殖民地經營ば止むを得ぬことになる。それから又種々の理化學上の新發明て新らしい工業が起り、工業の機關が非常に力が大きくなり、製造品が急に增加した。又之と同時に商業の機關も整頓し、金融も手弘くなつた。それて以て利益を得それて以て繁榮を計る。然し之もタヾては行かぬといふものは、國が各々垣を設け、門を作つて、動もする

と外の國の商工業の邪魔をする。だから政治の力を藉つて商權擴張を行はなければ商工業の發達は圖られない。からしてどうしてもどこの國でも領土擴張と商權擴張とを何時も〳〵念頭に置くことゝなつて居る。そこで之が相容れることか、容れぬことか、併立することか、せぬことかいふに、私は無論相容れ、相併立するものと思ふ。相容れ相併立させねば充分國の意味をなさぬといふ程必要なものとなつて居ると思ふ。が時により、處により、同時に行はれぬ場合には魚を採るか、熊の掌を採るかとの論が起る。

今の日本に其問題があるとすれば無論支那に對してゞありませう。處で此問題を決定するは餘程六つかしい。恰度此前の「日本の利益を主眼として見たる支那問題」と其の歸着點が同じ事になる。處で之は支那の見樣次第で如何樣にもなる。細かに私はさういふ研究をした事もなく、又決定した意見も持ちませんが、大摑みに摑んで見れば、あの老大帝國の崩れかゝつて居る、或は崩れて居る、其あとについては、之は或はどうかすると列國に對して領土擴張と商權擴張と並び行はれるといふ餘地を供給するかも知れないと思ふ。支那の崩れかゝつたは今に初まつたのではない。隨分古くからの事だ。實に不締りな帝國であつて、丸で不行屆な國政を行うて居る。名ばかりあつて實のない屬邦や保護國を持つて居るが、此等は外の國の領土擴張の材料に供給して居る。屬邦であつた自分の領土を鳶に油揚を攫はれたやうに攫はれた事もある。咸豐年間に黑龍江沿岸のあの大きな土地を露國のイグナチウスにやられたのは全くそれだ。畢竟するに支那には敎化政令が四方に行屆いて居らぬ。人口も稀疎な、主權があつてもないが如き領土が隨分多い。そんな所は其土地の爲めからいつても、或は其土地に居るいくらかの人民の爲めに言つても、或は外の國の主權の下に文明の政治に浴した方が幸福でありませう。荒地を荒地の儘にして置くのは天物を暴殄するやうなものである。荒地を荒地の儘にして置く地主の爲めにならないのみならず、そこを立派に開墾しやうとする他の地主に對し

て防害を加へることになる。寧ろ他に奥れて了つた方がよいかも知れない。知れないぢやない、無論其方がよい。

が支那もあの通の廣い所だから種々な部分がある。人口が稠密て政令のよく行はれて居る部分もある。四千年來の文化の跡形が美事に殘つて繁榮して居る所がある。政府の政治こそ隨分いかないにしても一種のデモクラシーの成立つてる部分がないでもない。その部分ては人間の必要なものを製造もするし、又生產品の剩りと他國の生產品の剩りの貿易も隨分行はれ得る力も殘つて居る所がある。そこいらには商權擴張主義を行はずして何をか待たんてある。商權擴張は向ふても待つて居るといふても差支がない。又片方の相手方からいつても、さういふ所に向つては商權擴張主義て進んて行く方が利益てある。

そこて私は、日本の政治家の國政の執り方次第、政府の政權の振り廻し方次第ては、此二つの主義を支那に對しては同時に行ひ得ると信じて居ります。

△領土擴張主義は過去の夢

伯爵　大隈重信

世界には最早や無主の國がない、世界の至る限り皆何國かの領土に屬して居る、それ故領土を擴張したいとて擴張すべき領土が無くなつて居る。領土擴張主義の時代は去つて居る、領土擴張主義は既に一二世紀前の殘夢である。英國あたりて頻に帝國主義を唱へ、帝國主義に從つて大に領土の擴張を勉めたが、併し是れ亦今日では最早や陳腐となつて仕舞つた。今は領土の問題は外交の問題である。處が外交其ものが今日では大に昔と變て居る。互に領土を擴張する外交は最早や一轉して經濟的に發展する外交に移つて居る。領土的の問題は古い外交の餘波で、今尙ほ時々現はれる樣てはあるが、最早や大なる問題てはないのである。僅に古い外交の惰力として存在する迄である。

世界の全面を通觀するに最早や國際間の競爭に堪えぬ如き弱小の國は次第に强大なる國の勢力の下に征服され了つた。殘る國々は未だ多少あるけれども、最早や如何に强大なりとも一國の手で支配する事は出來なくなつて居る、國際間の競爭に堪えぬ如き弱小の國でも今日では列强均勢の中心となつて容易に他に併呑されぬ事になつて居る。弱小の國でも尙ほ强國鼎峙の間に獨立を維持し存在を保つ事が出來る。或論者は英國の今日の大を爲したのは其領土擴張主義の御蔭である。今や大英國の領

土内には日の沒する處なしと迄言はれて居るといふも、それは歐羅巴大陸の大動亂あり、列國内輪の爭に忙殺されてそれ以外に手を出し得なかつた時に乘じた迄の事で、最早や時勢の推移した今日と爲つては到底行はるる事でない、獨逸も彼の樣な强大なる帝國を建てたに拘らず、世界の何處にも領土を持たぬてないか、それは獨逸にも、彼の日の沒する處なしといふ莫大なる領土を有する大英國の制海權を破り其領土を侵さんとする、所謂領土擴張主義を主張するものがある。如何かすると英國にも亦此ういふ論者が無いでもない。が此の如きは偶ま或る一部の外交家に奢夢を見る者があるといふに過ぎなくて、全體の上からは甚だ少數である。獨逸のカイゼルの如きも最も領土的野心の滿々たる人の如くに見られて居るけれど、其實其樣な考を持つて居らぬ、凡そ物は必要より起るものだが、最早今日になつては其必要がない。一國の富强を謀るには必すしも領土を擴張せずとも宜い。宜いからカイゼルも左樣な考を抱かぬといふ譯である。昔は領土擴張は君主の野心若くは名譽心の爲に企てられて、是が爲に無暗に兵を動かしたものだが、今はそれが出來ず、世界は漸次に經濟的競爭に移つて居る、今日の原則は能く經濟的關係に於て優勝の地に立つものが世界に覇を稱する事になつて居るので、それだけ獨逸今日の繁榮が立證して居る。即ち獨逸今日の繁榮は、決して制海權や領土の擴張によつて得たものでない事が之を證明して居る。獨逸は歐洲大陸にこそ巍然たる大帝國を建設して居るけれども、足一たび大陸を離るれば最早や世界に寸土をも有せぬ。而かも此の如き獨逸が世界の殆んど全面に散在する領土、日の沒する所なしといふ大領土を有する大英國と頡頏して能く其商權を壓迫し繁榮を誇つて居る。然ば獨逸は何を苦んで領土を擴張する必要があらう。夫のビスマルクの晩年に殖民政策を取り、一時亞弗利加若くは南に手を出したけれど、最早英佛に利益ある所は取り盡され、殘つて居た所は殆んど利益の無い所のみである。所謂肉を科理つて好い所はすつかり人の取つた後に行き、捨ててある骨をば拾つたのである。それ故爾來三十年間獨逸の殖民地は一向發達せない投資するといつても投資すべき程の商賣はない。獨逸の商賣は其殖民地には入らない。自然の勢獨逸人は皆其殖民地を顧みなくて、去つて北米若くは南米若くは英國の殖民地に向つて、其處に働き其處に移住し、そして商工業を盛にして居る。斯くして其商工業は獨逸大帝國建設以來著しき發達を爲し、殆んど經濟的に英國の領土を征服する程の勢を示して居る。然らば獨逸たるものは又何を苦んで領土の擴張を勉めやう。野心ありと見らるゝ獨逸の方針すら已に左樣である、以て今日の世界趨勢を默識すべきである。而して其獨逸の人口繁殖力如何を見ると非常なものである。今日世界に於て米國露國を除くの外は直に獨逸を推さなければならぬ、そして此繁殖する人口は世界の至る處に向つて漸次に發展して行く。而かも一面又獨逸人の學術を應用して其力で工業を起し發達させる勢といつたら非常のものである、それが爲一時は繁殖せる人口を頗に海外に出したものだが、今は段々それを内地に吸收して居る、今日では最早や海外に移住し居るものが、以前の二十分の一にも足らぬ。二万

か乃至三万位を出まい。一時盛に海外に出た時は四十万五十万人を越えた程であつたのだ。ビスマルクは獨逸人の世界に散ずるを好まず、獨逸民族だけで民族的大帝國、所謂パン、ジャーマン、イムパイアを建てんと志した。其實、人種を異にし風俗を異にすれば統一に困るといふ點に在る。それは尤ものことで現に英國の愛蘭の統御に困つて居るのもその爲である。それ故ビスマルクは獨逸人の世界に散ずるを好まぬ結果殖民政策を取るに至つたが、成績は前述の如く、流石の大政治家も成功せなかつたのである。然るに獨逸の工商業の發展は偉大なる勢力を一方に現して、二十万方哩の狹隘なる領土に年々に増殖する多數の人口を包容して苦まぬ程に驚くべき生産驚くべき富を爲すに至つた。それ故今日は最早や國力の膨脹を經濟的發展にのみ則すべく、領土なくば生活し得ぬといふ時代は夙に過ぎ去つて仕舞つて居る。

世界は漸次に縮少し、一世紀内に十分の一になつて居る、即ち蒸氣電氣の發明で、鐵道あり、滊船あり、電信あり、電話あり、スエスの運河も出來れば、又今より三年の後にはパナマの運河も出來る。最早や世界は元の歐羅巴よりも小さくなつた。如何かすると封建時代の日本位にもなろう、斯くて世界は經濟的に一の國家の姿を爲すので、此ういふ時代に最早や領土を如何するなどいふは今日の進歩の氣運に相伴はぬものである。領土擴張は夢である。其時代は過ぎ去つて居る。地には平和が來て居る。平和の機運は列國の軍備を撤せしむるに至る。今は尚ほ武裝的平和であるとしても此武裝的平和は互に勢力の均勢を保つべく軍備を擴張する。その結果各國とも國力が其負擔に堪へぬ。從つて物價は高くなる。社會主義は起るといふ有樣。經濟上から迫られて軍備の縮少を今は各國共に望んで居る。で何等かの方法を講じて國際間の爭論を鎮め樣として居る、之を以て遂に海牙の萬國平和會議開催となり。已に英米、或は佛等で國際間の紛議を其會議に附しもした。又第二回の平和會議に於て露西亞からは軍備の制限案を提出したが、尚ほ野心ある列國の反對を受けて否決された。是は列國相談の上でなければ撤廢出來ぬ事であるけれども、二三ケ國の强大なる國が卒先してやれば必ずしも行へぬ事ではないと思ふ。兎に角海牙の平和會議は一回は一回より好き機運に向つて居る早晩更に第三回の平和會議も開かれるであろう。我輩はそれに囑望する何としても領土擴張主義は時代後れの外交論である。獨逸の如き國を今迄永く侵略的の國とのみ思つて來てゐたが、段々觀察して來るに大きに左樣ではなかつた。是が世界今日の趨勢だから左もあるべき事だ。それは現世紀に入つても多少は諸方に紛爭を見る。モロッコの如き、トリポリの如き、又現在には支那の如きがあるが。併しそれとて最早昔の樣に行かぬ。何れの國が新に領土を得んとすれば容易ならぬ面倒が色々起つて來る。領土擴張主義と商權擴張主義などいふ問題は、今眼前に支那が動きつゝあるから起る問題であらうけれども、到底彼の尨大なる支那を列國が如何するといふ譯にいかぬ。列國關係が六かしくなつて互に獨り勝手な事は出來ぬ。又支那を助けそれを導いて文明の域に進むるとは、只支那その國の利益であるのみならず、又世界の利益であると信ずる。

圖して列强の大政治家中には皆此考此方針に定まつて居る事だろうと信ずる。

△何處までも領土擴張主義

法學博士 戸水寛人

日本の人口は非常な勢を以て增加する。年々五十萬など〻いつたのは昔のことで、今は每年六十萬乃至七十萬――年によつては七十萬以上も殖える。日本の現在の人口を五千萬とすれば、之が一億になるといふ事は餘り遠い話ではない。已に一億になればそれが二億となるといふ事も比較的近い將來の事である。尤も人口は食物や生活狀態によつて增加の率が違ふから、日本が何時までも小つぽけな所に屈伏して居ればそんなに殖えないかも知れぬが、之を自由に繁殖が出來る境遇に置けば前に述べたやうな事になることは分り切つて居る。マルサスとかミルとかいふ連中は人口の殖えるのを悲觀的に見て居つたけれども我輩は人口は殖える程よい、民族は發展する程よいといふ考を持つて居る。

そこで人口が左樣に殖えれば何時までも此小さな島に引込んで居る譯に行かない。どうしても殖民地の必要が起つて來る。處が此殖民地といふものは容易く得られるものでない。現に日本人が亞米利加に行けば亞米利加から排斥せられて居る。英國は日本の同盟國である。然し殖民の問題には同盟も何もあつたものぢやない。「此所屑屋入るべからず」といふ札でも掛けたかの如く日本人を無遠慮に濠洲から排斥する。それは實に酷いものだ。日本人は今に於て其立脚地を求めて置かなければ他日大に窮することがあると思ふ。その爲めに領土擴張はどうしても行はなくてはならない。其の手初めとして日本は已に朝鮮を取つた。が更らに進んで南滿を取るといふことも必要である。また單に北淸丈けでなく南淸にも手を延ばすといふ事が猶々利益であらう。世の中には北守南進などいふ愚論を唱へるものがあるが、我輩は甞ても本誌に論じた如く、北進南進東進西進論者であつて、國は進める時に進める所

に向て進める丈け進んだ方がよいといふ考を持つて居る。商賣のみで國を維持して行かうなどゝいふのは短見者流の論である。丸て世界の歷史を知らん人のいふ事と思つとる。

コロンブスが亞米利加發見以來世界に領土を擴めたものは、一は西班牙であつて一は葡萄牙である。然し此等の國は領地を持つても、其領地を治めるといふ事に重きを置かず商賣上の利益ばかりを考へて居つた。殖民地から寶物を持ち返るといふとを主として、人民を治めるといふ事を疎かにした。其爲めに久しからずして其權力を失うた。之に代つて海上の霸權を握つたのは和蘭である。之も隨分領地を取つた。西班牙と戰つて勝つて其領地を奪ひ、又葡萄牙からも土地を得た。然し其やり方も矢張り西、葡と同じやうなもので、領土を治めず、殖民に重きを置かず、偏へに商賣で儲けることばかりをやつた。それで之も亦久しく續かなかつた。和蘭に代つて海上の霸權を握つたのは英吉利であるが、此方は其地の人民を治めることを主眼として貿易の利益は自然に上つて來るやうにしたのである。其結果英吉利の勢力は益々發展して今日では萬里橫行の概がある。我日本は西班牙、葡萄牙、和蘭を學ぶべきか、又英吉利を學ぶべきかといはゞ、英吉利に學ぶ方が利益であらうと思ふ。自分の領土を作つて、そこに殖民をして、そして商賣上の利權を得るやうにした方がよからうと思ふ。

こんな事をいふと、他の國の領土を取るのは正義に反するなどゝいふものがあるが、言葉を短くしていへば、人のものでも取れば即ち我物になるからよいと思ふ。どこの國でもさういふ事をして領土を擴めたのである。印度は昔から英吉利のものではなかつた。西比利亞は昔から露西亞のものではなかつた。然し一旦英吉利が印度を取り、露西亞が亞比利亞を取れば、取つた後は之を英吉利のもの、露西亞のものと國際法が認めて、他國が之れを侵害してはならないとなつて居る。實に可笑しいものだ。日本でも領土を取つて了へば其取つた日から國際法が日本を保護して吳れるのである

そんな事を遠慮して他の領土に手を出さぬなどいふのは愚の極だと思ふ。

昔は交通の機關が備はつてゐなかつたから、國民の膨脹力か弱かつたけれども、今は交通機關が備はつた爲めに膨脹力が非常に盛んになつた。此やうな時勢に當つて論語やバイブルにある文句を引張つて來て他の領土を取つてはいけないなどいふのは餘程愚な事だ。今日の如き民族の競爭の盛んな時代には土地を取つて民族の膨脹を計るといふ事が最も時勢に適したやり方と思ふ。

△兩立せざる二個の目的

本多精一

世界に於ける民族の生存の目的は經濟上の進歩及び幸福を增進するにあるが故に、此の目的を達せんが爲に領土擴張を必要とすべきか若くは商權擴張を必要とすべきかは、主として之を民族の經濟に及ぼす關係から觀察するを以て適當とする。領土の擴張によつて民族生存の目的を達せんとするのは、歷史上からこれを見れば昔の羅馬帝國の如き其最も著しきものであつて、羅馬帝國は領土を擴張して外の國の領土財產を掠奪し、金銀を吸收して、それによつて羅馬民族の福利を增進せんとして而して終に民族滅亡の端を開いた。降つては彼の中世紀に於ける西班牙若くば葡萄牙の殖民政策の如きは、羅馬帝國とは其趣を異にせるも之れとても矢張り何の爲めに殖民するかといへば、殖民地を自國に於て獨占して、そして殖民地より原料を自國に輸入し、殖民地をして專ら自國の製品を購買せしめるといふ方策であつた。即ち殖民地の商業を自國に於て獨占せんとしたものであつて、市場獨占主義と稱するものである。而して此の主義による殖民政策が西班牙にとつても、葡萄牙にとつても共に經濟上の失敗に歸したといふ事は歷史上著しき事實である。

本來通商の目的は輸出計りにあらずして、仝時に輸入の利益を收むるといふ事が其の眼目の一つであるからして單に領土を擴張して其の領土を自國に於て獨占し、そして自國の生產品の獨占市場としようといふ事は通商の根本目的と兩立しないのである。何となれば領土主義なるものは經濟市場の獨占に依て外國の競爭を防がんとするとを經濟上の目的とするからである。現代の民族は經濟上外國との競爭に依て發達するものであるからして、此見地より見れば經濟市場の獨占は民族の發展の根本理由から見て理論上兩立するとの出來ないものである。外國との經濟的競爭は各民族をして種々の生產上に於ける發明を促し又勞働の效果を進めて生產費を減少せしめ、之によつて民族の生產を增して其經濟上の基礎を鞏固するものになるが故に、單純なる領土擴張主義即ち擴張された

る領土に一つの繩張りをして以て自國の經濟市場を擴張したもの丶如くに想像する政策といふものは、是れ却つて民族の經濟的基礎を薄弱にし一見其經濟市場が擴張せられたる如く見えて其實は自ら求めて民族經濟の勢力圏を狹うするものといはなくてはならぬ。要するに今日領土〱といふて專ら領土に重きを置くのは國民經濟の活動する舞台を土地の面積にのみ重きを置くのであつて、經濟的活動は面積に於ては地球を目的とし、人類の生存する所必ず經濟的活動の存することを無視するものであつて、或者はローマ帝國の夢を見て領土主義を唱へ、或者は西班牙、葡萄牙の失敗したる殖民政策を慕うて、か丶る主義に心醉するものとする外、經濟上に於ては解釋することが出來ぬのである。

或は曰く我國の人口は無制限に非常なる勢を以て增加するから、斯く年々增加する人口を吐き出す必要上、領土擴張をせねばならぬといふものがある。如何にも我國の人口增加は明かなる事實であるけれども、假りに年々增加する人口が到底現在の領土に生存し切らぬ時期が到來するならば、か丶る時期に於ては人口過剩に原因する經濟上の必要が、自然に過剩の人口を驅つて地球の各方面に移住せしめるといふことは必然の勢ひであるからして今日よりして豫め人口移植の地を求める必要がなく、而かも之が爲めに非常なる高き代價を拂うてまでも將來の移植地を準備して置くといふ必要は之を認めないのである。

本來人民の移住は經濟上の必要に迫られければ如何に國家が之を奬勵しても移住若は殖民は、國家の爲めに、或は民族の經濟上の利益の爲めに諸外國に向ふものではない。專ら自己の經濟的必要に迫られて初めて動くものであるからして此經濟的必要に迫らる丶までは領土の準備なるものは決して人民の移殖を促がすものではないのである。現に朝鮮の如き拓殖會社までも設けて移民を奬勵したり、又南滿地方に於ても政府は滿韓移民の集中とまで聲言して、人民の移住を希望しつ丶あるに拘らず今日まで一向其移民を見ないのは一に經濟的必要が之を促さぬからである。假りに一歩を讓つて領土の擴張が人民の移住を促し、人民の移住が經濟市場の擴張を伴ふとしても、擴張されたる經濟市場は本國の經濟上に如何なる結果を與ふるかといへば單に仝じ民族の共喰主義に終り、之が爲めに經濟上に於て本國人の利益幸福を增進するといふことを見ることが出來ない。現に朝鮮の如き若くは南滿の如き何れも日本人同志の共喰經濟であつて朝鮮では總督府が年々費やす所の經費を日本人同志にて共喰をし、滿洲にても南滿鐵道其他の爲めに共喰をして居るやうな狀況であつて、結局は日本政府の補助金其他を朝鮮滿洲まで持ち出して行つて之を喰つてゐるに過ぎないのである。畢竟領土擴張の結果は經濟上にか丶る不利益を伴ふは當然であつて此共喰主義の經濟を以て國民經濟發展の徵候とするならば、領土擴張主義は大いに效果があるかも知れぬけれども、此流儀の國民經濟は恰かも貧乏人が借金をして諸所に別莊を拵へ、別莊を持つたといふ事を理由として借金を殖やし、そして自分の富力の增進を夢みて居るのと、主義に於ては少しも異らぬのである。故に國民經濟の大局から見れば領土主義などは何等の效果ないのみならず

却て頗る危險なる國民的虚榮心の發展といはざるを得ない。况んや我國の財政は領土擴張主義と絶對に相容れざる事情の下にある。即ち領土擴張の爲めには益々軍備擴張を必要とし軍備擴張の爲には、外には益々外債を起す必要を生じ、内には益々租税を増徴する必要があるから、此外債と租税丈けでも我國の國民經濟は益々著しき財政上の壓迫を蒙らざるを得ないからして、假りに領土主義を行はんとしても、財政上の壓迫に堪えざる國民經濟は、其領土を利用して健全なる國民經濟の發達を促がすといふ事は絶對的に不可能である。故に今日一面に領土擴張主義を唱へ、他の一面に於ては産業の發展若くは輸出の奬勵を唱ふる如きは到底兩立すべからざる二個の目的を全時に達せんとするものであつて、かゝる論者が今日の政界を支配することがあるならば、其及ぼす所の危害は頗る大なりといはなくてはならぬ。

△今の所領土擴張は眞平御免

福本日南

領土擴張主義と商權擴張主義と何れか急なりやとの問題に對しては甚だ言ひ易からざるものがある。之に對しては先づ領土擴張の如何を一顧せねばならぬ。歷史に問へば領土擴張には二大系統がある。其一は希臘の領土擴張にして其二は羅馬の領土擴張である。後來歐洲列强の領土擴張は以上二系統の外に出てぬ。過去に於ける西班牙、葡萄牙、佛蘭西等の領土擴張は羅馬流にして、和蘭、殊に英國の領土擴張は希臘流であつた。扨其擴張した領土の繁昌は何れの方面に多いかといへば羅馬流にあらずして希臘流にあるのである。其故は羅馬流の領土擴張は主として武力に訴へて土地を獲得するのである。それで成功の方からいへば極めて迅速にして且つ目覺ましい。羅馬帝國の一時歐洲世界を掩有したのでも見ることが出來る。然しながら此種の擴張は軍隊的擴張である。官吏的擴張である。それて本國の勢が衰へて一旦軍隊を引上げ官吏を引上ぐるに至れば擴張したる殖民地の衰亡は踵を回らさぬ。あれ程廣大なる羅馬帝國の一朝忽焉として亡滅したるは畢竟此結果である。後世此系統を追うたる西なり葡なり佛なりの殖民政策が不結果に終つたのも亦此故てある。之に反して希臘流の殖民は個人的殖民である。商賈的殖民である。それ丈け本國の勢力を藉らずして各

地各點に繁昌してフイニシアに見よ、ゼノアに見よ、アレキサンドリアに見よ、カルセーヂに見よ、マルセーユに見よ、バルセロナに見よ、到る處として彼の所謂自由都府が繁盛殷賑の結果を示さゞるものはない。但し此等も亦亡滅するに當つては同じく忽焉たるの氣味はある。さりながら之は殖民地の罪にあらずして其殖民地と本國との間に連鎖を缺いた結果である。此れ丈けは希臘流にも亦缺點がある。それで今日の英國の如き大殖民地を有する國に於ては兩者の得失を鑑みて殖民地の經營は與ふ丈け希臘流により、本國の政治を以て之を連鎖することは羅馬流によるとにして居る。

そこで議論は生ずるのである。アレキサンダーや、シーザーや、那翁一世の時代は最早過去の史話となつて今日の世界では空漠なる大地主主義を容れぬ。國の殖民地を要するは畢竟何の爲めかといへば主として本國の商工業に對して吐き口を求めるといふに過ぎぬ。次ぎには其殖民地から原料若くは粗製品を入れて之を加工の材料とする。此二つが主眼である。之に次いでは本國の畑から人口のハザを引く。目的は以上の三者に過ぎぬ。從つて殖民地を收め之を經營せんと欲するものは其土地が三者の目的に合するや否やの攻究が第一である。故に此目的に合するものならば領土擴張も疎かにしてはならぬ。此點については商權擴張論者と雖も恐らく皆一致するであらう。領土擴張と商權擴張と何れが急なりやといふ問題に對して甚だ言ひ易からずとするのは此所にある。

只今日の領土擴張論者は以上の三着點を度外視するの氣味がある。申さば英國の領地には太陽の沒する時がないなどゝいふ浮誇心に驅られてゐる氣味がある。但如何に此等の功名家もゴビやアラビヤやサハラの沙漠を領土にして喜ぶかと問はゞ、それは御免であるといふであらう。勿論之は極端論である。然しながら道理は自ら此中に含まれて居る。無用の土地を如何に多く所有してゝ本國の利益とならざる土地は一顧の價のないといふ事は自ら此中に包含する。して見れば領土擴張〳〵と咆哮する奴輩も一地を見出してそれを版圖

に收めやうとする場合には何等の利益かを豫見するものが無くてはならぬ。尙進んで之を言へば全然赤土の砂漠でない以上は其土地から一錢の利益も上らぬといふものではない。然しながら此處が比較論である。此等の領土を收めんとする場合には本國に於ける富の程度とも相談して見ねばならぬ。本國の富に問うて此等の土地を兼併するも尙餘力ありといひ、兼併の後或は五十年或は百年を待つて有利有產地方と變化し得る、それ迄本國にて堪へ得る見當がつけば兼併も强ち不可ではない。只今日起る問題は左樣な悠々閑々たる議論てはなからう。何れの地方を占領するは本國の利か不利か。而かも其利か不利かは今日よりして五年十年以內に利となるか不利となるかの問題であらう。是に於てか我々はそろ〳〵本音を吐き出さねばならぬ。

帝國今日の現狀は高麗半島の新領土すら之を經營することは容易でない。然る以上は今新たに人々の眼中に映出する新領土を手中に收めて如何に之を處せんとするか。さらぬだに民力の窮乏を告げて內地の事業が起らぬと嘆じてゐる今日である。それに新たに樺太の兄弟見たやうな新領土を背負込んで何とする。そこが我々の容易に同意し得ざる處である。

他の商權擴張に至つては以上の如き仔細に計考を費やすまでもない。本國が已に島國なるが上に山嶽國と來て居る。面積三分の二は峨々たる山嶽を以て埋められてゐる。五千萬の衆は殘る三分の一の平地にあつて目下の帝國を作つて居る。古來自ら農業國と稱すると雖も此農業國は米國などの如く廣袤千里の大地面を有したる農業國にあらずして最早や已に精一杯開き切つたる農業國である。現在以上には最早や擴張の餘地なしといつてもよい位の狀態である。今後の帝國は商工業に於て發達するより外に名策はない。幸にして近傍には我工業品を需要すべき地方と民衆とは無數である。之を相手にして商工立國論を講ずるより外はない一國の政策は主として之に伴はねばならぬ。事新らしく我々が言ふ迄もなく今日列强の外交は商業の先驅てはないか。我々は此先驅及び海軍との後援を以て此帝

國未來の繁榮と幸福とを庶幾せんと欲するものてある。麻布の叔父さんてはないが、今頃氣の知れぬ古英雄の眞似をして直ちに三文にもならぬ領土の擴大論などは眞平御免てある。

然し以上に述べた通り領土擴大を絶對にいけぬといふのてはない。物になる所なら取るがよい。それは昨今の禿頭が夢想するが如き地方の謂てはない。緯度は其邊から四五十度も下つた地方でなければ論ずるに足らぬ。幸に昨今日佛間の航海通商條約も開始せられたやうてある。安南東京地方の貿易も之から多少の便宜を得るてあらう。まア支那の本部から此邊にかけての貿易奬勵に此處五年と十年は熱中するがいゝ。其中には段々國民の身代も立直らう。領土擴大はそれから後に方面を變へて持ち出ることゝしたいものである。滿目千里、芭蕉の風に戰ぐあたりを持ち出して多年一日實際問題にするの時あらう。それ迄の間は辛抱して領土擴張論者は引込み玉へ。

△商權擴張の爲めの領土擴張

尾崎行雄

領土を擴張すると、商權を擴張すると、何れか採るべきかとの問題は其國の狀態如何によつて決定すべきものであつて、其國の狀態を離れて絶對的に論斷することが出來ぬことゝ思ふ。例へば人口の繁殖力が强盛てあつて現在其國土が餘り廣くない國にあつては、どうしても領土を擴張する必要がある。而して其擴張すべき領土は人口が比較的少くして、本國の過剩の人口を收容するに足り、過剩の人口を收容しても國内の生活難が甚くならないやうな所でなければならぬ。又本國との交通が餘り惡しくない所てなくてはならぬのである。之に反して人口が少く、又已に廣大なる領土を持つて居る國に於ては、勢ひ商權を擴張して民力の涵養發展を計らなくてはならぬ。我國の如きは甲の部類に屬するもので、土地は極めて狹く、人口は至つて繁殖力が强盛であるからして、どうしても領土を得なければならぬ。そして其領土は前に言つたやうに人口の少い本國との交通の便のある所で無ければならぬ。人口の多い所であれば商權擴張の目的にはよいが領土擴張の目的にはならない。昔は領土を擴張して、擴張した領土の人民から租稅を取つて、之を本國に持つて來たものてあるけれども今てはそんな所はない。何れの領土ても其領土から取つた丈の租稅では其領土を治むるに足らぬ。皆本國から支給して居る、

我國に於ても臺灣を領有してから、久い間本國から補助して居つた。夫れ故に領土を持つといふ事は本國の財政に負擔を増す結果をこそ生ずれ、財政上の利益を得るといふやうなことはない。英國の印度に於ける、世間の皆羨む所であるけれども、之も印度の收入丈けでは足らず矢張り本國から支給して居る。只已れの領分であるが爲めに、英國の物品を賣り附ける。つまり商權擴張をすることが出來る。加奈陀の如き濠太剌利亞の如き人口が少いから、本國の人口多ければ此處に送り出すことが出來ると仝時に矢張り商權擴張が出來るのである。英吉利が加奈陀などを持つ爲めに軍事上や何かて本國の弱點となつて少しも強味とならない。只物品を賣り附ける利益があるが爲めに、平時に少からぬ軍事費を支出して居る。つまり皆商權擴張の爲めである。それで通常領土擴張といふのは過剩の人口を其處に吐き出すことの出來る外は商權擴張の目的を達する爲めに過ぎない。

仝じく領土を擴張するにしても仝化しにくい人民が多數住居する領土を取るといふ事は、外形に於ては強大なる如く見えても、内實は本國の弱點を增すといふやうな事が多い。例へば獨逸が佛領のアルサス、ローレン二州を取つたのは軍事上からは多少の便宜があるかも知れぬが、其他は實際の利益なきのみならず却つて不安を增して居る。又米國が布哇や比利賓の如きものを有するのは、之は仝化しにくいとふいのでないかも知れんが合衆國が強くならずに却て弱點を增加して居る。露西亞が波蘭を所有するが如きも亦然りである。

尤も今日の世界狀態に於ては領土が餘り狹いと一等國として對立する丈けの人民を容るゝことが出來ぬ。從つて一等國に必要なる陸海軍を備へることが出來ぬ故に、或程度の土地と人民とは是非必要である。現代に於ては凡そ五六千萬乃至一億萬を容るる位の土地を有することが必要である。さりとて仝化しにくい人民を持つことは必ずしも強味とはならない領地を取るといふ事は多くの場合に於て戰爭の結果土地の割讓を得るのであるが、今日では主として商權擴張の目的の爲めに領地を得るのである。夫れ故に若し土地を得ずして商權擴張の目的を達することが出來れば戰爭に要する面倒と費用とを節約することが出來るからして之は却つて望ましい事である。

英吉利などの領土は世界中に散在して居るが其目的は皆、商權擴張で貿易の利益を收めんとするにある。又露西亞もなか〱領土の廣い國であるが、然し之は貿易上にあらずして政治上の利益を主眼として居るやうに見える。然し其利益といふものは世間の皮相的觀察者が考へるか如き重大なるものでない。日露戰爭に於ても已に證明せられたる如く、あの中には仝化しにくいものが大分入つて居るから政治上の利益といつも餘り大したものでない。

我日本の如き島帝國に於ては領土を擴めるに當つて、強大なる陸軍を所有する陸軍國と近接したる大陸に領土を持つといふ事は餘程國家永遠の長計に危害を生ずるの原因となる。島國であるからして海軍を以て國防の主要なるものとせねばならぬことは論がないが、大陸に於て強大な

る陸軍國と境を接して領地を有つことになれば强大なる海軍と共に强大なる陸軍をも有たなくてはならぬ。而して何れの國と雖も陸海軍の双方を世界の一等國と對抗する力を養ふといふ事は國力の堪ふる所ではない。天地間の萬物皆此道理を明示するもので、山を駈けるものは海に泳ぐを得ず水に棲むものは山に登ることが出來ない。獅子や虎も水に入れば獱獺の爲めに笑はれ、鯨や鱶も陸に登れば小猫の餌養となる。海陸兩方を狙はるといふ事は天地間の生物に於てないが如く、又其生物の一類たる人間を以て組織する國に於てもない。陸に於ても强く海に於ても强きは之れ天地間の原則の許さゞる所である。其原則に背くものは一時盛んなるが如く見えても久しからずして其國は必らず衰弱する。財政上からも心理狀態からも或は體力の上からいつても、之を爲んとすれば必らず力が疲弊する。即ち國民多數を窮苦の狀態に陷らしむるに至るのである。而してさういふ場合には國家の内部に國家を危うする兇敵を作り出す。力不相當の武備をすれば其弊害が必らずあらはれる。實例をいへば露西亞の軍備擴張には虛無主義者を起し、獨逸の軍備擴張は社會黨の勢力を增加せしめる。獨逸の社會黨は年々其勢を增して最近の選擧に於ては最大の數に達した。之は陸海軍擴張に反對するのみならず、國家其者に反對するものであつて、實に國家の存立を危うするものである。獨逸社會黨の歷史は現代經國の士の最も深く注意すべき點であつて、我帝國の如きも單に社會主義を惡むといふが如き單純淺薄な態度ではいけぬ。凡そ社會黨を撲滅せんとして力を盡したる所獨逸の如きはない。ビスマルクも今の獨帝も人事の極端を盡して之を壓抑したけれとも、壓抑せられぬのみか却て其勢を助長して居る。之は深く其原因に遡つて研究して見る價打がある。

之を要するに領土擴張と商權擴張といふ事は主義として二つに分つことは多くの場合に出來ぬことであつて、大抵の領土擴張は商權擴張の爲めである。商權擴張をはなれて領土擴張を念とするのは、人口が溢れて如何ともし難き場合に限るのである。

△領土擴張主義か商權擴張主義か

松山忠次郎

商權擴張の爲めに廣い領土の有る方がよいか無い方がよいかといへば、そりや廣い領土のあるに越したことがない。領土なくして商賣をするから見れば、自分の領土で自分で商賣をする方が便利なのは言ふ迄もない。殊に昔から格言がある通り「商業は國旗に隨ふ」といふ位であるんだから、國旗の樹つた所では其の商賣はどうしても繁昌する。之は奇體なもので、内外人の區

別なく最も公平に取扱ふ所でも其處の主權を持つた國の商賣はどうして繁昌するものである。現に濠洲とか印度とかいふやうな所、此等は無論英吉利の殖民地であるけれども、英國に對するも、佛獨米諸國に對するも、取扱は全く同じ事で極めて公平にやつて居る。關税も英國に輸入するものに特に安いといふ事はない。然るに此等の國ではどうしても英國の商賣が最も盛んである。獨佛米等の外國は到底も太刀打が出來ない。此事情は何處の殖民地でも同じ事である。夫れ故に自分の領土の廣いのは貿易上便利であることは言ふ迄もない話である。只廣い領土を持つたものにどうだかと考へらるゝ事は之を守る爲めに陸海軍を擴張しなくてはならぬ事である。充分な陸海軍が無ければ領土が守れないといふ事である。そこで領土を持つのは貿易上に利益であると同時に防禦費が入る。つまり貿易の利益と防禦費と差引どちらが得かといふことが問題になる。どんな殖民地でも持つた以上には多少之を守る陸海軍の費用が入るに極まつて居る。其費用が存外少くて貿易の利益が多ければ領土擴張をした方が得である。之に反對な場合は領土があれば本國の損になるのである。領土が廣ければ廣い程本國が疲弊するといふ事になる。從つて絶對的に領土擴張がよいか商權擴張がよいかといふ事はいはれない。領土の性質如何によるのである。

假りに此點から領土の種類を分てば三つになる。第一は領土を持つたが爲めに殆んど軍備擴張の必要のない處である。之は昔にはあつたかも知れないが、今は殆んどないといつてよからう。第二には防禦費は入るけれども特に殖民地の爲めに費用を多く支出する必要のない所である。例へば英國は海軍國である。海軍の力に於ては何處の國も敵はない。其國が濠洲であるとか其他の島國を持つたからといつても、之を守るが爲めに特に海軍を擴張するの必要がない。いはゞ有り合せのもので間に合はせることが出來るのである。第三は殖民地あるが爲めに特に陸海軍の何れかを増す必要があるのである。例へば獨逸のやうな國である。獨逸

は元來陸軍國である。陸軍て本國を守つてゐる國てある。處て之が假りに僅かの島國を領土に持つたとすれば之を守る爲めに特に海軍を擴張せなくてはならぬ。こういふ國になるといふと、殖民地を持つたが爲めに陸軍も海軍も兩方共强くせなくてはならぬ。陸海軍兩本位の必要を感ずるのてある。

處て以上の三つの中、第一の場台は殆んどないが、第二の場合なれば領土を持つた方が利益である。例へば日本が臺灣を持つ、之が爲めに特に海軍の必要がないのてある。本國を守る爲めに持つた海軍て以て臺灣を守ることが出來るのてある。そして臺灣を持つた爲めに貿易上必らず利益を得て居るのてある。勿論富の多少にもよるけれども、此種類の殖民地若くは領土といふものならば概してあつた方がよい。處が第三になるといふと非常に國防費がかゝるといふ事になつて、餘程有利な殖民地てなければ差引勘定て損をするといふ事になる。そして殖民地の廣くなるに從つて本國は貧弱になる。元來國防を陸海軍の兩本位に置くといふ事は頗る困難な事である。多くの國は陸軍とか海軍とか、どつちか片一方の一本位て立つて行くのてある。一つ丈け外の國に負けない丈けの力があれば、それて其國が守れるのてある。其れてすらも近來は何處の國ても國防費が入つて敵はないのてある。然るに陸海軍兩本位て以て兩方共外の國に負けない有力なものを作らへるについては餘程の金持の國てなければ持てないのてある。獨逸は陸海兩本位の國である。陸軍は其國を守る爲めに元來一番重きを置いたのてある。然るに近來海外に領土を擴張せんと欲するが爲めに海軍も擴張するの必要を感じて來た。啻に陸軍て以て大陸て威張るのみならず海上の最上權を握らうとしたのてある。それが爲めに財政は頗る困難てある。此兩本位て獨逸か遣り切るか否かは今後の問題てある。佛蘭西も元來陸海軍兩本位を企てたのてある。然るにとう／＼國力が續かないて今日ては陸軍も海軍も双方共强くない。兩本位て成功してゐる國は殆んどないといつてもよい。獨逸の如き富國ても餘程窮して居る。處て日本

が亞細亞大陸に手を出すといふ事になれば陸海軍兩本位の必要を感ずるのである。本國を守る爲めには海軍一つ强ければ守れるのである。大陸に如何に强い陸軍國が出來ても海軍さへ强ければ怖くはないのである。之れは恰度那翁の盛んな時に英吉利が平氣てゐたと同じやうな譯てある。然るに日淸戰爭以來大陸に手を出すやうになつた。其結果としては日本は海軍のみならず陸軍も擴張せねばならぬ必要に迫られた。亞細亞に於ては海軍は無論第一てなければならぬし、陸軍も第一てなくてはならぬことになつた。假令海軍て一番强くても大陸に日本以上の陸軍國が起れば日本の大陸に於ける勢力は餘程危くされるかも知れない。そこでどうしても陸海軍双方共亞細亞ては一番强くなくてはならぬ必要に迫られて居るが、之が頗る困難である。今の財政の困難も畢竟之に基いて居るのである。此例は英吉利が嘗て佛蘭西の北方を占領した時と同じことてある。當時佛蘭西と英吉利との間には始終葛藤が絶えなかつた。例の百年戰爭のやうな長いものもやらねばならぬ事になつた。そして結局佛蘭西に取られた。つまり英吉利は陸海軍兩本位て失敗したのてある。日本人は英吉利人よりも兵隊として强いかも知れんから、そんな事を心配する必要かないかも分らないが、朝鮮を得る爲めには餘程の費用が入つた。そして動もすれば大陸との葛藤あることを覺悟せねばならぬ。此點からいへば先年亞米利加のノックスが提議した、滿洲を中立地帶にするといふ事は或はよい事かも知れない。滿洲が中立地帶となれば大陸に如何に大きな陸軍國が出來ても日本は朝鮮を守ることが出來るのてある。陸軍は內地乃至朝鮮內の秩序を保つ丈けあれば澤山てある。海軍さへ强ければ日本は守れるのてある。之は冷靜な頭て考へるべきことゝ思ふ。勿論大陸に領土を擴げた爲めに日本が非常な貿易上の利益を得て、優に其費用を支辨することが出來る場合には又格別てあるが今の所左樣な事は一寸ないやうてある。

○後藤男爵の領土主義と貿易主義に對する談話

凡そ今の政治家中、後藤男程、如何なる問題にも意見を有し、又其意見を大膽に發表する人はあるまい。議論の立て方は何時でも大きい。帝國本位——日本帝國の力と運命とを信じて、大和民族發展の立場から總ての論が割出される。其堂々たる論を行る間に、なか〳〵警句を吐く。聞いてあの位面白い議論の出來る人は所謂論客といはるゝ人の間にも餘りない。

僕が「領土擴張主義と商權擴張主義」の論題を持つて、男を訪問した時は、恰度男が何處かへ出かけられる所なので、男の之に對する纒つた意見は聞くことが出來なかつた。それでも一言二言話された中に面白い觀察が無いでもない。此一頁の餘白の埋草にそれを書いて置かう。

一體私はイスムス——主義——といふものが嫌ひだ。ビユーロクラチスムス。リベラリスムス。何でもイスムスに凝り固まつて了つては動きが取れない。政治家は矢張り、時により、處により、又物によつて、其場合に最善い處置を執らねばならぬ。學校の教科書にあるやうな主義一點りては人間が乾物のやうになつて、活きた世界に働きが出來なくなる。殊に政治界は轉變が甚しい。一定の理想は固より必要だが、當面の問題は機を見、勢を察して、之を處理せねばならぬ。

殊に今の世界に於て領土擴張主義などを唱導するといふ事は穩かならぬ事に相違ない。然しながら一國の存立上、どうあつても其土地が必要だといふ場合には、こりや國の生命を賭しても爭はなけりやなるまいと思ふ。然しそれは領土擴張主義といふ主義から割り出されたものではなくて、一國の存立の必要上から自然に出て來る結果である。此場合を外にしては無論商權擴張といふことが、平常の目的であらればならぬと思ふ。

次號の誌上には是非「官業主義と民業主義」に對する意見を聞くことを約して玄關の處でお別れした。(一記者)



數奇傳（九）

――一小文學者の自敍――

田岡嶺雲

（貳拾參）足のなえ

(1) 空を踊んで歩む事が出來た

此歳の夏の初め頃から種々の病徵が現はれて來た。然し其の時には未だそれが不治の痼疾の前驅であらうとは毫も想ひ設けなんだ。

激しい痔の出血が始まつた。痔には母も叔父も惱まされてゐたから、我家の人として、此に罹るのは、敢て意に介する事でも無いとは思ひながら、眞紅な血の滴々に精力がしたみ出さるる樣で、厭な心持であつた。

脚部に、發疹も無いに、堪え難い痒みを感じた、予は當時之を極めて輕く視てゐたが、蓋し此も足の癈するに至る一の病徵であつたらしい。

又此頃であつた、或時予は偶と自分の身をフワリと輕く宙に浮かせて、空を踊んで歩むことが出來ると想はれ出した。確に之を試みた事實があつた樣な感が頭に遺つてはゐる者の、夫が何時何處でとも評らない。想ふに

此は未だ覺醒時には意識しなかつた脚部の痿軟と痲痺とを、睡眠中の夢に知覺したのであらう。然し當時には夢と思はれぬほどマザ〳〵と自分の記憶に印象されて、有り得可からざる事とおもひ乍らも、實際に有つたやうに何うしても考へられた。

予の識つたものに、空中步行のポッシブルを論證しやうと企てて、其家を捨てゝ弟に讓り、自分は東京の木賃宿に殆ど永住して其研究を續けてゐた篤志な而かも狂人じみた獨眼龍の男があつた。此も予の夢の一材料てあつたらう。但其頃此を狂じみたと暗に笑つてゐた予自らが、夢に見た其狂じみた事を、覺醒中の事實と混同して判つことが出來なかつたのは、腦にも多少の變調を來たしてゐたかも知れない。

夏休みが來て日本に歸つた、山陽鐵道の汽車中て、二等の寢臺に足を垂れて寢て、其足が鉛の如く重いことを始めて感じた。翌日岡山て下車して、日に灼けた椽側を素足て踏んで熱さを覺えぬので、足の痺れてゐることが判つた。

歸朝する前、南潯といふ處に往つた還りに、彼方に其處を過ぎる汽船を待つ爲め、露を冒して一夜を河の中の小舟に明かした事があつた。此んな事から脚氣にても罹つたのであらうとおもつた。

東京へ歸つて二三の醫者に診てもらつたが、脚氣らしいといふ診斷であつた。

長崎て上海までの船を待つ間に、入浴の際に脚部が湯に沁みて激しき痛を感ずることを知つた。町醫者を招んて診せたら矢張脚氣だといふ、容體を如何にも重大らしくいふので、醫學專門學校の大谷博士に診て貰つた。初めて脊髓癆の初期の疑ひのある事を診斷せられた。

脚部の痲痺以外別に此といふ徵候も無いから、予は其儘又蘇州に還ることに決した。

(2) 潮はゆるく舷か叩く

此頃も未だ郵船會社の上海航路は社外船の借船てあつた。予が此時乘合せたのは中ても船體の最も小さい千噸計りの千代田丸といふボロ船て、元來が貨物船て

有るから一等の船室は勿論無い、二等が僅に二人を容れる一室ある許り、此も船員などの室を間に合せたものらしかつた。床も棚になつたのが鍵形に二つ相接してゐるのみで洗面の設備すら無い。

合ひ客は長崎から同じく乘つた若い女であつた。眼鼻だちは揃つてゐるが、九州の女によく見る何處にか男性的の嚴さがほのみえて、女らしい潤ひとふくらみが無い。夫に其の身分の高い者て無いことは、送つて來てゐた母親らしい女の惡疾て墮ちたらしい鼻に其素性が窺はれるのから推しても知れるのみならず此の女自らの容姿の裡にも何となく下品な處があつた。後て聽いたが、漢口へ行くのだといつてゐた、恐らく彼地の料理屋へても酌婦稼ぎに出掛けるのてあつたらう。

出帆したのは恰も二百十日の夕方てあつた、艀舟に乘ると港内にも波が湧いて、西の空に雲脚が唯ならず急てあつた。艀舟の船頭は大した事は有るまいと請合つてくれた者の、日が日なり、船は小さし、幾らか氣がゝりてあつた。

果して海は荒かつた、風と雨とに小い船は揉まられる樣に搖れうごいた。予は床に就いたまゝ、コーヒーとラムネとに船暈の渴を慰する外は、二晝夜を絶食に過ごした。同室の女も甚しく惱んてゐたらしかつた。二人は言語を交す餘裕さへ無かつた。

船長の話に據ると、暴風雨が支那海を通過した餘り時化を喰つたのてあつたさうだ。

呉淞沖へ着いた時は夜中てあつた。潮の具合てか、此沖に假泊して天明を待つた。

風ももう忘れたやうに凪いてゐた、外は靜かな薄月夜てあつた。船の醉も醒めて疲れた身體が懶いやうにだるい。

同室の女とも話の口がほぐれて、二言三言言葉を交すやうになつた。

夜は深い、締め切つた船室に唯二人のみてある。女の取亂した姿が弱い燈光の影に媚めかしい。舷を叩く潮の音がゆるく懷かしげに枕に響いて人の氣を唆るやうだ。

予の心は怪しく躍つた。

併し斯る時に予は常に極めて臆病である。寝ても此な事があつた。

學生時代に下宿してゐた家に娘があつた。或る雨の夜予は感冒(かぜ)をひいて早くから寢てゐると、其娘が部室へ來た。試驗前の溫習の質問にといつて本は提げてはゐたが、二三件の質問が濟んでも直ぐには去らなかつた。

肩と肩と觸れて、息と息とが通ふ樣に枕邊近く座つてゐた。頸垂(うなだ)れた頸元(えりもと)白く、鼻をつく髮の匂ひに、心がときめいた。

然し予は纔にソッと其手に觸れたのみて、怯(おび)へた樣に吾手を引いた。

今の此の場合にも、心をのみ惱ましつゝ、空しく夜のしら〱と窓外に明けゆくのを眺めた。

(３)茶漬に福神漬が戀しくなつた

蘇州に還つてからは、病勢は次第に加はるのみてあつた、脚部の痲痺には急激な變化も無いが、痔の出血は愈よ甚しく、身體の衰弱が著しく感じられるやうになつた。併し床に就くといふ程でも無いので、日々懈らず教壇に立つてゐた。

此迄は日本料理よりも寧ろ好きてあつた支那料理の日々の食膳の膩臭い匂ひが、不思議に鼻に附いて、茶漬に福神漬の方が戀しくなつた。心に惱みあるとき父母を懷ふが如く、身に病あるとき慣れた故國の味が偲ばれるのであらう。

其内に冬の休になつたので、靜養をかねて西湖へ遊びに往つた。

湖畔の劉氏の別墅を借りて貰つて、同行五六人て休みの間を此に過ごした。

舟の中から降り出した雨は、着いた翌日から雪となつて、前後三日間を絕間なく降續いた、湖を遶つた山をも、湖中の島をも、對面の杭州の城壁をも一色に降埋めて湖水の水のみ獨り青かつた。何等の風流福ぞ、晴好雨奇以外に西湖の雪景を飽くまで觀るを得た。

雪に飢うる小禽(ことり)を撃つべく同行の人々は銃を肩にし

て出掛けた、武器に對しては拵ひ方も知らぬ予のみは獨り家に留まつてゐた。數日間予等の食膳は野鳥の肉て豊かであつた。

空が霽れて孤山に雪後の梅を探つて林和靖の墓をも訪うた。詩に入れば面撓とてもいふのであらう、櫓て漕ぐ小舟に乗つて湖中の名勝をも歴觀した。岳飛の廟をも蘇小々の墳をも弔うた、英雄美人同じく黄土の感が深かつた。所謂呉山之第一峰にも登つた、想ひの外に低い一つの丘て麓は淺草の様な見世物や屋根抔が騒々しい俗地である、但錢塘江を俯瞰した景色は較佳かつた、湖畔に立つ古い塔の崩れた頂きに、仰げば小さく樹が見えて、其上を白い雲が流れる様に過ぎて通る、羅馬の古墟にても遊んだ氣持のしたのは今に忘れぬ。

二週間許りの靜養中に食機を恢復して蘇州に歸つた時は體力も較々舊に復した様に覺えた。

直ぐにも辭職して日本へ歸らうとしてゐた決心を飜して、又暫く其儘に留まつた。

然し日々の務めが段々懶くなつてきた、而し別に外に現はれた著しい病徴が有るても無いから、外國人の事とて十分に意思の疏通し難い支那人側の總辨などに怠慢と誤解せらるるを嫌におもつて病を勉め教壇に立つた。終には夫にも堪へられなくなつた。併し寢附いてしまう程ても無いので、矢張缺勤するのが心辛かつた。寧ろ辭職と決心したのは明治四十年の五月てあつた。

船が長崎へ着いた時は、兩岸の青い山に、櫻が咲亂れたのが白く點綴してゐた。

(貳拾四) 痾を養ふ

(1)碍附生活の心安さをおもうた

歸つてから神戸の兄の許へ身を寄せた。兵庫の町外れの長田神社の裏の低い丘の上の池の傍に建てられた遙かに海を見晴した、兄の所有の一草廬に痾を養うてゐた。

此時ほど予は世俗的の虛榮を馬鹿らしく感じた事は無い。第一髮を櫛けづる、鬚を剃る、衣を更める、履物

を穿く、此んな煩はしい手數と費用とをかけて、夫が果して何の用をかする。唯だ他人に對する面目、世間に對する體裁に過ぎぬては無いか。自己の道德的價値に寸毫の加ふる所ある者では無い、飾り立てても自己は竟に自己である、飾らずとも自己は竟に自己である、皮一枚上の塗抹粉飾は、自己の本質(きぢ)の光澤には何の增減する所ある能はざる者である。唯だ好觀(みえ)の爲め、體面のために浮身を窶すのは、人間の大なる弱點である。此の弱點に囚はれて藻掻(いが)き足掻(あが)き躍り跳る人間は、憐れむべきの極て無からう歟。

予は此までにも、虛榮のために人間が心を勞し力を費やすのを愚な事だと感ぜぬ事は無かつた、而し斯く感じながらも其の自らの行ひの上には矢張虛榮の囚れを脱する事が出來なかつた。予は少い時から比較的に外觀には無頓着て、學校時代には綻びたあとをナイフて穴をあけて紙捻(こより)て結びつけた一枚の袴を着通した。夫ても茶屋酒の味を覺えるやうになつてからは絹物の襲ねをも作つた、羽織の裏に繻珍を附けた、髮に油をも塗つた、髭の形を氣にしては捻り上げもした、隔日位には顏も剃つた、匂ひの高い石鹼を擇んでは使ひしもした、香水を注いだ手巾を袂に忍ばせもした。畢竟は動物の雄(をす)が生殖上の牽引のために體軀の美觀があるのと同一理由に歸すべき者てあらう、今想うても冷汗の出るやうな眞似を、其頃は平氣て爲て居た。但自分は何事にも衒ふといふ事が大嫌いてめかすといふ事を恥ぢる氣分はあつたので、成るべく人の眼に立たぬやうにとは勉めた。然し此の遠慮も畢竟するに一種の虛榮てあつた。

縱使身體の上の虛榮は若い時には有勝ちの弱點て、且つ予敢て深く此に執着するやうな事も無く隨分困れば裸でも居兼ねなかつたから、此が爲めに心を苦める場合は割合に少なかつたがたゞ負嫌ひといふ一種の虛榮心は深く予が心の奧に根ざして、此のみは、貧に處して蓬頭弊衣に甘んじてゐる時でも、中々に拔くことが出來なかつた、馬鹿々々しいほど此がために心を苦しめ身を苦しめた場合が多かつた。

今此の爭競の心をも一笑に附し去つた時、始めて天地の寛々たるを感じた。

予は此時始めて、切に墨染の衣一着に萬事足る衲僧の心安さをおもうに堪へなかつた。

偶々此頃大阪に來てゐた正岡藝陽が、中山の眞言の寺て得度の式を行うて剃髮した。予も其式に列する筈を時間に遲れて、停車場て既に剃髮した藝陽の紫の衣に袈裟をかけた坊主姿に遭つた時は、世間の約束の上に超脫して直情徑行する藝陽が妬ましく、常識の桎梏にからまれて遲疑する自分が歯痒かつた。

(2)落葉掻く翁も嬉しかつた

夏の雜沓を故らに避けて、秋の初の九月から、淡路の洲本在へ轉地した。

洲本へ船が着いたのは夜に入つてからてあつた、陸へ上ると兩側に低い二階建ちの家が立並んて、軒に掛けた行燈に夫と點頭かるゝ、格子の中には鏡に向つた偏袒の女が見える、軒に立つた浴衣がけの者もある、ドヤ〳〵と船から上つた客の過ぎ行く外には、チラ〳〵と罕に人通りのある許り、廓としては寂しい。濤の音と松風を枕にきく廓も、亦風流なものてあらうとおもつた。

予の往つた八洲國といふは洲本からは半里許、海の中に突き出た巨巖の上にある。海を隔てゝ雲烟の間に攝河紀泉の山の影が望まれる、由良の瀨戸は眞近かに見える。巨濤常に激し打つて海風髮を散すべし。一二人の外には別に客も無い、朝々松の落葉を掻く聾の老翁も嬉しかつた。

飽まて海氣を吸ふ傍ら、女子解放論の稿に筆を執つた。

人に男女の別あるは、動物に雌雄牝牡あると同じく生殖の便宜の爲めに外ならぬ、然らば男女の何れか重きやは、生殖なる其本務を標準として論ぜねばならぬ。而るに生殖の上に於て重なる部分を働くシテたるものは女子にして、男子は只ワキを勤る助手たるに過ぎぬ。故に之を本來の自然よりいへば、女子は重く男子は第二位に位すべき筈のものてある。之を太古の原始的狀

態に稽へ、若くは現在せる未開人種の風俗に徴するも、其證歴々として睹るべきものがある。然るに此が漸次其地位を顚倒して、男子が女子を壓伏するに至つたのは、所謂文明の進步と共に、經濟的關係が直ちに權力的關係を生ずるに至つたが爲めて、女子の不幸は實に夫婦なる者が同棲して經濟關係を有するに始まつたのである。

予は如上の見地から、三篇に別ち、上篇には自然の狀態に於ける男女の關係を說き、中篇には如何にして此自然の關係が破られたるかを述べて、下篇に於て女子を現在の不自然なる狀態より解放せんには當に如何かすべきやを論ずる腹案であつた。而して予が從來の著作のやうに斷片的な感情的な者でなく、生物學人類學社會學經濟學等の科學を基礎とした纏まつた一冊とする計畫であつた。

著作が殆ど上篇を稿し了つた頃、東京の笹川臨風から打電があつた、東京に新に起る新聞へ入社をせぬかとの勸誘であつた。

商品となつた新聞の態度に慊らぬ予は、再び所謂新聞記者となることを屑く感じなかつた。但恰も上京の機會を待つて居た折であつたのと、新しく起る新聞てあるとの事に心を動かして、遂に上京するに決した。

女子解放論の稿を脫手するを得ずして、予は此地を去つた。

(3) 兒は母に屬し人類に屬す

予が婦人問題に關する意見に就て、予に暗示を與へた事實を序に懺悔しやう。

予がまだ岡山に居た頃、予は二人の女に關係してゐた、其二人が殆ど時を同じうして姙娠した。固より此二人は無垢の處女では無い、所謂職業的に媚を賣る女てあつた。從つて其相接する男が必ずしも予一人て無いことは勿論疑ふに足る、又よしんば果して自分のために懷姙したとしても、之を口實として其責任を回避し得る餘地があるのである。然るに予は二人の言ふまゝを承認して、敢て拒ば無かつた。

予と雖ども其の必ず自己の生見たることを疑はぬほ

ど此の女等に惑溺してゐたのでは無い、從つて二人から妊娠の事を聞いた時は、胸中に大なる苦悶を感じた。

男子は、女子の懷妊に對し、其の必ず吾兒たることを承認し得ざると同じく、其の必ず吾兒たらざることをも拒否し得べからざるディレンマに立つ者である。若し或は吾が兒たるに、女殊に斯る種類の奴が、懷妊のために受くる打擊を冷眼に視るは餘りに殘酷である。而かも吾兒たらざるに其懷妊に對し扶助を與ふるのは世間の嗤笑嘲罵に値するのみである。

世間の嗤笑嘲罵を甘んずる乎、否らずんば冷忍殘酷の行を敢てする乎。二者の中必ず其一を擇ばねばならぬ。

予は寧ろ世間の嘲罵を甘じ受くるも冷酷の行を忍ぶに禁へ無かつた。

予は終に解決の路を得た。

母體に孕める兒は父の兒たるに疑はあるとも其母の兒たるに於て疑ひは無い、我の兒たるに疑ひはあるとも人(人類)の兒たるに於て疑ひは無い。必ず其眞の父たらんを欲し、必ず其の眞の我が兒たらんと欲するは人間の私である。兒は母に屬すべきものである、父に屬すべきもので無い、人に屬すべきものである、一己の我に屬すべき者で無い、兒は一屋の下の我の相續人としてよりも天地の間の人類の繼承者として意味がある、從つて其の兒を出產する母は社會の公人である、一男子の私有として視るべき者で無い、母は社會の公人として其懷妊に對し社會に扶助を要求する權利が有る、男子は又其私有せざる女子に對しても其懷妊を扶助する義務が有る。男子が女子の懷妊に關し必ず其父たらんとし必ず我兒といはんとするは私念である。偏見である。

予は斯く考へつゝ、又吾が兒の人の手に養はれつゝある一の報償なりとも考へて、女等の要求を諾した。

此時に考へた產兒に對する男女兩者の地位は即ち予が女子解放論の思想の基石となつたものである。

(二十八) 終に病む

(1) 吾れに小説の才あらしめば

十月の末に上京した。

余の東京に歸るのは、何時も十月の末から十一月の初めへかけてゞある。津山から歸つたのも、岡山から歸つたのも共にさうてあつた。今度も亦さうてある。是れも、亦一種の運命の神秘と云へば云ばるゝてあらう。

天地はリズムによつて支配せらるゝとも言ひ得る、人間の出産や死去や、若しくは暴風雨の始終やの如きが、所謂潮時の關係があるとの古い傳説も、今少しく科學の研究か進歩すれば、明確に説明し得らるゝかも知れない。潮汐は即ち一種の大いなるリズムてある。

人間の一生の上にも亦リズムがある、一年の間にも人間の生活の上にリズムがある。余自らの上から言へば、四五月の頃は、常に一年中の否塞の時て、十、十一月が發揚の時てある。自分の今日迄の經驗ては、いつも多くさうてあつた。東京に歸るのは、どちらかと云へば此の發揚の時に於てゞある。

東京に來て直ぐ聞いたのは、嘗て天鼓に載せた論文を集めた、『霹靂鞭』が、又秩序壞亂の廉て發賣禁止になつたことてある。

雜誌の上て一度無事に通過した物が、書籍となれば遽に秩序壞亂の物となるといふことは、我等の樣な小面倒臭い法律といふ物を知らぬものゝ常識から考へれば、甚だ奇怪千萬の事の樣に思はれる。我等が、憲法に依て附與せられた言論の自由なる者の、至つて狹隘てある事をしみ〲と感じた。

予に若し今少しく豐かなる想像と、華かなる文藻とあらしめば、予は寧ろ議論の筆を捨てゝ、自分の思想を、小説に現はしたらんにと思つた。何時も〱出版さへあれば發賣禁止に遇ふ、我れは只筆を折つて默するの外はない。同じ思想ても若し之を軟かな小説に書き現したならば、その人を動かす危險の程度は、却つ

て大なるにせよ、檢閲官は何等の危險なきものとして之を看過するてあらう。

我は此時ほど、小說家たるには情に足らず、學者たるには理に足らず、終に何の採る所なき、我才の足らざるを憾みと思つたことはない。

(2) 覿面に死を見た

我等の關係した新聞の運命は、短かつた、それよりも余の筆を執り得た間は更に短かかつた。

新聞は十一月三日に初號を出した、其翌年の正月十二日に、予の病は重くなつた。

此日は厭に生暖い日てあつた、新聞社から歸ると妙に體に疲れを覺へてそのまゝ横になつた。それなりうと〱と睡つて了つた。目を覺して起上ると俄かに足が思ふ樣に利かなくなつて、余は此の日より一種の癈疾となり了つた。

その頃予は本郷の下宿屋にゐた、愈々不治の痼疾と覺悟して、靜かに病を養ふべく雜司ケ谷に家を構へた。

此年は時候が極めて不順てあつた、寒中は極めて暖かく、四月の、櫻が眞盛りの頃に大雪が降つた。雷鳴がして大きな雹も降つた。

此時候の不順な爲めてもあつたてあらう、此年には知名の人が多く死んだ。橋本雅邦翁は確か余の發病の當日の明け方に逝いた、岩崎彌之助男の逝いたのも此年、山階宮有栖川若宮兩皇族が、薨せられたのも此年てあつた。

天才も、富も、尊きも、以て死に敵するに足らぬ、死の前には何人も平等てある、死は何人にも必ず來る、何人も常に死の巖頭に立つて自ら知らざる者てある。

我は雜司ケ谷の寓居に臥しながら、護國寺に瘞められ給ふ山階宮の葬儀の弔砲を聞きつゝ、切に人生の儚なきことを想ふた。然し此等の人々のよりも、更に覿面に予に死の悲痛を示したのは、友人たる佐藤秋蘋と上海に於ける舍弟の死てある。

弟の訃を聞いたのは、此年九月修善寺に轉地中てあつた。是より先き八月に弟は歸朝したが東京へは來なかつた、兄等二人は弟に會つたが、吾れ一人は遂に最

後に彼れを見る機會を失うた。弟の訃を聞いた時は、何となく吾れ一人兄弟の緣が薄い樣に思はれて悲しかつた。

秋蘋の危篤を聞いたのは、確か二月の雪の降つた後の日であつた。小川芋錢君から秋蘋が肺炎で駿河臺の高田病院に入院して今夜にも危いと聞いた。其夜直ちに雪後の月夜を病をつとめて彼が病床を訪ふた。彼は醫師から談話を禁じられてゐた、彼は紙を取つて大丈夫未だ死すべからずと書いて余に示した。吾れも死すべき運命を擔ひ、彼れは更に死すべき運命に迫られてゐると自らは知らぬ彼を悲しんだ。

數日後に彼れは竟に死んだ、然し彼れはその最後の眠りを溫かき其妻の手に於てした。孑然たる孤獨の冷かなる他人の手に死すべき我が運命を想ふて寧ろ秋蘋を羨むの情に堪へなかつた。

(3) 褥の墓に横はる生きたる屍

發病以來既に五年、幸に(或は不幸に)猶生きて、生と死との境を彷徨ひ、「生きたる屍」を「褥の墓」に横たへて活甲斐なき命を纔に保つてゐる。予はこのまゝにして果して更に幾許の日と月とを送らんとはする。

五年の間に、吾れの友、吾れの知れる人の、吾に似ず健康なりし幾人かは却て死んだ。あゝ人間の命は脆い、然し又人間の命は粘り強い。人は容易に死すれども又容易に死なない。明日死すべきか吾れは知らず、明月死すべきか吾れは知らず、明年明後年死すべきか、又吾れは知らず、知らざれども吾れは終に死すべし、何人にも死は時の問題である、特に吾れ等の如き半ば死せる者に於ては。

顧れば四十餘年の予の生涯は、吾れには既に長きに過ぐ。固より予は、先天的に人生の意義ある事を信じない、人の生るゝはチャンスである、然し生れて後、人間は之に意義を付する、既に生れたる以上全く空虛に全く無用なる生活は、寧ろ生れざるに如かない。予が過去の四十餘年一萬餘日何の爲す所なく、何の世に人に益する所なき空虛なる無用なる生涯であつた、されど此の以上更に生きて何の內容を予の歷史の上に加

へ得るとも思はれない。人は寧ろ疑問なる未來を有する時に死すべきてある、吾れ等の如く貧弱なる過去を有する者となつては、死は寧ろ既に晩い。

何人の上にも必ず至る者とすれば、死は恐るゝに足らぬ、否恐るゝとも如何ともすべからざる者てある。

死を恐れずといふは固より一種の氣取りたる虛僞てあらう、予は敢へて死を恐れぬとはいはぬ、而し吾れの怯るゝは此の五尺の軀の虛無に歸するよりも、寧ろ死の際の最期の苦痛てある、否寧ろ其最期の苦痛の豫想てある。此の豫想の暗き影に掩はれたる前途を望みつゝ過ぎ行く一日一日よ。されど人は境遇に慣る、若し人に境遇に慣るゝ適應性なかりせば、吾が一日一日は如何に苦痛に刻まれたる者なるべき。吾れは天に謝す、境遇に慣るゝの性を人に與へられたることを。

此の稿を起せし時は、五六回にて完結すべき豫定なりしが故に、頗る省略に過ぐる處多し、此に一旦筆を擱くも、若し余の健康にして之を許さば、更に補遺の稿を續ぐことあるべし。　嶺雲生

その二週間（下）

倫敦　繞石生

八月十五日

今日はビユウドへ行くことにして居る日てあつた。

ビユウドはボスカスルの東北十五哩の、海岸の小さい町だ。

今日も同勢がある。九人だ。ロオ、トル行同樣、コオチて行く。馭者は相變らず、宿の主婦の弟だ。

今日は遠いといふので九時にコオチに乘つた。村の坂下の橋を渡つて、一本道の村道を傳つて行けばいゝ。

道は海岸から遠いので見るに足る景色は無い。處々坂があると、車を下りて歩るかせられる。今日も暑いのでこれには閉口した。非職海軍々醫だといふ六十恰好の老紳士、同年配のその細君、五十許りの紳士夫妻、瘠せた、丈の高いヤンキイらしい三十男、三十餘りの學校教師だといふ、中肉中丈の男と、その新婦らしい女、それに僕等二人、この九人の同勢のうち、ヤンキイらしいのは御者臺に御者と並んで座つて居る。車には、殘る八人が四人づゝ向ひ合つて座つて居る。坂に上りだすと、かのヤンキイらしいのが一番に道へ飛び下りる。そして

『どうです、下りませんか。馬が可哀相だから』

と言ふ。『馬が可哀相だから』と言はれちや、下りぬ譯には行かぬ。二度目に下りた時は、そのヤンキイらしいのが僕と並んであるいた。突然僕に

『サヨナラ』

と叫んだ。だしぬけだつたので、何と返事していゝか、まごついて居ると、

『僕は日本語を二つ知つてます。サヨナラとオハヨとサヨナラがグドモオニングで、オハヨがグドバイでしやう』

と言ふ。噴出して笑ひたかつたが、やつと忍んで

『そりや反對て、グドモオニングがオハヨです』

と言ふと、

『僕はグドモニングがサヨナラだと思込んでたから、それで今君にサヨナラと日本語を遣つて見たんだ。そりや失敗した』

と笑ふ。鼻にかゝる英語だ。確かにヤンキイに違無いと思つた。

僕等男子連は、坂へ車が差蒐ると下りさせられたが、非職海軍々醫殿は一度も下りなかつた。これは歸路のことて、乗合一同、互に口をきゝ合ふやうになつてからだつたが、とある坂の上まてあるいて、車へ乗り込んだ時、その軍醫が、

『どうです、時々車から下りる方がいゝてせう。下りて又車に乗ると、餘計レデイスをアツプリシエートし出

來るから』

と言つたので、皆んな哄笑した。

今日は一番暑いやうだつた。車で走つて居る時でも、路傍の草イキレをムッと感ずる。ビュウドの町の入口で馬車を下りて、海岸の砂濱の、風の能く吹き來る處へ出るまでは、眼が眩みさうに暑かつた。

此邊も海岸は概して斷岸だが、ビュウドの町の處だけ、珍らしく遠淺の砂濱になつて居る。

例によつて、晝食入りの手籠を提げて、お供然と孃の後から行く。退潮と見えて、濕氣のまだ乾かぬ平らな砂地が、岸から水際まで二丁はある。砂濱は右の山鼻から、左の山鼻まで幅半哩はある。その廣い砂濱に豆粒を撒き散らしたやうに、人が居る。岸近く、大小幾多の天幕も見える。天幕の中へ衣物を脱いで置いて、海へはいるのだ。タイトから水を垂らしながら天幕の方へ駈け行く者、砂の上に踞んで海を見て居る者、細君か妹か麥藁帽を深く冠つた女の手を引いて海に向ふ者、玩具のシャブルで砂を堀上げて山か城か造らうとして居る子供連、砂地へ環を書いて其處を宿にして鬼ごつこをして居る女の子、——中々賑やかだ。いづれもビュウドに滯在中の海水浴客だ。

僕等二人は同行者と分れて、浪打際を傳つて、右のはづれの山鼻まで行つて、岩を目つけて、其へ坐つて晝食した。エエルが暖湯のやうだつた。

食後、孃は靴をぬぎ、足袋を脱ぎ、スカアトと下着とをまくつて、水へつかりに行くといふ。僕も膝頭までヅボンを捲り上げて隨行する。そして脛の半分隱れる位の處まで水へ入つて歩るいた。考いて見ると、足先を水へつけたことは、英吉利へ來て今日が初めてだ。冷たい。海は極めて穩やかだ。波は唯ポチャリ〳〵と思ひ出したやうに打つきりだ。

コオチは四時に出るといふことだつたから折角海風に涼しく汗を納れたのを、又も汗をふき〳〵町の入口まで歩るいて行つて、車上の人となつた。

途中、八哩許り歸つた處の、エインハウス、コオナアといふ、四辻道の一軒茶屋で茶をのみに休んで、客

い夕日を浴びながら日暮に宿へ歸つた。さらてだにダアクだく〳〵と言はれる僕が、今日一日て一層黒くなつた。

八月十六日

今日も無雲の大快晴。

今日はロッキ、ヴレイとボシニイ、コオヴとへ行つて見やうと孃が言ふ。僕は一日位靜養したいのだが、仕方無しに同行する。

チンタアゼル近くの、深い溪に架つた木橋、その木橋を渡らずに橋際から左へ、谿の奧へ行つてセント、ナイトンの瀧を此間見たのだが、その木橋を渡つて、右へ谿を海の方へ行けば、谿の兩側は奇岩怪石突兀として亂立して居る。此處がロッキ、ヴレイなのだ。

海に近づくに從つて、谿は却つて蹙まつて、左右屛風を立てたやうな岩ばかりになる。谿も巨岩に埋められて居る。底を潜り流れるのか、水は涸れて居る。路なんどありやうが無い。岩角につかまつて、恐る〳〵進む。一歩を過まれば大變だ。漸くのこと。白沫を飛ばす海水の激する、谿の出口の、とある大岩まて辿りついた。それからその大岩の上へ攀る。下着は汗しとゞだ。

ても岩の上て、谿へ吹込む汐風を滿身に浴びるのは實に爽快だつた。右にはトレヴルガの海角に少し離れて、ロングアイランド、ショオトアイランドと、大小二つの島が見える。左には、キラバアクといふ海角が長く海中に突出して居て、近くにライ、ロックと稱する大岩礁、遠くに『姉妹が島』と呼ばるゝ小岩礁が二つ浮いて見える。ライ、ロックに近くボネトが一艘居る。舳と艫とに一人づゝ人影が見える。釣糸を垂れてるやうだ。釣してるやうだが、何が釣れるかと孃にきくと、鯖の小さいのだらう、といふ。岸は岩ばかりだから、寄する波が白く砕けるが、少し沖は鏡のやうに平らだ。こゝにも海鷗が多い。眞白な翼を日に輝かして高く低く海上を翔け廻つて居る。長閑な景色だ。

海は退潮だ。僕等が腰かけてた大岩の前は、水が底の見えぬ深さてあつたが、いつの間にか、岩の頭が、

浪に連れて、出たり隱れたりするやうになつた。やがてその岩の頭が、浪に洗はれなくなる。次第に大きくなる。見て居る間に潮はずん／＼退く。その岩の左右にも、いろんな形の岩礁が次第に頭を出して來る。岩の平らな處にはヨメガサラの大きいのが膏藥を貼つたやうに着いて居る。裂目、窪みには雜多な海草が生えて居る。青海苔もある。アオサもある。テングサもある。海酸漿に類したのもある。孃は海草が珍らしいので、岩を這ひ下りて採らうといふ。

「危いからおよし。すべるから」

と言つても肯かぬ。靴をぬぎ、足袋をぬいて、到頭這ひ下りた。やがて一摑の海草を片手に攀ぢ上つて來た。

「こんな貝が此海草についてますよ」

と示す。神馬藻の根に、雛の貝の小さいのがくつついてるのであつた。

「おゝ、氣味がわるい。下着が濡れてつめたい。」

と、岩の上で足踏をする。それ見たとかと、覺えず

「サアヴ、ユウ、ライト」

と口走つたら、

「何んですつて、も一度言つて御覽なさい」

と言はれた。

腹が減つて來た。一時半近くなつてるのだ。今日は辨當無しで出たので、何處かで賴んで食はして貰はなきやならぬ、といふと、街道へ出る迄に、一軒家があるから、そこで賴んで食はして貰はうといふ。然し下着の裾の乾くまで待つて下さい、といつて、僕と脊中向きに、日に向つて岩の南側へ腰かける。そしてスカアトをまくつて兩足を投げ出して日南ぼつこをする。僕は見ぬふりで、海の方を向いて卷煙草をくゆらす。然しその下着が、茶と白との細かい市松模樣の絹物だといふ程は見えた。

又も岩傳ひて、谿川の緣の小徑のある處まで出た。雜草が徑を埋めて居るので、やゝともすれば、川へ辷りさうだ。

來がけには、つい氣付かなかつたが、街道へ出る迄

に、こんもり繁つた楡の木の蔭に、小さい水車小屋があつた。谿川の水の多い時、それを横へ桶で引いて廻すやうにしてある。今は水車は休んで居る。その水車小屋に接續して、一部屋しか無ささうな小さい田舍家がある。孃はツカ〳〵と其の入口らしい處からはいつて行つた。

『お茶は無いさうですが、絞りたての牛乳はあるさうです。それと、ブレド、アンド、バタでいゝでせう』と出て來て言ふ。裏へ廻つて呉れと言ふのださうな。

言はるゝ儘、その小さい家の裏へ廻る。小紋の更紗の上下を着た、髮をバサ〳〵に亂したその家の主婦がとある楡の木の日陰へ小さい食卓を持出した。荒削の板へ、脚を四本つけたまでの食卓で、クロオスなんか固より掛つて居らぬ。

支度の出來るまで、水車小屋の裏へ行つて見る。

其處には、三十坪許り、低い棚を四方に廻した牛飼場があつた。赤斑のたくましい雄牛が二頭。一頭は水車小屋の日影に臥て居る。一頭は棚に顔を凭らしてじつとして居る。その牛の角の間に雄鷄が一匹止つてゝしきりと牛の額を啄んで居る。牛は心地よささうに眼を瞑つて居る。何を啄んで居るのかと近寄つて見たら、鷄が居ると氣づかずに牛の顔へ飛んで來る蠅を啄んで居るのであつた。

此處で空腹ほど醫やして街道へ出た。

街道をチンタアゼルの村家が見えだす處まで、だら〳〵坂を上ると、右に圓い芝山がある。その芝山の左側に小さい徑がある。それに隨いて行くと、急に谷間へ下りるやうになる。行手に海が見え出す。その邊から、——此の山の海に面する半面——突然懸崖になつて居る。それには、巧みに之の字之の字形に、岩を削つて羊腸たる路が設けてある。

脚下ばかり氣をつけて、右へ折れ、左へ折れ、急なその岩道を下りる。

下りきつた海岸には少し砂濱がある。砂濱の左右はU字形に海へ突き出た絶壁だ。右側には、壘を積上げたやうな岩が海中遠くまで出て居る。左側の絶壁は、

岩層は水平だが、垂直に幾多の裂目があつて、一番海に近い裂目は、絶壁の上の處ほどはつながつて居るが、途中から全く裂け切れて、高いアアチが出來て居る。裂目は喫形に下程廣くて、潮が退いて其處が砂濱になつた時は、三人は手つなぎで通れる。此の岩鼻を「象が岩」と名づけて居るといふ。さう聞いて見ると、鼻頭を地に付けてる象の頭に稍や似て居る。

折から潮は退ききつた處で、その鼻の頭から二十間ばかりの沖まで砂濱になつて居る。チンタアゼルへの避暑客で、海水浴をやらうといふ人は、總て此の砂濱まで來るのださうな。隨分御苦勞だと思ふ。設備は何も無いから、岩蔭へ衣物を脱ぎはなしにして置いて飛びはいるのだといふ。無造作にひつかけられる日本服と違つて、タイトを脱いで通常の衣物に着かえるのに――殊に婦人は――困るとだらう、などゝ要らぬ心配もして見る。でも「象が岩」近くの砂濱をぶらついて居る男女が七八人居た。僕等の下りぬ前に海から上つたのだらう、疊を積み上げたやうなかの岩の日當に、紺や、鰕茶や、赤や、紺白だんだらやの、タイトが並べて乾かしてあつた。

書き忘れたが、此庭がボシニイ、コオヴなのだ。

「象が岩」の處まで、ぶら〳〵歩るいて行く。「鼻」の長さが三十間はあるやうだ。「鼻」を廻つた處にも少し砂濱があつた。

かの、疊を積み上げたやうな岩を見て居ると、不圖その蔭から小さな白塗のボオトが出て來た。男が左右双手で擢を漕いで、海水帽を冠つた女が舵を操つて居る僕等の近くへ來た時、砂濱に居た七八人の一人が、

「おゝい、釣れたかあ」

と叫んだ。避暑友達と見える。ボオトの男は擢を流して、鰓から口へ細紐を通して繋いだ十匹餘りの魚を船底から取り出して、

「これつきりだ。今日は釣れぬ」

と同じく大聲で返事した。チンタアゼルへ歸るのであらう。先刻ロツキイ、ヴレイて、ライ、ロックの岩礁近く見た、あのボオトに相違無い。

僕は一年半許り淡路に居た時、よく沖釣に出た。キスヤベラの大きいのが面白いやうに釣れた。

「ボスカスルに居る間に一度釣に出りやよかつたに」

と言はうと思つてると、

「獵に行つたり、魚釣つたりする人の氣が知れぬ。實に殺生ぢやありませんか」

と孃が言つたので、口先まで出か丶つてたのを撤回した。

チンタアゼル村の入口まで行つて、茶をゆつくり飲んで、それから歩るいて歸つた。今日の入日が實に美しかつた。

八月十七日

今日も朝から照りつける。昨日よりか風があるので大に助かる。

午前は海岸の、望樓に近い絶壁の上まで行つて、海を眺めながら何彼と話して暮した。

茶を終つてから、チンタアゼル道を五六丁行つて、其處からフオラベリイ、チヤアチへ通ずる畑の畦道を傳つて、寺の墓地まで散歩して歸つた。

或る畑では麥を刈つて居た。こんな田舍でも、手では刈らずに、器械で刈る。左右に大きな車輪の附いた器械を馬に牽かして、百姓は上で啣え煙管で御して居る。器械は獨手に麥を刈り、獨手に適當な束に括り、獨手に束を横へ放つて行く。馬も慣れて居ると見えて殆んど手綱の要は無い。ゴオとかトオとかいふ、御者の掛聲だけで、止つたり歩るいたりする。全體に、當地の馬は從順だ。日本では、馬は恐いもの丶一つだつたが、當地へ來てから可愛ゆいものになつた。

犬もさうだ。どんな犬でも從順だ。知らぬ人と見ると、すぐ吠えついたり、唸つたりする犬は、何處へ行つても居らぬ。宿にジョンといふ、大きな尨犬が居る。顏なんか、眼が見えぬ程毛が垂れて居る。晝間は門口や裏庭の日陰に寢轉んで居る。名を呼ぶと、尾を輕く振つて、少し顏を擧げるが、直ぐ垂れる。

「ジョン、ジョン、カメア」

と四五度も呼ぶと、さも物憂さうに立ち上つて、徐

へ寄つて來る。そして僕の靴へ頭を載せて腹這をする。横へ押すと、ぐるりと腹を仰向けに轉んで、僕の顏をずつと見て居る。實におとなしい。それて居て、夜家人が眠つてからは、門口へ人が近づくと吠えるさうだ。そして名を呼ばずに、此家へ入ると噛付くさうだ。家人は此犬さへ居れば安心だといつて。暑いうちは表口は戸を鎖めずに寢るといつて居た。

それから猫もさうだ。人が近よると飛んで逃げるやうな猫は當地にや居らぬ。實に人馴れて居る。

日本ては猫は嫌ひだつた。當地へ來てからはこれ亦可愛いものになつてしまつた。

宿には犬の他に猫も居る。平素は地下室に居るやうだが、

「ブシ、ブシ、ブシイ」

と呼ぶと、階段を上つて傍へやつて來る。虎斑の小さい猫だ。居間の扉を開けて先へ入ると、隨いて來る。椅子に腰かけて、指て膝を叩いて、

「シツト、ヒア」

といふと、輕く脛へその前脚を引つかけて、ヒヨイと僕の股の上へ上つて坐る。そして僕の顏を眺めて、甘えて輕く「ニヤア」と啼く。肩を叩いて見せると、胸傳ひに肩へ上つてうづくまる。

「ゲツダウン」

と肩を搖ぶると、床へ飛び下りる。そして立てた長い尾をうね〳〵さしながら、哀れ氣に「ニヤア」と啼く。可愛ゆい。僕は、膝の上へ載した儘、ナイフとフオクを持つた兩手で首を抱へるやうにして、食事するともある。皿の物へ手をつけやうとは決してせぬ。物欲しげに啼く時がある。

「ビ、クワイエツト」

と叱ると、默つてしまう。すつかり猫が好になつてしまつた。

八月十八日

今日も日本晴だ。

いよ〳〵今日は出立しなきやならぬ。十時半にフエイトンに乗つて出立した。主婦のオールド孃、その妹、

主婦の母と、三人門口に立つて別を惜んで呉れる。街の向ひの、あの女の子も、母に抱かれて門口で見送つて呉れる。その隣の――畑一つ置いた隣の家の十許りの男の子、畫を器用に畫く子で、いつか遊に來た時幾枚か持つて來て見して呉れたので、ケエスの底へ入れて來た色刷の花鳥の繪を二枚與つて、それでしつかりお馴染になつたその男の子もフエトンの横まで來て、握手して呉れる。

『左樣ナラ』

と、いよ／＼出かけると、皆んな、擧げた右手を上下に振つて(日本のおいで／＼だ)何時までも別を惜んで呉れる。

馬車は輕く砂塵を揚げて坂道を上る。村はづれへ出る。並木道になる。振返つて見ると、村は畑の林檎や路の並木に遮ぎられて四五軒飛び／＼に見えるだけだ。やがて隱れてしまう。坂を上つて、少し平らな處へ出た時には、あの谿の、あの林の裏とばかりで、人家は一軒も見えぬ。小山ごしに海が見える。望樓の旗は暑さうにダラリと垂れて居る。下り坂になつたら、海もその旗も見えなくなつてしまつた。一生二度と此處へ來るとはあるまいと思ふと、月並かも知れぬが、哀愁の情に堪へなかつた。

どうも英國は好い。

大谷繞石氏は三箇年の留學を終へ、目出度歸朝せられたり。氏の最後の海外通信たる南歐紀行は近く本誌にあらはるべし



淪落の女

東京朝日新聞記者　松崎天民

「淪落の女」は、新俳優喜多村緑郎氏に宛たる「黒縮緬」、小説家正宗白鳥氏に宛たる「捨ばち」及び、救世軍の山室大佐に送るべき「十二階下」女子教育家宮田修氏への「お小夜」牧師綱島佳吉氏への「さまよひ」等、凡て五篇より成る一種の通信なり。これを或る階級に屬する婦人研究と見るも宜しく、また予が人生觀察に於ける備忘錄の一と見るも妨げざるなり。

二、捨ばち

一、プランタンの一夜

正宗白鳥君　足下

先夜は、カフエー、プランタンで、大に失敬しました。酒を勸める事の巧い横山辯護士や、眉を八の字に寄せて居る松永ニコ〱君や、横山君の友人だと云ふ品川君などが居たので、ツイ調子に浮かされて、浪花節まで唸つて了つた。氣持好く醉つて、彼れから電車で、青山の宅に歸るまで、私は近頃に無く愉快を覺えた。あゝした歡樂の夜が、また有れば好いがと思つて居ます。

カフエー、プランタンは、主人の松山省三君が、洋畫家である緣故も有る

てせうが、こゝに集る人々は、若い文學者や若い畫家、若い歌人、若い俳優、若い新聞記者などが多い。唯、プランタン其のものの空氣が、何となく華麗で無いために、近頃は『趣味』の人々も、自然に疎遠になつて居る樣ですが、夫れでも時々、彼所で、足下に逢つたり、德田秋聲君や生田葵山君の顏を見、知合の新聞記者と會見する事を、私は快樂の一つにして居る。君が小田原に旅行したとの文藝だよりを見て居ただけに、彼所で君に逢つた時には、何となく意外にも思つたし、また嬉しくも思つた。

顏にほくろの有るお柳と云ふ女、愛國婦人會員然たるお梅と云ふ女、二人とも男を引付ける愛嬌は無い。無口で、無愛相で、言ひ付けられた用事しか仕ない所が、反つて面白いては有りませんか。若い色氣のある女は、カフエー、ライオンにも居る、ウーロン、チーにも居る、淺草のよか樓にも居る。種々の料理店が、料理以外に、別に、若い美しい女を看板にして、客を引かうとして居る中に、單りカフエー、プランタンが各階級のメンバーと、飮食を主とする人々にのみ依つて、激しい生存競爭の中に立つて行かうとして居るのを、私は風變りて宜いと思つて居る。是非の評判は種々有る樣だけれど、仕事に疲れた夜、脂肪濃い物が食ひたい夕など、私は相變らずプランタンの扉を開けて居る。お柳さんのほくろなんかは、頭から問題になりません。

彼の夜、私が『南部坂雪の別れ』の一節を、桃中軒雲右衞門入道張に唸つて居た時、ドヤドヤ〳〵と入つて來た一群の男女があつたてせう。コーヒーと甘い酒を注文して、面白氣に調子高に話し合つて居た一群、彼の中に藝妓風した一人の女が居たのを、君は確に見たてあらうと思ふ。黑縮緬の羽織を着て、左の中指に金剛石の指環を光らせ、大きな廂髮の鬢ほつれた橫顏を、君は何と讀みましたか。下谷か、葭町邊の藝妓に違ひ無いと、私は直ぐ直覺したが、藝妓にしては餘に色が褪めかけて居る。寧ろ宇都宮か、日光か、水戶邊て見るべき中年增の藝妓て、話の中に、乾度、『妾、東京

に居た時はねえ」を繰返す類の女に相應しいと見た。其の女は、私の浪花節を唸つて居る汗ばんだ横顔を、チヨイ／＼窺く樣に見て居たが、やがて連の男達を急き立て歸つた。後には横山辯護士と松永ニコ／＼雜誌とが、ニコ／＼の定義が何うの、ニコ／＼は現代的で無いのと論じて居たが、果は飮め飮まぬと云ふ爭論になつた。君がインバネスと鳥打帽で立去り、私が外套の襟を立て出たのは、それから小半時も經つてからである。

日本酒とビールと、ドムとウヰスキーと三鞭酒と、これだけ飮めば大抵の者は醉ふ。私も彼の晩は、何時になく醉つたと見え、宅に歸つてからも、大きな聲で詩を吟じたと云つて、翌朝、細君から散々小言を食つた。女房や子供があるのに、燈火の巷に歡樂を貪ることは、舊い道德の前に、赦され難い罪惡の樣にも思ふが、然し、美味い酒は何時飮ても美味く、若い女の顏は何時見ても美しい。時あつては、妻あり子あるを忘るゝの若やかさに復つて、甘き酒の滴りに醉ひ、美しき戀の泉を掬ぶのも、私等の「生」だと思つて居る。そこに、謂ふ所の中年の悲哀があり、そこに謂ふ所の三十五歳の煩悶がある事を、君だけは、同感を有つて見て呉れるだらうと思ふ。

同じ岡山縣の出身であると云ふ因緣は、此の手紙を君に宛て送る重な要素になつて居るが、プランタンの彼の夜に見た藝妓の横顏も：此の通信を君に送るべき重大な因緣となりました。こんな手紙を送るのは、日本有數の小說家たる君の尊嚴を犯すこと多大であるが仕方がない、見込まれたと思つて、斷念めて貰ひませう。（汽車中にて）

二、廂髮に結た中年增

彼の翌朝、十一時頃新聞社へ出ると、私は或る秘密事件の特別探訪を命ぜられて、横濱から、鎌倉、藤澤國府津の方面を歩き廻つた。段々事件の端緒を得るに從つて、私の身體は一地方に滯在するを許されず、それから東京を素通りして、兩國驛から成田行の二等車

に乘つた。第一回の通信は、其の夜更けて、成田へ着くまでの汽車中で、走り書きしたものです、最う讀んで呉れたことと思つて居る。

成田へ行つても不動樣には參詣せず、翌日の正午頃私はまた汽車中の人となつた。成田から千葉、我孫子を經て、漸と此の△△町に着いたのは、雨催いの風寒く車窓に吹く夕暮であつた。――この町の名を明ら樣に云ふのは、何でも無い事ですけれど、新聞社の命令で探訪して居る事件に、重大な關係を持つて居る土地だから、暫く△△町として置く。――曾て、一度悲慘なる母子の自殺事件を探索するため、出張して來た土地ではあるけれど、心忙しい黄昏に見た町の姿は、宛然初見參の土地に來た樣で、此の宿屋の二階に落着くまでには、尠らず車夫公を煩した。私は今、△△町第一と云ふ旅館の二階の一室で、東京に居る君に宛てゝこの手紙を書かうとして居るのである。

車夫の紹介が好かつたと見えて、通された二階の一室は、兎に角この家の第一號室である。南が硝子障子で西が高い半窓、十疊の中央に置かれた洋燈も、東京では近頃見られない總ニッケルである。床の山水畫には直彥の落欵があるし、額の『半醒半醉是仙境』には、『博文』の二字が殊に目立つ。猫柳か何かを投げさしにしてある花瓶は、恐しく時代の付いた青銅で、床柱もピカ〳〵と異樣に光つて居る。縣の土木史か、郡長樣か警察署長閣下でないと、滅多に通さぬお座敷らしく見えて、何となく可笑しくなつた。私は此の部屋で外套を脱ぎ、宿の褞衣に着換へるや否、暗い浴場で据風呂を沿び、汽車で疲れた身體に、先づ一杯の酒を呼んだ番頭か下男か判らない樣な風體の男が、恐る〳〵宿帳を持つて來たから、一人一欄の所に大きく『東京朝日新聞記者松崎市郎、三十五歲』と書いて遣つた。すると番頭奴、私の顏と宿帳を七分三分に見て、「へ、へ、へ」とお辭儀をしたかと思ふと、スーと部屋の外へ姿を消した。

丸い手に輝を切らした十五六の小娘が、世馴れぬ樣子で酌して居たが、番頭の「へ、へ、へ」が消えてから

もの丶三十分も經たかと思ふ頃、
「東京の方と聞いては懷しいわねえ」
と云ひながら、一人の女が入つて來た。大ハイカラに結つた二十七八で、米琉擬いの絣の羽織に、縞物の前垂をして、袖口から赤い襦袢を出して居る樣子は、女將か、非ず、女中か、非ず。藝妓か、非ず、たゞ者で無い。默つて、部屋に入るや否、女は、
「入つしやいまし、寒いぢや有りませんか」
と云つて、私の傍の四角な火鉢に寄り添つた。
「お酌、さして頂いても好いでせう」
蓮葉な手つきをして、膳の前にある銚子を取上げて、心持品をつくつて見せる。人を人と思はず、大臣にも、博士にも、巡査にも、常に同じ態度で接して居る私も、此の女の男を男と思はぬ氣の樣子には、尠らず面食つた。默つて一杯受けて置いて。
「エラい人が飛込んだねえ、君が何かい、僕のお酌をして呉れるのかね」
と云ふと、女は眼を大きくして笑ひながら、
「妾、賴まれて來たの。東京のお客樣と云ふんでせう何となく懷しくつてね。氣もそゞろに上つた譯ぢや有りませんか」
と、至極く物馴れた態度である。
白鳥君足下、彼の晩、ブランタンで、横顏を見た藝妓が、此の女にそつくりなんです。髮のほつれた工合から、頰のこけて居る鹽梅、眼が大きくて鼻が隆く、口許に利かぬ氣が見える樣子など、實に彼の黑縮緬の藝妓にそつくりである。
「君は、東京に居た事があるだらう。妹が藝妓をしては居ないかい、下谷か、よし町で」
「東京、居た事がありますとも、東京には大變な思ひ出があるのですよ。親も無し、兄も無し、妹なんか有りませんけれども」
酌すれば、女は幾らでも飲む。飲むことに於て、既に此の女は、私の大敵である。(△△町にて)

三、酒に語る過去現在

△△町の宿屋を出て、其の日は終日人力車に揺られた。事件の探訪も八分通りは要領を得たので、大分重荷を下した樣な氣持になつたが、未だ東京へは歸られない。今夜は前橋市の一旅宿で、久し振に美味い酒を飲んで、氣も心も輕く、好い氣持になつた。即ち彼れから後の通信を續ける。

彼の宿屋に來た廂髮の中年增は、近頃私が逢つた女の中で、最も誂へ向の小說的に出來て居る一人であつた。二人で二合入のお銚子を十三本空けても、女は顏を紅くした限りで、別に取亂した風もなく、自分の過ぎ來し方を語り初めた。斯うした類の女が、身の上話をする場合には、殆ど判で押した樣に、說明と批評を加へるものであるが、彼の女は繪卷物でも展開げる樣に、平面描寫的に自分の經歷を語つた。

「貴郞、東京て所は、恐い都會ねえ」

を、其の話の最初の言葉として、

「こんな女が、世の中にあるてせうか」

を、其の話の最後の一語とするまで、女は約三十分間順序宜く身の上話をした。

手帳にも書いて居ないし、細かい事は大半忘れて了つたが、大略だけは未だ覺えて居る。女は名をお時と云つて、靜岡縣藤枝町の生れであつたが、幼少の頃兩親に連れられて、靜岡の繁華な町に出た。小學校を卒業すると直ぐ、朝風にリボンを飜へして、女學校の門を出入する鰕茶式部となり、十八の秋までは、世の鹽も知らず娘に爲つた。繼風身に泌む妙齡ではあるけれど、家庭が段々不如意となつて、雇人は解雇する、店は閉める。果は夜逃げ同樣の憂き目を見ながら、兩親に連れられて、東京の冬に泣く境涯に陷つた。女子大學が創立されてより、恰度二三年目の事ではあり、學問に對する熱い憧憬もあつたので、お時は「東京」と云ふ名を聞くと等しく、何も彼も忘れて喜んだ。あゝ東京、東京、女學生の澤山居る東京、女でも學問の出來る東京、二重橋の在る東京、國會の開ける東京、大きな吳服屋の在る東京と、お時は飛び立つ思をして、長い間夢にのみ見て居た東京の土を踏んだ。うき世の戰

ひに破れ傷いた兩親は、お時の悦ぶ顏を見て、人知れぬ涙に暮れたさうであるが、東京病に罹つて居るお時は、何にも知らなんだ。

東京へ出てからの生活は、夫れは實に悲慘なものであつた。父は傳を求めて司法省の使丁となり、母は裁縫の賃仕事して、淺草三筋町の露次内に、細ひ煙を立て居たが、親子三人麥飯を食ふにも、足らぬ勝の日が多かつた。國を出る時持つて來た僅少の金も、父が晩酌の醉、未だ十二分ならぬ間に、五圓紙幣一枚を餘すのみとなつた。東京の「空氣」に憧憬れ、東京の「色彩」を夢想し、東京の「響」に戀して居たお時は、此の時、初めて貧乏の味を知つた。「空想の東京」から、「現實の東京」に觸れた刹那の驚嘆は、俄にお時の心を三四年老ひさせた。斯うしては居られない、何か仕やう、親の爲には身を賣る女もあると聞く、妾の花は最う散つた、妾の娘時代はこれ限りと、お時は娘心にも覺悟を極めた。憖じ文字を知り初めて居ただけに、憖じ舊道德の感化を受けて居ただけに、お時は烈婦傳や節婦傳の女を空想して、墮落の初一歩に踏込んだ。

お時は麹町の××男爵家に、小間使として上つた。男に對する思慮も、大分成熟して居た妙齡とて、何時しか玄關番の法學生と戀に落ちた。夫れからは最う男を男と思はぬ樣になり、轉々して料理屋の女中にもなつた、待合の女中にもなつた。果は口入屋へ出入のお妾ともなり、三四人の旦那取りともなり、濱町の暗路に警察の眼を忍ぶ黑縮緬の群にも入つた。今では斯うして、△△町に「酒飲みのお時」と唄はれて、宿屋の手傳もすれば、料理屋の女中代りもする。好いたらしい方と見た時は、自分からしなだれかゝる夜半もあるとお時は笑ひながら語り終つた。そして、

「貴郎、お酌をして頂戴な」

と、此の時、初めて膝をくづした。

白鳥君足下、斯うした類の女の身の上話としては、別に奇異な事實も無いけれど、私はお時が身の上話をする其の態度が氣に入りました、憂き悲しさを哀れとせず、酒に沒して他を思はず、身を捨てばちの其の態

が、如何にも氣持よく痛快てある。（前橋市にて）

四、自暴自棄の表と裏

その翌朝、前橋を出發して、谷中村事件てお馴染の古河町に來た。今や破壞され樣とする村の農家て、田中正造翁が血涙をふるつて怒號したのも、最う五年の昔てある。古河町は何かに付けて、思ひ出の多い土地てある。停車場も、宿屋も、郵便局も、警察署も。

馴染の宿屋て一風呂浴びて、馴染の老女將と昔話をしながら、酒を飮むのも面白い。秘密事件の特別探訪も、大に要領を得て了つたので、今夜は初めて「自分」が發輝される。宿の女將はホク〳〵して、彼の時居た若い藝妓は、役場の書記と馳落したとか、彼の女中は嫁に行つた、彼の女は情死したなどと、奇異の事實を報告して呉れる。僅五年の間に、人の運命と云ふものは、斯うも變化するものかと、今更の樣に、人生流轉の激しさを感ずること深い。

白鳥君足下、酒を飮んで別れただけては有るけれど私は未だお時の事が忘れられない。彼した女は、行末何うなるのてせうか、人の妻となつて、平凡な家庭て死水を取られるのが落か。或は多々益々發展して、飮めるだけ飮み、食へるだけ食ひ、着られるだけ着て、欺されるだけ欺し、暴れるだけ暴れて、死ぬるのがどん底てせうか。彼の女の行末、彼した類の女の未來ほど、解き難い「謎」は無い。△△町の樣な、人にも金にも乏しい田舍に居て、昔の夢を繰返しながら、老行くを知らぬ顏に暮して居る人ほど、世に悲慘なものは無い。男と云はず、女と云はず、自分の若く華麗なりし昔の思ひ出に笑みて、現在の苦痛と未來の絶望とを忘れんとして居るのは、眞に痛ましく悲慘てある。お時の如きは、樂しかりし昔が有つたと云ふて無く、微笑むべき過ぎ來し方が有つたと云ふても無いに、夫れても現在に生きんとするよりは、過去に生きんとする努力の方が强い。酒に醉へば、直ぐ有りし昔の事どもが、走馬燈の樣に浮んで出て、初對面の旅客にまて、身の上話をさらけ出して了ふ所に、お時の「煩悶」と「涙」が

有る樣に思ふ。

男を弄んだり、男に弄ばれたりする境涯にある女、殊に日蔭の花と咲く賣春婦の群には、その心持も十人十種の差別がある。十六七の齢若い女は、美しい衣服が着られて、若い男に接觸する機會が多いのを、此の上無い快樂にして、自分の境遇の賤しくて果敢いことを、反省る暇も無く、其の日その日をはしやいて暮して居る樣に見える。少しく齢をとつて二十三四となり、濁り江の水の臭氣を自覺し初めた女になると、悔恨の情、煩悶の念も激しくなり、救の手を求めること熱心てあるが、不幸にして助けられる女は稀て、多くは自暴自棄の淵に沈んて了ふ樣てある。此の浮むか沈むかの岸邊に立つて、浮む者が十人有りとすれば、沈む者は九十人の多きを數へても間違は有るまい。唯、同じ自暴自棄の群にも、苦勞性とのん氣性とがあつて、苦勞性は常に自覺し反省して、淺間しい境涯を脫け樣と悶掻きながら、力が足らなかつたり、弱かつたりして、遂に身を捨ばちに持くづす。のん氣性に至つては、考へたつて駄目なこつた、何うせ傷の付いた身體だもの、斯うして一生を送る他は無い。男なんか口と涙とて、何うにてもなる代物だ、そんな代物を相手にして、一生を面白可笑しく送るのも、陽氣て賑かて宜い、などと云つて居る。然も、のん氣性のん氣に見える皮一つを剝いて見ると、其所に無量の涙があり、其所に無限の悲痛があるかも知れない。

お時は、身を捨ばちに持崩した女の型として、滅多に得難い一人てある。眞面目て居る時は、種々の事を考へて、思はず落涙することもあるけれど、そんな時には何よりも先づ酒を飲む。飲んて居さへすれば、醉つて居さへすれば、世の中が面白くて面白くて仕樣が無い、と云つた樣に覺えて居る。

「東京の方にお目にかゝると、ツイ愚痴が出ますけれど、町の人なんか相手になりませんからね。酒飲みのお時、お時て通して居るんですよ」

何も彼も知つて居ながら、自暴自棄の生活を實行し得る者は、今の世に於ける強者てある。東京の風に吹

かれて、弱者の群に落ちたお時が、△△町に流れて强者の一人たることは、面白い現象でないか。（古河町にて）

五、女から長文の手紙

正宗白鳥君足下、△△町は遂に△△町として置きませう。五日の旅を終へて、今夜東京に歸るや否、私は直ぐプランタンに來た。横顔のお時に似て居る藝妓を、見て、遙にお時のために、乾盃して遣る積でしたが、來たのは生田葵山君一人で、待設けた横顔は殘念ながら遂に見ることが出來なかつた。

旅先から出した手紙は、皆讀んでくれた事と思つて居ます。詰らない女の事なんか書いて、私自身でも詰らないと思つて居るが、事實が下らないのだから、眞に以て致し方が有りません。今夜は久し振てほくろの有るお柳さんの顏も見たし、愛國婦人會員然たる、お梅さんの姿も見て、如何にも東京に居る樣な氣持がした。東京に居ては左樣でもないが、旅から歸つて見ると、東京が明るくて華麗て、私等の生活には、眞に相應しい樣な氣持がする。「東京」の眞趣を味はんとするには時折、旅行をするが一番好い樣に思ふ。

お時に就ては、最う何等報告すべき材料もないが、唯一つ、彼の女から來た手紙をお目に掛けませう。捨ばちの女でも、女は何所までも女だと見えて、彼の宿屋の二階で、私に話した事を、非常に氣にして居るから可笑しい。思ふに、新聞記者と云ふ事が判つて、新聞にでも書かれはすまいか、その心配も有るらしい。その手紙は、巻紙に四尺もある長さで、惡い墨の濃かつたり薄かつたり、讀むのに大分骨が折れたが、然しなかく／＼の名文である。言文一致體と候體とか、混合して居るのも、お時に於ける新しい試作の一つと見えて、讀て行く間に、可笑しくなつて吹き出した。

妾はこんな字しか書けません

先日は眞にまことに、失禮いたし申候、お酒を澤山いたゞいて、醉ばらつてしまつて、いろ／＼の事を申し上げた樣ですが、あれは噓が大分まじつて居ますから、その積でお聞捨のほど願上候、妾もすゝめる

ことは上手なつもりてすが、貴君樣も女に酒を飲ませることは上手にて、ツイ〳〵つり込まれて、珍しく大へべれけになりました、酒のみのお時どころかあれては猩々お時だと云つて、宿のはげ頭に笑はれたのが口惜しくて〳〵堪りません、あんなに醉ふ筈てはなかつたに、妾どうしたのてせう、やつぱり貴君樣が惡いのてす

貴君樣は新聞社の方にて候由、あとて宿から聞いて驚きました、新聞のたね取りさんなら、その考へてお相手いたせしものを、あの晩は何もかも大失敗てした、妾は醉ふと膝がくづれて、いゝ年増だのに、赤いおこしを出すくせがあります、赤い長じばんだけは、婆になつても着るつもり、氣が若いと云つて町の者なんか笑ひますが、妾は赤い色が大すきてす酒のみのお時なんか、實にいやしい女だと御さげすみなされ候や、そんな方ならば、身の上ばなしなんか噓ばかり云ふのてしたに、妾御酒をいたゞくと、ほんとに馬鹿になつて仕樣がない、こんな馬鹿者ても此の町に居る間は、貴君樣のことを忘れない、ほれて居るのてはありません、あまり酒を飲まされたそれが口惜しい〳〵からてす

私のはなしを新聞なんかに出すことだけは、何卒〳〵御ゆるし被下度候、朝日新聞にかゝれますと、すぐ町の問題になりますから、それだけは神かけて御願申上げます、尙々テンプラン何とか申すところにて、お逢ひなされし藝しやが、このお時に似て居るとのこと、どちらが美人てすか、それだけ御知らせ下されたく、妾の方が女ぶりがよかつたら、何でも貴君樣のすきなものをおごります

左樣なら、御きげん宜しく、これだけ書くのに、三時間かゝりました、雪が降るかも知れません、御身御大せつに祈上候、かしこ

酒のみ女より

松さき旦な樣

此の手紙を讀て見ても、お時の自暴自棄、お時の捨ばちは、未だ自意識の境を脫して居ない事が判る。斯

うした女は、救はうと思へば救へるものを、お釋迦樣もエス樣も、未だ朝寢の夢が覺めないと見える。
最う書く事が無くなつた。ドムでも飮んで宅へ歸り久し振に可愛い子供の顔を見ませう。
下らない事ばかり書いて、失敬、失敬。(プランタンにて)

人物評論（二十六）

大倉喜八郎と安田善次郎





△大倉と安田

文學博士　三宅雄二郎

大倉氏及び安田氏は世間の所謂成功的人物なるものゝ模範である。歐米でも成功は所謂成功の意義になつて居るのが多いが、所謂成功だけで足らぬとする聲の聞ゆるも稀でない。日本で成功といへば殆んど金

く所謂成功であつて、所謂と所謂でないとの差別がない、所謂成功だけで足らずとする迄の餘地がないと見ゆる、今の處或は已むを得ぬのであらう、所謂成功も成功は成功であつて、如何なる成功にも必要たる條件を備へて居る。その條件は普通に知られた事であるが、多くの人は自ら行ふ事が出來ず、行ふても低い程度に於てし、或は稍々高い程度に於てする。若し更に高い程度に於てすれば所謂大成功者となり得るのである。彼れ二人は事實に於て之を示して居る。

二人の性行は大に違ひ、遣口も大に違ふが、共に所謂成功の秘訣を得て居る。日本人の欧米人に及ばぬ所として色々說くものがあるが、二人は欧米人に劣らぬ事を證明するの材料とするに足る。遣口は全く欧米の所謂大成功者の遣口である、若し欧米に生れたならば、嶄然頭角を露はし、今よりも幾層か發展し得たであらう。人の欧米人に稱するは精力である、日本人は如何も精力が足らぬ、多く見積つても同位置の欧米人の三分二だといふ。併し彼の二人は何の點に於て欧米人の精力家に讓るべきか、精力にかけてはヒケは取るまい。實に二人共に精力あるが、安田氏は秩序立ちて仕事し、大倉氏は果斷勇決して仕事する。大倉も秩序立たぬではない、必要なる限りに秩序立てる、安田も大膽でないでは無い、必要があれば果斷勇決する、先づ現るゝ順序に於て、一は秩序を主にし一は勇斷を主にするといふのである。日本人は時々の思付で仕事をなし、フイツトで仕事をなし、秩序立てる事に長ぜぬといふが、安田氏の歩一歩地盤を鞏固にしつゝ次第に發展する處は欧米人の最も秩序立てるものに匹敵しはせぬか。氏は金貸を以て一貫し、金貸の外殆んど何事をもせぬ、時に試みたのは旨く成り立たず、經驗して長所短所を知つた所もあらうが、一意專心金貸となり、金貸業に於て金融界の大立物と爲るに至り、而して他に關係するは保險業位のものである、元はといへば矢張り金貸業である。銀行家として是程の腕利きはない、苟も金を貸す段になれば人の見えぬ所も見え、驚く可き大膽な事を敢てする、そして事は理想通りに行はれる。氏は實に銀行家としての天才を具へて生れたのである。

日本人は小成に安んじ、一事業が成れば樂隱居でる氣になるといふが、大倉氏はさうでない、欧米人の最もエンタープライジングなるのに匹敵する。氏は銀行業を好まぬ、事業といふ事業に携はらうとしながら、銀行業に携はらうとはせぬのは、事業を起すに熱心にして、人に貸して利息を收むる位の金があるならば之を或る事業に投じやうといふのである。人が六かしいとする事で、金の力で出來る者ならば、遣つて見たい、遣つて見て出來上ッたならば其れを一大愉快とするのである。あれほどエンタープライジングならば餘り不足は無いでないか。幾らも事業が成り立つたが、後から後にと何か目論見をする。最早や金も出來、左樣金を儲けずとも宜からうといふものあるに對し、己は事業が何よりの樂である。事業をせん位ならば命は無くとも宜いといふ、實に事業が生命なのである。決斷をして最後ならしめよ(レット・デシヴヨン・ビ・フアイナル)といふ語がある、大倉は能く決斷をして最後ならしめる。

若し獨立自尊己の力で運命を開拓するといふ方よりいへば、安田は大

倉の上である。己れ人に頼まず、人己れに頼む、金の事で政府に頼まず、政府に頼まれる、己の儲けた金の力で横行濶歩して居る。是より見れば大倉の御用商人として儲けて來たのは意氣地ない沙汰であるが、銀行家と事業家との違もある、金貸は貸して利を取りさへすれば宜い、誰に貸し附けても利の高い方が得である。別段政府に賴み込まずとも宜い。高利貸は裁判所で威し附ければ儲ける事が出來る、平沼なんか隨分儲けた。併し事業はさうは往かぬ、今こそ民間に樣々の事業もあるが、少し以前迄は事業らしい事業は重に政府と關係して存在して居つた、事業好きの大倉は現に御用の事業が目の前にブラツいて居るに、只徒に見過して行く譯にいかぬ、面白い事業があるなら片々から遣りたいのである。小さな御用商人は御用に應ずる事が出來ぬ、一度にケツトを幾萬枚と納めたり出來ぬ、人の出來ぬ事は己がする、出來ぬ事をすれば儲も多いといふので、大きな請負となると引受けて人に鼻を明かす。思ひ切つて事業を爲さうとする所では安田の上である。金貸も入用であつても金貸ばかりでは仕方がない、寧ろ事業を起すが肝要である。事業を起す上に於て大倉は頗る面白い、人が造り得ぬなら己が遣らう、天下の大倉は此の如きものだといふを見せ樣とする。何でも大きな事をしたがる。邸宅を造り別莊を造るも左樣である。樂隱居する氣で造りはせぬ、子孫永遠の計を爲さうといふでもない、何程財産を殘して置いても子孫が愚ならば之を無くし了ることを知つて居る、が何百年と傳はる建築物を殘して置くならば、代が變つても是は昔大倉喜八郎なるものゝ造つたものと傳はれば宜いといふのである。

安田は銀行業の外別段大きい事を望まぬ。至極儉約である、厘毛も苟もせぬ。大倉は長者の萬燈貧者の一燈位の割合の事をする、時としてそれ以上の事をするが、安田は精々で百燈位である、それも甚だ六かしい、一燈も出さぬことがある、其過て大倉は面白味があり。安田は面白味がない。併し安田は人から謗ふも、人から貰はぬ、大倉と違ひ、政府から貰はぬ、貰はぬから出さぬといふ了簡もあらう。仕事の上では、秩序立てる事が肝要であるならば安田は妙を得て居る、エンタープライジングが肝要であるならば、大倉を稱すべきである。秩序立てて惰力を活用する事と、決斷して意志の力を發揮する事と、共に成功に必要であるが、彼の二人は此に得た所があり、以て能く彼の如きを致した。歐米人の成功の秘訣とする所で彼等に何の足らぬ所があるか、二人はプッシュ・ツー・ゼ・フロントして其の結果を得たのである。

然るに二人は何處となく物足らぬ感じのするは何であるか、見地の低い處が最も與り居りはせぬか、安田氏は素手で巨萬の富を積み、動もすれば金融界を支配するが、巨萬の富を積んで畢竟何を爲樣とするか、金融界に便利を與ふるは世に益する所無しとはせぬが、つまり人の事業を爲すの補助と爲るに過ぎぬ、己れ自ら何の事業をし樣といふのでない、自らは金を抱きかかへて居るのみである。金山を所有しても之を發掘せず、金山の所有者として滿足し居ると異なつて居らぬ。大倉氏は金を活かして遣ひ、前に無かつた事業を起したりする、國家若くば社會の爲に

なると聞けば、多少出金する、學校をも起し、濟生會にも割合に多く出した、國家とか社會とかいふ事に耳を假す丈の事はある。併し手段を構はぬ、目星を附けて權門に取り入るには何でもする、御機嫌に恊うとして到らぬ處がない、血族をも犧牲にする、苦肉の策をも敢てする。且つ國家社會の爲といふも餘りに名聞が勝ち過ぎる、何でも大倉を吹聽せねば氣が濟まぬ、吹聽にならぬ事には金を出さぬ、學校でも大倉の學校といふ看板を掲げる。天眞爛漫といへば天眞爛漫であるにしても如何にも見地の低い次第である。只金を握つて離さぬに優る事萬々だが、何處か下郎根性がある、何時迄も肴屋上りといふ所がある。併し完全なる人の見附かり樣がない、他の有象無象に比べれば事業家としての快男子である、賤しい處あるにしても面白い。

大倉氏本年七十六、安田氏七十五、尙ほ己の職とする所に從事して倦まぬ。今に於て少しく心を改め、所謂成功者より眞の成功者に轉じては如何か。カーネギー氏も所謂大成功者であつたが、漸く眞の大成功者と認めらるゝ樣になつた。所謂大成功者ならば他に幾人もある、カーネギーが群を拔いたのは眞の成功者としてゞある、所謂成功者で世を終つては、死んだ後に遺るのは家と金位のものである、墓の下に何處の馬の骨が埋つて居るかを尋ねられもせぬ。二人全く性行を異にするが此邊に考ふべきである、授爵云々に至つては如何でも宜い、今となつては受けぬ方が宜からう。政事家に比べれば大倉氏は伊藤公の類で、安田氏は山縣公の類であるといふべきか。

△性格の丸で異つた男

壽老人

大倉と安田とは丸で性格の異つた男だ、大倉は七十幾つで、安田も七十幾つでありませう。が、大倉にはいくら年を取つても稚氣がある。處が安田には藥にしたくつてもない。一言にしていへば老練だ。も一つ進んで言へば老猾だ。そこで稚氣のある丈け隨分一面には、恰度小供が非難さるゝことをするやうに大倉も非難さるゝことをすると今時に、一面には矢張り許されて可愛がらるゝといふ事がある、が安田の老練老猾に對しては誰も可愛がり得るものはない。私は算盤を握つた事がないから詳しくは知りませんが、身代の上からいへば多分安田の方が上でせう。けれども大倉もなか〳〵大きくなつて居る。天津邊のパニックなどには大分大疵を被つたやうであるが、そんな事にはビクともしない。さうして支那方面の商業に活躍して思ひ切つた事をやつてゐませう。又大倉はそんな事が好きだ。そして稚氣のある丈けしくじりもあるやうだ。安田には頗るしくじりが少い。又手を容易に出さない。出したが最後金輪際放しはしない。轉んでもなか〳〵只は起きない。尤も意外にも桂の財政には安田も一寸氣を許し過ぎたかの如くにも見えて居る。あの公債借換を桂にさしたのは安田の献策であつたといふ事は間違がありますまい。それで安田がどれ丈けの利益があつたかといへば、私にはどうも疑問だ。つまり

桂の財政を買ひ過ぎた、買つてやり過ぎた。桂からいへば安田は可愛い奴、らい奴といふかも知れぬ。桂からさういはれるのは安田の名譽でないかも知れない。が然し一國の財政に關してあのやうな力を振つたとすれば安田の老氣秋に横はるといつてもよいかも知れない。兎に角、大倉、安田、二人とも日本の商業界の豪傑に相違ない。

惜しい事には二人共年を取り過ぎて居る。此上らンとやるといふ事は一寸六つかしい。問題はあの先生達が此先どうするかといふ事である。傍から見た所では二人共あんまり自分の後の事などを考へてゐるやうに見えない。死支度などをしない所、そこがあの先生達の豪傑である所以かも知れないが、傍から見れば危いやうにも見える。外の國でも必要であるが如く、日本でも大金持といふものは必要なものである。一體大金持といふものは餘り可愛くないものであるが、然し大金持にして貰ふべきものも、させるべきものも世の中にあるのである。日本も發達するに從つて、今現在居るよりも、もつと大きな金持が必要になつて來る。そこで國に對する御奉公からいつても、死んだ後で餘り滅茶々々にならぬやうに、自分の生きてゐた時同樣若くはそれ以上になつて國家に御奉公が出來るやうに少々考へて置いたらどうかと思ふ。

△大倉君と安田君

田川大吉郎

○大倉君と安田君、何といつても明治の豪傑の一人だ、僕は決して無茶苦茶に之をけなさない、

○其大倉君とは多少知り合の關係はあるが、其安田君とは、君はば半面の識、どこかで其顏を見たといふ迄の緣で、面と向つて對談した覺えは曾て無い、一體、僕は言ふ迄も無いことだが、所謂、當世の金持とは、全く相知らざる者だ、

○其僕が大倉君と知つて居るのは、僕の同縣對州の先輩に大島邦太郎といふ人があつた、其人は大に顯れずして既に無き人の數に入つたけれど、其父は維新の前後に、木戸、伊藤諸氏と徴逐した、矢張、當時の俊傑の一人で、伊藤公等は始終其邦太郎氏を引立てやうと厚意を運んで居た、其邦太郎氏の才錄も亦尋常ならずで、曾て兵庫縣の參事官をして居た頃、今の遞相林伯は其縣知事であつた、而して遠からず外務に轉じ、公使として伊太利に駐劄すべきことが内々定まつて居た、其際、林伯は其邦太郎氏を一緒に伊太利に往かうとすゝめたものだ、而して僕は碌々、到底大臣の器で無い、次官位が精一杯關の山だが、君は有望、歸つて當に大臣となるべしとなど激ましてくれたこともある相だ、

○其邦太郎氏が過つてまごついて、遂に活路を臺灣に求むることに爲つ

た、其際氏を世話した人は大倉氏である、僕は其關係から大倉氏を知つた、其ために幾度か大倉氏を訪ふた、それは大島氏に賴まれて訪ふたこともあるが、又、大島氏を大倉氏に紹介した先輩の旨を承けて訪ふたこともある、つまり其緣で、僕は珍らしくも大倉氏の門に客と爲つたことがある、而して其際の大倉氏は如何にも親切懇勲であつた、

◎其後、僕は臺灣協會を創立した、今の東洋協會が其後身である、其臺灣協會を創立すべき發起總會の頃の事である（桂公が同會に投じ來る前）僕は事實の創立者だけれど、少しおくれて參會した、而して其間に此協會は政治をも議する事にしたか、議せぬ事にしたかと問ふた、丁度、傍に居合はせた大倉氏は、皆まで言はせず、無論、議しますとも、政治を議しなくて何を議しますか、瓜哇クラブなどは現に盛んにそれを議して、當局者の後援ともなり、又、指導監督者とも爲つて居る、臺灣協會でも、無論、それを議せねばなりませぬと、最も眞卒に、一點の淀みも無く答へてくれた、僕は、此答へに就て二つの考へを得た、臺灣協會はいよ〱政治にも論及することゝ既に議定されたのである（此は其前から議論が二派に分れて居たのだ）大倉氏の如き一番弱さうな實業家が、此んな強い意見を大膽に主張するのだから、さては、此方針は臺灣協會に於る全會一致のものであると、而してしみ〱僕は大倉氏を見上げた、人は見かけによらぬもの、氏は存外の氣骨見識を有して居ると思つた、

◎既にして臺灣協會は桂公を迎へて副會頭にした、又會頭に座せた、創立總會があつてから正に一年の後であつたらう、意外にも、臺灣協會は政治を議するか否やの問題が起つた、起りは臺灣の事業公債六千萬圓の募集に關してゞある、僕は如上の記憶から、無論、論及すべきものだと主張した、（最初の程は無論其樣な疑ひは無つた、現に幹事長水野遵氏は僕等を其私邸に招いて公債問題を議し、協會は田口卯吉氏、阪谷芳郎氏等を委員として其可否を調査せしめた）所が、協會の空氣は何日の間にか一變して居た、而して協會は政治を論ずべからざる所と明らさまに要求された、僕は自ら憤慨に堪へざると共に、僕の同人に對してもつく〱不面目に感じた、而して思はざりき、大倉氏は其僕の心得違ゐ、記憶違ゐを論し、宥め、賺す一人であらうとは、丁度、總會の席上、其別室に於てゞある、僕は此時、大倉氏の物の言ひ樣、話振り、人を說き方の稍細かき一班を知つた、成程、練れて居る、流石に海山千年の奇才だ、

◎此んな場合に大倉氏のみを咎むるは酷だ、水野氏は既に其說を變じて居る、水野氏のみか、多くの評議員は皆其說を變じて居る、僕の知る所、故杉村濬氏のみは毅然として確に操持する所があつた只一人である、そは兎に角に、僕は此くして略ぼ大倉氏を知つた、臺灣協會は、僕の如き貧乏者が事實の創立者だけれど、割合に財に裕かな協會と爲つた、桂公の力である、同時に大倉氏の力である、而して僕の肩は自然に拔けた、僕は從來協會の創立などを思ひ立つたことは無い、其之あるは臺灣協會が始まりて、今太平洋協會あるのみだ、而して臺灣協會は僕に於て何かと殊に追懷の種子が多い、而してその度ごとに僕は必らず桂公と大倉氏とを思ふ、

○安田氏に對しては、噂はいろ〳〵聞いて居るけれど、只一つ其將來に、斯うもあらうかと思ふて居ることは、東京灣の築港である、若くば其埋立てゝある、其築港若くば埋立に就て、安田氏が、他の富豪を排して、敢然自らそれを背負ふて進まんとする雄算のあるらしい事である、僕は此點から窃に安田氏を偉なりとして居る、其眼が群を拔いて居ると思ふて居る、それが果してどうなるかは別の問題だ、人生の事、兎角に意の如くならざるもの十中に八九、それがどうなるかは固より豫斷の限りでないが、安田氏がそれに着眼して居るといふ一事、固より金儲のためとしても、其志が遠くして大きい所がある、或は必らずしも私のためのみならずと思はるゝ所がある、僕は、只守錢奴一方の人として氏を見ることを首肯しない、固より左樣な所もあらう、それが氏の性格の大部分かも知れない、然しさうで無い所もある、それに止まらぬ所がある、僕はそれを此方面から氏の爲め窺ひ居らるゝ樣に思ふのである、

◎大倉氏は動的の人であらう、安田氏は靜性の人であらう、故に大倉氏には安田氏よりも危き所がある、同時に安田氏には大倉氏よりも手堅い所がある、これが安田氏の事業が久ふして益々鞏固な所以である、大倉氏の事業が、ともすれば危ぶまれがち、浮沈の激しい所以である、從つて大倉氏には、目星しい事なら、どんな事でも相談が持ちかけられる、革命黨からの借款問題でも宜しい、同時に大倉商業學校でも宜しい、若くば大倉美術館も亦可なり、其勃々たる雄心の向ふ所、何でも御座れ、皆宜しい、安田氏にはさうは往かない、以て長短を見る、以て得失を見る、以て其志趣を見る、

◎聞けば兩人とも、今の富豪家中で、最も熱した爵位の希望者だとの噂がある、無理もない事の樣だが、實は途方も無い見當違ひだ、日本の社會は元來爵位を官吏の專有物と立てゝ居る社會で、二氏は、其世風を餘所に見て身を立てた人だ、故に其生涯は、元から爵位には風馬牛相關せぬ筈のものだ、其覺悟で身を起したのじや無いか、今にして爵位の慾にあこがるゝのは、七十にして七十年の志を抛つといふものだ、そんな馬鹿氣た事があるものか、僕は其噂の虚傳ならんことを望む、若し眞實ならばそれは魔がさしたのであらう、兩人とも魔がさす樣に爲つては既に末路だ、

◎序に一言する、名を得んとしてもがく人があり、權勢を得んとしてもがく人があり、力を得んとしてもがく人があり、富を得んとしてもがく人がある、皆各々其志を成すのだ、而して今は富の力が割合に發達した時代だ、其時代に實業家と爲つて千萬の富を擁して、一世に雄飛することが出來れば、他の何事に成功したよりも、一番滿足な成功であらう、それに名爵の位階のと、そんな實益のない望みを起すといふことがあるものか、僕は二氏のみならず、他の多くの實業家が。やれ男爵の、子爵のと、思はぬ所に力瘤を入るゝのを見て、片腹痛く、おかしく、愧かしく、氣の毒に思ふものだ、僕は皆の人が皆其境地に獨立の旗を樹て、不朽の志を成さんことを望む者だ、今日の時勢から、特に富豪の眼から見れば、大臣、大將、學者、文士、記者は、皆其門に趨走して其驅使を

待つに急なる者ては無いか、僕がこんな事を言ふと、僕は或は其人達の怪怒を招くかも知れないが、然しながら思さずして言へばマアそんなものだ、大倉氏や安田氏にそんな器量の有るか無いかは別として、僕は、實業家が、もそつと其器宇を大きくし、更に一層其大地を神聖不可侵のものにする様にと望んで居るのである。

△いゝ取組

京童子

○大倉と安田、いゝ取組だ、此二人を評するにはどうしても行司心でなければならぬ、二人を土俵に上せて、彼一手、此一手、彼一技、此一技。双方の長所短所。得意不得意を比較し來つて彼等の今日ある所以を論じて見たら面白からう。

○安田といふ奴、あいつはなか〳〵喰へる代物ぢやない。我輩は、命名して「銀行倒しの名人」といつて居るが、ボロ銀行、破産銀行に金を貸して、ヅッと自分の手中に收める手腕と來たらそれは〳〵怖ろしい。確か百三十銀行かゞ破産しかけた時と思ふ。内田山の刀豨侯は安田を呼び寄せて、アレを救つてやれとの厳命を下した。安田は謹んで申上げた。御仰せの程御尤とは存ずれども某の微力にては到底も〳〵左様な大任は果せません。此段幾重にも御辭退申す。さりながら閣下が何處までも某に御下命下さるとならば、某もお願が御坐る。斯ういつて膝を進めて、金額は確かに記憶せぬが何百万圓かを廿ケ年間無利子で大藏省から借りるやうにと願ひ出た。刀豨侯はおれの命令を聽くならお前の頼も聞屆けてやらうといふので、早速大藏當局に命じて安田の願ひの通り無利子で貸し出させた。處がよく勘定して見ると何百万圓かを無利子で廿ケ年借れて居れば、安田が一厘も損をせずに、而かも廿ケ年後にはうま〳〵と其銀行に貸した丈けが丸儲けになるといふ計算になつたさうだ。そんな所の拔目のない所と來たら天下第一であらう。

○大倉といふ奴、こいつも亦なか〳〵油斷のならぬ男だ。一寸見た所安田とは違つて、どこか豪傑らしくて、金放れが奇麗なやうにも思はれるが、金の話を持掛けられゝばトボケて白を切ることなどの旨い事それはない。佐々木高行といふお爺さんは溫厚の君子人で、なか〳〵人を怒らぬ人であつたが、何かの公共事業に大倉に寄附を勸めに行つた時は、ひどく怒つて了つて、大倉のやうなあんな汚ない奴はないといつて居つた。

○以上は二人の金にかけてのコスク、キタナイ話であるが、然し二人は何事にかけても万事此調子だ。二人をよく知つて居る人から我等の先きにいつたやうな行司心で評して見て貰て御覽なさい。詰度面白からうと思ひますよ。

△我實業界の双璧

早川鐵冶

一體日本で最も商業に適當なものは北陸道の人間の樣だ、物事に細かに氣が着いてそして忍耐力が强い。特に事業を爲す上に仲々勇氣がある。れつい。即ち粘り强いといふ奴(やつ)だ。それ故東京で大きい金持といふと多く北陸道から出る樣だ。大倉喜八郎、安田善次郎、高田愼藏、日比谷平左衛門、淺野總一郎など皆左樣、銀行トラスト王としては安田善次郎、事業家の張本としては大倉喜八郎。共に現代の日本に於て實業界の錚々たる立物だ。その大倉は越後の新發田の人で安田は加賀の大聖寺の人である。共に初は小つぽけなもの、安田は鰹節屋に丁稚奉公をしたが大倉も亦魚に緣があつて魚屋をしたものだつた。それが今は彼の通りのものになつた。安田は金貸し、銀行で次第に財産を築き上げたが、大倉は戊辰の役より始めて戰爭を利用し、軍器彈藥を賣つて儲け、それから洋服屋をやる、海外貿易をやる、又御用商人となつて政府の御用足をもやる。即ち安田と大倉とでは事業の方面が全く違ふ。一は金融方面であるに對して一は事業方面である。

けれども二人とも七十五六、年齡は相同じく。そして昨今は近く互に交際をし、親みも加はつて居る。實に適才適處に居り、思ひ〳〵に辣腕を揮ふのだから面白い。安田の何處迄も銀行家であるに對して大倉は何處迄も事業家である。安田は緻密で一毫も苟もせず利殖をのみ計つて行くが、大倉は粗い、粗いけれども思ひ切つてやる。日露戰爭後に直に南滿州に手を出し本溪湖の炭山を買つた。そして一方濟生會には百萬圓を投ずる。儲ける事も儲けるが出す方にも深く出す。大に儲かれば直に學校を造るとか何とかする。日露戰役の時にもだと思ふ。自分の美術館を賣拂つて直に献金した。遣る事が凡て人の意表に出る。それ丈絶へず活躍の趣がある。安田は金貸だから金は大倉よりはあるけれども事業は餘りやらぬ。只ボロ銀行を買つて漸々成功して來て居る。事業家と金融家とは共に實業界に無くてならぬものだから並べ重んずべきである。

安田は何處迄も温和しく、茶の湯をやる。風流な事が好きだ。大倉にはそれがない、けれども亦文才がある。狂歌を作る。書も仲々達者である。二人とも學問といふ學問を規則的にした譯ではないのだけれど、何時の間にか相當にやつて居る感心なものだ。

私は幼年の頃から幸か不幸か知らぬが天下の豪傑と交つた。例へば後藤象次郎とか陸奥宗光とか、又外交官として外へ出ては彼の有名なビスマークとかジエームス、ブレーンとかいふ人々にも會つた。一代の豪傑などいはれる人物には何處か怖い樣な所があるけれど、一方には又甚だ拔けた處がある。後藤伯など胸に機變を藏して仲々喰へぬ人だけれど、家庭に入つて見ると丸で小供じみた處がなる。剃刀大臣の陸奥も亦左樣であつた。鐵血宰相ビスマークに至つては又格別、ブールドツグと渾名された程あつて、六かしい顔付、其目からは後光を出す樣だ、處が家庭に

於ては丸で違ふ趣がある。始終其夫人からオットーシェン、オットーシェンと呼ばれて居る。シェンとは小供等に用ふる愛稱なのだ。大人物には何處にかゆとりのあるものだ。安田は温和しい一寸の人でそんな風は少しも見えぬ、最も私はどちらも知つては居るものゝ安田の方は左迄親しくない、が大倉とは親しい、事業も一所にして居るし。又私とは性質にも稍々似た所があるかして自然に交りも近くなつて居る、其の所爲(せい)でより好く知つて居るといふ譯からかも知らぬが。どうも大倉には一種の豪傑大人物といふ風がある。一方頗る緻密なるが如くにして又抜けた所がある。是が一歩他に抽んじて居て、而かも可愛ゆい點である。安田になると緻密で抜目がない。大倉には抜目がある。大抜かりがある。是が抑も大豪傑の資格である。

曾て大倉が還暦の祝をした事があり、私も招かれて宴に列したが、其時家人が翁に向つて言ふには、事業には兎角盛衰がある。あなたも最早や還暦にもなり、追々年が寄るばかりだから、是から危い事の無い爲安田さんの樣に銀行でも建てて、そればかりになさつてはと、すると翁は大聲疾呼して家人を叱し、何事だ。此大倉は事業を以て生れて來たのだ。それが事業を止して如何するか、失敗したとて元の大倉だ。元の大倉は尻つ切りの着物一枚で東京へ來たのだと言はれた。翁は今や七十五六の老齢にも拘らず、實に此元氣を以て猶ほ日々事業に奔走し、熱心に經營し行かれるのである。安田は温良の人だけに何人にも恨を結ばぬが、大倉は斯く元氣横溢の人だけに隨分人に向つて議論もすれば喧嘩もする。それ故世間に敵も多く往々人に惡く言はれもする。事業家、金貸し共に實業界に必要なるものであるが、國家の上には事業家の方が利益があると思ふ。

大倉には風流はないといつたが、併ヘコには安田の茶の湯と全然趣味の違つた一中節がある、酒酣に耳熱し興熟して來ると之をやる。要するに大倉は何處迄も陽の人である。安田は陰の人である。大倉は家を建てるにも伽藍洞の宏壯なるものを造るが安田はイキナ引締まつた優雅なものを造る。一は粗である。一は精である。粗。故に大倉は疵だらけである。精。故に安田は完全無缺である。

澁澤に加へて大倉、安田は共に我實業界の三傑である。三尊である。此三尊百歳の後我後繼實業家に能く衣鉢を繼ぎ得るものがあらうか。澁澤程の徳望を有するものがあらうか、大倉程の事業のやれるものがあらうか。安田程の金融界の大勢力を背負つて立つものがあらうか。政界には伊藤已に逝き、現存するものは大隈、山縣、井上の三傑あるのみ、此三傑逝いて後には何人か能く其後塵をだも拜するを得べき。我輩は之を想ふて常に政界人なきを嘆ずるが、之と同時に實業界にも三尊以後又三尊あるべくもなきを觀て甚だ遺憾に思ふ。三尊は今日の日本に取つて甚だ大切な人物である。

△安田の方がずつと上手

青南子

▽大倉と安田！　そりやどうして安田の方がずつと上手だらう。安田はなか／＼算盤に明るいさうだよ。あの男の計畫した事は當てが外れるなどいふ事は滅多になからう。大倉は時々しくじるからネ。

▽大倉は顔を見ても分るぢやないか。いやしい、品のない男だよ。學問のない事は安田も大倉も似たものだらうけれども、大倉には殊に俗氣があつて嫌ひだ。あの男はつまり伊藤とか桂とか、何でも時のお役人の所へへばりついて儲けさして貰ふのだからナ、いはゞ一種の幇間サ。實際大倉は先天的幇間といつたやうな趣があるよ。

▽そこになると安田の方がエライよ。兎に角自分の腕一つで立つて行くからナ。尤も安田も小さな銀行に金を貸して、自分のものにしたりする癖があつて、人からは憎まれるサ。然し憎まれて居つてもドコか偉い所があるネ。僕は二人を比較したらどうしても段が違ふ役者と思ふネ。

△大倉君と安田君

男爵　澁澤榮一

兩君とも私には古い親友であります。互に年を取つて居りますから種々なる經歷を重ねて居ります、安田君には明治七八年頃私が銀行者と爲つてから知合になり、其後段々懇親を重ねて來たのであります。大倉君とも明治八九年頃から交際したと思ひます。

安田君は元は多分兩換屋といふ様な業務であつたらしく。其業務が追々進んで明治の初には銀行者として頭角を現はしました。大倉君は初から商業家として發達したといつて宜く、其中にも海外貿易に最も力を注いだ人であります。

兩君共非凡な精力ですが、其非凡の點に大なる違ふ所がある樣です。兩君の性格を示すに最も分り易い樣な形容辭を思出すことが、困難ですけれど、大倉君は譬へば先づ河海の長く流れて津涯を認め難い樣な光景を描き出すのです、併し時としては茫乎とすることもあるけれども概ね人の意表に出でゝ奇抜な行動が多いのです、而して是非の見極めが附くと早く決斷して他人を顧ずに直にこれを發表するといふ氣象を備へて居る。又安田君の特性は如何にも緻密で物事に就て其用意が周到であります。譬へば名人の極彩色の繪畫を見る樣に一木一石も其位置を得て居るこれを山水に譬ふれば瀬戸内海の景色の樣に前後照應して一毫も亂さぬ布置の跡が見えます。但し餘りに行き屆く處よりして作意に過ぎて天然を失するの憾があります。

要するに兩君とも事の出來榮えを早く見得る人です。凡そ世の中に事物の結局に早く見込の附く人が勝を制する樣に思ふ。出來ぬ事を何時迄も愚圖々々心配するものと、又出來る事を彼れか此れかと長く躊躇するものとは何方も成功は出來ない。大倉君は一氣呵成、安田君は一分試しと

いふ兩極端の差はありますが其見極めの早く附く點に至つては、兩君共に其揆一なりといつて宜いと思ひます。それ故兩君共其初は貧困にして志大なれども、人からは十分の信用を得なかつた時代もありましたてせう、但し私が直接左樣いふ場合を見たといふてはありませんけれども隨分難儀をされた事もあつた樣です。がそれ等の百難を排して今日の成功を贏ち得たのであります。安田君も大倉君も其資力は大分大きいものでせう。私は何れ程の力を持つて居られるか其測量は好みませぬけれど我邦にては有數の豪富と思ひます。

天保時代の商賣人には凡て完全なる教育を受けた人とてはありません。舊いにせよ新しいにせよ滿足な學問をしたといふ人はありません。斯く申す私なども、實は偏頗なる漢學教育に發成されたものですが、時勢が時勢だから致し方はありません。中には目に一丁字無いと形容すべき程の人もあり、又一通り新聞紙位は讀め、手紙位は書けるものでも文雅の無いものが多い、縱令有るとしても僅に古楙畫又は骨董品とか茶器を好みてこれを誇りとする位のものが多いので、學問を好み、學理に由り、歷史文學若しくば哲理に興味を持つといふ樣なる考にて今日の事務を取つて行く人物は貨殖を謀るものゝ中には兎角乏しいのであります。然るに兩君共此文雅を備へて居られる樣であります。就中大倉君は當世風の學問も古風の漢學も滿足にはやられぬけれども、日頃種々の讀書を好み且つこれを氾讀して世情を解し、常に狂歌をもつて凡ての事物に加味して實行せらるゝらしく、老年に至つて特に此氣風が進む樣に思はれます。又安田君も近年繪畫を嗜まれ、また御手並は見ませぬけれど大分此頃は上達せられたと聞きます。又茶事は一の本職としてやつて居らるゝは大倉君の一中節と好一對にしていつれも綽々として餘裕ありと御褒めして宜いと思ひます。

唯兩君共に蓄財の意念強く、又其能力の勝れて居る爲めに、安田君の如きは自己に厚く公共に薄きの嫌を世間の人に起させますのは多少遺憾とせざるを得ぬと思ひます。必ずしも左樣でもあるまいけれども、其力の現はれる點に於て公を後にして、私を先にするかの誤解を招きます。又此誤解をなからせ樣とするには今少し他に方法があらうと思ひます。又大倉君の從來の經營に於て一種の御用商人的の行爲多きに就いて彼是れ世間に誹謗がありますが是は兩君に對して所謂玉に瑕と言はなければなりません、けれど私は此等の些事で此實業界の偉人を傷けたくないと思ひます。尙は細かい事で物話をすれば限りなくありませうが餘り長くなりますから先づ概略だけに止めて置きます。

和歌

尾上柴舟選

若林牧春

○

春に入る心明るくなつかしく若草の芽に日のそゝぐなり

戸を閉ぢて街へ行かむとふと仰ぐ空に雪こそ降りいでにけれ

ぬけ落ちし長き髪の毛もてあそびとりとめもなくものを思へる

つかれはて獸のごとくまろび寢むあはれや今日もたそがれにけり

酒飲みて今宵一夜をうたはんと來にけるものを涙わきいづ

○

安井竹美

雛鳥の巣だちしあとのせきれひの巣のあかあかとうつる落日

夕まぐれ莖細き桑の靑き葉にうすく光りて春の雪ふる

野よりかへり指にうつりし草の香に心そゝられ消息をかく

汝が母は汝をたよれりわが父母はわれにたよれり別れなむいざ

芝居よりつかれてかへる人たちにすこしはなれてあゆむはかなし

夕日させば木の葉よりくるうす黄なる反射あびつゝわがあゆむかな

○

眞崎白城

野の末につらなる街のあかい灯にそゝぐ瞳をかすめ降る雪

頰のへにみだれちるこそかなしけれ明るく白き春の淡雪

千鳥なく大川端のみち潮にむかふ心のしづかなるかな

あてもなくさまよふ心うち浸しうちひたしつゝみつる夜の靄

月の出の明るき色にみだれつゝ夜の霧蒼う地にこめてあり

○

日下貢

ものみなが聲をひそめし冬の夜半とほき瀨音が
うれしかるほど
劇場いづれば女役者のせりふのみわづかにみみ
にのこるもさみし
眼路とほくはしるさみしきやまなみに雪しらじ
らとせまるたそがれ
はなさく木はなさかぬ木の鉢あまた緣にならべ
ぬまれのふゆばれ
はやりうたひとあつまればうたひいづるさみし
き男みつつかへりぬ

○　町田不破

白無垢の姿すなほに埋められしそのすなほさが
惜しくて泣かる
手術場のくらきが中にうら若く死を早めたる妻
悔やしけれ
ふしあはせ重ねがさねに來る男母が火葬に泣き
も得ざる子
白々とかまどの奥に燒けのこる小さなるかな我
を生みし母
たへがたみふら〳〵とまた朝風呂の强き刺戟に
身を投げにゆく

○　松島落果

落葉につもりもあへずあは雪のふれるがなかの
靑き月光
梢あをみほのかに梅のつぼむころ空はかなしく
澄みわたるかな
落葉のうへに雪ふるゆふぐれのわれのこゝろの
うすくらがりに
山かげの街にはやくもおとづれしかなしき冬を
うちながめをり
戸をいでよ木の間をさやに舞ひおつる木の葉に
月は靑くてりたる

○　前田黄昏

夕暮をさまよひ出てし土手の上窪地に立ちて口
笛を吹く
明けぬれば哀しき旅を續けなんかく思ひつゝか
るく目をとづ
うら淋し月白々と流れ行く大河端に默せる三
人
枇杷の花白く咲きたり古郷の野にも山にも冬が
呼吸つく

○　大谷桃花

天地に何の暗さもあらぬわれいかなればかく神の祈らる

神に祈る身をばあはれと思ふさへ早も涙に眼はくもるなり

罪もなく暗さもあらぬわが身なり神いかなれば涙強ふるか

身をさゝげ神よいましにしたがはむかく思ふだに泣かるゝものを

○　若木花次郎

風なぎし夜の寺に居て少年が泣きつゝ床に入るがわれなり

妹や居む父や居まさむふるさとの清洲の家にわれの近づく

垢づきし蒲團の中に身をまろめ靜かなる夜の風を味ふ

夕やみのうす明るみに妹が弱き手をもて米とぐがみゆ

○　井田葉歌

林ゆく汽車の硝子に口笛をふく顔うつる胤にやゝ似し

あれ胤が泣くのぢやないか田の中の櫟枯葉がから〱となる

はらからのこれがすべてと見まはしてそと瞳を落すなきがらの上

○　山本清貝

我れすでに生きてあるからは生くるてふ淋しきことを喜ばんとす

ほの白う明けの空氣に浮び出て物思ふらし水仙の花

冬の日もたそがれてけり天地もしじまの中に物思ふらし

○　久津村茫人

うすさむき冬の日あしのをちかたの山にかゝれば心おののく

あるかなきうすき情けの何なれば身にしみ〲とにじむ夕ぐれ

ふと見たる夢はかなしや君ひとりわれを見すてゝ海邊にゆきぬ

○　小島ます子

洛陽の女はをかし小格子の薄き日影に洗ひ髪乾す

我もまた木草のたぐひたゞありにありとばかり

はうたがはぬかな
浮舟か耳かたぶけし水の音湯槽の中に聞く夜ふけかな

○　内山久夢

せともの丶かけなど沈む冬の川大根の色のなま白さかな
山に登り冬枯る丶杉の並木見てしんみり解くる霜の音きく
目の上がけいれんする日のアカシヤの葉のなき並木に冬の雨ふる丶

○　藤井清士

大川の堤の砂に身を投げて草などむしりひとりつぶやく
星のふるあかるき空に見いる時友なき我のたへぬさびしさ
月の夜は城の麓を徜徉ひてひとりたのしむ我にてありき

○　原田銀葉

草に木に萌えし若芽を見てさへも涙ぐまれて春は淋しき
日を浴びて晴れ渡りたる海を見る三月のひるの疲れ心地よ

○　伊藤錄

眠れねむれ夜の明くるにも近からん泣くなかれ見よ鷄ないて居り
地にうつる月夜の町のわれのかげ祈らざる身のものおそれかな
月うすき樹の間の夜氣にくもりたる眼鏡のくらさ心の重さ

○　訥鷗軒

ストーブによれり爲すべき事もなし土曜の午後のこのこころもち
水涸る丶大河の洲にから風の砂山つくる冬はさびしき
うら枯れの郊外なれど出てぬすぐさびしき宿にこもるよりはと

○　山本汀雨

長門路の麥生の上の朝月に旅の心の淋しさうたふ

○　桐壺桝三郎

くまもなく夜はひろごりて樹の肌に露しろじろとふりそ丶ぐかな

あかつきの車窓ひらけばこの國のうす青色の山のなつかし

○　鈴木風影

をちこちに山茶花白く散りてあり共同墓地の冬の夕暮

夕月は税關山の上にあり古りし港の街のさみしさ

○　今井紫郎

僅かなる刺戟におびえおびえつゝ辿り來れるいく月日かな

山裾をたゞひとりゆく旅人に添ふなりあはれうら寒き影

○　下浦潭水

日向ぼこ霜燒の指のほのかゆしうつとりとして三味の音をきく

わがぬかに漆のごとき髮ふるゝ少女にまじりとるかるたかな

○　柳澤黄果

竹の葉のそよげば雪のちりかゝるうすき月夜をとる枕かな

「由井ヶ濱」うたひ出づればあたゝかう涙はてなき秋の明くれ

○　山本春久

醒めたれど夜具に顏うめうつら〱夢のつゞきを追ふこゝろよさ

父母を二なきものとし思ひける七歳の日の心のやすさ

○　菊岡波留尾

霧深く荒海つゝむ晩秋をいつもよく鳴る燈臺の笛

國境をちぎれ〱に雲の飛ぶ君と分るゝ日の淋しさや

○　江澤虹花

圓繞する總てと吾を切放ち丘に横臥す冬の眞晝を

○　森青栗

ことさらに母よと呼びしわがこわね胸にひびきしあとの寂しさ

垢つきし洋書の皮に頰つけて學びし若き日をなづかしむ

○　中川八重子

かゝる日のうらさびしさを何とせむ歌にまぎら

すはかなき心地

○　村井屏山樓

十月の青き天地にうみはてぬこの生活をいかにしてまし

○　木村北鳥

行き疲れ誰を頼りて生くこととかこの日母の子故郷を出づ

○　村上白愁子

心やゝ落付きて來ぬ遇ひ得ざる悲しき事に馴れし此頃

○　村上義信

四十男なほ落ち付かず灯を見ればあたふたとして街に出て行く

○　星野秋雄

美しきゑまひのうちに涙をばかくして行けよ父母のもとに

○　太田忠太郎

うすかすむとなりのくにの山脈をなかめてあれば涙はてなし

○　尾西小鐵子

きききききとながくも啼ける百舌鳥のあり三日の晴れのつづきたる朝

○　横田湖峯

吾れゆゑの君にはあらじ君ゆゑの吾れにもあらじ生きむと思ふ

○　京野青磁

夕まぐれ路のかたへに人夫等が算ふる錢の音の淋しさ

○　田中路草

背の川に濃き影そゝぎ思ふさま陽光を吸ふ家に並みし袖かな

○　平岡保三

子を生みて身の衰へし白兎紅き眼をとぢて物思ふ夕べ

○　雲の城

雪ふれば竹のたわみて軒ふさぐ家に生れて歌をのみおもふ

○　和田信義

さらされし蛇のぬけがら輕る〳〵と冬暖き崖にかゝれる

○　増田末狂

怖れつゝわれはぞこふるくらき森そのなかをゆ

く薄光る水

○　杉浦彩霞

ごと〳〵と菜つみて行く荷車に夕映えすなり冬かれの路

○　長谷川牛丸

歯並みよきほゝゑみ遂に吾がための苦しき過去となりてはかなし

○　佐野珂村

赤き實の庭にふくらむ冬の朝渡り鳥など啼けるよろしさ

○　若杉すだく

いづくやらむ祭の笛のかすかにも流れてくる夜君と歩めり

○　馬場埋木

二十四と云ふ元旦になりにけり鏡に顔をうつし見るかな

○　池永蒼桐

野より野へ暗のいろ紫に國をながるゝころの山燒き

○　伊藤楊花

醉ひ足らて座に殘されし人のごと持てあましたる我が命かな

和歌應募の注意

○東京市小石區原町百十五尾上柴舟氏宛
○用紙は半紙大の原稿紙に限る
○封筒の表面には必「中央公論歌稿」と朱書すべし
○氏名住所明記の事

▲口繪の說明

本號の口繪「オロラ」(夜明の女神)の筆者アンリ・フアンタン・ラツウル(1836—1904)は佛國近代名家の一にして、ドラクロアに私淑し Homage to Delacroix と題する畵を作りて此大家に對する尊敬の意を表したるとあり。其好みて畵題とする所は傳奇的(ロマンチツク)、想像的(イマジナチヴ)、比喩的(アレゴリカル)又は神話的(ミソロヂカル)のもの多く、又音樂を愛し、これに關する普譚中より畵題を採りたるもの少からず、其他花卉にも深き趣味をもちて畵きたり。彼の有名なるキツスラアの如きは此人の感化を受けたる所多し。

俳句

椿

高田蝶衣選

密使迎ふ日の白椿露下りて　鎭西郎
落椿風穴を石塞ぎせる　同
坑夫納屋裏菜も作り居り椿照る　同
妻女知らぬ遺稿あり椿白き咲く　同
椿咲くや墓地移轉道の先づ成れる　同
篆法にかゝる頓悟を椿落つ　摘星辰
椿瀞水取り船の今日もあり　同
白椿徒らに書淫の名に住めり　同
盜を放つ磊落に床の椿落つ　同
磯椿養干秣を引ぎはへて　同
ほろ落つる椿見て粉挽の母と居き　月精
椿頃を對陸の百貨臻り初む　同
診來し懸念を洩せば椿もろ落ちぬ　同
紫山雨にいや濃き窓の椿咲く　同
炭竈を閉づ供御や椿山日和　同

城趾訪へば瓦器勸め賣る椿宿　天樞
開帳に同舟の女や島椿晴る　同
歸錫待てる寺門や椿無爲に落つ　同
宿損も云ふ講籤日椿晴る　同
厠神祭る日なりし椿宿訪へば　同
唄はずば梭音添はずよ椿咲く　花馭史
廓用水引ける野や椿晴るゝ里　同
塚堀りし鍬清め盥椿落つ　同
筏流しも麓椿の晴れよさに　同
妖姫石に化せし祀れり白椿　波月
馬場椿響せり鞍馴らし來て　同
祀き事に卓巾濯ぐ椿晴　同
椿咲く羅漢寺や裸岩聳ゆ　同
講習に來て舊知訪ふ門椿　同
落椿流す一縷の水の宿　聲耳生
遠灃の濱宮は椿咲くところ　同
私謁日の門頭を椿吹きさかる　同
椿落つ山莊や日々の雪解鳴り　宙斗
狸囃す椿寺や月白照れり　同
椿寺朱に彩りの太柱　同
貝塚ほとり椿照る霧透きの旭に　同

隠れ栖めど過ぎる志士あり椿森　不寝庵
轆轤細工も鬻ぐ温泉村の椿宿　同
先住は鍍を愛せり墓椿　同
往くさ來るさに頼む噴井や驛椿　同
鷄舍番の椿照る火も藪透いて　貞丸
椿照る月は鹽屋の洲に赤し　同
椿咲き果てり養兎賣り減りに　同
線香の秘授に椿の窓を鎖す　同
高き椿と白壁指せり湖渡舟　冬城
椿藪に立つ禿倉奇しう水噴けり　同
鏡立てし娘に禽鳴くや椿落つ　同
椿山の平め石灰燒が占む　同
朝課素讀も果て開窓や落椿　白羽
綾機に織り込む唄か椿映ゆ　同
書窓暗さに思ふ移植を咲く椿　同
聾鬢撫てる思ひ主に待す庭椿　同
泣尼の叩く木魚や落椿　紫禽
落椿忌に人寄す日掃かれけり　同
席畫の日落椿興あると見し　同
樹の闇を法院の冷えて椿落つ　三石
四窓の椿夕べ施飯運ぶ人　同

雀宿さん椿夕べを死馬舁き過ぐ　同
史料探るに奉命や椿村泊り　翠郭
妓家に椿見て酌むも起工頓挫より　同
脛長の檜森椿据飾る　同
椿宮へ舟つけて宿る人々や　青輪
長厩見て橋に出づ落椿　同
泥臭き村湯浸りや赤椿　同
秘め借りの一書なり椿栞りある　寝覺草
花神梳るとや椿森流し　同
夕照に椿いや深し歌妓の塚　竹美
椿腐つ日數あり提唱の庭　同
日も壁に射返し頃を椿落つ　柳子
逆上目を遊ぶ日裏の椿咲く　同
殉國の士が靈に椿火と咲けり　同
秘め憂事吐けば一笑椿落つ　同　丹花　愛子稱
椿咲くや絕戀の悲を追想す　一其
落椿門下忌に泣く寺の窓　同
改鍍の布令到る門の椿赤き頃　朱雀
風負けの藪垣結へば椿落つ　同
枯れし巨木の庭や椿あしらへり　茶の門
垣椿添ひ來れば臭さ藍壺干せり　同

縞賓の來し午后を椿裏に映ゆ　一山
午砲なりて人去れり池畔落椿　同
炎上記に鬼門の椿珍ら咲きしと　六緑生
忌む鳥の椿落す師入寂せん　同
看護疲れの放心を椿落つ悲し　紫浪
鶯の餌にとる蜘蛛や椿蔭　同
鳥のはご掛けて椿や遠見ゆる　象眼
椿寺武を說く僧の生きて健　同
針谷めに籠る縫女や椿落つ　松葉　綠羊改
椿晴る日の綠喜僧の旅立ちし　琴水
水汲みの集ひ待つ日南垣椿　碧水
巡視了へて椿に午食よき旅亭　銀竹
美石產すと聞き來しが山椿咲く　白青
風呂薪や椿大樹の花もあり　三五郎
放牛も牆近う椿咲ける宿　湖峯
椿咲くも書室北窓開くより　冬湖
騷鷲餌になき止んで椿落つる寺　國郎
椿忌むは首落つに似るといふ人や　天行子
幽閉の身に信心や椿さく　桂仙
垢離場なるを來し椿山表行ゆく　桃谷
古陵骨立の椿にも花咲きて　甘泉

山合ひは日短か椿散る川も　子膚
飾り蓑の藁穗調べや椿庭　笑尊
朗詠や雨に萎れかけて椿落つ　秋灘子
工場參觀も許る添書して椿晴る　覇句
飛ぶ虫に蕾の絕えぬ椿かな　笠磐
募りゆく師の病狀を椿咲く　胡鬼子
しみを拔く匠と知るや門椿　楚丘
瓦燒く煙小雨す椿山　雲洞
風干の陶器に椿赤きかな　水馬
雨後の山路風も冷たし落椿　芳葩
灯もとゞく厨棚香ふ椿ある　羊子
贋金使捕はれの日を椿落つ　神風
もろ花の白に晚れざり庭椿　錦櫻
大師勸請に名あがる村や椿咲く　竹梅

(正誤)　旅亭詩會散するを鳴く千鳥哉(以下七句)愛。香。

課題　踏青(野遊)　三月十日〆切
若鮎　四月十日〆切

規定　▽一人三十句限△用紙は半紙
▽淡路假屋在谷口高田蝶衣宛

評論

エーレンタール伯

（墺國外交史上の異彩）

二月十七日、墺國の偉材エーレンタール伯薨去す、あだし野の露消る時無く、鳥部山の烟長なへに絶えさる人の世に、何ものゝ愚ぞ、徒らに獨り海外の英物を惜まんとはする、然かも願くは讀者をして少焉らく理義の林を去つて、情と涙との泉を尋ねしめよ、吾人は二伯の大功績と毀譽褒貶の姿とを見て、其長逝に際して轉た沸涙の横流を支ふる能はす。

抑もエーレンタール伯とは如何なる人ぞ、先つ其傳記履歴を略記せんに、伯は千八百五十四年を以て誕生し、ボーン大學に學び、二十三歳の時巴里墺國大使館員たり、次て外交官補として露都墺國大使館に在り、間も無く暫時歸國、外務省詰となり、一千八百八十八年出てゝ露都大使館書記官となり更に公使に陞任す、一千八百九十五年ブカレスト府駐箚公使に轉じ一八九九年露都駐箚大使に任ぜられ、一千九百〇六年擧げられて外務大臣となり、在職六年今日に至れるなり。然り、我都諸新聞の多數が伯に關して傳へたる所は、實に斯くの如きものなりき。

然かも吾人は斯くの如きものを以て滿足するを得ず就中伯が晩年に於ける苦境に關して、特に一言を加へさる可からざるを覺ゆる也。

二

苦境とは何ぞ、墺國皇太子フランツ、フェルヂナンド親王以下陸軍派を中心とするエーレンタール伯排斥運動の發生是也。

浮說を傳ふるものは云、此反對運動の勃興は由來する所、意外の點に在り、皇太子妃（未だ公式に妃と言ひ難からんも）即ち所謂ホヘンベルヒ公爵夫人、駐墺獨逸大使夫人とエーレンタール伯夫人との關係に在りと、吾人は其說の如何なる程度迄眞實なるやを知らず唯だ知る所は、エーレンタール伯に對する毀譽褒貶の激變是也、換言すれば先きの讃美者は今の呪咀者となりたること是也。

顧みれば一九〇八年十月、エーレンタール伯が斷乎ボスニア及びヘルツエゴヰナ兩州を墺國に合併し、翌年二月の假協約に於て、遂に土耳古をして之を承認せしむるや、伯の名聲は隆々として旭日の勢ひを呈せりき、蓋しボ、ヘ兩州は面積一萬九千方哩、人口百七十四萬、敢て大なりと言ひ難きも、墺國に執りては東進政策上、手離す可からざる地域たり、然かも是實に一八七八年伯林條約に於て其行政を墺國に委托したるものにして、其領土權は依然土耳古に在りたりき、況んや露國を始め塞爾比諸國、皆極力之が墺國合併に反對なるに於をや、左れども烱眼にして辣腕あるエーレンタール伯は、久しく露都に使節たり、其弱點を知悉せるを利用して、斷乎露國を無視し、獨逸の後援を得て、遂に墺國三十年來の素志を成したるなり、切言すれば一九〇九年歐洲外交舞臺の月桂冠は體軀屈曲、極度の近眼鏡を懸け、一見平々凡々たる墺國外相の頭に戴かれ、露國外相イスウォルスキー氏は勿論、英國外相サー、グレーも殆んど顏色あらざりき。

是時に當つて墺國の上下は、蕩然として勝利に醉ひ就中皇太子フランツ、フエルヂナンド親王の如きは盛んにエ伯を推賞したり、蓋し伯の前任者ゴロチヨウスキー氏の時代迄は、歐洲に於ける墺國の地位は第二位とも言ふ可きものなりき、是アルゼシラス會議後、獨帝が同外相に對して「朕は貴國が獨逸の助手として働かれたるを感謝す」てふ難有からぬ謝電を送れるに徵しても知る可き也、年少氣銳、雄心勃々たる皇太子は平和圓滿なる叔父皇帝フランツ、ヨセフ陛下と異り、深く此謝電に奮慨し、謀つてゴロチヨウスキー外相を

斥け、エーレンタール伯をして其後繼者たらしめき、而してエ伯や、皇太子の期待を空うせずして、遂に空前の偉功を樹つ、同親王及味方が、千百の讚詞を連ねて伯を九天の高きに揭げたるも、亦何ぞ怪むを須ゐん哉

然かも思はざりき、此賞贊の美聲は一年有半ならざるに、忽ち非難の惡音と變ぜんとは、

三

如何にしてか此變化は來りたる、私人的關係、裏面の事情は問ふの由なし、吾人は寧ろ墺國の對伊太利政策問題に其責を歸せざるを得ざる也、

墺國と伊太利とは共に三國同盟の一員也、從つて其關係正さに兄弟も啻ならざる可からざる也、然かも事實全く之に反するは何ぞや、他無し、兩國はアドリアチック海上に於ける競爭者なり、近東貿易の競爭者也然かのみならず將來土耳其分割の曉、アルバニヤを爭はんとするものは墺國と伊國となり、此故にツリポリ戰爭起るや、伊太利は墺伊國境の軍隊を減少ぜず、却て之が增加するの奇現象を見たり、同盟國にして斯くの如く相信ぜざるは、恐らくは他に之無かる可し。

是に於て乎近來墺國海陸軍擴張熱、日を逐ふて盛んなり、然かも外相エーレンタール伯は依然親伊政策繼續を可とし、一時知己の感ありたる皇太子及其味方の軍人派、伊太利に慊焉たらざる一部實業派の主張する「露墺獨三國同盟を形成して伊墺獨三國同盟に代ゆ可し」との提案に贊成せず、少くとも今日排伊政策を執るを國家の利益にあらずとせり、是に於て乎昨年一月陸軍參謀總長ヘッエンドルフ大將がガルダ湖上の防備案を提議するや、エ伯は之を斥け、昨秋ツリポリ戰爭以後、軍備案再び起るや、外相對參謀總長の大衝突となり遂に參謀總長の辭職となりき、而して此參謀總長の背後には皇太子あり、爾後エ伯攻擊の聲は宮廷に、政府に、民間諸新紙上に囂々として聞かるゝに至りぬ、即ちエ伯自身は臆病者として、國家を誤るものとし、天下の嘲りを受るに至れりき、

吾人は今詳細に此攻擊の當否を評せんとするものにあらず、蓋し評論欄の紙數は之を許さざるを以て也、

然かも唯伯が陷りたる苦境に至ては、憐む可きもの無しとせず、蓋し伯には猶八十二歳の老皇帝の同情ありたりと雖も、利害に敏なる多くの廷臣と政事家とは、遠からず皇嗣の登極を見る可きを信じて、エ伯に反對するの巧妙なる處世術となしたりき、是則ち昨秋廢伯の辭職説を發生せしむるの止む無きに至りたる所以にはあらざりし乎。

然かも伯已に逝きぬ、今に於て説くも、甲斐無きを悲む、唯一言指摘し置く可きものあり、何ぞや、今後墺國外政に關する皇嗣の勢力は一層增加し、伊墺の反感を强うすると共に現在の三國同盟を弱うし、結局露獨墺三帝同盟の成立を容易ならしむる可きと是也、而して墺國新外相が親露論者ベルヒトルド伯に落ち、獨逸が又益親露政策を執れるは、此點に於て大に貢献す可きを疑はず、知らず此時に當つて英佛兩國は如何なる巧略を以て、之に處せんと欲する乎。

英國の政局

英國議會二月十四日を以て開會す、今後の政局果して如何、

今議會に問題たる可きもの、選擧法改正案あり、威斯(ウエールス)敎會廢止案（同地に於ける諸敎會を平等にし、英國敎會に特典を與へ來れる制を廢止する目的のもの）あり、勞働同盟案（勞働同盟が政治運動の基金を設くる權利を許し、同時に右政治運動に贊成せさる同盟員は政治運動基金に對する納金丈けを拒むを得ること等を規定せり）あり、然れども最重要の問題に至ては、則ち愛蘭自治案たらざるを得ず。

愛蘭自治案の内容は未だ判明せず、故に論評するに由無し、唯海軍卿チャーチル氏の演說に徵するに、其兩院より成る立法部を愛蘭に設置し、之れに對して責任を負ふ可き政府をダブリン府に設け、殆んど半獨立の地位を附與せんとするや殆んど明かなるに似たり、知らず之に對する統一黨の策戰如何、

此處統一黨の新首領ボナア、ロー氏の苦心を要す、況んや現に十九日奉答文修正案討議に於ける一部自由

黨員の態度に徵するも、統一黨の遣り口如何に依りては、政府黨内の不平分子を刺激し、反旗を飜へさしむるも全然不可能ならざるに於てをや、

歐米飛行界の發達

今春倫敦に於て發表せられたる飛行器及び飛行術發達表を見るに、殆んど驚嘆に堪えたるものなり、

	年	飛行家	飛行機	
高さ	一九〇八	ウヰルバーライト	複葉	三二八尺
	一九〇九	ポーラン	同	一、五五八
	一九一〇	モクスセー	同	一一、四七四
	一九一一	ガーロス	單葉	一三、九四七
速力（一時間）	一九〇八	ウヰルバーライト	複葉	三九哩
	一九〇九	ドラグランジ	單葉	五〇
	一九一〇	ルブランク	同	六七、五
	一九一一	ニユーポルト	同	八二、五
一飛行距離	一九〇八	ウヰルバーライト	複葉	七七、六哩
	一九〇九	フアルマン	同	一四四、五
	一九一〇	タブトー	同	三六五、〇
	一九一一	ソピー	單葉	四六二、〇
搭乘者一人を伴ひたる一飛行時間	一九〇九	ウヰルバーライト	複葉	一時、三五分、四七秒
	一九一〇	カムメルマン	同	四、〇五、〇〇
	一九一一	スーザラツク	單葉	四、三三、〇〇
一飛行時間	一九〇八	ウヰルバーライト	複葉	二時、三〇分、二三秒
	一九〇九	フアルマン	同	四、一七、五三
	一九一〇	フアルマン	同	八、一二、〇〇
	一九一一	フールニー	同	一一、一一、二九

右は過去四年間に亘りて、一年中に最良成績を示したるものを捕へて比較せるなり、誰か我飛行界の幼稚を顧みて忸怩たらざるものぞ、

獨逸社會黨の頑固

獨逸議會、二月七日開會し、社會黨議員シャイデマン氏、副議長に當選す、而して獨逸議會の慣例として、議長及副議長は當選後直ちに獨帝謁見を請願する筈なるに、彼れ獨り出願書に調印するを拒み、爲に今年に限り、獨帝は新議長及副議長を引見することあらざりき、如何に從來政府に迫害せられたる行懸りあればとて社會黨も亦餘りに頑固に過ぎたらずや、行ふ所斯くの如くんば、やがて排社會黨的反動を激成するあるも、亦怪むに足らざる也、

（備考　獨逸新議會の構成は下の如し、社會黨百十、中央黨九十三、國民自由黨四十五、保守黨四十三、急進黨四十一、波蘭黨十八、排猶

人黨十三、自由保守黨十四、其他アルサス派五、ロオレン派二、ゲルフ五、巴威農民協會派二、獨逸農民協會派二、中立四、合計三百九十七）

自動車と通行人

米國紐育の控訴院判決を下して曰く、自動車にして笛を鳴らし、疾走し來るあるも、通行人等は決して自己の威嚴を損する程度に於て走つて之を逃るゝの必要なし、自動車乘は斯くせしむるの權利無しと、

吾人は多言せず、然かも斯くの如き判決は紐育人民の希望たるよりも、寧ろ一層我日東の大都「東京」市民の熱望する所にあらざる乎。

英國陸相獨逸訪問

英國陸相バルデン卿、伯林に至るや、天下獨英協商の端緒開かるゝを欣ぶ、然り端緒は開かれたり、左れど其成立は如何、英國は老大守成、現勢維持を便として、獨逸は少壯進取、現勢變更を便とする以上、恐らくは其成立難かる可く、成立すとも完全なるものにあらざる可し、

如何に政事家が騷げばとて、國家利害の根本的衝突に至ては、遂に如何ともす可からざる也。

葡萄牙共和政

葡萄牙共和政治成りてより、何ぞ其中外の希望を空しうするの甚しきや。

最近傳ふる所に曰く、政府財源に苦んで、止む無く賭博を公許し、以て財庫の不足を塡補せんとすと、斯くんは、是則ちマノエル二世の非政に勝る非政にあらずや。（憤沙隱客）

新刊批評

△讀史餘論　新井白石著　大同館發販

白石の史眼炬の如く、其識見前人を空しうせり。國史に對する彼の論斷は極めて直截鋭利にして、其文亦老勁秋に横はるの「讀史餘論」一編今日に至つても實に史論のオーソリチーたるを失はず(定價七十錢)

△日本男兒　兒玉花外著　實業之日本社發行

日本武尊に初つて西郷南洲に終る三十二人の英雄を歌へるもの、文字蕪雜、句調亦疎漫、純文字上の製作品としての價値に乏しきも、只一道の熱氣全篇を貫くを取る。(定價四十錢)

△エマーソン論文集　下卷　戸川秋骨譯　玄黄社發販

上卷に較べると、題目は幾分社會的な方面に近く集めてある。詩人論乃至自然論等よりは、その他の諸論の方に興味が深い。何といつても人生の一大綱を提つた哲人の文章である。その大觀し斷定する處は、現代の如く凡てに、濁流の香高き時の人々にとつては、恰も强烈なる太陽の光である。此論文集二卷、時に應して處世の根本義に、人を導くの力は大きなものであらう。(金一圓二十錢)

△名士の偉人觀　不屈生編著　實業之世界社發行

名士といふものゝ觀察は、概して包括的な、無意識な中に教訓を多く持つて居るものである。細かく說明して了はない處が價値である。亨け易く、學び易い。不屈生の筆は更に之等の材料に適してゐる。苦味のある面白い人物評論集だ。(金七十五錢)

△旅順籠城、劍と戀　高須梅溪　加藤汀月共著　啓成社出版

上篇は「戰塵」といつて、三十七八年役の描寫式な從軍記錄であり、下篇は「お花さん」といつて、當時の一挿話たる戀物語だ。露國の少尉レンカートの原著であるだけに、從來の戰記とは大分筆つかひも違つて柔かく細かい味のあるものだ。(金一圓三十錢)

△元祿忠魂錄　村上浪六著　至誠堂發行

ちぬのうらが筆は昔ながらの撥發にて、嬉しい調子はそのまゝに殘つてゐる。如何にも元祿といふ空氣の中にありさうな大石藏之助が、專ら描かれてある。藏之助は單なる忠臣ではない。矢張元祿の老成なる風流才人である。彼が仇討は至誠人を泣かしむるほどに洗錬せられた、眞面目な洒落である。さういふ味も此書にはある。あの時代あの人物、大石藏之助はまだいくらも描きやうのある深い藝術的な人である。(金一圓)

△陸奧宗光　續編　伊藤痴遊著　東亞堂發行

外交家、改革者としての陸奧宗光が後半生の講話である。面白い。クダケた人物傳で、人を倦ませる事がない。(金九十五錢)

△維摩經評註　加藤咄堂著　丙午出版社發行

佛典の中でも殊に興味の深い、そして幽玄な味に充ちた壯厳を極めたものは、維摩經である。説く所は凡て大乘の根本義であつて、それが巧みな劇的な結構に盛られてある。原文に譯を添へ、欄外に註を施してある。和本製の感じいゝ書物である。(金七十錢)

△唯一氣　堀内新泉著　成功雜誌社發行

「近時最も活動せる青年實業家某氏が半生の事業史、信仰録たり」と序にはいつてある。人間の溫情と堅實なる信仰とが此主人公の成功をなした事が、小説として物語られてある。(金八十錢)

△婆言爺語　菅原曇華講話　至誠堂發行

總説由來、五家七宗、二十四流、注意活用歸結と分つて、隨筆に系統を與へたやうなもので、靜かな筆に靜かな説法を淳々として綴つてある(金三十錢)

△戰記文評釋　内海月杖著　文成社發行

保元、平治、平家、源平、大平記の五篇である。評註に、各章の概説が面白く添えてある。小ぢんまりした美しい本だ。(金八十錢)

△新譯漢文叢書　至誠堂發行

(第十編　新譯水滸全傳(下)金一圓二十錢

△學生文庫(金三十錢)　至誠堂發行

○禪學名著集
○續心學道話
○謠曲全集(中)
○日本外史(下)



（中付の二）



駈落

森田草平

一

落着く先は繰船の一軒家と極められた。萬事の手筈は駒吉夫婦の方寸から出たのである。

二人の外に誰も二人の中を知らぬ間は、たとへ人目を忍んでなりとも、二人は自由に逢ひもした、話もした。一旦世間へぱつとしてからは、生木を裂くやうに引離されて、顔も見えない、聲も聞けない。只、夫婦の計らひて、人手から人手を傳つて、一二行走り書きした紙片を取交して、纔に心のたけを通ずるに過ぎない。夫婦は身を粉にしても、飽迄擅那場の一人息と一人娘のために、二人の中を取持たうとした。て、いろ〳〵手を盡して、肝膽を碎いた揚句、一先づ二人を近國へ落ち延びさせることにした。私は早く女の顔

が見たさに、何事も夫婦の云ふが儘に成つた。

「左樣極つたら、お重、お前一つ直樣に隨いて一軒家迄行つて來て呉ろよ。」

駒吉は臺所の話聲を氣にしながら、急に聲を低めて云つた。

「あゝ可いよ」と、お重も膝を乘出した。

弟が死んだので、夫婦の中の一粒種、歳は二十九、娼妓上りの女だけに、今度の事については一番働きもしたが、又自分でも我事の樣に興味を持つて居るらしい。

「裏街道から行くが可えぜ」と、阿母のお關も傍から口を添えた。「如何ぢやえ、粂州でも連れて行つたら——彼男なら何も彼も知つちよるて可えに。」

「左樣だね」と、お重は最う裾を端折りながら立上つた。

「そんなら粂は脊戸へ廻らせるぜ」と、お關は臺所の方へ出て行つた。

「ぢや、直樣」と、お重は私の手を引張るやうにして、臺所で雜談をして居る浪花節の前座語りや三味線彈きの連中に氣取られぬ樣に足音をぬすみながら、こつそり裏口へ出た。脊戸には、お關が粂と一緒に先へ出て待つて居たが、

「そんなら氣を附けて。」

「あいよ。」

かう云つて、お重は二足三足歩き出したが、急に後戻りをして、「阿母、々々」と喚んだ。

「何ぢや、〳〵」と、お關も事々しげに側へ近寄つた。
「あの、餘り晩く成るやうだつたら、今夜一晩、俺や向ふて泊るかも知れんよ。」
「左樣さな」と、お關は打傾ぶいた。
「だつて、昨夜はあの通り徹宵寢ないんだし、明日のことも有るから、眼だつて些たア休ませて置かなくつちや。」
「うむ、まア阿父さに左樣云つて見やう。」
「ぢや、後を賴んだぜ。」
其儘、お重はすた〳〵と步き出した。
田圃の中の畔徑を一丁許り傳つて行くと、直に裏街道へ出る。村の中央を貫く本街道に對して、村の背後を通ふ里道である。道案內がてら粂が一番先に立つて、お重は殿をする。眞中に私が狹まれて行く。粂作と云ふ漁師の家の前は傍視をしながら走り拔けた。それから先は一面に田圃がひらけて、未だ宵の間ながら人通りもない。
三人は只すた〳〵と步いた。誰も物を言ふものはない。村の三昧の傍を通るとて、私は不圖子供の時分此道を通るのが氣味の惡かつたことを想出したが、それでも默つて居た。新しい墓と見えて、白張提灯がぼんやり見送つて居た。
偶々道の行手から人聲が聞えて來た。夕靄の中を透して、二三人黑い人影が見える。何やら高聲て話

しながら、どし／＼急いて來るらしい。足音も手に取る樣に聞え出した。一筋道のことだから、何處へ避けるにも避け樣がない。お重は自分が眞先に立つて歩き出した。

だん／＼兩方から近づいた。やがて擦れ違ひざま、

「今晩は」と、向ふから聲を掛けた。何でも樣子が田舍廻りの旅商人らしい。商ひ先で日を暮して、泊りを急ぐものと見える。

「今晩は、お涼しう御座います。」

お重も虚勢を張つたやうな挨拶をした。そして、其儘行き過ぎた。

三人はそれ限り好いとも惡いとも云はずに、只管道を急いだ。行手の山が段々近く成つた。山の麓て本街道に合して、山の北側を廻りながらそれを出外れて、又一畷田圃道を行くと、やがて堤の上へ出る。それが目指す繰船てある。

堤の手前から、お重は懷の中て橋錢の勘定をした。まごついて顏を見られぬ用心てある。橋の袂の番小屋ては、臺の上へカンテラを出したまゝ、番人は蚊張を釣つて寢て居た。それて人の足音が聞えると、のそりと頭を擡げる。お重が橋錢を渡して居る間に、後の二人は最う橋の中程迄來て居た。人が通るたびに、ゆら／＼と搖れる程の橋てある。

お重は直に後から追附いた。橋を渡つて、だら／＼と坂を下り掛けた所に、一棟白壁の土藏がある。其庇の下をくゞつて、母屋の大戸の前へ出た。

二人を外に待たせて置いて、お重一人家の中へ這入つて行つたが、間もなく此家の主人と一緒に出て來た。主人は野良のかへりが晩く成つたと見えて、未だ土足のまゝ、

「さ、何卒此方へ」と、庭の木戸を開けて座敷の口へ案内した。

私はおづ〳〵其後に隨いて行つた。飛石傳ひに座敷の縁側へ上らうとすると、合の襖を開けて、赤い手がらを掛けた上さんが臺洋燈を持つて出て來た。上さんは如何やら姙娠らしい

夫婦は聲を揃へて上へ招じた。私は何の爲にこんな所へ來て見ず知らずの人達の世話に成るのかと思ふと、夫婦の思はくも憚られるやうな心持がして、うち〳〵と隅の方に坐つて居た。

お重は衆を自宅へかへして、一人後から上つて來たが、「直樣、此處なら一寸位大きな聲て話をしても可えぞな。」

「え丶、此處なら大丈夫てすとも」と、主人もそれに和した。「本當に野中の一軒家てすから、日が暮れたら、それこそ猫一疋通りやしませんわい。」

一軒家と云ふことが急に氣に成つた。こんな人里離れた一軒家に年中二人限りて暮して居る夫婦のことも思はれた。

そんな事を思ひながら、私は二人の話に耳を傾けた。

主人の家は先代迄繰船の粟餅とて名代の粟餅屋てあつた。其頃は未だ今の樣な橋もない。名の通り兩岸から綱を張つて、其綱を手繰つて船を渡したものだ。西國三十三番谷汲山の札所へ詣る街道に當るの

て、相應に人通りもあれば、從て餅屋も繁昌した。それが御維新以來追ひ〳〵に廢れて、主人の代にはとう〳〵商賣を罷めてたゞの百姓に成つた。繰船も新しい橋に架け代つた。ところで又一昨年のこと、谷汲山に六十年目に一度の開帳があつた。人間一代の間に又とは逢はれない。爺さんも出掛けろ、婆さんも出掛けろ、嫁も小姑も押出せと云ふので、六十日の開帳の間、美濃一ヶ國は申すに及ばず、近國近在から善男善女の參詣引きも切らずと云ふ有樣、それを見込んで、駒吉夫婦が主人の家を借りて臨時に粟餅屋を開業した。目算見事に當つて、日々の大入大繁昌、其間には隨分可笑しいこともあれば、苦しいこともあつた。二人は當時の事を想ひ出して面白相に笑ひ興じて居るのである。

私は只默つて聞いて居た。自分には關係のない事だけに、耳は假しながら、心の中では別の事を思つて居た。時々足の甲に吸附く蚊を平手ではたきながら、うつとりとお卷のことを考へて居た。お卷と云ふのは明日の夜逃出して來る筈の女の名である。

「蚊燻しを持つて來ましよか。此處は本當にえらい蚊ぢやてなも」と、上さんが饗應振りに云つた。

「左樣さな」と、緣側に腰掛けて居た主人は急に尻を持上げながら、「それよか最う蚊帳を釣つたら如何ぢやい。蚊帳の中へ這入つて貰つた方が可かろ。」

「左樣しよかなも」と、上さんも立上つて押入から夜具を出しにかゝつたが、「お重さの寢床は如何しようなも。」

「私かな――私なら可えぞな、別に取らんでも。直樣の足許へ這入つて寢まずて、枕一つ借してお呉れ

んさいな。」

「さ、其枕が有つたか知ら――」と、上さんは少時押入の中を搔捜して居たが、「こんなのでも宜しいかなも。切めて枕紙でも取代へましよか。」

「何う、私が取代へましよ」と、お重は手早く帯の間から半紙を取出して小さいくゝり枕を包んだ。それを隅の方へ押遣りながら、用ありげに臺所へ立つて行つた。

私は一人上さんの釣つて呉れた蚊帳の中へ這入つた。蚊帳の裾をまくると、古い麻の臭ひが蒸れるやうに鼻を突いたが、ぢつと我慢した。慣れて見れば左程でもない。

それに私の心は直にお巻の許へ走つた。今夜私が此處へ來て待つて居ることは、あの女も知つて居る筈である。いよ／＼自分の宅で寢るのも今夜限りて、明日の夜は何處へ行つて何處て寢るやら知れぬと思つたら、女心の何んな氣がして居るだらう。そんな事を考へて、一旦約束したものゝ、心細さに氣が變るやうなことはあるまいか。よもや、そんな事も有るまいとは思ふが、あゝ、逢ふ迄は氣が揉める、顔を見る迄は氣が揉める。

私は幾たびか蒲團の上て寢返りを打つた。

不圖、何やらお重の云ふ聲が臺所から聞えた。それに伴れて、

「悠くり臥んどくりやアすえも」と、夫婦が聲を揃えて挨拶をした。お重はやがて此方へ遣つて來るらしい。

あゝ、お重が――

私は始めて女と一緒に泊つて居るのだなと云ふことに氣が附いた。一人の女を思ひながら、別な女と一緒に人目を忍んで、野中の一軒家に隱れて居る。明日の夜家出する女を待ちながら、今宵は外の女と一緒に泊つて居る。

これ迄お重には文の取次やら傳言やらいろ／＼な事で世話に成つた。今度の事でも駒吉夫婦の指金とは云ふものゝ、一番身を入れて居るのはお重である。て、逢ふことも度々逢つたが、女だと思つて逢つたことは一度もない。勿論年紀も十歳の餘上である。それに長年所々方々の色街を流れ渡つて、男と云ふ男の味を嘗め盡して來た女だから、私なぞとは丸で時代が違ふやうな氣がして居た。が、本當の事を云へば、其時分の私は何んな女を見ても目にも留らなさや、又お卷の外の女は頭から女の様にも思つて居なかつたのである。

それが今お重の足音を聞くと、急に女に成つたやうな心持がした。あの女が私の側へ來て寢る――私は俄に胸騒ぎが仕出した

お重は何氣なく襖を開けて這入つて來た。そして手探りに最前の枕を取つて、一寸蚊帳の裾をまくりながら、

「直様、何方を頭にして寢て被坐しやるの」と訊いた。

私は只息を詰めた。

「最うお臥み？」と、重ねて女が云つた。

「あゝ、此處に居るんだよ」と、私は間の惡い時に間の惡い返辭をした。

それても、別に氣も附かぬらしい。

「左樣、其方枕にして」と云ひながら、するく＼と側へ寄つて來た。そして、「最と此方へお寄んなさいな。私が手枕をさして上げましよか」と、兩手て私の身體を抱へ込むやうにした。

私は相手のするが儘に成つて、靜平と息を凝らして居た。何か女の方から話ても仕掛けるかと思つたが、何とも言出さない。

何時の間にやら、すやく＼と寢息が聞え出した。如何にも苦の無ささうな、平和な寢息てある。それて私が一寸身動きてもしやうものなら、恰度母親が子供を抱いて寢て居るやうに、夢現の中から手を動かして、蒲團を引張つて被せたり、背中を撫つたりした。そして又すやく＼と寢入つた。

女の夢の安らかなだけ、私はいよく＼興奮して眼が冴え渡つた。幾許眠らうとしても寢附かれない。お卷は今頃如何して居るだらう。矢張私の樣に寢附かれないて、眼をぽちく＼させながら天井を見詰めて居るだらうか。切めてお卷のことても思ひ詰めに思つて居やうとしたが、それさへ思ふに任せない。私の脇腹の上へ載せたお重の腕はだんく＼重く成つて、だんく＼息苦しく成つて行く。それを凝平と怺えて居ると、終ひには半身が痺れて息が詰るやうな心持てある。

此女は私を何と思つて居るのだらう。こんな男を男とも思はぬ女が、私など何と思はう筈がない。それにしても、何と思つて他人の戀の取持して、やきもきと自分の事の樣に騷いて居るのだらう。斯うして寢て居ながら、心は何處へ通つて、何んな夢を見て居るのだらう。

私はお關から聞いた此女の經歴を一つ〳〵溫習へて見た。十九の歳に始めて靜岡の二丁町から突出されて、それから吉原の角町、東海道の沼津と經廻つて、一昨年の春、大阪の難波新地から一人でぶらりと戻つて來た。其儘自宅に居着いたとは云ふものゝ、長い間には隨分男と逃げたこともあらう、人の家を潰して、妻女を離緣させたことも數あらう。其女が今私を抱へて寢て居る。女の寢息もかゝる、二人の體溫も通ふのである。

私は堪らなく成つて苦しげに寢返りを打つた。

此時、不圖門口で人の足音がしたかと思ふと、どん〳〵大戸を叩く者がある。風の音にも心を置く身の私は思はずひやりとした。

「何誰、何方からお出です」と、次の間で主人の聲がした。

表でも何やら云つて居る。

「へえ只今、只今開けますぞな」と云ひながら、上さんがむづ〳〵起上つて大戸を操りに行つたらしい。

少時土間に立つたまゝ、二人の話聲がして居た。

やがて上さんが戻つて來て、

「お重さの阿父さぢやとな。」
「左様か、それぢや上つて貰ふが可え」と、主人の聲も上釣つた。
私は何事ぞと胸を躍らせた。
「それでも土足て上れんと云つてぢやが、いつそ座敷の口へ廻つて貰ひましよかなも」と上さんは私達の寢て居る部屋の襖を開けて、
「お重さ、〳〵」とつゞけ樣に喚んだ。
女は前後も知らず寢入つて居る。
「お重さ」と、聲を張上げて、「阿父さが見えたぞな。」
「へえッ」と云つたまゝ、お重は死破と跳ね起きた。其儘又うつとりと成る。
「阿父さが見えたて――今座敷の口へ廻つて貰ひますてなも」と言ひ捨てゝ、上さんは二たび土間の方へ引回した。
やがて又戻つて來て、内側から座敷の戸を一枚開けた。庭から廻つて、飛石の上に立つて居た駒吉は、突然
「お重ッ」と喚んだ。
私は其聲を聞くと、二たび早鐘を撞くやうに動悸が打出した。
「お重、何故歸つて來んぢやい」と、かさねて云つた。如何やら只ならぬ權幕である。

「え〻？」と、お重は睡たさうに眼を擦りながら、「何ぢやえ、今頃――」

「今頃も糞もあるかい。直樣を送り屆けたら、何故直に歸つて來んぢやい。」

「だから、阿母アに左樣云つて來たぢやないか。」

「阿母アに云つたとて」と、駒吉は思はず聲を張上げたが、急に又低うして、「村方の衆も遊びに來て見えるし、お重は何處へ行つたと訊かれたら、俺ア返辭の仕樣がない。それて無うても目指されて居る所ぢや――さ、俺と一緒に歸つた、〱。」

「そりや歸れと云ふなら歸りもするけれど――」と、お重は兩手を延ばして欠伸をしながら、「一體、最う何時頃だらう。」

「左樣ぢやなも」と、後ろに居た上さんが不意に言出した。「今し方十時を打つた許りぢやて、十時半――未だ十一時には成りますまい。」

「へえ、そんなもんて御座いますぢやろなも」と駒吉は代つて返辭をしながら、「さ、早く仕度をせんか。」

「そんなに急いたつて仕樣がないよ」と、口小言を云ひ〱、お重も立上つて帯を緊め直した。其間に眼もはつきりしたと見えて、細君に向つても、

「何うもお喧ましう御座いました」と、慇懃に挨拶をして、二三歩戸口の方へ出掛けたが、急に又立歸つて、私の耳へ口を寄せながら、

「明日の晩ですよ」と囁いて、其儘ぷいと出て行つた。

「到頭お歸りでしたなも」と、上さんは誰に云ふともなく言つて、そろ〳〵と其後の戸を閉めにかゝつた。

折柄、權現山で時の鐘を撞き出した。

私は生れて始めて人から置いて行かれた寂しさをおぼえたやうな心持がした。時の鐘は未だ鳴つて居る。

二

明くる朝、私は膨れぼつたい眼をして起上つた。臺所へ行つて見ると、主人は最う野良へ出て居なかつた。井戸端へ出ては人に顏を見らるると云ふので、上さんが遽てゝ手水の水を汲んで座敷の縁側へ持つて來て呉れた。新しい手拭で濡れた顏を拭いて居ると、橋を渡る荷車の音がどど〳〵と聞えて來た。午後の暑さが思はれるやうな朝である。

上さんの給仕で朝飯の膳に向つた。上さんとは云ふものゝ、宛然子供の樣な顏をして居る。これで嫉妬に成つて居るのが可笑しい程、邪氣無い顏をして居る。年紀も私と同い歳か、或は一つ位下かも知れない。

私は成可く相手の顏を見ない樣にしながら、飯を喰ふ間、一言も物を言はなかつた。そこ〳〵に箸を

下に置くと、

「どうも、何も召上るものが御座いませんで」と、上さんは叩頭をしながら膳を下げて行つた。

私は此日程一日の日を長いと思つたことはない、又此日程短かいと思つたこともない。只立つて見たり坐つて見たりして居た。一寸往來を覗いて見ようと思つても、若しや通りがゝりの村の者にでも見附かつたら、それこそ、折角の苦心も水の泡に成つて仕舞ふのだから、滅多にそんな事は出來ない。座敷の欄間に、主人が近衛師團を除隊に成つた時の寫眞が掛けてあるのも、何遍となく其前に立つて見飽きる程見た。やう〳〵日が下つて、庭鷄がくゝゝと鳴きながら塒へ上らうとするのを見た時は、心からほつとして息を吐いた。

上さんは裏の流元でこつ〳〵庖丁を使ひながら、晩の仕度にかゝつて居る。主人も今日は早く野良から上つて來たが、それでも手を束ねて遊ぶやうな事はない。何やら忙し相に屋敷のまはりで働いて居る。だん〳〵日が暮れかゝつた。軒下に捨てゝある鍬の刃先だけが夕闇の中にも薄白く光つて見える。最う戸外へ出ても人顔の分るやうなことは有るまい。

私はおづ〳〵堤の上へ出て見た。田の畔、水の邊りにもしつとりと夕靄がかゝつて、野良一面そよとの動くものもない。一日野良へ出て働いて居た百姓も、各自に自分の家へ歸つて行つた跡と見える。私は又一足づゝ橋の上迄行つて見た。脊延びをする様にして、お巻の棲んで居る村の方角を見渡したが、目の下に、一筋坂の下迄街道がつゞくばかりで、それらしい影も見えない。

何の道から遣つて來るのだらう。何の道から來るにしても、此街道へ出て來る外はない。

私は又胸騒ぎがして來た。かねて手筈の通りに、旨く行くか知ら——あの女の手際で旨く行くか知ら——下手なことをして感附かれるやうなことは無からうか。お重が隨いて居るにしても、家の中迄這入つて指圖をすることは出來ない。家の中だけ旨く遣つて、旨くお重の手にさへ渡れば可いのだが——お重も又如何して與れるのだらう。何だか自分で見に行きたい、自分で行つて見て居たい。

とつおいつ、只堤の上を往つたり來たりして居た。

やがて、主人は片手に竹の鼻緒の立つた下駄を下げて出て來たが、私の顔を見ると小腰を屈めて、「晩く成りましたが、何卒御飯を上つて下さい」と云ひながら、のそ〳〵と堤の腹を水際迄降りて行つた。足でも洗ひに行くのであらう。

私は少時橋の下で黒い影が動くのを見守つて居たが、其儘家の中へ引回した。

夕飯が濟んでから、主人は頻に自分が世田ヶ谷の聯隊に居た時のことを語り出した。私もそれに伴れて二つ三つ東京の街の變つて行く有樣を話した。そんな話をして居るのが、私には何よりも辛かつた。其間に、主人が夜業仕事に手造りの煙草の葉を刻み掛けたのを見て、又こつそり橋の上へ出て見た。

橋の欄干に腰掛けたまゝ、靜平として居ると、川添ひのこんもりと黒い笹籔をさや〳〵と動かして、橋の裏から川風が吹上げて來る。夜の深けるに伴れて、一重の肌には小寒い程である。

西の空には片破月が新しい光を増して來た。蒼穹は瑠璃色に光つて、四方の山々の輪廓がはつきりと

見える。

私はそれを見詰めて居ると、俄に悲しいやうな心持に成つた。ついぞ考へて見たこともない、是から先の事が思はれて來た。是から先は如何成ることであらう。あの山の向ふへ行くのだ――あの山の向ふへ二人は行くのである。

こんな事を思つて居る最中にも、お卷は如何したらうと云ふ氣が急に差して、時々頭を上げて見た。何度見廻して見ても、それらしい影も見えない。夜はいよ〳〵靜かである。

如何やら不安な氣が仕出した。今夜は駄目ぢやないかとも思はれて來た。何か都合が惡くて出られなかつたのぢやないか。それにしても――それなら其樣にお重からでも云つて來さうなものだ。何とか云つて來さうなものだ。

私は立掛けた腰を又卸した。が、未だしも家の中で待つて居る方が、氣が揉めないやうな氣もして、二たび立上つて歸らうとした。

此時、ばた〳〵と云ふ足音がつい鼻の先で聞えた。見ると、一人が橋番の小屋の前に立つて居ると、一人は早や橋の上迄來て居る。私は俄にどく〳〵と胸が動悸を打つた。思はず二三歩前へ乘出して、

「お卷か」と喚んだ。

「えゝ」と云つたまゝ、女も駈寄つた。

私は突然兩手で女を抱へながら、

「好く出られたね、好く出て來られたね」と、喘ぐ様につゞけて云つた。「本當に好く出て來て呉れたねえ。」

女は男に抱かれたまゝ、堅く成つて靜平として居る。

「こんな所で談話しとつて明くもんか」と云ひさま、後から來たお重はお卷の手を取つて駈出した。私も隨いて駈出した。

二人とも草履穿きで、二人とも裾を端折つて居る。お卷の方は雪駄の様でもある。

お重は直に座敷の口へ連れて行つた。そして、自分で勝手へ廻つて手桶と盥とを持つて來て、お卷にも足を滌がせ、自分も足の泥を洗つた。

「ま、お重さ」と云ひながら、上さんが走つて來て、「後は私が片附けるて可えに、早よ上つて貰つてお呉れやす。」

「左様かな」と、お重も其儘手を引いた。そして、「貴方、早よ上りやアせんか」と、お卷の手を引張上げるやうにして座敷へ上らせた。

私は只迂路々々して立つて居た。

三人は少時顔を見合せたまゝ坐つた。女二人は何とも言出さない。私も代る〲二人の顔を見較べながら默つて居た。お重さへ居なかつたら、あの眼を、あの頸を、あの耳朶を如何かして遣りたい位なのを、凝平と怺へて默つて居た。

やがて、「まア可かつた」と、お重が先づ口を開いた。

「如何したい、え、如何したんだい」と、私は傍から不安相に訊ねた。

「え丶、如何もしやしませんけれど」と、お重は一寸私の顏を見上げたが、「そらお寺の裏に大きな藪があるてせう。あの藪下の溝端に立つて、蚊に喰はれながら待てど暮せど此人は出て來んのじやし、此方ても氣を揉んでぢやろと思ふので、如何か知らん、可えか知らんと、一足宛お寺の門迄行つては又引回したりして居る間に、石垣の角でばつたり出逢つたのさな。いきなり『お重さか』と云つたまゝ、私に獅嚙みついて泣くんてせう。『こんな所で泣いて丶明くもんか』と、私も叱り附ける樣に云つて、其儘手を引いてばた/\と駈出したが、彼是二三丁も駈けて來た所で、あれは何處やらてしたなも——左樣/\、裏街道へ出る手前の所にお作後家の池がある。彼處ぢやつたなも」と、一寸お卷の方を振回つた。

お卷は淋しさうな顏附をしてにつこり笑つたが、直に俯向いて仕舞つた。

「彼處迄來ると、向ふから誰やら來るんてせう。さあ困つたと思つても、一本道ぢやあるし、如何する譯にも行かんので、え丶、儘よと、顏を背向けたまゝ、急いて擦れ違はうとすると、道巾が狹いので、其拍子に小溝の中へ片足づぶりと陷つたんてすよ。え丶、此のお卷さまがさ。」

お卷は俯向いたまゝ、ふゝゝと笑ひ出した。お重も一緒に成つて笑つた。

「だつて、愚圖々々しちや居られんので、突然手を執つて引擦上げると、其儘又駈出したんてすよ。それが餘ンまり早業だもんだから、先方ても驚いたんてせう。『や、河童ぢやないか』と云つて、此方を見

ながら立つて居るんてすもの。それが新田の助馬鹿の聲なんてすよ。まア助馬鹿だから好かつたんてすがねえ。此方はそんな事にや構つて居られないから、後をも見ずに、どん／＼駈出したんてさ。好い鹽梅にそれからは誰にも逢ひませんてしたがね。時々背後から「お重さ、／＼」と、切な相に此人が喚ぶんてすけれど、返辭なぞしちや居られない。此處へ來る迄は、そりやア眞個夢中てしたよ。」

斯う云つて、お重はやつと話を切つた。それと一緒に、帶の間からよれ／＼に成つた緞子の烟草入を出して、一服喫はうとしたが、

「をや、私は未だ尻を端折つたまんまだよ」と、一人て笑ひながら立上つた。

そこへ上さんが茶盆を持つて這入つて來て、後から主人も顔を出したので、叮寧に坐り直して、

「昨晩は何うも――又今晩も、飛んだ御迷惑て御座いますなも」と、挨拶をした。

お卷もお重の影に隠れる樣にして、何やら口の中て言ひながらお叩頭をして居た。

「い丶え、／＼」と、主人は只それ許り繰回して居たが、熟々女の容子を眺めて、「お卷さんも苦勞なさいますなも」と、眞顔て嘆息する樣に云つた。

「へえ」と、お重が代つて返辭をした。「一人子て何不足のない身ぢやけれど、親御さんが餘ンまり嚴いてなも――まア好えわな、親の側て苦勞する間は。私なぞと來たら、それこそ――」

お重は何やら想出したらしく、急に默つて仕舞つた。

「後ぢや――今頃如何して居るんだらうね」と、私は心ならぬまゝに皆衆の顔を見ながら云つた。

自宅のことを云ふと、お卷が一番落着かぬ眼色をして四邊を見廻した。

「そりや、最う氣が附いてるさな」と云つたが、お重もそれ限り何とも云はない。

「えゝ、今頃は騷いて見えるぢやろなも」と、良あつて主人も云つた。「併し私の許へ來てりや大丈夫てすよ。何と云つたとて、此家へ氣が附く氣遣ひはない。」

「左樣ぢやてなも」と、お卷はほつとして、思はず確かめる樣に云つた。

「此處なら分りませんとも。」

主人は二たび大丈夫らしく請合つた。

「えゝ、此家の知れる氣遣ひはないが」と、お重は俄にそは〳〵として、「私の家へは目を附けてぢやてなも、私が居ないんぢや――もし、一寸」と、何やら用ありげに主人を喚んで次の間へ立つた。

後はお卷と私と二人に成つた。私は直にも女の手を執つて力限り抱いて遣りたかつた。抱くより外に、今の私の遣瀨ない心持の表はし樣がない。只、他人の家ぢやと云ふので、左樣したいのを辛抱して、まじ〳〵と女の顏を見守つて居た。お卷も霑んだ眼元に凝乎と私の顏を見上げて居る。が、何うもそれが私の顏を視て居るやうぢやない、私と同じ心持で私の顏を視て居るやうぢやない。

私は始めての戀から先づ女の物足らなさを味はつた。其後私は幾度女に戀しても、終に此心持の除れたことがない。

それは扨措き、お重は二たびあたふたと此方の間へ這入つて來て、「それぢや、私は兎に角今夜は自宅

へ歸るてなも」と言出した。

「え？」と、二人は一齊にお重の顏を見上げた。

「今夜私が自宅に居ないと、まさかの時に何うも言譯が立たんてなも。其代り明日の晩――おそくも明後日の日暮には、夜釣りに行く振をして、阿父さが此橋の下へ船を着けるてなも。それからは、そら――解つて居るてしよ」と、突然私の耳へ口を寄せて、何やらぼそ〳〵と囁いた。

私は分らぬながら、何うせ後で分ることだと思ふので、好い加減に點頭いた。一つはお重の居なく成るのが嬉しいやうな氣もしたのである。

「好えかな、其積りで」と、お重は一人で呑込んで立上つた。二たび甲斐々々しく着物の裾を端折つて出立の用意をした。

「まア今頃から――本當にお氣の毒ぢやなも」と、お卷が縁側迄送つて出た。

「今頃なら未だ好えが、昨夜は――」と云ひながら草履を穿く。

「それぢや人目に掛からんやうになも」と、何時の間にやら側へ來て居た主人も心を附けた。

「えゝ、山の手から廻つて行く積りぢやわな」と云つたが、其儘すた〳〵と堤の方へ出て行つた。

主人は其後から首を出して、少時表の樣子を窺つて居たが、

「最う月も這入つたなも」と云ひながら、戸の中へ身を引入れた。

「さ、最う何卒臥んでお吳れんさい。此家なら本當に心配はないてなも。」

二人は一緒に頭を下げた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

其夜、二人は一睡もしなかつた。明くる朝に成つて、主人が野良へ出た時刻を見計つて、こつそり起上つた。若い上さんは、別に變つたこともなく、二人のために朝餐の膳を二つ拵へて與れた。

そこ〳〵にして元の座敷へ戻ると、お卷は襖の前に靜平と坐つたまゝ、何時迄も動かなかつた。私も態々其側へ行つて寐そべりながら、飽かず女の顏を見詰めて居た。髮も梳らず、顏色も煤けた樣に蒼味を帶んで、折々うつとりと物案じ顏をして居るのが、側に居る私のことも忘れて居るやうで、隨分物足らなくもある。併し私は只自分の側へ女を惹附けることが出來たと云ふだけて、永久に女を自分のものにしたやうな氣がして居たので、そんな事はさのみ心にも懸からない。只飽かず女の顏を見守つて居た。

一日中、只女と顏を見合せて居たと云ふだけて、言つたことも爲たことも、何一つ覺えては居ない。左樣して居る間に、長い夏の日も暮れかゝつた。

日暮に來ると云つた駒吉の船が夜に成つても來ない。私は何か異變でも起つたのぢやないかと、急に宅の方の樣子が氣に成り出した。お卷はお卷て一層おど〳〵した容子をして居る。

「なに、そんな事が有るものかな。今夜見えんでも、明日の晩は乾度見えるに」と、主人は事も無げに

云つて力を附けて呉れた。「それに私の許ぢや些とも心配は入らんてなも。何日迄ても好えに居てお呉れんさい。」

それに氣を引立てられて、兎に角上さんの釣つて呉れた蚊帳の中へ這入つて待つことにした。一時間とも經たぬ間に、みしり／＼と庭の土を踏む足音がして、

「直樣、もし直樣」と、戸の外から喚ぶものがある。

とろ／＼とした私は吃驚して眼を醒ました。

「駒吉かい」と云ふと、

「仕度は出來てますかな」と訊く。

「あゝ可いよ、出來てるよ」と、私は矢庭に跳ね起きた。

「さ、これはお卷さまの預つてあつた着替ぢやがなも」と、雨戸を細目に開けて、小さな、風呂敷に包んだものを押入れた。

「お卷、／＼」と、私は氣立ましく喚んだ。

「へえ」と、直ぐ背後で女の聲がした。お卷は宵からまんじりともしなかつたものらしい。

「其處に居たのか」と、急に聲を潛めながら、「ぢや、これから出掛けるんだよ。此着物は如何するんだい。」

「あゝ左樣かな」と云つて、それを受取つたまゝ默つて居る。

「まア好えわな、船の中ぢやて其儘でも好えに――」

「それぢや、一寸此家の方に」と、お卷は蚊帳の釣手を外しながら云つた。

「えゝ、左樣ぢや〳〵、家の方にも一遍挨拶して――」

駒吉も立ちながら心を附けた。

お卷が手探りて次の間の襖を開けやうとすると、

「私達なら今其方へ參りますわな」と、蚊帳の中から主人の聲が聞えた。

やがて、素裸の上に晝間着て居た絆纏を引被けながら出て來て、「いよ〳〵駒さが見えたなも。最うお立ちかな」と云つた。

「へえ」と、二人は逡巡しながら、「いろ〳〵何うも御厄介に成りまして」と、一緒に頭を下げた。

「何卒、ま、御機嫌宜しう」と、上さんも主人の袖の下から挨拶した。

三人はこそ〳〵と足音を盜む樣にして、軒下を離れた。堤の上から振回ると、其時恰度山の端に月の入る所であつた。私は其月の色が氣に懸かりながら、何を思ふ暇もなく、しつとりと露を持つた土手の草を踏んで、水際迄降りて行つた。川の水は一面に黑ずんて、殆ど流れるか流れぬか分らない。橋の下には、小船が一艘繫いてあつた。

主人は此處迄送つて來て、お卷と私とが乘り移るまて、船緣を抑へて居て呉れた。二人は駒吉の云ふが儘、胴の間に寢轉んて、其上から毛布を捲いた。人目にかゝらぬ爲だと云つて、更に其上から蓙の匂

ひのする荒蓆を被けられた。身動きをするたびに、蓆の端が頸筋にちく／＼する。

「ちや、好えかな。離すぞな」と、橋杙から纜を解きながら、主人が云つた。

「え丶、何卒。」

これは駒吉の聲である。主人は手に持つた纜を船の中へ抛り入れた。

小船はゆら／＼と搖れながら、川の眞中へ出た。其儘ずん／＼川下へ流れて行く。駒吉は時たま棹を操つて居た。

私の眼には只兩岸の高い堤だけが見えた。水の上て、船に搖られる寢心地は、又何とも云へないものてある。お卷はと見ると、船底に頭を押附けたまゝ、ぼち／＼と大きな眼を見開きながら、靜平と身動きもせずに居る。私も少時左樣して居たが、何時の間にやらうと／＼と夢路に入つた。

はつとして眼を覺ました。氣が附いて、四邊を見廻して見ると、船は未だ流れて居る。駒吉は艫に立つたまゝ、折々想出した樣に棹を操つて居る。

最う何の邊迄來たのてあらう。私も亦何の位眠つたのてあらう。

「何時頃着くんだい」と、喉元迄出たのを、ぐつと嚙み殺した。何うせ斯う成つた上は、何事も向ふ任せにしたが可い、連れて行く所へ連れて行かれた方が可い。それ迄は何事も訊かずに只待つて居やう。

お卷はと思つて、胸の上へ手を遣つて見たが、靜平として動かない。女も寐入つたものと見える。

私は又うと／＼とした。

「もし、〳〵」と、耳の側で喚ぶ者がある。ぼんやり眼を開くと、お巻が私の胸に手を掛けて搖起して居た。「もし、最う起きなさいませんかなも。最う着いたさうぢやぞなも。」

私はびつくり起上つた。睡い眼を擦りながら見廻はすと、眼の前に眞黑な土手が見えて、四邊は一面に桑畑であつた。

「何處だい、此處は？」

「何處ぢや、私は知らんがなも。」

駒吉は船から下りて、棹を砂の中に突立てながら、ぐる〳〵と纜を捲いて居た。

空には最早や曉近い氣色が立つて、冷々とした朝風は浴衣の袖から腹の底へ沁み渡つた。私はぞく〳〵と身戰ひをした。

三

三人は船から上つた。

土手を登ると、下り坂に松原がある。大きな赤松の並樹を拔けて、繩手にかゝつてから七八丁、最う四五丁で、片田舍の小さな町へ這入らうと云ふ手前の田圃の中に、二三軒かたまつた家並がある。其眞中で、門の柱に『鯉こく』と木の札を懸けた、小料理屋めいた草葺の家の前迄來て、駒吉はぴたりと足を留めた。つか〳〵と軒下へ近づいたが、一寸振向いて、二人を小手招きしたまゝ、ずつと土間へ通つた。

私もお卷と顔を見合せて、其後からつゞいて這入つた。奥からちんべ一枚で出て來た肥滿ッちよの上さんを片蔭へ招んで、駒吉が何やら談合つて居るので、私達は土間へ這入つたもの丶、片隅に小さく成つて立つて居た。上さんは頻に「よし、〳〵」と點頭いて居たが、ちらと後目に二人を見て、又何やらぼそ〳〵と囁き合つた。

やがて話が分つたと見えて、「あ丶大丈夫とも」と、にた〳〵笑ひながら此方を向いたが、「一寸待つとくりやすな、一遍裏座敷を掃除させるに」と云つて、「お仙や、お仙」と、少女の名を喚び〳〵、裏の方へ出て行つた。

「さ、何卒此方へ寄つてお掛けやすな」と、先づ駒吉が緣鼻に腰を下ろした。二人も並んで腰掛けた。

駒吉は腰から煙管筒を拔いて、燐寸の火で、一人すぱ〳〵烟草を吸つて居たが、

「此家の御新造はな、あれで仲々呑込んで呉れる人でなも」と、こんな話から切出して、お二人とも宿屋に泊つても、宿帳に本名を名告る譯には行かない。縱令又好い加減な名を騙るにしても、それが露顯した日には事面倒である。で、いろ〳〵考へた揚句、當座の隱れ家に此家を目指して連れて來たのだと、重ッたい口からくど〳〵云ひ聞かせて、

「此家なら、そんな心配は入らんでなも。ま、宿屋の樣な自由なことには行かんぢやろが、些との間だに辛抱しやすなも。」

「なに、宿屋だなも？」と、奥から取つて返した上さんが口を挾んだ。「そんな風をして、若い者が宿屋

へ泊つたら、それこそ人の目に立つて仕樣がない。私許も斯んな稼業はして居るけど、此頃では滅多にお客もないてなも。」

「左樣ぢや。そんな事云つては惡いが、本當に誂向ぢやてな。」

「はゝゝ」と、上さんも一緒に成つて笑つた。「それでは一遍裏座敷へ行つて見やすか。最う掃除も出來たろに。」

私は默つて立上つた。

「お卷さまも」と、駒吉に注意されて、女も後から跟いて來た。

土間を拔けて、裏口から便所の前を左へ曲ると、庭の外れに隱居所めいた小家がある。六疊と三疊の二間あつて、柱など大分古びて見えながら、壁は未だ荒壁の儘である。誰やら寢て居たのを叩き起して、遽てゝ後の掃除をしたものらしい。

「此部屋ぢやがなも」と、上さんは突然うしろの窓を開放した。一目に、方三丁もあらうと云ふ白蓮紅蓮の大池が見渡される。

「まア綺麗な」と、お卷は思はず聲に出した。

「これでも大池の蓮と云つたら、元はわざ／＼近在から見に來よつたものぢやがなも」と、上さんは謙遜らしく云つた。

最初見た時は、何だか下司張つた女で、こんな奴に差出口をされたら可厭だと思つたが、別段入らぬ

口を利くてもなく、二人を殘してそこ〳〵に引返した。朝餐の小女に運ばせて、二人に任せて置いた。
私は飯茶碗を代へて、凝乎とよそつて呉れる女の手許を見ながら、不意に
「おい」と喚んで見た。
「え」と、お卷は顔を振上げた。「何だつたなも。」
「何だつて、分つてるぢやないか。」
女はきよとんとした顔をして居る。
「なにさ」と、私は女の手から茶碗を受取りながら、「只ね、斯うして二人限りで御飯を喫べるなア始めてだらう。今一寸左樣思つたから云つて見たのさ。」
「ひゝゝゝ」と、お卷は膝の上を見詰めたまゝ、何も言ふことを知らぬ女の樣に笑つた。私はそれても嬉しかつた。
朝餐の濟んだ頃、駒吉は二人の所へ顔を出して、最う歸つて行くからと告げた。何れ異變があれば時を移さず使を出すし、異變がなくとも、四五日の間には、お重かお關の中誰か見舞ひに來させるからと約束して立つた。私も椽迄出て見送つた。
後は二人に成つた。一日中、二人で何をして居ても、誰一人邪魔するものはない。私は年紀から云へばお卷と同い歳でも、三年前、或所で手取女の商賣人に引懸つて、散々脂を取られたが、一方では其道の修業も積んだので、女と戯れるとなら相應に心得て居る。只相手がづぶの初心だから殆ど手答へがな

い。只男のするが儘に成つて居る。それだけ男の方ぢや焦躁しくもあれば齒搔くもある。お終ひには、只顔を見合せたまゝ、うつとり逆上せるやうな心持もした。

夕方から何うも蒸暑い。一雨來るかも知れないと云ふので、夕飯の膳を下げると一緒に雨戸を繰つた。私達も昨宵眠らなかつたから、早く寢ることにして、二人で蚊帳を釣つて居ると、ぽつり／＼大粒な奴が遣つて來た。「そや」と思ふ間もなく、屋根の上で耳も裂けるやうな雷鳴が聞えた。二人は一縮みに縮み上つて、蚊帳の中へ這ひ摺り込んだまゝ、小さく成つて仕舞つた。

俄に低い屋根も拉げるやうな大雨である。神鳴も仕ッ限なしに鳴りはためいた。中には直き裏の池へ落ちたなと思はれるやうのもあつた。それでも女を伴れて居るだけに、自分から怖氣附いてはと思ふのてあらう、顔だけ蒲團の外へ出して、ぽち／＼しながら眼を開いて居た。雨戸の隙間から射し込む、火繩の樣な電光にもたぢろがなかつた。

やがて一時間餘りも經つた頃、だん／＼雷鳴も遠く成つて、雨も歇んだ。母屋では二たび雨戸を繰つて空模樣を見て居る聲も聞えた。お番はと見ると、私の胸に獅嚙みついたまゝ、何時迄も靜平として動かない。

「おい、おい／＼、如何したんだい」と、肩に手を掛けて搖振つて見た。

「本當に如何したんだな。」

「えゝ？」と、やつと寢卷に包んだやうな聲で返辭をしたまゝ、矢張動かない。

私も二たび喚んで見やうともせず、其儘うと〳〵と寢入つた。

明くる朝眼を覺まして、窓を開けると、空はからりと晴れて、蓮の葉の上を渡つて來る風がそよ〳〵と蚊帳の裾を弄つた。私は欄干に凭れて、目の下の池を見ながら、何を考へるともなく考へて居た。少時して、振回つて見ると、お卷は夜具を片側へ積んで、それに凭つかゝつたまゝ、如何したのやら顳顬の邊りを抑へて居る。

「如何したい、心持ても惡いのかい」と訊いて見た。

「いゝえ、別に」と云ひながら、急に立上つて押入へ片附けやうとした。

「可いぢやないか、左樣して置いたら――今に彼の少女が來たら爲せやう。」

お卷は云はれる儘に蒲團を下に置いた。そして、欄干の側へ來て、私と並びながら、何氣なく池の水を見下ろした。

私は不圖二人の身の上を思つた。斯うして世の中から隱れて、宿帳にも名さへ附けられぬ身に成つて見ると、二人は最早世間から逐はれたので、此社會の保護は受けられない。それと共に、二人の外には世間も社會もない。二人だけの世界に生きて居るやうな氣がする、日は二人の爲に暮れて、二人の爲に明けるやうな氣がする。私は何と云ふこともなく大きな聲がして見たかつた、大きな聲をして喚んで見たかつた。

朝餐の膳に向つて箸を執りながら、小女から小熊野の松の大木に雷樣が落ちたと云ふ話を聞いた。小

熊野と云ふのは、昨日の朝通りがゝりに見て來た堤の松林らしい。お卷は顏色を變へて聞いて居た。

午后に成つても、お卷は何處が惡いと云ふでもなく加減が惡いやうな容子をして居るので、强つて寐たくないと云ふのを、無理に枕を持つて來て横に成らせた。私は枕頭に坐つたまゝ。凝平と女の顏を見詰めて居た。何時迄見詰めて居ても退窟するの何のと云ふことはない。

不圖、椽先の沓脱石の上に眼を移すと、古い雪駄が泥塗れに成つたまゝ、一足揃えて脫いてある。私は少時それを眺めて居たが、つと立上つて、寐て居る女の額の生際を指で弄つて見た。お卷は吃驚した樣に眞赤な眼を見開いた。私は何とも言はずに、二たゝ女の耳朶のうしろに——。

何やら聞覺えのある女の聲がして、ばた〳〵と足音が聞えたので、驚いて振向ると、上さんが驅けて來て、

「お重さが見えたぞな」と知らせて呉れた。

「えッ？」と云ひながら。私も思はず椽先迄飛び出した。

お重は何時になく明石の一重など着込んで、他所行の服裝をして、車夫に風呂敷包を持たせながら這入つて來た。私はお重が椽側へ上つて、車夫に賃錢を拂つてかへすのを待つて、

「加何したんだな、え？」と、氣遣ひ相に訊ねた。

「譯は後で話すがなも——えゝ、そんな心配な事ちやない。それよりも岐阜から三里、此炎天に腕車に乘つて來たら暑くて仕樣がない。一寸御無禮するぞな」と云ひながら、次の間へ立つて帶を解きにかゝ

つた。

「えゝ左樣とも、此暑いのに帶附ぢや何も成らんがな。お重さ、お前さん浴衣があるかな。無けな持つて來(と)らずに」と、上さんが腰を上げた。

お重は外の事に紛れて返辭をしない。

何時の間にやら、お卷も起上つて、三疊でお重を手傳つて脫棄てた着物を衣紋竹に掛けて遣りなどした。やがてお重は足袋を穿いたまゝ腰卷一つに成つて出て來たが、やをら女持の煙管を取上げて立てつゞけに二三服喫つた。

お重の云ふ所に據れば、お卷が家出した後でも、宅(うち)の方は割合に平靜てある。内心周章(あはて)て居ても、表面ぢや、兎に角そんな所は見せない。それだけに片ッ方の話も未だ進捗する所へは行かない。只、差詰め困つたのは、お重の一身てある。誰云ふとなく、今度の事は如何してもお重の鉤尺(こしがね)だらうと云ふやうな噂が立つて、方々て目を附けられ出したから、なんぼ何ても烟(けぶ)たくつて、自宅(うち)に靜平(ちつ)としては居られない。此上愚圖々々して居やうものなら親迄引合に出され相なので、一寸氣を拔くために、大阪へ立つた積りで遣つて來たと云ふのである。金子(かね)は私の母の手許から引出した。私にも誂(あつ)らつて來たと云ふので、紙に包んだ紙幣を私の手に握らせた。

「確に五圓札が六枚有つた筈だに、改めてお呉れなさいな。」

私は默つてそれを受取つたまゝ、少時云ふこともなかつた。

お重は二たび立上つて風呂敷包の中から紙袋を取出したが、

「お菓子が不自由だらうと思つて、わざ〳〵廻道をして、長崎屋の松風を購つて來て上げましたぞな。好う氣が附くてせう」と、一人て饒舌りながら、今度は椽側から木綿の風呂敷に包んだ重箱を持つて來て、「これはお二人に喫べさせたいと云つて、阿父さがわざ〳〵調へたんぢやが」と、二人の前へ出した。手料理の鰻の蒲燒である。「ぢや、これは後に仕舞つて置きませうね。」

「あゝ、左樣してお呉れ。」

私は只それだけ云つた。かねて覺悟はして居るものゝ、何だかいよ〳〵事件が重大に成りさうな報告を聞いては、一寸物を言ふ氣にも成れぬのである。

お重は上さんの持つて來た浴衣を引被けると、「一寸」と云つて、庭傳ひに母屋へ行つた。其儘、何を話して居るのやら、小一時間も歸らなかつた。

後の二人は、別に談合ふ程のこともなく、まじ〳〵と顏を見合せて居る所へ、お重が戻つて來て、突然、

「直樣、お湯へ入りやアせんか」と云つた。

「あゝ」と、私も横に成つたまゝ、ぐるりと向直つた。

「入りやアすなら、直に入つとくりやアせ。私も後で一風呂浴びたいから――」

「ぢや、左樣しやうね。」

私は直に立上つた。

湯殿は裏座敷の隣にある。小女がよち〳〵と大きな手桶を下げて來て、湯の加減を見て呉れた。鐵砲風呂の中に首迄浸りながら、うつとりとして居ると、廂から晝間の薄白い月が覗いて居た。

やがて好い加減にだば〳〵と遣つて、眞赤に煠つた足を片足代りに拭き〳〵上つて來て、

「おい、最う明いたぜ」と、椽側から聲を掛けると、

「えゝ、今一寸手が引けませんから」と云ふ聲に次いて、お卷の笑ふ聲がした。

見ると、お重がお卷の背後へ廻つて、髮を梳いて遣つて居るのである。私は火鉢の側へ寄つて、一人て茶を注いて呑みながら、器用に梳櫛を扱ふお重の手許を見守つて居た。

やがて、それを下に置いて、

「ぢや、湯卷に束ねて置くぞなも。私や其外の髮は旨く結はれないんだから――」

「えゝ何卒――左樣ぢやけど、私そんな髮に結つたことないて、私に似合ふか知ら――」と心配相てある。

「さ、髮結さんが上手ぢやてなも。だが、貴方の樣な面長の顏には、束髮はうつるのよ」と、お重は手早く髮を束ねにかゝつた。二三度結ひ直して、「これて如何？これては如何なの」と、鏡に映して見せながら、又自分て解ぐして、やつと四度目位に結ひ上げた。

「ま、此位にして置かうかいも」と、反古て油手を拭いて居たが、又氣に成るのか、梳透して鬢の邊り

を弄つて見た。
「えゝ、何うも有難う」と、合せ鏡をして居たお巻は、それを下に置いて、何處やら嬉し相に禮を云つた。「これて薩張したわなも。」
「直に湯へ這入ませうね」と、お重はてきぱき櫛の道具を仕舞つて、鏡臺を片寄せながら立上つた。
「さ、早く被入アすな。あ、左樣、白粉壺を持つて行きませうね。」
兩女は一緒に湯殿へ這入つた。
少時笑聲がして居たが、氣が附いて見ると、何時の間にやらふつつり止んだまゝ、待てど暮せど上つて來る樣子もない。女の長湯だと思つても、一人子然と待つて居る退屈さに、庭へ下りて、掘拔井戸の噴水の中に手を入れて見たり、裏の池に繋いてある生洲の葢を開けて見たりして居たが、到頭湯殿の前へ行つて、
「おい」と喚んで見た。
「え？」と云ひさま、内側から拔き戸を開けた。夕日の日影がずつと射し込んで、湯殿の中は龕燈提灯を向けた樣に明るい。
「如何したんだい」と訊いて見た。
「あゝ、今直きてすから――一寸目眩しいに其處を閉めて置いてお呉れやすな。」
私は直に又ぴたりと閉めた。

何ても、兩女ながら流板の上へ出て、お重がお巻の顔に白粉を塗つて遣つて居たものらしい。相手がお重だけに、何だか姉女郎がぽつと出の妹女郎を取廻はす樣てもある。それてなけりや、娘をお浚ひに出した母親が氣を揉んて居るやうな——私は裏庭を往返りしながら、そんな事を考へて、一人北叟笑むだ。

やがて兩女とも湯から上つて來た。二人とも、こつてり化粧て、つぼめた唇を光らせて居たが、取分けお重の容色が水際立つて、歳さへ十餘り若やいて見える。餘りちんと濟まして居るので、

「そんな風にして、暑かァ無いかい」と訊くと、

「お化粧をすると、却て涼しう成るものてすよ」と云つて聞かせた。

夕餐はお重の持參物を開いて、三人一緒にした。私は何時になく酒を取寄せて、一人て二三杯傾けた。お重はあんな稼業をして來たものにも似ず、お合ひさへ出來ぬと云つて手を振つた。

夕餐後、私は其邊を散步しようかと言出した。お重も一寸首を傾げたが、此邊なら別に知つた人もないし、殊に夜だから構はなからうと云ふので、直に贊成して吳れた。お巻一人うち〳〵して、何だか出ともないやうな氣振を見せた。それに出るとしても、下駄からして無いと云ふのてある。

「ぢや、其下駄を買ひに行かうぢやないか。」

「ても、こんな在郷の町に有りますか知ら」と、未だ危なげてある。

「さ、何うせ好い物は無いてせうが、庭穿の樣なのても、一足無いことには困るてせう」と、お重が側

から口を添えた。

「左樣ぢやなも」と、お卷も納得して隨いて來ることにした。

そろ〳〵人顏の見えぬ頃、青田を渡る涼風に吹かれながら、二人の女を連れて、一筋仄白くつゞく街道をぶら〳〵歩くのは、漫ろに心も浮くものである。私は二人を遣り過して、二人の後姿を見較べながら、のそ〳〵隨いて行つたが、時々息が詰まるやうな心持がして立停つた。何も知らぬ二人は路傍に待合せて、私が近づくと又歩き出した。

下駄屋は町の取附にあつた。が、買物は歸路のことにして通り過ぎた。先づ此町で名高い弘法大師の寺へ行つて見たが、夜のことゝては有り、命日でもないので、境内は寂寞として人氣もない。ぴたりと盲目の眼の樣に閉切つた扉の外から拜を遂げて、其儘引回した。片田舍のことだから、大通りと云つても、賑やかな所はほんの店舖なら七八軒並んで居るに過ぎない。自餘は百姓家も同然である。三人は結句それを好いことにして歩き廻つたが、何處からともなく、二たび下駄屋の前へ出た。

「如何するかい」と云ふと、

「えゝ、這入りませうなも」と、お直が先に立つて這入つた。

成程、下駄は山の樣に積んであるが、いづれも格恰の變な、いやに臺の高い物ばかりで、町の女の齒に合ひ相なのは一つもない。それでも、兩女は其中から彼れか是れかと撰り好みをして、やつとの事で一足購ふことにした。私は蟇口から一圓紙幣を出して十五錢釣を取つた。

元の裏座敷へ戻つて、暫く縁側で團扇を使ひながら涼んで居たが、汗の退くのを待つて、小女を喚んで寢る仕度をさせた。小女は急いて上さんを喚びに行つた。やがて上さんは小女と一緒に遣つて來て、蚊帳の釣手が何うとか斯うとか云ひながら、三疊間の中を迂路々々して、何時迄も果てしがない。

「如何したんぢやな」と、お重が椽側から聲を掛けた。「私なら別に釣らんでも、一つ蚊帳の中へ這入つて寢ても可いぞな。」

「えゝ、そりやお前さんは可えぢやろが——」と、上さんは矢張仰向いて鴨居の邊りを手探りに探つて居る。

「なに、私や横に成ると、直ぐ寢て仕舞ふから構はんさな」と、お重は事もなげに云つた。

私は、不圖、綠船の夜を想出した——あの、女の兩腕の間に狹まれながら、まじ〳〵と眠られなかつた夜を。何だかそれをお重が知つて居るらしい、知つて居ながら、空恍けて居るらしくも思はれる。

兎に角、如何にかして三疊間の蚊帳も釣れたらしい。

「最う可えかな。ぢや、お先へ失禮」と、お重は何時になく自分から先へ蚊帳の中へ這入つた。

私は返辭をすることも忘れた。かうして別々の蚊帳へ這入つて寢るのが、何となく氣が差して、暫く蚊帳の外へ出て居た。寢床へ這入つてからも、音さへ立てぬ樣にして靜平と辛抱して居た。三疊の方からは時々想出したやうに團扇を使ふ音が聞えた。

明くる朝、お容は一人早くから寢床を出た。私もつゞいて起上つた。お重だけ何時迄經つても起きて

來ない。襖の隙間から覗いて見ると、壁の方へ向いたまゝ、寢て居るのか身動きもしない。

私達が待ち勞びれて朝餐を濟ました頃、やつと目を覺まして出て來た。

「何うも眼が流れて仕舞ふ程寢たなも」と云つた限りで、ぼんやり庭の上を眺めて居た。

それからも懶さうに足を投出して坐つたまゝ、餘り口も利かなかつた。

此日は近邊の休日と見えて、午后に成ると、いろ〳〵の風體をした男が七八人も此家へ聚つて來た。母屋の二階へ上つて、何うも樣子が袁玄道でも開張するらしい。小女を捕まへて訊くと、近所の若衆が寄つてけころの札を引いてるのだと云ふことである。

間もなく、お重は一人母屋へ行つた。如何したのやら、夕飯時に成つても歸らない。私は何だか博打の仲間へ這入つて遣つてるのぢやないかと云ふやうな氣がした。小女を喚びに遣らうかとも思つたが、其儘捨てゝ置いた。

其夜、一時頃に成つて、お重はやつと戻つて來た。次の間で、少時灰吹の音がして居たが、やがて横に成つて寢たらしい。

又、次の日が來た。今日もお重は朝から母屋へ行つた。何だか故と左樣して二人を避けて居るらしい。二人の方でも、お重を邪魔にするやうな氣振らひが見えたのか知ら——成程、お重の前では二人とも餘計な話はしない。二人寄つて居る所へお重が來て、途中で話を止めたこともある。併しお重のお陰で二人一所に寄りながら、最うお重を要らぬものと思つて居る樣に取られるのも心苦しい。

からして二三日經つた。お重の心持を憚りながら、矢張打出して何と云ふことも出來なかつた。

或朝、未だ朝飯も喰はぬ間から、駒吉が血相變へて遣つて來た。樣子を聞けば、何うも自宅の方の話が面白くない。それにお卷の宅ぢや、到頭警察の力を藉りても娘を搜出さうとして居るやうだから、兎に角、一旦此處を立てと云ふのである。

それだけ云ふと、駒吉は直に又引回して行つた。

最早何を云つて居る暇もない。三人は遽てゝ此家を引上げる仕度にかゝつた。私達は別に行く所もないから、六月入學試驗を受けて、秋から學期の始まることに成つて居る、或北國の學校の所在地へ向けて旅立つことにした。それにしても、お重は何處へ行く氣だらう。

私は幾たびか女の顏色を見て居たが、思ひ切つて、「お重、お前は如何する氣かい」と訊いて見た。

「私？」と此方を向いて、「私は矢張大阪へ行くより仕樣が無いてせう。」

大阪へ行つて、何處か手頼る所でもあるかと訊いて見たかつたが、默つて居た。

「まさか娼妓をして居た時のお客の所へも行かれまいが、あの頃の主人もあるてなも。」

斯う云ひながら、お卷の帶を後ろから緊めて遣つて居た。

やがて頼んだ腕車も來たので、大垣から西行の汽車に乘るつもりで、三人一緒に宿を出た。二里の田舍道をがた〳〵と輪の鳴る腕車に搖られて、午后一時頃、やつと大垣の停車場へ着いた。汽車の都合て、停車場前の旅館へ上つて、又三時間餘りも待合せた。

いよ〳〵汽車の出る時間が來たので、四邊に氣を配りながら遽て丶乘込んだ。お卷は殊にびく〳〵して居た。

垂井、關ケ原と過ぎて、伊吹山の麓からそろ〳〵日が暮れかゝつた。やがて米原驛へ着く。私達は此處で降りて、北國行の汽車に乘換へなければ成らぬ。

二人はプラットフォームの上に立つて、汽車の中のお重を見守つて居た。お重も窓から顏を出して二人を見返して居た。薄暗い洋燈の灯の下て見る所爲か、ひどく窶れて、影が薄い樣にも思はれる。

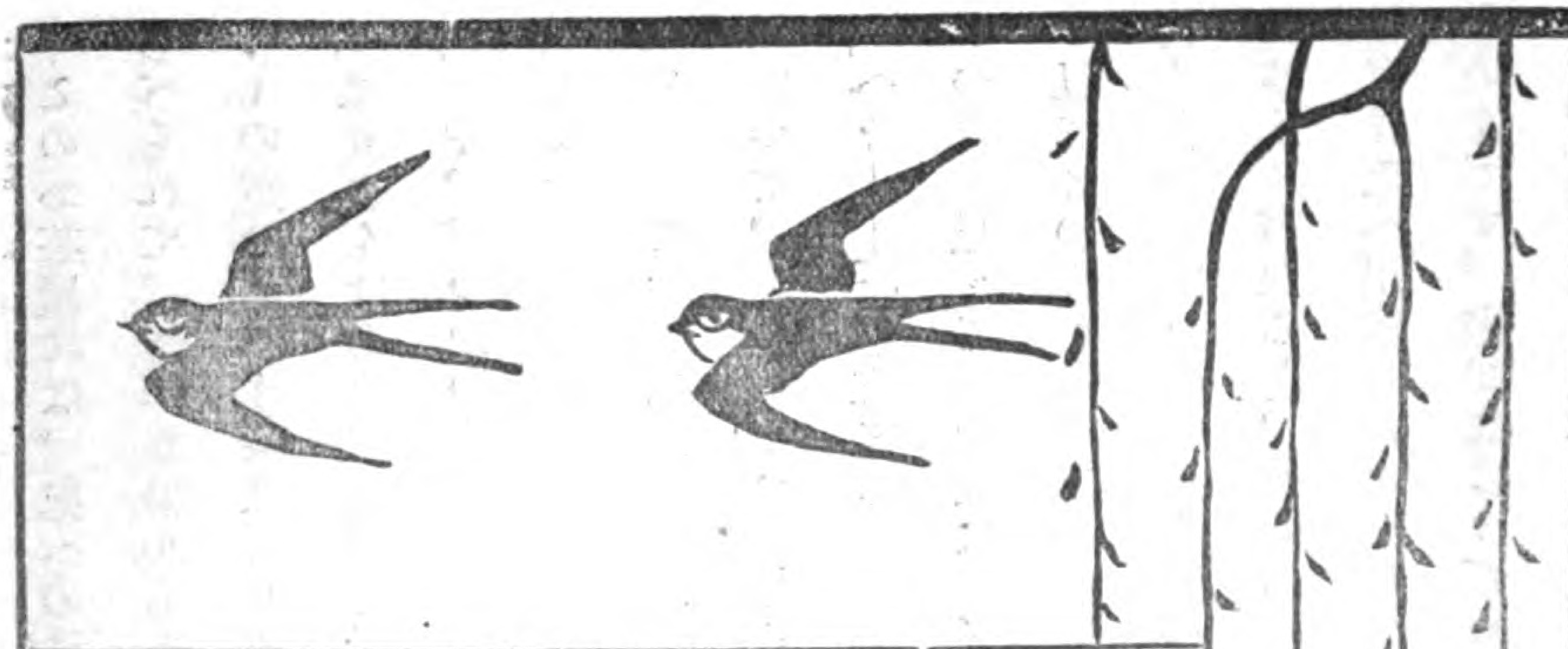
間もなく、汽車が動き出した。

「左樣なら、お二人ともお御機嫌宜しう」と、お重が頭を下げた。

「左樣なら、〳〵」と、私達も挨拶を返した。

見る〳〵お重の姿は見えなく成つた。列車の窓が目まぐるしくつゞく。私は急にあの女が可哀相て堪らぬやうな氣がした、追ひかけて何とか言つて遣りたいやうにも——

（をはり）



春雨の寮

倉田啓明

仇と意氣地の二筋を、三筋にかけた五丁町、水近江といふ大籬の家を出たのは、まるでお雛さまの道具にある雪洞(ぼんぼり)のやうな、彼岸櫻の咲きそろつた、春の日のかはたれ時でした。

さうして名古屋山三の銀(しろがね)づくりの太刀の光に、顫へそよぐやうな仲の町の掛け行燈に、濱千鳥と書いた椎丸さんの家の、紺のれんを潜りました。

このお茶屋には、抱への妓女が五六人もありましたらう。幾臺かの鏡臺が出窓を前にして、綺麗にならべられて、皆がお湯からあがつて來ると、どの妓もこの妓も同じやうなしどけない姿をしては、それ〳〵の鏡の前に片膝立てゝ座りながら、夕ぐれのお化粧を凝らすのでした。

「椎丸さんはゐますか。」と云つた、私の聲を聞きつけて、椎丸さんは奥からばた〳〵と駈けて來ました。

「おや、歸つたの。」

「あゝ。」

「どうして――二三日前に行つたばかりぢやないか。」

「だつて、寂びしくつて詰らないんだもの。」

「へえ――。」と椎丸さんは呆れましたといはぬばかりの顔でした。それでも私の歸つて來たのが、嬉しかつたと見えて、眼元に可愛らしい皺を寄せて、にこ〳〵笑つてゐました。

私はこの春から、芝の伯母さんの家へ移つて、そこから日比谷の中學へ通ふことに定まつたんです。何んだつて吉原の家から通つちや惡りいのか、子供の私には薩張り見當がつきませんでした。そしてお母さんに尋ねると、お前の爲めによくないとか、勉强が出來ないからだとか云つてゐました。で、一昨日私は芝へ引越したんでしたが、何んだか穴へでも投げ込まれたやうに、寂しくつて寂しくつて仕様がないんです。晝間はさうでもありませんが、夜になると火の消えたやうに家の人は皆八時を合圖に寢てしまひます。さうして私をも無理やりに床へ押し込んで了ふんですもの、とてもやり切れやしません。

美くしい夜の世界に育つた子は、鳥眼の人みたいに、夜になると恐しい物にでも襲はれたやう、聲を秘めて寢て了ふ陰氣な家には一晩だつて居られるものですか。それだから堪らなくなつて、今朝默つて逃げて歸つて來ました。私は學校なんかへやつて貰はなくつても可いから、あの美くしい賑やかな曲輪の家にゐたかつたのです。

「よく叱られなかつたね。」

「叱られちや不可ないからね。斯う云つてやつたの。伯母さんとこは夜になると幽靈が出ておつかないから歸つて來たんだつて。」

「ほんとうに幽靈なんか出るのかい。」と椎丸さんは不思議さうな顏をしました。

「うそなんだよ。さう云はないとね。叱られるからさ。するとお父さんはそんな馬鹿なことがあるものかと云つてたが、お母さんはあんな伽藍とした大きな家だから出るかも知れない。又寂しいから氣の勢でさう思ふんだらうからつてそれて歸るやうになつたの。」

今まで大きな桐の火鉢にあたつて居た椎丸さんのお母さんは、この時にや〳〵笑ひながら、

「まあ、惡い坊ちやんだこと。お父さんやお母さんにうそをついて歸つてらつしやつたのね。今度行つたら云付けてあげますよ。」と嚇すやうな口調で云ひました。

お母さんは物馴れたもの丶云ひやうや、それ者らしい身のこなしをする人で、褄はづれが年を取るに從つて一入凄く見えて來ました。

「いゝよ、いゝよ。あたい死んでもあんな厭な家へは行かないから。」

「だつて椎丸も矢張りそんな寂しい家に行つてたんですよ。」

「椎丸さんは小ちやい時からゐるんだもの慣れつ子になつてらあ。」

「あら、あなたは椎丸の事を知つてらつしやるの。」と云はれて私は默つて了ひました。

この時こゝの抱へつ子のお時姐さんがお湯から上つて來たので話を途切らした。お時姐さんは素足に縞物、羽織も着ずに、毛筋を横ざしにして鏡の前へ坐りながら「坊ちやん、今日は。」と私に挨拶をする。

「この坊ちやんは伯母さんとこを逃げ出して來たんだとさ。」

「まあ誰と駈落なすつて。」

「獨りで——。」と私は澄まして云つてやりました。

どつと三人とも笑ひくづれました。

「矢張りお母さんのお乳が戀しいんでせう。」とお時姐さんが云ひましたから、

「いゝや、伯母さんに振られて歸つて來たのさ。」と私はませた口の利きやうして、直ぐその後へ「時ちやんの顔が見たいから。」とつけ足した。

「へん、いつも時のことをお時婆〳〵と云つてる癖に。」と椎丸さんに素つぱ拔かれて、私は眞赤になつてしまひました。

「口の惡い坊ちやんだことね。」とお母さんは笑ひました。

今時分定まつてやつて來るカリン糖賣が、青竹の籠を脊負つて腰板をばたつかせながら往來を歩いて來ました。大道廣い曲輪の中を我が物顏の六法は、丹前姿ならぬ不破伴左でも氣取つてるんでせう。所がこの男は何んとか云ふ强盜だと後で判つたさうです。二昔ほど前、小梅の小倉庵といふ有名な割烹店の主人が大盜賊だつたといふ事と好一對の話柄です。

二日間私は灯(ひ)の入つた曲輪の景色を見なかつたものですから、急に外へ出て見たくなつて、椎丸さんを促して微溫湯(ぬるゆ)のやうな空氣に浸されてる仲の町を歩きました。

お向の苅藻屋の土藏の忍返しの間から、まんまるいお盆のやうなお月さまが、ぬつと現はれてゐました。

兩側に並んでるお茶屋の紺のれんには、未だ初春仕更へた許りの新らしい藍の香が殘つてるやうでした。五月の袷どきになると紺の香を懷かしげに、遠い國から渡つてくる燕は、いつもこの紺のれんをくゞります。そしてつういつういと飛んで行つては、向ふの街(まち)の角(かど)でひらりと飜(かへ)つて、またやつて來る。水近江の私の家でも濡れる心の傘(からかさ)にもと、濡れにぞ濡れた濡れつばめに塒を貸してやつてゐました。

椎丸さんは濱千鳥といふ引手茶屋の子でした。

世の中が萬事、簡易とか速成とかを目度(めど)にしてゐる時ですから、同じ遊ぶんでも安上りに限るやうになつて來ました。登樓(あが)る時だつて先づ妓夫に物は相談だと云はぬ許りの顏をして「如何だい。一つ手輕

に頼まうぜ。」などとその受合顔をほく／＼もので、狐鼠／＼と宿無し猫のやうに二階へ登つて行く。そして割床へ押込められて、不承／＼待てど暮らせど女は來ない。來たかと思へば若い衆が油を注ぎに來るつて有樣ですから、切ない切ない後朝(きぬぐ)の恨みもなければ見返り柳も要りません。そんな世の中ですから引手茶屋は殆んど上つたりです。然し其頃はまだそれ程でもなく、明治の初年、ぱつと榮えた曲輪の名殘を花火の消え際のやうに果敢なくも留めてゐました。

椎丸さんの生みの母は、幼ない時から吉原で叩きあげた美くしい藝者でした。二代か三代か、廣重と落欵のある錦繪を、今でも椎丸さんは大切さうに秘めてゐます。その繪は向島の土手なんてせう。櫻の花が咲きみだれてる下を青い水がすうい、すういと流れて行きます。梢の間に白帆と待乳の森と筑波の夕霞と、そして花を慕ふか夕汐に、上手へ登る白魚や、二挺櫓立てた障子船、その土手の上に花の梢を見返す褄重たげな昔の藝者の立姿。これが椎丸さんの生みの母であつたのです。

お母さんの名はこまと云ひました。その兩親は本所柳島の片端(かたはより)の足輕長屋に住んでゐた榊原の御家中だつたさうです。然し維新といふ大きな波は、三百年の澱んだ空氣に倦みながら暗い屋敷の角窓に朝夕愼ましく控へてゐた、椎丸さんの祖父母の家を一溜もなく壞滅のどん底に陥れて了ひました。さうしてこの破れ長屋の暗い一室に、只おど／＼と、怕ろしい夢の不思議を探るやうな瞳を見交はして、力ない嗟嘆(といき)を漏すとき、彼女は祖母の胸に乳を求めて泣く幼兒であつた。けれども此の破れ家にすらも永く留る事を許されませんでした。そして「浮世柄比翼稲妻(うきよづかひよくのいなづま)」の芝居に忘れられぬ、曲輪の富んだ揚屋の娘に貰

はれて行きました。廣重の錦繪に彩られた頃の彼女の身體にも、又銀扇を舞ひひるがへして秋の仁輪加の引摺屋臺に、與次兵衛吾妻の道行を踊つたその指先にも、若やいだ血潮が漲り騒いでゐたんでせう。又或時は着物帶、下駄にまで、助高屋高助の丸に「い」の字の紋所や水に千鳥の模樣を散らして與がつたこともあつたと云ひます。そして云ひ寄る多くのお客の中から彼女は一人の戀人を見出した。それが椎丸さんの生みの父でした。張、俠引、然う云ふ言葉が幽かながらも忘れられずにゐた頃の事で、彼女の心にも源氏車の後へは引かぬ意地と我慢の江戸氣質を持つてゐました。さうして彼女は金で面張る多くの客や曲輪の養母の意に逆つて、水神の八百松の座敷から趨つてしまつた。逼れた先きは戀人の家でした。男は「夢結蝶鳥追」の座光寺源之丞や「箕輪の心中」の藤枝外記を思ひ出すやうな、奔放な旗本の末男でした。曲輪の家を走つた彼女は養母の怒に歸ることもならず、物狂ほしさと遣瀨なさとの餘り月足らずの椎丸さんを桐の花のほろ／＼と散る根岸の家で生み落した。生れた子は直ぐに川楊や青蘆の茂つてゐる綾瀨の川上へ里子にやられ、今の兩親の許へ引き取られたのは五歳の春でした。

　椎丸さんは私よりは二つ年下で、仝じ淺草學校へ通ふ大の仲よしでした。椎丸さんはお母さん似て、笑ふ時眼を細くしたり物を云ふ時口を右の方へ歪めたりする癖のある可愛い美くしい兒でした。

　母の家と椎丸さんの實家の濱千鳥とは懇意にしてゐたものですから、私もよく遊びに行きました。それ故椎丸さんがこの家の子であることも、薄々知つてゐたのですが、椎丸さんの方は彼女が自分の生みの母であるとはまだ知らなかつたやうです。ところがその冬、濱家は商賣に失敗して、朝鮮へ引移るこ

とになつたが椎丸さん丈けは學校の都合で曲輪の家に留まつてゐました。

「君、僕のことを知つてゐたの。」

椎丸さんはこんなことを尋ねました。

「そりや知つてゐたよ。だけどほんのちつと許りさ。」

椎丸さんの身の上を知つてるのを私は何んとなく誇りにしてゐました。子供の時には他人の秘密を知つたり發いたりするのが無上に嬉しい惡戯でしたから。

「如何してそれを知つたの。誰かに聞いたんだね。」

「君んとこのお母さんが家のお母さんに話したんだつて。」

「家のお母さんおしやべりね。」

こんなことを云ひながら遂々角町の門際までやつて來ました。張見世の顏は大抵揃つて、早出の素見がぞめきはじめる頃でした。向ふから中番の新さんが豆絞の手拭をちよいと肩に引つ掛け、ほろ醉機嫌で歸つてきます。そしてこの春一本になつた、私の家へよく來る藝者と半玉とがお化粧をすまして、からころと塗下駄を運ばせつゝ小走りに歩いて行くを見付けて、彌造を拵へながら何かからかつてゐる。半玉はその後姿をじろりと眺めて「いやな新さんね。いつでもへゞれけに醉つぱらつてるんだもの。」と嘲けるやうに云ひました。若い藝者は私等の顏を見て、一寸愛嬌を作りながら、

「何方へ。早く歸らなきや不可ませんよ。」と姐さんらしいことを云ひます。

「大きにお世話だい。」と私が赤んべえをして見せると、げた〳〵笑ひながら行き過ぎます。

「君矢ッ張り今の家よりや廓の方が可いだらう。」と訊くと「あゝ。」と云つて椎丸さんは何事か切りに考へてゐました。

「君の家は朝鮮へ引越したつていつ歸つて來るんだい。」

「いつ歸るか分らない。」

「よく君を殘して行つたね。」

「でも永く向ふにゐるやうだと迎ひに來るつて云つてたよ。」

「迎ひにきたらどうする。」

「行かなきや不可ないだらうね。」

「そんな時には僕のやうに逃げてお出てよ。」

「だつて朝鮮と芝とは大分違ふからね。」と云つて困つたらしい樣子でした。

花火玉を無理に口へ差し入れて火をつけると、ぽんと高い響を立てゝ口が裂けるのを面白がつて、幼い時分によく蛙を捕りに行つた、お鐵漿溝のとこへ、二人は出てゐました。その頃溝はもつと廣く、夏の夕景などは殊に騒がしく鳴いてゐて、障子越に幽かな灯が映つてゐたものです。あれから千束町、田町へ抜けて草の疎らな土手傳ひに歸つてきました。粋な咽喉でもあつたなら「山谷がへり」て行きたいところです。

留守の間に芝の伯母さんが私を探しに來て「幽靈なんぞ出るものかネ」と笑つたがお母さんは子供の事だから幽靈は出ずに、蟲でも出ると困ると言つて、矢ッ張り家へ引取ることになつたさうです。お母さんはよく毎年の夏眠たさうな節で賣りにくる、箱根の山椒魚を買つて飲ませてくれました。

帳場格子の掛硯のとこへ坐つて豆に肩を叩かせてゐたお父さんは

「やつぱり俊には賑やかなとこが可いんだ。」と云ひました。

私は幽靈とは巧いところへ氣が付いたものだと、われながら感心して、豆のおどけたやうな顏をしげ〳〵と見詰めてゐたが、それにも厭きて内所を出ました。自分の居間へ行くと角行燈が點いてゐて床がとつてあります。枕元に置いてあつた眼さましのお菓子の甘納豆を頰張つて直ぐに蒲團の中へもぐり込んぢまいました。

うつら〳〵してる内に表の方で金棒の音がして、辰さんが例の粋な聲で

「火の用心さつしやりませう。廻らつしやりませう。」と云ひながら通つてゆくのが聞えます。

引け過ぎの廊下を傳ふ跫音が、小耳に觸つて中々寢付かれません。

翌晩、私は猿若町のお祖母さんとこへ遊びに行きました。お祖母さんは文字壽といふ常盤津のお師匠さんです。

近所の町娘が上浚してもらつて、本を伏せながらお辭儀をするとお祖母さんも輕く會釋を返へして、三味線を下に置きました。見臺を離れた娘は、柿色の地へ白て角木瓜の定紋を染めた包みへ、稽古本を

入れて、閾の所で又叮寧に挨拶をして、あたふたと歸つて行きました。

お祖母さんは未だ五十を少し越したばかりで、その夫のお祖父さんは夢橋左文と云つた此の時分の有名な戯作者でした。假名垣魯文などと肩を並べた人で同じく花垣さんのお弟子でした。明治の戯作者もこの人を以て止めを刺したんです。左文さんはお祖母さんに比べると三味でも唄でも餘程達者でした。歌澤、新内、清元は勿論、河東に常盤津、一中から薗八までも繩張りして、勝手ちがひの太棹にも手を出しました。粋士通人といはるゝ程の人には、まだ／＼文化文政の面影を宿してゐた時分ですから、お茶屋遊びにサノサ節や、ラッパ節、さては間がいゝ節で落ちをとるやうな人はありませんでした。義太夫さへ贅六趣味だと云つて鼻にも掛けなかつた位ですもの。それでもお祖父さんは和合連の和十や孝玉の出る前には、兎に角一かどの語り手だつたさうです。が、お祖父さんの趣味は矢張り、川柳に燈火の匂ふ頃、二階の小座敷から漏れて來る、爪彈の細い音締にありました。一體、一中だの薗八だのに耳を傾ける人はどうせあゝでもない、かうでもないと色んな道樂に行き詰つての揚句の果に足を辷らせる藝事のどん底なんでせう。

お祖父さんはいつも入谷の水近江の寮にばかり居つて、女郎衆に色んな遊藝を仕込むのを樂しみにしてゐました。

「お前一寸提灯へあかりをつけてお呉れな。」とお祖母さんは私に燐寸を渡したので格子のとこに吊してある、角木瓜の紋所打つた大きな圓い提灯へ火を入れてやると「憚りさま。」と云つて、切山椒を添へて

お茶を酌んでくれました。

　私はそれから「芝の伯母さんの家ぢや幽靈が出るよ」と、澄まして話しますと、お祖母さんは「おゝ氣味のわりいこつた。」と云つて襟をすくめながら「いくら開化の世だつて、やつぱり爭はれないものだねえ。」といつてそれから若い時に見たといふ人魂だの、ろくろく首だの、身の毛もよだつやうな怪談をして聞かせました。

　大の話好きて、相手かまはず、のべつ幕なしにしやべり續けるのがお祖母さんの癖でした。

「お祖母さん、ひとりぼつちで寂しかあないかい。」と尋ねると、

「なあに、もう慣れつ子になつちまつてるんだもの平氣だよ。それでも何んだよ、嵐の晩なんかは薄氣味がわりいよ。そんな晩には泊りにきてお呉れな。」

「いやなこつた。お祖父さんに歸つて貰へばいゝぢやないか。」

「なに彼の人が歸るものかね。この家でも燒けたら火事見舞に來るのが關の山さ。」と云つて氣にも掛けない。

「今ね。寮に花紫さんがゐるんだよ。」

「さうかい。あの妓はお前のお友達の姉さんだつて云ふぢやないか。」

「あゝ。濱千鳥の小母さんの子でね。他家へ子に行つてたんだが、いま家へ一寸歸つてるの。」

「その子は花紫を知らないのかい。」

「うん、家でだまつてろつていふから、まだ話さないんだもの大方知らないんだらうよ。」

この時、格子が開いて

「今晩は――。」と云つて、椎丸さんがやつてきました。

私はわざとだまつて居ると、お祖母さんは

「誰方。」ときく。

「あの、水近江の俊ちやんが來てますか。」

「椎丸さんかい、おあがんな。」私はかういつてやりました。

椎丸さんは座敷へあがつてきて、お祖母さんに叮寧にお辭儀をしました。

荒ぽい銘仙の絣の羽織と着物とを筒袖に仕立てゝ、絞の帶を胸高にきちんと締めてゐました。

お祖母さんも「はい、今晩は。」と云つて、頭を下げる。

「今君の家へ行つたらこゝへ來たつていふから出てきたの。」

「さうかい。何か用なの。」

「そら、昨日云つた寫眞が出來てきたから、持つてきたんだよ。」と云つて、懷中から四切の寫眞を出した。

「へえ、江崎で撮つたんだねえ。」

「年を取ると眼がわるくなつて」と云ひながら、大きな眼鏡をとり出して、お祖母さんも一所に眺めま

した。

そして見終はると「あなたがあの濱千鳥さんの何なんですか。」と云つて尋ねる。

「はい。」と答へて、椎丸さんはもじ〳〵してゐました。

「來月五十軒の連中が向島へ花見に行くんだつて、さうかい。」から私が云ふと、

「さうだつてね。それで今から大騒ぎさ。」

お祖母さんはそれを聞きつけて

「昔はお花見と云つたら、そりや大變なもんでしたよ。お花見と芝居見物に浮身をやつした時だからね。それに仲の町の夜櫻もやつぱり昔の方がよかつた。でも最う今年はそろそろ植へ付けてますか。」と椎丸さんにきく。

「いゝえ、まだです。もう些つと早いんでせう。」

「わたしのやうな姥櫻も今年はうんと若返つた氣で、お花見にでも押し出さうかね。」

お祖母さんは頻りに昔を思ひやるといふ風でした。そして三味線を三味線かけに掛け、撥は常盤津代々の家元の名前の書いてある古びた軸の前の箱の中へ收ひました。

軸の中には都一中の次ぎに、宮古路豊後掾の名がある。今の常盤津にも豊後節の淫らな節廻はしの名殘があります。淫らな豊後節は幕府がこれを禁止した。そして豊後も心中した。角木瓜の紋所には美くしい幻影がひそんでゐます。

表の方から二三人の足音がして、格子をあける音がしました。

寮にゐるお祖父さんと、粋な男が二人入つて來た。

「まあ珍らしいのね。お天氣が變らなきや可いが。」お祖母さんはかう皮肉を云ひました。

お祖父さんもさる者です。「待ち人こいの辻占屋さんが來やあしなかつたか。」かう皮肉の返報をして、どつかと火鉢の前へ坐り込んで、「おい皆んなあがつて與んな。」と二人の男に聲をかける。

「ぢや、眞平御免なさい。」二人ともあがつて來ました。

お祖父さんは誰にともなく、この二人の男を紹介するつもりて、「この人達は花松、山源つていふ木戸藝者だよ。」と云ひました。

私等には木戸藝者つて意味が、一寸分りませんてしたが、それは聲色使のことだと後て知りました。

「どうだい。近頃は。」

「どうもかうも、丸つきりいけやせんね。」と若い方の男が、手拭て一寸と口を拭いて答へた。

「さうだらう。だが圓右は一寸賣り出したやうだぜ。」

「へい、あの人は五代目と大和屋が十八番てげす。」

「聲色よりや身振りが甘えや。馬鹿岩なんか一體どうしたんだらう。」

「さあ——。」

「何しろ流しは不可ねえつてこつたからな。」

「まつたくでげす。」

「さあ、みんな賴ますぜ。」

「承知しやした。」と云つて、二人とも申し合はせたやうに咳をして、茶を一口飲みました。

一人は高島屋の聲色、今一人は五代目の「魚屋の茶碗」をやりました。

それから「おい、一番古風なとこを賴ますぜ。」つて註文なので、二人とも九代目と五代目の聲色で二丁目の芝居で昔卸し當時の、鞘當を留女の出るところまでやつつけました。

初めの臺詞は「遠からぬものは音羽屋にも聞け、近くば寄つて目にも三升の寬濶出立は、いま流行の白柄組、通ひ廓の大門を、入れば忽ち極樂淨土。」といふ、あの古風な奴でした。そして、面白いことには臺詞の結びには必ず極めの定文句をつける。

「こゝらで一寸止袖や、振袖さまへのお暇乞ひ、ホヽウうやまつて申す。」なんて、何んとなく面白い甘味のあるものです。

木戸藝者が祝儀をもらつて「どうぞ御贔負に。」と云つて歸つて行つた後で、お祖父さんは聲色使の話をして聞かせました。

「文化文政頃、こゝの猿若三座の狂言替りの初日前には、役者の役割と狂言の名題とを披露するのが、この木戸藝者の役目だつたのだ。それがすむとね。吉例として役者の聲色を使ふのさ。三座に二人づゝ居つて、木戸前に一間ばかりの臺を上手と下手に置いて、その上へ乗つかつて兩方掛け合てやるつて譯

梅式だつた。そりや中々花々しいものだつたよ。」

こんな粋なものは、だん〳〵亡びて行く。さうしてこのお祖父さんなんかも最早今の世の中から捨てられてる人だと心づくと、私は何んとなく哀れつぽい感じに襲はれました。

お祖父さんは木戸番者の説明をしてまうと、今度は私に向つて「俊ちやん。花紫は明日家へかへるつて云つてたぜ。」と云ひますから私は、「さう。もう良いの。」と浮々した調子で訊ねました。

花紫さんが家へかへると聞いて、私は急に嬉しくなつたのです。

「うむ。そんなに悪かあないんだらう。お前歸つたらお父さんにさう云つときな。」

「あゝ。」

「お前はあの妓の岡惚れさんだと見えて、しよつちう俊ちやん、俊ちやんと云つてるぜ。餘程お前が可愛いんだね。」

「知らないよ。」私は恥かしさうに顏をそむけて、椎丸さんの顏を覗ひました。

椎丸さんは一所に歸らうといふから、私も連立つて表の方へ出ました。最う大分遅いと見えて、人通りも稀になつてゐました。

金龍山の下を通つて、わざ〳〵隅田川といふ佃煮屋の前から、今戸橋を渡りました。向ふ河岸の三囲のあたりは、丁度淺黄幕を垂れたやうです。どうしたつて常磐津林中、ワキは松尾太夫の出語で、若い男と女とが夢のやうに出て來て、くるつと脊中合はせになつて、手拭を噛み緊める拍子に、ぽーんと長

命寺の鐘が鳴るつてな場面です。

左へ曲るとお寺の墓場の横へ出ます。化銀杏のやうな大きな銀杏の樹が聳えてゐるところを、おそるおそる通つて行きました。

私は道すがら、花紫のことを云はうかどうしやうかと考へたが、如何しても云へませんでした。けれども、若し椎丸さんが花紫さんを自分の姉さんだと知つたときには、私は二人を會はしてやらうと、妙なところへ俠氣を出しました。何故なら花紫さんは私を自分の戀人のやうに、そして又弟のやうに可愛がつて呉れるんですもの、一肌脱がなきやならないと力んでゐたのです。

そうして、姉弟のあることを知らずにゐる二人が何んとはなしに可哀想になつて、濱千鳥の門口で椎丸さんに別れるとき

「又、會はうね。」と優しく云つてやりました。

遲いとおもつてかへつて來ましたが、大門を入るとまだ宵の口でした。

花紫さんがかへると聞いて、私は明日お母さんと一所に歌舞伎へ行くことを、すつかり忘れてしまつてたのです。

「魚がし」だの「よし原」だの「四日市」といふ幕は、何時見ても惡かあありません。そして桟敷にゐる藝妓の花簪や、天井を眺めてゐると、默つて引幕が變る。今までの幕が消えてゆくあとから、直ぐ別の幕

が續いて現はれて來ます。

私と一所に行つた、内藝者もお母さんも、二番目狂言になる頃から、お茶屋へ着物を着更へに行きました。人柄な着物を捨てゝ、世話に砕けた極く意氣なものに着更へた。これが狂言の取合せとしつくり合つて、狂言と見物の身なりとがよく調和します。近頃はそんなことをする人も尠なくなりました。

音羽屋の默阿彌物を見て歸ると、待つてゐるだらうと思つた花紫さんは、既に寮へ行つちやつた後でした。

私はがつかりしました。

さうして、「何故花紫さんを歸しちやつた。」と云つて、お父さんを散々いぢめてやりました。お父さんも持て餘して、色々と辯解しましたが何んと云つても聞き入れませんから、とう〳〵「それぢや。明日寮へ遊びに行つといで。」といふ許が出ました。私は乾度から來るだらうとおもつて、思ひ切りすねて見たのです。ところが巧く圖星に的中しました。

聞けば花紫さんは未だよくないんださうです。私は子供心にも、今の内に椎丸さんに逢はしてやりたいとおもつて堪らなくなつて來た。誰が何んと云つても會はしてやると、かう臍を固めた私は、明日こそ一所に連れて行かうと。獨りでうなづいてゐました。

床へ入つてからも、若し後でこの事がばれて叱られた時には、何んと云ひ拔けやうか知らと、色々他愛もない理屈を考へて置きました。只、私にはこれが世にも稀な義俠心だと信じられてゐたのです。

花紫さんは水近江ては、流行つ妓てした。藝も達者てしたし三十一文字の稽古もしてゐたさうてす。それが如何した加減か、兎角近頃は氣分が勝れないと云つて、絶えず寐て保養してゐます。ですから私は花紫さんも中萬字屋の玉菊のやうに夭死するんぢやなからうかとおもつて、秘かに心を痛めてゐました。

花紫さんはそのお母さんや椎丸さんと同じやうに、生粋の江戸つ子てす。張りのある女てす。そして玉菊が河東節を好んて巧みてしたやうに、花紫さんは一中節が好きて巧みてした。お師匠さんは菅野序遊てす。

玉菊には竹婦人の水調子が殘つてゐます。然し花紫さんのためにも、水調子を作つて歌つてやる人は今の世にあるてせうか。

あくる日は、絲のやうな春雨が彼岸櫻の枝に流れてゐました。

私はお書を濟ますや否や、水近江と大きく書いた番傘をさして、濱千鳥へ椎丸さんを誘ひに行きました。

椎丸さんは中の間て、綺麗な雛妓と投扇興をして遊んてゐました。

蝶の臺へ扇を載せ、蝶を傍へ落して立てゝ桐壺の七十五點を得たと云つて、しきりに自慢してゐました。

私は早速、「入谷の寮へ遊びに行かないかい。」とかう切り出しました。
「道が悪いから止さうよ。」稚丸さんは扇を投げるので一生懸命になつてるんです。
私も亦どうしても今日は連れて行かなきや最う好い機會がないんですから、此方だつて一生懸命です。
「まだそんなに悪かあないから行かうよ。面白いものがあるぜ。ね、可いだらう。」
「うん。」とまだ生返事です。
「さあ、行かう。」
「ぢや、行かうか。」やつと立ちあがりました。
「あゝ、お出てよ。それに可い話があるんだから。」かうして。遂々連れ出すことが出來ました。
待合の辻を曲つて、龍泉寺町から、大音寺前へ來ると、まだその頃は、龍泉寺町は人家がまばらで中田圃の稲荷の邊は、畔道が廣くうね〱と續いてゐて、畑には紫蘇と白瓜とが多く植へてあつたやうです。その畔道て春になるとよく大きな凧を揚げて遊んだものでした。凧揚げの競爭なんかも盛んに催されました。
水の谷の原へ出て、今は金魚飼養所になつてゐる、大きな池のところを、ぐる〱廻つて右へ突き當ると金杉てす。左へ行くと入谷へ出ます。
直侍ぢやありませんが、入谷田圃は實際寂びしいところでした。ところ〲に點綴してゐる、一寸意氣な家には遲咲きの紅梅が咲いてゐました。

畔の細い道は二人並んで通れませんから、相合傘で行きました。
「いゝ話つて何んだい。」
「何んだつて可いから、默つて踵いてお出でよ。」
「また擠ぐんぢやなからうね。」
「さうぢやないんだよ。君にね。可い人を遇はしてあげるのさ。」
「可い人つて何處にゐるの。」
「何處つて、僕の家の寮にゐるんだよ。」
「ぢや、女郎だね。」
「まあ、そんなものさ。」
椎丸さんは首を振つて「厭だよ。女郎なんかに會つたつて仕様がないぢやないか。」
「君には仕様がないかも知れないが、遇つてみりや分るんだよ。何んでも可いから私に任せて置きな。」
「何んてんだい。その女郎の名は。」
「花紫。」
「昨夜、猿若町のお祖父さんが話してゐた女だね。」
「さうだよ。昨日一寸家へ歸つて來たんだけど、何しろ此頃身體が惡いので又直ぐに寮へ行つちやつたんさ。」

「それが如何かしたのかい。」

「その女に君は遇はなけりや不可ないわけがあるの。」

「どうし。」

「どうしてでも。」

「秘だね。」

「何んだつて可いよ。」

椎丸さんは狐につまゝれたやうな風をして、蹤いて來ました。

追憶の館――水近江の寮が二人の眼の前に現はれました。

建仁寺垣の竹の色が、春雨にしつぽり濡れて、一層青く冴えて見えます。

庭に咲きみだれた櫻の花から花へ傳はり、笹蟹の絲のやうな春雨の一筋から一筋へと移つて行つて、なよ〳〵した微風のために、垣越しに吹き送られて來る、三味線の音色。それは「ツルロン、テッツンテン。」と云ふ一中節の特殊の合の手でした。大方、花紫さんがつれ〴〵の手すさびなんてせう。

私等はおもはず、屋號の入つてゐる番傘をつぼめて、建仁寺へぴつたり身をすり寄せてしまひました枝振りの良い松の葉に宿した、露の玉が二人の肩へこぼれました。

「今三味線彈いてるだらう。あれが乾度花紫さんだよ。」と私は椎丸さんにわざと小さい聲で囁きました。

冠木門を入つて、縄暖簾をくゞり、内らへはいると、そこは叩きになつてゐて、上框は竹で造つてあります。そして入口には青い線を左り巻に染めた提灯を吊してありました。

奥の座敷には、花紫さんが三味線の音締を整へてゐました。その傍には夢橋左文さんがまるで玉菊に於ける十寸見河東と云つた風に控へてゐました。さうして私等二人は、十寸見蘭洲と山彦源四郎とであつたならばとおもはれました、

「おゝ、俊ちやんかよくやつて來たね。」とお祖父さんが云ひました。

花紫さんは私の顏を見て「おや、坊ちやん。昨日待つてらつしやるだらうとおもつて、歸つたらお母さんと歌舞伎へいらつしやつたんですつてね。私、ほんとにがつかりしちまいましたよ。それでもお樂しみだつたのね。」とさも懷かしさうに云つて吳れます。

「僕もさうなの、姉さんがかへつてるだらうとおもつて、急いで歸つて來たらゐないんだもの、だから散々お父さんをいぢめてやつたの。」

「それで今日いらつしたのね。」

「あゝ、さう。」

お祖父さんは「やれ〳〵。今日はとう〳〵想ひが屆いたんだね。しつぽりおしげりなんしかね。」と云つて笑つてゐました。

「今日はね。こんなお客さまを連れて來たんだよ。」

「おや。お客さまてしたのね。何處の坊ちやんなの。」
このとき、椎丸さんは何か云はうとするから、私はこれを制して
「まあ、君は默つてお出てよ。」と云つて、花紫さんに
「これはね。僕のお友達だよ。」
「さう。可愛い坊ちやんね。」
花紫さんは切りと椎丸さんの顏を眺めてゐました。
それてすから、椎丸さんは羞かんて、凝とうつむいて了つたんてす。
私は最う云つても可いだらうか。如何だらうかと思つて、獨り胸をどきつかせてゐたんてすが、中々口へ出て來ません。實際私には何んと云つて可いのか分りませんしてた。
花紫さんは、ちん〳〵松風の音を立てゝゐる茶釜のとこへ行つて、濃茶を點じてすゝめました。袱紗捌きの水際立つて綺麗なのはこの妓の特色てした。
すると左文のお祖父さんは、甘露梅を肴に白酒を舐め初めました。
この水近江の寮は素敵に凝つた造作てした。お祖父さんが大の凝り性なもんてすから、柱一本だつて中々吟味したものてす。
すべてが化政の好事癖の後を享けて、捻りくねつた、そして洗錬せられた趣味性があらはす寮の空氣は、十八大通や木場あたりの旦那衆から喜ばれさうなものてした。けれども世の進歩に伴つて、箱根か

ら東には野暮と化物とは住まないとえばつた江戸つ子の末路は慘めなものでした。板前の庖刀の切れ味を吟味したり、田樂の竹串の產地を詮索したりして、通を誇つた人達が、歡樂の襖の蔭には語るに忍びない、哀れな物語を殘して滅んて行つたんてす。

私等はその昔の豪奢の影の潛んてゐる、粹な座敷に坐つて、心ゆくばかり落ちついた靜かな春雨の庭を見渡しますと、遠くの方には入谷田圃や、雨の箕輪がぼんやりと烟つて浮んてゐます。

「武藏家がいよ〳〵不可ないんですつて、眞個なんてせうかね。」

花紫さんは左文さんにかう尋ねました。

「眞個さ。惜しいものだね。彼處の家は芋が名物だつたが、とう〳〵駄目になつちやつたんだね。」

「はやらないんてせうか。」

「さうだらうよ。どうせ今時の奴さんなんかには向きさうもない家だからね。滅んちまう方が却つて可いかも知れない。燭臺に蠟燭ともした割烹なんか、當節何處へ行つたつてありやしない。だからこの忙しい世の中に、わざわざ蠟燭の心を鑽りに出掛けて行く奴もなからうぜ。」

「ほんとにね。」

「あの家が普請して出來あがつた時に、俺は引札を書いてやつたんだ。えゝと――何んとか云つたつけ――うむ、さう〳〵お終ひの文句は何んとかて權三りますてんだ。武藏家權三を洒落てみたのさ。」

四人とも笑ひました。然しながらそれは何んとなく寂しい笑てした。

それからお祖父さんは長々と、武藏家が歌澤の四疊半趣味に適してゐて、そこの離座敷て、こんな春雨の夜、燭の火を鑽りながら、柳橋の稲荷の瀧や、都伊中の節附した端唄を歌つたことなども話してゐました。

「この頃のお客は常盤津と清元の區別さへつかない人が多いんですものね。」から花紫さんは哀しげに呟ちました。

「仕方がないよ。――ぢや又うさ晴らしに何かおやんな。俺が彈くから。お客さんにお前の良い咽喉をきかしてあげなよ。ねえ俊ちやん。」

私は默つてうなづきました。

花紫さんは「妾はこれから獨りでこゝて歌つたり彈いたりしてゐやうか知ら。誰れも聞いて呉れる人がなけりや、自分ひとりて樂しんてるに限るわねえ。」と云つて坐り直しました。

左文のお祖父さんは、三味線を膝の上へ載せ、腕を一寸嘗めて、さて考へました。

「何をやらう。」

「何んても。」

「ぢや。妹が宿でもやらうか。」と云つて彈き出しました。

お祖父さんの三味は素敵に撥當りが強いのですが、流石に一中になると太く寂びた音色を出します。

花紫さんも寂びのある良い聲でした。皮肉て氣品の高い技巧を極めた節廻はしが、その幅のある呂の

利いた聲と巧みに調和してゐました。

花紫さんは唄ひ終はると、ほつと吐息をついて「まあおとなしく聞いてらつしやつたのね。」と云ひました。

お祖父さんは白酒に醉つて、億れたやうな顔をしてゐましたが、三味線を弾き終はるとごろりつと手枕をして横になりました。

私は良いしいしほだと思ひましたから、花紫さんの側へすり寄りました。

「姉さん。僕を可愛がつて呉れたのね。」

「えゝ。妾は誰よりか俊ちやんが好きなんですもの。」と云つて莞爾としました。

「これからも可愛がつて呉れて。」

「まあ。この人は可笑しいのね。いつまでも可愛がつてあげますよ。」

「ほんと。」

「ほんと。」

「さう。」私はこれてやつと安心しました。そこて椎丸さんのことを云ひ出さうとおもつたんてす。

「姉さん。この子知つてゝ。」

「知らないわ。何處の坊ちやんなの。」

「知らないの。姉さんとこの子だよ。」

二人とも不思議さうに顔を見合はしました。

「妾のとこつて何處なの。」

「濱千鳥の子ですよ。」

花紫は驚いた風で「あらつ。それぢや椎丸さんなの。」

「えゝ。」と椎丸さんは返辭をしました。

「まあ――。」と云つた限り、暫らくの間花紫さんは默つて眼を据えてゐましたが涙が次第に瞼に溢れて來ました。

椎丸さんも氣が付いたと見えて、「姉さんでしたか。」と云つて傍へ寄つて來ました。

「今日は君の姉さんに會はしてあげやうとおもつて連れて來たのさ。」

「ほんとによく連れてきて下すつたのね。妾は椎丸さんの名前だけ知つてゐて、まだ一度も會はないんですもの、些つとも氣が付かなかつたわ。隨分大きくなりましたのねえ。」

それでも二人とも未だどこか遠慮勝な様子をして羞かしさうにしてゐました。

椎丸さんの眼は美くしい花紫さんの髮飾から顔へ、顔から派手な衣物へと焦點を落して行つて、遂ひに自分の膝の上を見詰めてゐました。

大方椎丸さんにはこの艶姿が、やゝつらく感じられたのでせう。

「姉さん、何處かお惡いんですか。」

「え丶。少しね。身體がよくないので俊ちやんのお父さんに願つて、こゝで養生させて戴いてるんですがね。椎丸さんに遇へば直きに癒りませう。大したことはないんですから。」

かう云つて花紫さんは話頭を轉じました。

「椎丸さんも妾も根岸で生れたんでしたね。おぼえてゐますか。」

「え丶。何んでもお行の松の近所ですつて。」

「さうですつてね。最うその家は亡くなつてるんでせう。」

「さうでせう。」

花紫さんも、椎丸さんも江戸の戯作者が綺岸と洒落た、あの靜かな町で生れたのです。そして離れ離れになつてしまつたのです。

「仲の町へも行きますか。」

「え丶。僕暫時仲の町へ來てるんです。家のものが皆朝鮮へ行つたものですから。」

「ぢや。お母さんに遇つたのも近頃なのね。相變ずらですか。」

「皆達者です。お母さんに遇つて話を聞いたのはつい近頃ですが、僕は顏だけは知つてたんです。毎年お正月にはお禮に來ましたからね。お母さんとは知らなかつたけれど、代々木にゐた時分に家へ來るとよく椎の實を拾つてくれましたから、お母さんのことを椎の實の叔母さんと云つてゐました。」

「妾、いまでもお母さんの錦繪を部屋の手文庫へしまつてありますよ。」

「姉さんも持つてるんですか。僕もありますよ。そら向島の土手のところでせう。」

「さう〳〵。さうですよ。あれがお母さんの生き形見ね。」

斯んな話をしてゐるうちに、芝居の書割にありさうな、雨の箕輪あたりの人家から、微かな灯がまたゝき初めました。

雨は未だ止みさうにありません。西の方の雲が折々千切れ千切れて見えますが、又直ぐに煙のやうな雲のために閉されて了ひます。

しかし最う家へかへるべき時が來ました。

殘り惜しいが又來ると云つて、暮れて行く春雨の寮を出ました。

別れるとき、私は

「ねえ。二人とも可愛がつてお呉れよ。」と云ひました。

すると花紫さんは、深くうなづいて二人の手を引きながら、上框に吊してあつた提灯へ火を附けて、冠木門のところまで傘をさしかけながら送つて來て呉れました。

その時、不圖私はお祖父さんのことを思ひ出しましたから、

「お祖父さんはまだ寢てるのか知ら。」と云ひますと、

花紫さんは「左文さんもわたしも、この寮で死ぬつもりです。」と答へました。

（完）

編輯だより

◎本誌の價値が益々江湖有識者の識認する所となり、近來に至つて急に又非常なる發展を遂げ、新年號は第三版を發行し、二月號は賣切となり、本號の大增刷を見るに至りたるは、編者の感謝に堪へざる儀に御座候。

◎四月一日に發行すべき「春期大附錄號」に於ては些か此感謝の意を表彰いたしたく、社員一同大車輪となつて名篇大作の蒐集に努力いたし居り候間、發行の上精細なる御批判を仰ぎたく今よりして希望致し置き候。

◎小說に於ては卷頭の豫告にも有之候如く、藤村、花袋、鷗外、荷風、鏡花、潤一郎、幹彦の七氏に依賴し、鷗外、幹彦の二氏は已に脫稿せられ、其他の諸氏は目下熱心に執筆中に御座候。又白鳥氏の「白壁」は氏の脚本の處女作にして現代劇三幕物。必らず文界に波瀾を起すべきを疑はず候。

◎長田幹彥氏の「零落」は氏の文名を一時に高からしめたる「澪」の姉妹篇にして、都會の糜爛せる生活に倦いて至純なる自然の懷に抱かれんとして終に風雪荒き北海の地に渡り、荒寥たる石狩河畔に於て飄零落魄の旅役者の一群と落合ひ、其轗軻數奇の身の上に同情して一群と共に次なる興行地へと流れ行く樣を書ける長篇にして、其描寫、其感情、色あり、匂あり、情あり、熱あり、而して一點のソツなき所、推して以て近來罕覯の佳作となすに躊躇いたさず候。谷崎潤一郎氏が其秘藏の材料を書き下したる「割烹」と共に現下新進の二作家の代表的作物たるとを信じ申候。

◎田山花袋氏の「別れてから」は新年號にて好評を博せる「別るゝまで」とは全然別主人公のものにて、只男が女と別れてからの心持を書かるゝ由に候。氏のいよ／＼深く突込める心理描寫は現文壇の觀物と存じ候。又鷗外氏の「鼠坂」は戰爭中の不思議なる事件を氏一流の筆を以て物語れる物凄き物に候へ共筋は申上げぬ方讀まるゝ時の興味深からんと存候。

◎藤村、荷風、鏡花三氏の作物の內容は分らず候へ共三氏苦心の作が如何に價値多かるべきかは論議する丈け野暮と存じ候。兎に角かゝる名家の顏揃を以て出づべき次號の附錄は梅櫻桃李一時に開くの句を以てしても形容する能はざる、爛漫たる彩華を發揮すべきこと疑なしと信じ申候。

◎論文に於て已に確定したるものは河上肇氏の「進化論と社會主義」と題する長大論文、久米博士の「古事記は根本史料の價値なし」稻葉軍醫正の「勞働者の生活問題」等あり、又「進步黨史論」「政友會史論」の筆者無名氏に政局史論を、「カイゼル論」の筆者福本日南氏に豐公論を、白鳥博士に「世界史にあらはれし人種問題」を依賴中也。何れも雄篇ならんと存候。

◎又論文欄の一大讀物として「官業主義と民業主義」の題下に現今經濟財政界の大問題となれる官營と民營の利害得失を講究いたしたく政治家、實業家、學者の各方面に亘つて廣く其論議を蒐集しつゝ有之候。已に依賴したるは後藤男、澁澤男、阪谷男、仲小路廉氏、本多精一氏、松山忠次郎氏及び東大、京大の經濟學者等にて、尙續々各方面に依賴中に御座候。

◎松崎天民氏の「十二階下」は「淪落の女」中最も力を籠めたる最長編にして氏は此一篇を讀んで而して後「淪落の女」を評して貰ひたしと申し居られ候。又黑頭巾氏も久し振りにて其會心の作を寄せらるゝ筈に御座候。

◎「男女學生に性慾に關する智識を與ふることの可否、適度、及び方式」はいよ／＼次號にあらはるべく、醫學博士十數氏の解答は此問題に向て意を用ふる人の參考となること大なるべしと存じ候。又「文藝委員會総斉評」には文壇諸名家に乞うて審査の正否に對する論評を蒐むる積に御座候。

○改正定價 金貳拾五錢外に郵稅金貳錢(海外郵稅拾貳錢但清國を除く)

冊數／國別	內國	外國	
六冊	金壹圓五拾錢	金貳圓拾錢	以上郵稅共
十二冊	金參圓	金四圓貳拾錢	

▲但 新年號春秋二期特別號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、即ち一ヶ年通計十五册分の割合なれば一ヶ年分御注文の方は內國は金參圓七拾五錢外國は金五圓貳拾五錢拂込まるべし

送金注意

一郵便爲替にて御送金の場合は本鄉西片町十番地反省社と指定し拂渡局を東京市東片町局と指定あれば途中盜取の虞なし

一振替貯金 口座は東京三十四番なり、これにより御送金の方は外に登記料一錢を加えらるべし、然らざれば送金額より差引くにより端金となりて却て面倒となるべし

一郵券代用 必ず一割增の事

一集金郵便 の便法を利用せらるゝ方は、座ながらにして誌代の拂込をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記集金委託料及送達料金を加えたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし弊社は直ちに其取扱をなすべし

一金一圓迄 金五錢
一金三圓迄 金六錢
一金五圓迄 金七錢
(集金委託料及送達料)

一受領證請求は必ず返信料金を要す

明治四十五年二月廿五日印刷納本
明治四十五年三月一日發行
(禁轉載)

發行兼編輯人 麻田駒之助
印刷人 藤本兼吉

發行所 東京市本鄉區駒込西片町十番地 反省社
振替口座東京三十四番 電話下谷一九一九 電信略號ハンセイ

印刷所 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 秀英舍第一工場



時計及附屬品
ダイヤモンド
其他寶石各種
貴金屬製美術
工藝品和洋服
裝飾品、眼鏡類、
製作及販賣

東京市京橋區八官町

小林時計商店

電長新橋 一〇〇三 一〇〇四
振替 七八〇七

CHUO KORON (*The Central Review.*)
By The Hansei-sha Publishing Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: annual subscription yen 5.25; Single copy 37 sen including postage. Entered at the Post Office at Los Angels, Cal. U.S.A. as second-class mail matter

明治三十年一月二十九日第三種郵便物認可
明治四十五年三月一日發行（毎月一回一日發行）
中央公論第二十七